カオス レギオン 04

天路哀憧篇

冲方 丁

イラスト 結賀さとる

カオス レギオン 04
天路哀憧篇

「ノヴィア、そんなに吠えると、ジークに嫌われるぞ。蔵の番犬みたいだぞ」
「い、犬……。泥棒猫みたいな人が、何を言うのっ！」
　あの頃の私たちは喧嘩ばかりだった。今ならその理由がわかる。キリが私にないものをたくさん持っていたからだ。自由で、強くて、誰とでも仲良くなれて。それでも、私にとって初めての同い年の仲間だったし、本当はキリと一緒に行ってみたかった。
　ジーク様が言っていた「全てが終わり、全てが始まる場所」——そう、海へ……。
　大幅加筆で生まれ変わった、大人気ファンタジー長編!!

「お前のお陰で……海に向かい続けられたよ……。
ノヴィア、本当にありがとうな」
天路哀憧篇
カオスレギオン
CHAOS LEGION

ドラクロワは再び大河に目を戻し、低く呟いた。
「追って来い……ジーク。真実の刻を求めて……」
握り締めた鎖の先で、十字型の紋章が小さく揺れていた。

「馬鹿は死んじゃえ」

カオス レギオン 04

天路哀憧篇

1026

冲方 丁

富士見ファンタジア文庫

136-6

口絵・本文イラスト　結賀さとる

目次

ヴィクトール・ドラクロワ
かつてのジークの友。反聖法庁として暗躍中
「知りたければ、追ってこい……ジーク」
レオニス・ジェルミナル
聖地シャイオンの新領主。車椅子に乗る
「僕らが、新しい怪物になればいい」
HISTORY
天界と堕界を分かつ大地、アルカーナ大陸。
ジークたちは、凶行を繰り返すかつての友・ドラクロワを追っていた。
旅の途中、一行は聖地シャイオンにてレオニスと出会い、それぞれの道を歩み出す。
三人の男が握る大陸の未来。混沌＜カオス＞の大地は新たな局面へ突入する……。
トーレ・ヴュラード
レオニスに仕える暗殺者
「父が死んでくれて、せいせいしました」

Prologue　大いなる流れ

ひどく、ぼんやりとしていた。

緋色の階段の上に設けられた王座に、小柄な少年が座って宙を見ている。

淡く澄んだ青紫の瞳、高い鼻筋に、磁器のように滑らかな頬。その表情はひどく大人びており、虚ろな眼差しとは裏腹に、常に複雑な思考を働かせているような気配がある。

茶色がかった金髪には、銀の輝きが混じり、特に顔の両脇の髪などは鋭い白刃のごとき銀髪だ。その金銀の髪に彩られた少年の面立ちこそ、聖地シャイオンで対立していた二つの民族が混じり合った、平和の象徴であった。

王座に座るべくして座り、それ以外の道とてなかった少年——

その王座の前に、男がひざまずいて、言った。

「ただいまより出立いたします。レオニス様」

瀟洒な貴族服に身を包み、両手に白い手袋をはめた男であった。

長い黒髪に、ぬめるような白い肌。黒々とした目も、ひどく赤い唇も、濡れたように光っている。まるで骨のない生き物が人間の皮をかぶったような仕草で、顔を上げた。

「こたびの狩りの全権を委ねて頂きましたことを心より感謝しております。その恩義に報いるためにも、必ずやジーク・ヴァールハイトめの首を手に入れてみせましょう」

「頼んだぞ、アキレス・ツェペット。吉報を心待ちにしている」

レオニスは、ぼんやりと返した。何も考えていないというより、何を考えているのか底知れない怖さを秘めた声音だった。その目は、まるで深い闇が少年の姿をしてそこに座っているような底知れなさを感じさせた。

アキレスは、むしろそのレオニスの様子を喜ぶような顔でいる。

「成功のあかつきには、私めに力を下さいますことをお忘れ下さいませぬよう……」

「忘れてはいない。ジークの〈招く者〉の力は、お前のものだ、アキレス」

アキレスの唇の両端が、異常な高さにまで上がった。まるで口が裂けたような笑みを浮かべながら、その黒目が、レオニスのそばに立つ者を、横目に見た。

まるでレオニスの影ででもあるかのように、全く気配のない青年が、王座の傍らにいた。影法師トール――そういう異名を持つ青年であった。王座に向かってひざまずくアキレスでさえ、目を伏せれば青年が本当にそこにいるのかどうか分からなくなる。もしかする

と、いつの間にかアキレスの背後に回って刃を構えているかも知れない。それほど気配も見せず物音もたてぬ、優れた暗殺能力の持ち主であった。
レオニスにとっては生まれたときからそばにいる側近である。そのトールさえ差し置いて、全権を任されたのだという満足感が、ありありとアキレスの顔に浮かんでいた。
トールは、無表情にそのアキレスを眺めている。
また一方で、同じように無表情に立つ者を、アキレスは視界の隅に見た。
ほとんど白髪に近い灰色の髪をした小柄な女が、真っ白いものを手にして、広間の片隅に立っているのだ。聖地シャイオンに彫刻師として招かれた、蠅使いの女――レティーシャ・ベルゼブベスであった。綺麗に切りそろえた前髪の下で、碧の目に、いやにあどけない表情を浮かべている。得体の知れなさでは、今広間にいる四人の中で一番といえた。
何しろ、手にしているのは、兄のものだという頭蓋骨だ。
「あの男、張り切ってるね、兄様。一人で狩りが出来るからね。大きな河なのね、兄様。そこに行くのね、あの人。そこで流れて行くんだ、兄様。ふー、おかしいね、兄様」
レティーシャが、ぼそぼそと頭蓋骨に話しかける。全く面と向かって人と話さず、頭蓋骨としか会話しない。そのくせレオニスを今のような状態にしてしまった女だった。
だがそのレティーシャも、今度の狩りに手出しすることはない。

アキレスは自分が優位に立っていることを完全に確信した顔でレオニスを見上げた。
レオニスは言った。
「ジークは、ドラクロワの荷を追って大河を下っている。その河一帯がお前の狩り場だ。ジークにとって一番の弱点である水辺で、存分に、お前の力を発揮しろ」
アキレスが立ち上がり、一礼しようとする。そこへさらにレオニスの声が飛んだ。
「ただしジークの従士は殺すな」
何の感情もないくせに、有無を言わせず相手を従わせるような響きがあった。
「僭越ながら、レオニス様……かの従士はジークにとって何よりの戦力。それを討てばジークの狩りも容易になりましょう。どうか真の王たる者として、ご決断下さいますよう」
まるでレオニスの態度をいさめるようなアキレスの言いざまに、トールが、ますます表情を失った。アキレスに対する怒りが、そうさせているのだ。
レオニスは、つまらなさそうに、アキレスに答えて言った。
「彼女と僕の関係は、お前も知っているはずだ。彼女は……僕の姉だ。同じ血筋にあるものを討てと言うのか」
いったいどういう思いで、そう口にしているのか——最愛の者が血を分けた姉であることを知ったレオニスの痛みを思い、トールは暗澹たる気持ちになった。その痛みをレオニ

スにしつこく再確認させようとするアキレスへの憎悪が、胸の内で膨れあがった。
そのトールを嘲るように、アキレスはなお、レオニスを窺うようにこんなことを訊いた。
「ジークの従士である少女は、レオニス様との血の絆を、ご存じなのでしょうか？」
「もし、初めから知っていたとしたら？」
「彼女は……知らないはずだ」
「い、い、い、い、い、い、い、い、い」

口の端に笑みを浮かばせ、アキレスは訊いた。
レオニスの目に、何かまがまがしいものがよぎった。
トールは、今すぐアキレスを真っ二つに斬りたい衝動を必死に抑えた。
レティーシャが、頭蓋骨を愛おしそうに撫でながら、ちらりとレオニスを見やる。
「もし、彼女が知っていたら……知っていて僕にあのように接していたのだとしたら」
レオニスは、勝手に結論が口をついて出るのを待つような茫漠とした声音とともに、
「彼女は死んで良い」
そう断言した。あまりのことにトールが息をのみ、アキレスが満足そうに微笑したとき、
「……だが、そうでない限り、手出しは無用だ」
レオニスは、ひどく淡々と言い加えていた。それは決して理性が言わせたのではない。
心の傷を広げぬため、しいて無関心を装っているだけだ。傍らのトールにはそれが痛いほ

ど分かる。これほどそばにいるのに、何も出来ない自分を怨むしかないとは——

アキレスは、今はまだこんなものだろうというような笑みでいる。いずれレオニスが、さらに心変わりすることを確信しているように。

「お前に望むのは、王の心得を聞くことではないぞ、アキレス。あらゆる手段を講じてジークを狩り、その力を奪って、僕がドラクロワに匹敵する足がかりをもたらすことだ」

レオニスの冷ややかな口ぶりに、アキレスは従順に頭を垂れ、今度こそ一礼した。

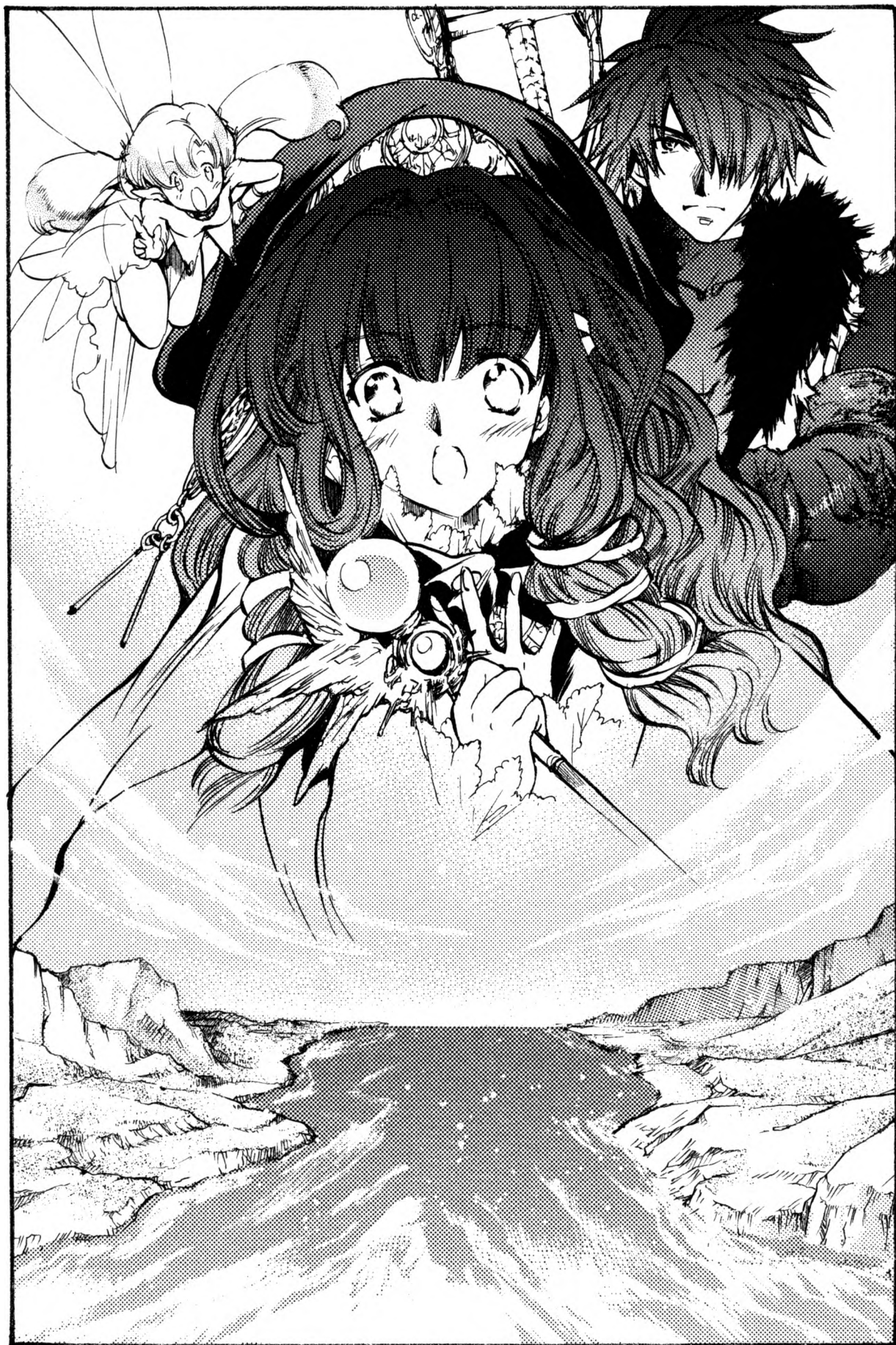
「真の王たる者と、この聖地の栄光のために」

巨大な蛭が身を翻すように、いやに滑らかな動作で広間を去るアキレスを、レオニスはじっと、深い暗闇をはらんだ目で見送った。

第一章　セラヴィの悪童

1

「うっわぁー、大っきな河ァ！」
突き抜けるような青空の下、小さなものが、その体のどこから出るのかと思うほどの大声を上げた。掌ほどの妖精である。花弁のように束ねた金髪に、金の瞳。金に輝く羽を震わせ、白いシルクのドレスをまとう女性形の身を宙に浮かばせている。
「ノヴィア、早くーっ。お船が沢山いるよぉ」
振り返って急かす妖精に続いて、
「待って、アリスハート。今行くわ」
少女が遅れて河岸にやってくる。溌剌と束ねた栗色の髪に、淡い紫の瞳。青い法衣の胸元を〈銀の乙女〉の紋章が飾り、手にした宝杖とともに少女——ノヴィアが、れっきとした聖道女であることを示している。旅暮らしにも白さを失わぬ頬を紅潮させて堤を登り、

「そんなに大きな河なの……」
言葉の途中で、思わず息を呑み込んだ。眼前を横切るものから目が離せなくなり。
「わあ……」
一拍の間があって、ようやく呑んだ息が、感嘆の声となった。
いまだかつて見たことのない、巨大な水の流れが陽光をきらめかせていた。湖かと思うほど、ゆったりとした流れである。河面を、まるで交易路のように渡し舟や荷船が行き交っている。対岸を行く人の姿が芥子粒のようだった。
「ねえ、凄いでしょぉ」
アリスハートが大喜びで言う。ノヴィアは、ただただ北へと流れゆく大河に見入った。
深く、広く、遠く、まるで何もかもを抱いて運び去ってゆくかのような雄大さでありながら、むしろその流れに身を任せてしまいたくなるほどの優しささえ感じさせるのだ。
大陸最大の大河――ネルヴァ河であった。その偉容に心奪われながら、
「凄い……こんなに大きな河は初めて見ました」
ノヴィアは、さらに遅れてやって来た男を振り返った。
「ここで船に乗るのですか、ジーク様?」
男は、悠然とした足取りで堤を登り、

「船に乗るのは、この先にある街の聖堂に話を通してからだ」
重く鋭い声を返しつつ、ノヴィアの傍らに立った。
燃えるような赤髪に風を受け、感慨深げに河面を見つめている。美貌といえる顔立ちに、しなやかな長身。ボロボロの白外套、黒革の鎧に赤籠手と、実に殺伐とした戦闘衣裳である——が、その肩に担ぐものが異様だった。その銀色のシャベルに、岸を歩く商人たちや、運搬船の船頭たちが、みな驚き呆れた顔で通り過ぎてゆくのだ。
城塞都市ルカでの戦いから、十日余——
大河を海岸へ向かって下る、最初の一歩がここだった。戦乱のための物資が、ネルヴァ河を下ってドラクロワのもとへ運ばれていることが明らかになったための旅路である。
「もう一度……この河の果てを目指すのか」
ぽつっとジークが呟いた。誰かに呼びかけるように。ノヴィアが反射的に振り返るが、
「行くぞ。昼過ぎには街に着く」
すぐにジークは、流れに沿って歩き始めている。ノヴィアが黙って従う一方、
「ねぇねぇ、狼男は前にもここに来たことがあるんでしょぉ？」
アリスハートはいつものように持ち前の好奇心を隠しもしない。
「昔の話だ」

ジークが憮然と返す。
「この河をずーっと下って、海まで行くんでしょぉ」
「そうだ」
「海って、この河より大きいって本当？」
「ああ」
「ねぇ、海ってどんなの？」
しつこく訊く。ノヴィアもつい引き込まれた。二人とも海を知らないのだ。
「見れば分かる」
身も蓋もない返事が来た。
「けちぃ。そんなこと言って、本当は見たことないんじゃないのぉ」
アリスハートが食いつく。それに対し、ノヴィアまで口を添えていた。
「それは、見なければ分からないほど雄大ということでしょうか？」
アリスハートばかりか珍しくノヴィアまで興味津々なのだ。目の前にこれほどの大河がありながら、それ以上に広大なものがあるというのだから、無理もなかった。
その二人の様子に、ジークは遠い過去を見るような思いに駆られた。
かつて、自分もまた、海を知らなかった頃のことを——

「広大だ……人が塵に思えるほどに。あらゆる河が海へ流れ、あらゆる風が海から来る」
そう言いながら、ジークは河の流れゆく先を見つめている。
「全てが終わり……全てが始まる場所……それが、海だ」
「全てが……終わり……始まる」
ノヴィアが何とか海の広大さを想像しようとしながら、その言葉を繰り返した。
そのとき、ふと河から声がかけられた。見れば荷船で船頭が手を振っている。
「安くしとくよぉ」
街まで乗らないかと言うのだ。運ぶ荷が少ないときなど、河岸をゆく人を運んで稼ぐのが普通だった。ジークがノヴィアに目配せする。ノヴィアはさっとその荷船を見て、
「男の人が五人います……武器はありません。荷物は、ほとんど服や食料です」
その視覚にやどる力の一つ――あらゆるものを見通す万里眼で、すぐに確認している。
ジークは船頭に向かって、ぽんと自分の胸を叩いて見せた。船に乗るという合図である。
そういう陸路では決して見られない河沿いならではの習慣の一つ一つが、アリスハートやノヴィアにはもの珍しい。近くの小さな船着き場に寄ってくれた荷船に乗りつつ、
「あの……大丈夫でしょうか」
今さらのようにノヴィアが訊いた。ジークは水があるところでは力が発揮出来ない。そ

れなのに、河のまっただ中に身を置いては——
「試しに乗る。油断はするな」
ジークは淡々と答え、荷船に乗って船頭に金を払っている。普通の渡し賃に比べて、かなりの高額を自分から払ったのだ。むろん船頭たちは大いに喜んだ。
「あんた様の、その得物を見て、こりゃ乗せとこうと思ったんですわ」
ジークのシャベルに刻まれた聖法庁の紋章を見て、稼げると判断したのだと言う。
「俺は敵が多い。襲撃されるかもしれん」
ジークが言う。それが試しの意味だった。だが船頭の返答も肝の据わったもので、
「河賊もここらは出ません。出たら、こいつで追っ払いますわ」
自信満々に、棍棒や分厚い鉄鎖を握ってみせた。どちらも鎧ごと頭を叩き割れそうなしろものだ。いったいどこにそんな武器があったのかとノヴィアが驚きに目をみはった。全て、船を運航するための櫓や碇などである。使い慣れた道具が、そのまま武器になるのだ。
武器といえば剣や弓と思い込んでいたノヴィアの、完全な油断だった。
「これまでの旅と違うんだ……」
いっぺんに気が引き締まった。習慣の違いから危機を見逃しては万里眼の意味がない。
一方、アリスハートはいつも通り、のほほんとして船を眺め、

「うわぁ、この船ってけっこう大きいんだぁ。河が大きいから小さく見えるのねぇ」
妖精を知らない船頭たちを逆に珍しがらせたものだ。
かくして荷船は何ごともなく河面を滑ってゆき、やがて昼を過ぎた頃――
「ね、ねえねえっ！　街って、もしかしてあれのことっ⁉」
いきなりアリスハートが大声でわめいた。目をまん丸にして下流を指さしている。
ノヴィアも、徐々に近づいてくるその街の姿に、呆気に取られた。
「なんて……大きな橋」
そうと言うしかない様相であった。
石と木と鉄で出来た巨大な橋が、大河を渡っているのだ。しかも橋の上に建物がひしめいている。橋の中央にそびえる尖塔など、そのまま橋梁を支える柱と化していた。
その橋からこぼれ落ちるようにして、建物が――街が、河の両岸に広がっているのだ。
橋が中心であり、街そのものである河港の都市に、ジークは鋭く目を向け、言った。
「セラヴィの街だ」
それが、この旅の始まりを告げる言葉となったのだった。
巨大な橋の下では、幾つもある船着き場に、多くの船がひしめいている。ジークたちを

乗せた船は、橋の東側の下にある、荷揚げのための広い空間に辿り着いていた。
荷を運ぶ者たちでごった返すそこは、まるで巨大な洞窟だ。
「うわぁー、上にあるあれって橋の裏側よねぇ。てことは、あれが街の底なんだぁ」
空を覆う天井を見上げて、アリスハートが驚嘆の声を上げた。
「凄い……。こんなところまで水が上がるの」
ノヴィアが柱に触れて言う。過去の洪水で上昇した水面の記録が、幾つも刻まれているのだ。自分の背丈の何倍もの高さに刻まれた水位に、ひやりとなった。
「私……あんまり泳ぎが上手じゃないのに。洪水になったらどうしよう」
「大丈夫だってぇ。こんな良い天気で、洪水なんて起こんないわよぉ」
「アリスハートは良いわよ、飛べるんだもの。私……ちゃんと泳げるかしら」
「洪水になれば、泳ぐひまもなく溺れ死ぬ」
ジークが、ぼそっと口を添えた。どうせ無駄なのだから心配するなというのだ。
「黙って流された方が、案外、助かるかもしれない」
何の慰めにもなっていない。ノヴィアは、くすっと笑って、
「ジーク様らしいご助言ですね」
妙なところで納得したものだった。

「そんなこと言って、狼男は泳げんのぉ？」
ああ、とジークは当然のように返している。アリスハートは、むっときた。泳げないのはアリスハートの方なのである。水に濡れれば、羽が重くなって飛べなくなってしまう。
「そんな重たそうなシャベル持ってたり鎧つけてたら、流される前に沈むわよぉ」
ジークは肩をすくめた。鎧をつけたままでも溺れない自信があるのだ。ただし――
「戦いの最中に河に落ちれば、負けだ」
そのときは洪水だろうが関係ない。〈招く者〉の力を完全に封じられてしまうのだ。
だがジークから悲壮な気配は感じられない。あらかじめ危険を知っていれば、事前に対処することを怠らない限り、どうということもない。
静かな覚悟を抱いて階段を登るジークの後を、ノヴィアとアリスハートが追った。
やはりノヴィアとアリスハートにとっては何もかもが珍しい。階段を登りながら、荷揚げの列や、ひしめく船、荷を運ぶ滑車など、ついつい興味をもって見てしまう。
橋の内部である通路を進み、ようやく外に出て陽光を浴びた。まるで深い洞窟から出た気分だ。ここも人や荷馬車でごった返しており、ちょうど橋の東側のふもとだという。
「うわっ、何この人っ？」
アリスハートが、出てきたばかりの通路を振り返って仰天した。

出入り口のすぐ上に、大きな銅像が立っているのだ。どうやら街にゆかりのある聖人像らしい。高位の法衣姿だが、なぜか裸足で、しかも右足を宙に踏み出そうとしている。
「聖者〈踏む者〉……ですか」
ノヴィアも珍しげに、像の土台に刻まれた名を読んだ。聞いたこともない称号だった。
「悪いことすると踏まれるのかしらねぇ」
アリスハートが、ふわっと宙を舞って像の足の裏をつつくのへ、ジークが真顔で言った。
「踏み潰されないようにな、チビ」
「チビって言うなっ。狼男こそ踏んづけられて、ねじ曲がった根性直してもらえばぁ？」
狼男というのはアリスハートがジークの目の鋭さを茶化した渾名だ。
ジークは気にした風もなく肩をすくめている。ノヴィアがくすくす笑った。
共に旅をするようになってから、もうずいぶん経つ。当初はアリスハートにまるで無関心だったジークも、今では軽口を叩き合う程度には親密になっているのだ。
ノヴィアにとっては、己の主たる騎士と、無二の親友である。その大切な二人が、距離を置きつつ声を掛け合う様子が微笑ましく感じられた。自分にとって何より大事なものがそこにちゃんとあるという気にさせてくれる。
「俺は、橋の向こう側の聖堂に行く。お前は街をよく見ておけ、ノヴィア」

これは決して観光をしているという意味ではない。ノヴィアの万里眼で、街を見通しておけと言うのだ。ジークが追うものを――ドラクロワのもとへ集められる物資のありかを見定める上でも、街の地理を把握しておくに越したことはない。
　しばらく前までは、ジークに別行動を命じられることに抵抗していたノヴィアだが、
「はい。しっかりと見ておきます」
　今は、溌剌と返している。その傍らで、アリスハートがちょっとほっとなった。
　ノヴィアが泊まる予定の修道院で再び落ち合うことになった。ジークは橋の上にひしめく建物の間へと歩み去ってのち――ノヴィアもその場を立ち去ろうとしつつ、ジークの去った方へ目を向けていた。少しの間だけ、万里眼で、ジークの姿を見たのだ。
「また、のぞいてるぅ」
　途端にアリスハートがからかう。ノヴィアは唇を尖らせた。
「のぞきじゃ……」
　言い返そうとしたとき、視覚の向こう側で、ちらりとジークが振り返るのが見えていた。僅かの間、目があった。とはいえジークからノヴィアは見えていない。だが感じてくれているのだ。自分のこの眼差しを。
　ジークは、すぐにまた背を向け、歩み始めている。ノヴィアも万里眼の力を発揮するの

をやめ、通常の視界に戻した。別れ際に、軽く挨拶を交わしたような気持ちだった。
「のぞきじゃないもの」
ジークに何かあっても、自分がちゃんと見ているということを伝えるための行為なのだ。
そう思いつつ、少し、どきどきしていた。
「はいはい。ねぇ、早く行こうよぉ。面白そうなものが沢山あるよぉ」
アリスハートは焦れたようにわめいている。ノヴィアは微笑んでそれに従った。
かくしてジークは街の西側へ向かい、ノヴィアは東側に留まった。
そこで二人は、それぞれ、ある事件に遭遇することになるのだが――そのどちらも今後の旅に関わるものになるとは、この時点では予想もつかなかったのである。

西の丘の上から、セラヴィの街の喧噪を眺めるようにして、その聖堂は建っていた。
ラフィエット聖堂――聖者〈踏む者〉が創始し、セラヴィの街の執政にも深く関わり、市庁舎よりも大きな権限を持っているという。
「聖都からこんな北の地へお出で頂いて光栄です、黒印騎士団ジーク・ヴァールハイト」
そう言って出迎えたのは、聖堂の助司祭で、
「あいにく聖堂長は留守にしておりまして、今は私が全権を委されております」

とのことである。来賓室にジークを招き入れると、にこやかな様子で、こう言った。
「お座り下さい、ジーク殿。この街や聖法庁について色々と語り合いたいものですな」
ジークはどっかと腰を下ろしつつ、
「ドラクロワのもとに物資を運び、戦乱を準備する者がいる」
世間話など一切する気もなく、いつも通り、ごく端的に告げている。
「物資の流れを追いたい。協力してもらう」
「ドラクロワ……ですか。聖法庁から高い地位を与えられたにもかかわらず重大な秘儀を盗み、二年以上も逃走し続けている男……実に、厄介な存在ですな」
ちゃんと事情は知っている、というように助司祭が言う。だがその助司祭も、ジークがドラクロワの親友であったことまでは知らないようだ。代わりに、別の知識を披露した。
「ドラクロワに荷を届けようと試みる反聖法庁のやからは、〈運びゆく者〉などと自称し、この近辺でも、色々とよからぬことを企んでおるようでしてな……」
「〈運びゆく者〉――？」
ジークが珍しく聞き返した。そんな集団の名は聞いたこともなかった。
「みな、もとは河賊どもですよ。ドラクロワに従えば荒稼ぎ出来ると信じる愚か者たちでしてね。我々も彼らを捕らえるために、武器の売買を調べていたところです。で……あな

たは、どこまで捜索する気なのです？」
「ネルヴァ河を下り、海岸へ向かう」
「シャングリラの海岸まで……」
助司祭が目をみはった。
それがネルヴァ河と呼ばれる大河の終着点であり、アルカーナ大陸の最北端——北の果てだった。その海岸からは更に貿易船が大陸各地を結んでおり、ジークはまさしく大陸全土の貿易の網の目から、ドラクロワの所在を突き止める気なのだ。
「河の全ての関門を通過できる通行証が必要ですな。かなりの額になりますが……」
貿易の要である大河を自由に往来するには、厳しい手続きと多額の金が必要だった。
「聖法庁から支払われる」
ジークが告げると、助司祭は、にんまり笑って、立ち上がった。
「さっそく手続きをしましょう。どうぞこちらへ、お出で下さい」
ジークを招いて執務室を出て、奥へと進んでゆく。
そのまま中庭に出る助司祭の後を、ジークはただ黙ってついて歩いている。
ふと助司祭が立ち止まった。ジークも足を止め、中庭を囲う建物を見渡した。
背後で、大きな音を立てて扉が閉まった。次々に、周囲の扉が、閉ざされてゆく。

助司祭が振り返り、無言で立つジークを、鼻で笑った。
「ご心配いりませんよ、ジーク・ヴァールハイト。あなたは通行証を持ってシャングリラの海岸へ向かったと、ちゃんと聖法庁には報告しておきますからね。あなたを魚の餌にした後で、聖法庁から通行証の代金をもらうためにね」
助司祭の背後にある、唯一、開かれた扉から、続々と完全武装した兵たちが現れた。
たちまちジークを取り囲み、一斉に槍の穂先を構えてみせる。
「聖堂全体で、ドラクロワに呼応したか」
ジークは、彼らを鋭く一瞥して訊いた。助司祭は声を上げて笑った。
「我々は単に、ドラクロワからも聖法庁からも、代金を支払ってもらえればいいのです。〈運びゆく者〉などという河賊どもに頼まれた荷を渡すだけで、荒稼ぎ出来るというわけでしてね。実に、有意義な商売だとは思いませんか」
「荷は、全て運び終えたのか？」
「今頃、聖堂長が最後の荷を渡す用意をしていますよ。さあ、たった一人で現れたことを後悔しなさい、ジーク・ヴァールハイト……」
どん！　凄まじい音が辺りに響き渡った。ジークが猛然とシャベルを地面に突き立てたのだ。助司祭がぎょっとなって後ずさった。だが真の恐怖が訪れたのは、その後だ。

「貴様らを闇に葬る。逃げたい者は逃げろ」
ひどく淡々とジークが言った。助司祭の顔が引きつった。
「せ、聖法庁の犬が、虚勢を張るかっ！　構わぬ、八つ裂きにしろ……！」
助司祭が慌てて叫んだとき、ジークの左手に白熱する雷花が咲き乱れた。にわかに迸る稲妻の奔流とともに、辺りに風が吹き荒び、ジークの口から烈声が迸った。
「ジーク・ヴァールハイトが解き放つ！」
シャベルが水銀のように溶けて飛び散った。中から銀に光る剣が現れ、その柄をジークが握りしめる。そして飛び散った銀の輝きが、禍々しい姿となって凶悪な咆吼を上げるや、助司祭も兵も愕然と凍りついたのだった。

行き交う荷馬車の列を避けながら、ノヴィアはアリスハートとともに街を散策していた。ドラクロワのもとへ運ばれる荷の行方を探る一方、いやでもこの街の華やかさが目に入る。どこもかしこも店でいっぱいで、食べ物や武器や宝石、地方の珍しい衣服や香辛料など、売り物を見ているだけで楽しかった。
「ねえ、ノヴィアもなんか買ったらぁ？」
アリスハートが気楽に言う。事実、ノヴィアにはそうするだけの金があった。

「何か気に入ったものがあれば……」
ノヴィアは思案するように腰の袋を手に取った。中には金が詰まっている。使おうか使うまいか、ずっと悩み続けている金だった。とある騎士団に料理を振る舞ったときにもらった金で、最初は返そうとしたが、ジークの言葉で受け取る気になったのだ。
(——それだけの価値があるということだ)
自分が誰かに与えたものが価値がある、そうジークに言われたときのことを思い出すと今でもどきどきして顔が赤くなる。その喜びをいつまでも感じていたくて、あれを買おうこれを買おうとアリスハートと話しつつ、結局は何も買わずに持ち続けている金だった。
その大事な金の入った袋を手に雑踏を歩いていると——ふとノヴィアの視界の片隅に、前方からやって来る子供の姿が映っていた。
年はノヴィアと同じくらいだ。健康そうに日焼けした肌に、短い赤茶の髪。短ズボンからはすらりと引き締まった脚が伸びている。少年かとも思ったが、あどけなく微笑む顔はまぎれもなく少女のものだ。どきりとするほど鮮やかな青い瞳をしており、高価な宝石を思わせる。だがその姿はどことなく薄汚れ、特に左腕を布で首から吊り、しきりに右手でさする姿がノヴィアの憐れみを誘った。
腕が悪い、貧しい子供——

ノヴィアはそんな風に思い、特に注意を払わず真っ直ぐ歩いた。
そして、その少女が、すっとノヴィアの傍らを通り過ぎたときである。
布で吊っていたはずの左腕が、蛇のような素早さで動くや、ノヴィアが持っていた袋を、ぱっとつかみ取ってしまったのだ。
「あ――」
数歩進んで、ようやく袋が消えていることに気づいた。それほど鮮やかな少女の手練だった。慌てて振り向くと、数歩離れたところで当の少女が左手に袋を持ち、勝ち誇ったような笑みを浮かべ、こう言ったものだ。
「へっ、間抜け」
一瞬ノヴィアの頭が真っ白になった。完全な油断だった。少女は腕が悪い振りをしていただけなのだ。それも金をするために。
生真面目なノヴィアからすれば最悪の所業である。相手の憐れみを誘った上で悪事を働くなど。しかも、よりにもよって子供がそれをするなど――
「……信じられない」
思わずそう口にしたとき、既に少女は背を向け、雑踏の中へ逃げ込んでいる。
「ま……待ちなさいっ！」

アリスハートが、びくっとなるほど怒りのこもった声を放った。だが少女は一向に構わず、雑踏の中に消えている。慌てて走ったとしても、とても追いつけるものではない。
普通の者なら、ここで大声を上げて少女を追いかけるところだが、ノヴィアは違った。
ノヴィアは迷っていた。自分の力を使うべきかどうか。命の危機に陥るならまだしも、相手はただの子供なのだ。といって見逃すには奪われたものが重要すぎる。金額が問題なのではない。何より大切にしていたものが奪われたのだ。ノヴィアは躊躇いつつ、やがて目の前の空間にぴたりと視線を当てた。
その様子に、アリスハートが絶句した。
ノヴィアの眼前に輝きが起こるや、にわかに一本の金の矢と化して宙に浮いたのだ。
ノヴィアの視覚にやどるもう一つの力――そこにそれがあるという幻を見ることで具現する幻視の力である。何でも現せるわけではなく、人や動物、火や水など複雑なものや不定型なものは無理である――が、人を射る矢は十分に現せる。
そしてその矢が、にわかに迅った。
既に万里眼で、雑踏に紛れた少女を見つけている。矢がじぐざぐに人を避け、逃げる少女目掛けて飛来した。
ただし矢の尖端は丸く、体を貫いて命を奪うものではない。それで少女の手足を打ち、

動きを止めるのだ。多少は痛むだろうが、ノヴィアとしては迷った末の妥協点だった。
「うわっ、なんだっ!?」
矢が、少女の左腕を打つかに見えたそのときである。
なんと少女が叫び、かわした。しかもただかわしたのではない。跳んだのだ。
周りの大人たちの背より遥かに高い位置へ、鳥のように舞い跳んでいた。周囲の人々が呆気に取られ、アリスハートには何が起きたかも分からない。
ノヴィアも驚きはしたが、すぐに外した矢の軌道を戻し、宙にいる少女を狙い打ちにしている。だが、そこでさらに異常なことが起こった。
少女が空間を蹴ったのだ。まるでそこに目に見えぬ台があるかのようだった。空中を跳んで矢をかわした少女が、建物の屋根に乗り、眼下を振り返った。
唖然とするノヴィアと、少女の青い目が、真っ直ぐに向かい合った。
少女は誰が矢を放ったか察した顔で、じろっとノヴィアを睨んでいる。かと思うと、
更にノヴィアの頭を真っ白にするような言葉を、いきなり放って寄越したものだ。
「危ねえじゃねえかよっ、このブスっ！」
全面的に相手が悪いにもかかわらず、これほどの侮辱を受けたのはノヴィアの人生で初の出来事である。ノヴィアの顔から表情が消えた。目に冷たい光が満ち、ぽつんと呟いた。

「刺す」

何が起きているのか聞こうとしたアリスハートが、ぞっとなって凍りついた。

少女が、屋根の向こうへ跳んだ。ただ逃げたのではない。建物の壁を蹴り、屋根を越え、何もない空間を踏み、でたらめに跳ねる鞠さながらに逃げ去ったのだ。

新たな矢を見たノヴィアは、どこへ放って良いか分からず、愕然となった。

万里眼を駆使しても追いつけぬほどの敏捷さで、少女はひしめく建物のどこかに消えた。

「逃げられた……」

呆然と呟いた。幻視の矢が力を失い、消えた。

大事な金も、幻のように消えていた。

ジークの周囲で、水銀の輝きが、トカゲの怪物と化して荒れ狂った。

数は十六体。両手に分厚い剣を掲げ、皆殺しの雄叫びを上げて兵を襲う。兵が応戦するが、たちまち槍を砕かれ、鎧ごと斬り殪され、血と悲鳴が吹き荒れるばかりであった。

「な……な……なんだこれは……」

腰を抜かしてへたりこむ助司祭に、

「凄魔——俺の古い仲間たちの魂だ」

ジークが歩み寄って言った。その間にも兵は壊滅し、残りは武器を棄てて逃げている。
「最後の荷とは何か、喋ってもらう」
助司祭は、今にも失神しそうな顔で喘いでいる。
「聖堂長はどこにいる」
ジークが近づくと、助司祭は震えて立つことも出来ぬまま、慌てて両手を振った。
「ま、待て。何でも喋る。だから、命だけは……」
その助司祭が、突然、ぎゃっと悲鳴を上げた。
鋭い何かが、助司祭の体を貫き、ジークに襲いかかったのだ。
ジークは、それを咄嗟に剣で打ち払いざま跳びのき、そして驚きに目をみはった。
それは、透明な氷の塊であった。巨大な氷柱が地面から斜めに生え、助司祭の体を串刺しにしているのである。物凄い絶叫が助司祭の口から迸った。傷から血が溢れ、氷の表面にしたたるや——氷柱のあちこちから氷の棘が生え、助司祭の体に食いついた。
そうして瞬く間に、氷全体が真っ赤に染まってゆく光景に、
「氷が……血を吸っているのか」
さしものジークが、驚きの声を零したとき——
そこら中から氷柱が生え、兵たちの遺体を片っ端から貫いたのだった。

串刺しにされた遺体が辺り一面に林立し、どの氷柱も、血を吸って赤く染まってゆく。
助司祭の悲鳴がやんだ。その体はからからに乾いたミイラのようになっている。代わりに真っ赤に輝く氷柱が、いきなり水になって、ばしゃっと地面にぶちまけられた。
助司祭の血は消えていた。次々に氷柱が水に変じ、遺体が地に落ちてゆく。
あるのは水浸しになった地面と、そこら中に転がる、干涸らびた遺体だけだ。
ジークは、微動だにせず剣を構えている。だがそれ以上は何の異変も起こらず、やがて静かに剣を下げた。氷柱は、どうやら単に口封じのために出現したらしい。
あわよくば助司祭ごと仕留めようとしたのだろうが、今は用心深く気配を断っている。
ジークは、干涸らびた助司祭の傍らに屈み込み、かすかに息をのんだ。
「……魂まで食われているのか」
あの氷が、血を吸うとともに、この助司祭の全てを――魂さえも食い尽くしたのだ。
最も新しい記憶は、城塞都市ルカでの不意打ちである。氷の魔獣が、戦いの最中にあるジークの隙を突いて襲ってきたのだ。そのときと同じ使い手が、今この近辺にいるのだ。
ドラクロワと同盟したレオニス・ジェルミナルの手が、ここにも及んでいる――
だがジークはこのとき、さらに過去の記憶を辿っていた。かつて、このような遺体を見たことがあるのだ。血も命も、魂さえも食い尽くされ、からからに干涸らびた遺体――

ジークは立ち上がり、凄魔たちを元のシャベルの姿に戻して肩に担いだ。レオニスが、どのような刺客を送って寄越したにせよ――あくまで目的はドラクロワただ一人だった。

「最後の荷……」

助司祭が最後に告げた言葉を、ジークは思案げに呟いていた。

2

「仕留めたか？　さすがのジーク・ヴァールハイトも油断していたのではないか？」

河に浮かぶ船の上で、法衣姿の老人が言う。

「いいえ、ラフィエット聖堂長……微塵も油断してはいませんでしたよ。さすがはジーク……おそらく、最初から戦う気だったのでしょう」

貴族服の男が、長い黒髪をかきあげて囁いた。その指がいやに細長く、白い。しかも異様なことに、両手の指全部に爪が無い。指先には複雑な紋様が刻まれ、おぼろに光っている。その紋様を刻むために爪を剝がし、二度と生えぬようにしたのは明らかだった。

レオニスが集めた狩人の一人――吸血医師ことアキレス・ツェペットであった。

「助司祭ごと〈蛭氷〉に貫かせようとしたのですが……そう上手くはいきませんね」

黒目がちの瞳を、聖堂長に向けた。痩せているが頰は艶やかに白く、ゆらりと立ち上が

る仕草が、骨のない生物を思わせた。それこそ巨大な蛭が、貴族服を着ている感じだ。
「信じられん……我が聖堂の兵が、こうもたやすく、たった一人に蹴散らされるとは。アキレスよ……貴様一人が助勢したところで、倒せる相手ではないのではないか」
「なに、真正面から戦おうなどとは思っておりませんよ」
アキレスは笑って応えた。
「それに今回は、〈蛭氷〉に血を吸われた者の姿を、あの男に見せることが出来れば、十分です。血も魂も吸い尽くされ、干涸らびた姿をね……」
「……なに？　なぜそんなことをする？」
「あの男に、因縁を思い出させ……私に目を向けさせるためです。そうすれば、ドラクロワのもとへ荷を運ぶ者たちから、ジークの目をそらすことが出来るでしょう？」
アキレスは当然のように返しているが、聖堂長は納得のいかない顔でいる。
「因縁？　何のことだか分からぬが……もしジークが我々に目をつけては……」
「ご安心を。ジークの目的はドラクロワであって、あなた方ではありません。また、この私が、レオニス様から、狩りの全権を与えられたのです。ドラクロワを追うジークを、背後から襲い……苦しませて殺す……。全て、私の仕事ですよ」
アキレスが優しく言う。聖堂長も渋々うなずいた。いずれにせよ、無為に兵を死なせた

ことを悔やむ気持ちは、アキレスにも聖堂長にも、皆無といって良かった。

「それより最後の荷は、どうするのですか？」

「もう少し観察したかったが……今のところ優良なのは一体だけでな、他は全て失敗とみなして始末するしかあるまい。貴様も手伝ってくれるのか？」

「〈蛭氷〉に血を与えられるのでしたら、ぜひ……」

　アキレスは微笑した。得体の知れない生き物が、人の皮をかぶっているような不気味な笑みに、聖堂長は思わずごくっと喉を鳴らした。

「血か……。よもや、そんなものを求めて働くとは……まさしく蛭だな」

　聖堂長にとって、それが精一杯の皮肉だった。だがアキレスは当然のようにうなずき、

「いえいえ……聖堂長ならお分かりでしょう。人はみな、蛭のようなものですよ」

「なに？　人が蛭だと？」

「飢えが満たされるまでは食いついて離れませんが、満足すれば、あっさり離れてゆく。権力や富や栄誉に群がる人間は、蛭と何処が違うのでしょう？　むしろ蛭の方がよほど無邪気で素直ではないですか。自分の欲望を何一つとして隠さず、ただ求め続けるのですから。あらゆる人の罪は、人が蛭であるということの証です。全ての裁きも戦いも、より強い蛭が、弱い蛭から血を吸って力を得るということに過ぎないのですよ」

そう言ってアキレスが爪の無い手を翻すや、船の周囲で、きしきしと軋む音が響いた。
聖堂長が蒼白になった。いつの間にか、船が鋭い氷に囲まれているのだ。
「ただ、私が造り出したこの〈蛭氷〉には、満足するということがありませんがね……。力を求めて永遠に飢え続ける、とても純粋な存在なのですよ」
震える聖堂長をよそに、アキレスは微笑して、飢えに尖る氷の牙を見つめた。
「我が主レオニス様もまた〈蛭氷〉のような純粋さで力に飢えていらっしゃる。レオニス様も、きっと気づくでしょう……全ての人間の奥底に隠された飢え……あの方自身の飢えに。レオニス様こそ、長いこと私が求め続けてきた、真の王たる方なのですから」

「それではレオニス様……そのように計らいます」
廷臣の一人が、レオニスの署名を得た書類を手に、うやうやしく頭を垂れた。
王座に身を置いたレオニスは、広間に居並ぶ廷臣たちに向かって、声高に告げた。
「じきに昼の鐘だ。しばらく独りで考えたい。午後の討議まで、みな退がっていてくれ」
廷臣たちや書記や執政に関わる者達が次々に広間を退出してゆく。やがて扉が閉められ、
「トール……そばにいるかい」

ぼんやりとした声を零すレオニスの傍らに、トールがすっと近づいて身を屈めた。
「はい、レオニス様。おそばにおります」
レオニスは、こつこつと指で王座を叩いて言った。
「ここは、退屈だな」
「はい……」
トールは従順に頭を垂れた。
昼の鐘の音が、遠くから聞こえてきている。
午前中いっぱいを執政の報告と討議で費やしたのだ。これまで執務室で政務をこなすことが多かったレオニスだが、ここ最近はずっと王座で報告と討議を行っていた。
その方がレオニスに声を届けやすいため、廷臣たちはその習慣の変化を喜び、目が回りそうなほどの膨大な報告に、てきぱきと応えるレオニスを揃って賞賛したものだった。
だがレオニスは、ひどくつまらなさそうに、誰もいなくなった広間を眺めている。
どうにかして失われてしまったものの代わりを探そうとするが、探せば探すほど、到底そんなものは見つかりっこないことを思い知らされる――そういう深い失望をたたえたレオニスの眼差しが、傍らのトールには痛ましい限りだった。といってトールになすすべとてなく、ただ黙ってレオニスのそばにいるしかない我が身が歯がゆかった。

「じきに……アキレスが、ジークと接触する頃だな」
「はい、レオニス様」
「失敗するにしろ成功するにしろ……報告は、まだ何日も先か」
溜息混じりの口調だった。報告を楽しみにするというより、このままでは気が滅入る一方であるせいで、何とか気を紛らわすための刺激を欲しているのだ。
「今日の分のまとめを、とってくれないか」
書記の机に山積みされた紙の束を指さし、レオニスは言った。
治水の件、司法の件、商業の件、罪人の処理、数々の揉め事など、聖地シャイオンが豊かになればなるほど増えてゆく課題が、幾つもの塊となって積まれているのだ。
それらの課題が一覧としてまとめられた書類をトールが手に取り、レオニスに渡した。
「耕地の水路の使用を巡る争いについて、貴人が罪を犯した場合の法律について、盗みの訴えが増え続けていることについて、商売で嘘をついた者たちの罰について……」
レオニスは、書類の内容を歌でも唄うように口ずさむうち、ふと思いついたように、
「トール……あの女を呼んでくれないか」
何気ない口調でそう言った。トールは内心のざわめきを押し隠し、
「あの女……ですか」

「そうだ。あの地獄の彫刻家を、ここに呼んでくれ」
レオニスは書類に目を当てたまま、静かに告げた。
トールは何か口にしようとしたが言葉にならず、ただ従順に鈴を鳴らし、付き人を呼んで、そのように取りはからった。
あの女とは、レオニスが招いた三人の狩人の一人のことだ。
居心地の良い住居を拒み、自ら地下牢に寝起きするばかりか、壁や天井におどろおどろしい彫刻を彫り込む女。トールが不在の間にレオニスを深い闇に誘い、どうやってか心の傷ばかりかノヴィアとの血縁まで悟らせてしまった娘――
トールにとって、今すぐにもこの世から消えてなくなって欲しい存在であった。
間もなく、その地獄の彫刻家レティーシャ・ベルゼブベスが、相変わらず兄のものだという頭蓋骨を両手に抱え、広間にやって来た。王座のレオニスに目を向けもせず、裸足のまま、ぺたぺたと足音を立てて広間を横切ってゆく。かと思うと王座のすぐそばに佇み、
「レオニス様つまらないから呼んだのね、兄様。そぉ、退屈なんだ。ふー兄様おかしい」
頭蓋骨を撫でながら、聞こえよがしに、ぼそぼそ呟くのだった。
「もう綺麗な像は彫らないのか、レティーシャ。僕のために何か彫る気はないのか」
レオニスが顔を上げて言う。レティーシャにとっての綺麗を、トールも知っている。

苦痛と悲憤に満ちたむごたらしい人間の姿こそ、レティーシャにとって何より綺麗なものなのだ。そんなものをレオニスが所望すること自体、トールには耐え難いことだった。
「あたし彫ったよね、兄様。綺麗、綺麗、綺麗なの彫ったよね。レオニス様のね、兄様」
レティーシャが無表情に頭蓋骨に話しかける。
レオニスにとっての綺麗な像――城の大広間に飾られた、女神像のことだ。
実際は女神というよりも聖母と言った方が似合うような、限りない気品と母性をたたえた女性像だった。領民も聖地を訪れる旅人も、その出来映えに感銘を受けない者はいない。
「確かに、あの像は、僕にとって綺麗だった。何より綺麗だった」
レオニスのひどく虚ろな声が広間に響き、トールは耳を塞ぎたい気分に駆られた。
「もっと他に綺麗なものは無いのか？　僕の中に、僕の知らないような綺麗なものが」
他にもっと苦痛は無いのかと訊いているようなものだった。トールはたまらず、
「レオニス様」
声を上げたとき――ほとんど同時に、レティーシャが言った。
「無いよね、兄様。今度は、レオニス様が綺麗にする番だよね、兄様」
トールが息をのんだ。レオニスも意表を突かれた顔になる。
「僕が……？　綺麗にする？　何をだ？」

「一番、綺麗にしたいものがあるくせにね、兄様。知ってるくせにね、兄様」
頭蓋骨に話しかけながら、いつの間にか相手の闇を引きずり出すようなレティーシャの口調そのものに、トールは嫌悪感と同時に戦慄を覚えた。
「僕が綺麗にしたいもの……。そんなもの、この聖地シャイオンしかないに決まってる」
レオニスは、謎解きでも楽しむように口にしている。
「この土地を豊かにし、誰もが住みやすい場所にする。それ以外に、どうしろと？」
「汚いものを綺麗にするんだよね、兄様。それが一番だよね、兄様。レオニス様、分かってるくせにね。一番したいこと、すれば良いのにね」
「汚いもの……」
レティーシャは、ぼんやりとした顔のまま、頭蓋骨に向かって言った。
「今日も沢山、汚いものを見せられてるのにね、兄様。ふー、レオニス様おかしい」
にわかにトールの背を、得体の知れない恐怖が走った。思わずレオニスを振り返る。
レオニスは、自分が手にした書類に、再び目を戻しているところだった。
「そうか……確かにそれもまた、聖地を美しくする方法だ。飾り立てるのではなく汚いものを排除すれば、残されるのは美しいものばかりだ」
子供が新しい遊びを発見したかのような声だった。そしてふと目を細め、

「確かに、父さんもそうしようとしていた。いつでも汚いものを厳しく罰していた。そうか……父さんもこんな気持ちでいたんだ。母さんを失ってから、ずっと。僕が歩けなくなってから、ずっと……こんな気分で、罪人を罰していたんだ」

「レオニス様」

トールが慌てて呼ぶ。だがレオニスは聞こえていないように呟いた。

「だからあんなに厳しかったんだ。僕はずっとそんな父さんに怯えて暮らしてたんだ」

どろどろとした暗いものが言葉となって噴出してくるようだった。

「おやめ下さい、レオニス様」

トールが切羽詰まった声を上げた。レオニスは、きょとんとして振り返った。

「珍しいね、トール。お前が、口を挟むなんて」

そう言って、ひどくおかしそうに微笑した。その目が、はっきりとこう告げていた。

影は黙って立っていろ——と。

トールは、あまりのことに呆然となって言葉を失った。

「おかしい……」

くすっと笑うような声がした。トールは、のろのろとレティーシャに目を向けた。

レティーシャの口元は、両手で持った頭蓋骨の陰になって見えない。だが無表情な碧の

目の下で、レティーシャが笑みを浮かべているのを、トールは実際に見た気がした。
冷たいものに体を縛りつけられたように硬直するトールに、レオニスは優しく言った。
「お前には、僕のそばにいて、この国が美しくなるところを見て欲しいんだ、トール」
トールは、やっとのことで頭を垂れた。それ以外にどうすれば良いのか分からなかった。
脳裏に、あの陽気な妖精の顔が浮かんでいた。アリスハートならどうするだろう。どうやって相手を止めるだろう。だが答えは何も浮かばなかった。
従順に賛同を示すしかないトールに、レオニスは満足そうにうなずいた。
「ありがとう、トール」
その言葉がトールの中の何かを打ち砕いた。あまりの痛烈さに息が詰まった。
レオニスは、そのおもてに鮮やかな悽愴の微笑を浮かべて、嬉々として言った。
「この国に、罪人はいらない。罪が軽い者も、重い者も、みんな綺麗にしてしまおう」

3

「黙ってお独りで戦う気だったんですか！」
ノヴィアの声が、修道院の客間に響いた。
「通行証なんてもう持ってるくせに！　わざわざ相手が敵かどうか試したんですか！」

聖王に直接面会が可能なジークの立場からすれば、ネルヴァ河を往来する許可などすぐに下りる。助司祭との会話は、全て聖堂の内情を探るためのものに過ぎない。

「みんな、人を騙すことばっかり考えて！」

だがノヴィアは顔を真っ赤にしている。ジークが眉をひそめ、アリスハートを見やった。

「何かあったのか？」

「いやぁ……。実はねぇ……」

アリスハートが苦い顔で金を盗まれたことを話すと、ジークは真顔で、淡々と言った。

「やられたな」

このときノヴィアは、ジークと出会って以来初めて、その顔に宝杖を投げつけたくなるという衝動に襲われた。ノヴィアにとって盗まれたのはただの金ではない。ジークの言葉だ。価値があるとジークが言ってくれた喜びそのものだった。

もう少しで涙が零れそうになった。そのノヴィアの肩を、慰めるように触れる者がいた。

「盗むことでしか生きていけない子達が、この街では多いのですよ……」

ノヴィアが泊まる修道院の、院長である老女だ。〈銀の乙女〉に属し、ドラクロワを追討するジークの事情をよく知っていた。

「この辺りには幾つも聖堂があって、戦乱で身寄りを失った子供達がもらわれてくるの。

でも厳しい修行が嫌で、街に逃げ出すのよ。無理もないわ……親を失ったというだけで、むりやり修行を強制されるのだもの」
　そんな子供達が集まり、その日を食いつなぐため盗みをする。彼らに盗まれてもみな滅多に聖堂に届け出ない。大した額ではないし、それで子供が生きられるならと思う者が多いからだ。悪童たちも分かっていて、たとえ目の前に大金があっても、ひとつかみほどしか盗まない。体が大きくなって河港で雇ってもらえるようになれば盗みはしなくなる。
「でも盗むのは悪いことです！」
　ノヴィアが叫ぶ。問題は、盗まれたのがあの金であることだった。大事な思い出を奪われ、かつ侮辱されたのだ。何としても見つけ出し、謝らせなければ気が済まなかった。
「悪いことは悪いことです。それを許すことなんて出来ません！」
　きっぱりと告げるノヴィアを、ジークはただ静かに見つめている。
「お願いです。夜までに必ず見つけ出します。それまで自由にさせて下さい」
　ノヴィアが言い募った。ジークの任務がどれほど重要か分かった上での懇願だった。
「逃げられたのは宙を跳んだのに驚いたからです。もう二度と逃がしません」
　ジークと老女が、同時に目をみはった。
「宙を……？　本当か？」

「はい。まるで空中を歩くみたいに。聖堂にもらわれたってさっきおっしゃってましたよね。きっと何かの聖堂での修練で身についた力だと思います。力を悪用するなんて……」
ジークがちらりと老女を見た。老女が小さくうなずく。ジークは思案げにノヴィアに目を戻し、やがて静かに、こう告げた。
「出来るだけ早く見つけ出せ」
「はいっ、頑張ります！」
「ううう……ノヴィアが怖いよぉ……」
みなぎる闘志をあらわにするノヴィアに、アリスハートが真剣に嘆いていた。

「わっ、けっこう入ってやがる」
街の外れの倉庫街で、少女が、気まずそうな声を上げた。
ノヴィアから袋を盗んで逃走した、あの少女だ。今、じゃらじゃらと金が出てくる袋に、喜ぶとも悔やむともつかぬ顔でいる。ふらふら買い物してる同い年くらいの子供から引ったくったのだが、まさか、こんなに入っているとは思わなかった。きっと親から買い物か何か頼まれたのだろう。紫の瞳で自分を睨んでいたあの子が親に叱られ泣いている顔が浮かんだ。いきなり矢を射られたときは思わず罵ったが、

「悪りぃことしちまったかなぁ……」
赤茶の髪をかきかき、舌を出す。
だが返す気はない。この金が無ければあの子が飢え死にするわけではないのだ。
少女は、仲間の分も盗まなければならなかった。仲間は自分も入れて六人。うち三人が病気で、残りの二人も日に日に体が悪くなってきていた。中でもリーダーとしてみなを守り、導いてくれた少年が、最も重症だった。彼がいなければ、誰一人として聖堂から逃げることも出来ず、自分の故郷が海であることも知らないままだっただろう。
（キリ——俺たちは海から来たんだ）
彼はそう言ってくれた。それは何より大切なことだった。自分たちがどこから来たか。
青——それが少女の名だ。そして彼が、その意味を教えてくれた。海のように青い瞳を持つからそう名づけられたのだと。物心つく前に聖堂にもらわれた少女に、見果てぬ故郷を与えてくれた。見たこともない海が、少女の——キリの、みなの故郷だった。
彼は言った。俺たち六人みんな、色合いは違うけど、青い目をしている。それは海の色々な青さのせいだ。そしてキリの目は中でも一番、海の深いところにある青さなのだ。
「フモ……」
彼の名をそっと呼んだ。途端に、どきりと胸が高鳴った。

仲間はみんなリーダーのフモが好きだ。でも自分の好きは、みなとは少し違う気がする。キリは、六人の中でただ一人の女の子だった。
「悪いな……どうしても必要なんだ」
袋に金を戻しながら、詫びるように呟き、隠れ家に向かった。

仲間達の隠れ家は、今は使われていない古い倉庫の屋根裏だった。キリが階段を上ると、
「みんなで生き残るのは、もう多分……無理だ」
いきなりフモのそんな声が聞こえ、キリはぎくっとなって立ち止まった。
無理――そんな言葉、フモは今まで決して口にしなかった。
「聖堂の奴らがそこら中にいる。このままじゃ見つかるのも時間の問題だ。誰かが生き残らなきゃいけない……そのためには誰かが犠牲にならなきゃ駄目だ。分かってくれ」
みなで話しているらしい。自分抜きで――そのことにキリはたまらない不安を感じた。
「キリか――」
誰かが言った。キリはびくっとなり、拍子に袋を落とした。
慌てて拾うが、みなの話し声がぴたりと止まった。耳に突き刺さるような沈黙があった。
キリは強いて何気ない顔を装い、いつもの明るさで階段を上った。

「ただいま。見ろよ、こんなに稼いだぜ」
にっこり笑って、ひょいと袋をフモに放った。
フモは寝たまま、袋を受け取った。その両脚は動かなくなって久しい。少年に似合わぬ引き締まった顔立ちが、厳しい表情をたたえてキリを向いている。
いつも優しい笑顔で迎えてくれるフモが――無表情に言った。
「みなで話し合ってたんだ、キリ。お前のことを。お前がここにいるべきかどうか」
キリは、恐ろしさで震えそうになる膝に力を入れ、
「どういう意味だよ」
何とか笑って肩をすくめてみせた。
フモは袋を仲間の一人に渡し、そいつは袋を手に奥の部屋に入った。残り三人はうつむいてキリを見もしない。やがてフモが言った。
「出て行け」
キリは笑顔のまま凍りついた。自分の心が真っ二つに引き裂かれ、粉々に打ち砕かれる音を実際に聞いた気がした。
奥の部屋に行った仲間が、荷袋を担いで戻ってきた。その荷袋を、どすんと音を立ててキリの前に置いた。そして黙って背を向けた。

「お前の荷物だ。もうここには来るな」
フモが言う。キリは弱々しくかぶりを振った。全身が震えていた。たとえ死ねと言われたってこれほど辛く、怖くはないはずだった。
「なんで……みんなで海を見ようって……病気が治ったら、行こうって……海に……」
キリが僅かに近づこうとした。フモに向かって。大好きなフモに向かって。
「一人でどこにでも行け。お前は邪魔だ」
フモの言葉が、キリの心を突き飛ばし、一歩たりとも近づけさせなかった。
キリは長いこと黙って立っていた。他のみんなは何も言わず、うつむいたままでいる。
フモは最後までじっとキリを見ていた。
キリはやがて痺れたように感覚のない手で荷袋を握り、後ずさった。
背中を向けた途端、もっとひどい言葉を投げつけられるのを恐れるような仕草だった。
フモはそれ以上、何も言わなかった。
キリはきびすを返し、階段を走って下りた。倉庫を出て、そのまま走り続けた。恐ろしいものから急いで逃れようとするように、必死に駆け続けた。
「行っちまった……」
仲間の一人が顔を上げ、言った。

「俺……キリのこと好きだったな」
別の一人が、そいつの肩を叩く。
「みんなそうさ。フモが一番……」
「これで良い。誰かが生き残るためには、誰、か、が犠、牲、に、な、ら、な、き、ゃ、い、け、な、い、ん、だ」
フモが硬い声で、彼らを遮った。
「あいつは一番元気だし……俺たちとは違う。あいつは……女の子なんだ」

「絶対に忘れないわ……あの顔。絶対に、絶対に見つけてみせる」
ノヴィアはそう口にしながら街を見渡した。自分の大事なものを盗んでおきながら、散々に悪態をついて逃げ去ったあの少女を捜し出すために。
「子供がお金を盗んでも誰も何も言わないなんて……そんなのが許されるなんて、変よ」
怒りのこもった目で街を睨むノヴィアの傍らでは、アリスハートがどことなくしょんぼりした様子でいる。
「ノヴィアぁ……そんなに怒ったりしないで、もう少し冷静に……」
「こんな風に頭にくるなんて生まれて初めて！」
ノヴィアは、まったくもって容赦のない口調で言い捨てた。

「絶対に捕まえてみせるわ、アリスハート。当然でしょう？　悪いことをしたのに何の罰も与えられないなんて。誰も怒らないなんて。そんなこと信じられない」

「でもねぇ、もし捕まえたとしてぇ……ノヴィアが罰を与えるのぉ？」

ノヴィアは、そこでちょっと考え込み、こう言った。

「そうね……お金を取り返して、私に謝らせて、その後で、その子が逃げ出したっていう聖堂に連絡するわ。きっと聖堂が、その子に罰を与えてくれるから」

それが最も正しいことなのだ。それが間違っているなどと誰が言えるだろう。

「確かに悪いのはその子だけどぉ……ちょっと可哀想よぉ」

アリスハートが小声で言う。だがノヴィアはきっぱりとかぶりを振り、

「何が可哀想なもんですか。あんな子……」

ふいにその目が見開かれた。まるでもの凄く良いことでもあったかのように、

「見つけたわ！」

怒りと喜びの入り交じった声を上げるや否や、アリスハートにも構わず走り出していた。

「ま……待ってよ、ノヴィアぁ！　そんな……落ち着いて、落ち着いて！」

脇目もふらず盗人を追うノヴィアを、アリスハートが慌てて追いかけていった。

「とても純粋な子ね。世の中の全てが、善と悪で割り切れると信じているわ……」
修道院長である老女が言った。
「優れた万里眼の使い手なら、盗まれたお金を取り戻すことくらい、たやすいでしょう。そして幻視の力があれば、盗んだ相手を捕まえてしまえるでしょうね」
老女は、どこか試すような口調でそう言いながら、ジークを見ている。
「相手を許す間もなく、罰してしまえる……それだけの力を持っている子よ、ジーク」
「許さない者こそ、最も許されない者だ」
ジークは、街の地図に鋭い目を向けたまま、短く返した。
「あの子、試されることになるわね。宝杖を持つ者として……力のあり方について。紋章と宝杖を持ってしまっていることの重さを、あの子が理解していれば良いのだけど。万が一、私的な怒りで力を行使し、お金を盗んだ相手を殺したりしたら……紋章の剝奪だけでは済まないでしょう。下手をすれば、あの子自身が、罰せられることになる……」
ジークはそれには応えず、地図の何か所かに印を付けた。
「他に、心当たりのある場所は？」
「いいえ……その東側の倉庫街が、家のない子供たちのたまり場になっているわ。どうするの？　あなたの従士よりも早く、お金を盗んだ子供を見つける気？」

「いや。そちらの確保はノヴィアに任せる」
地図を畳みながらジークは言った。
「俺は、聖堂の者が口にした、最後の荷を追う」
老女が驚いたように目を丸くした。
「自分の従士のことを、そんなにも信用しているというのね？」
「あいつは、母親の死さえ、許そうとしてきた」
「一時的な感情で、我を忘れたりはしない……そう信じているの？　あの年頃の女の子には少し酷な期待じゃないかしら。もし、あの子が罪を犯したら……」
「そのときは俺があいつの罪を背負う。あいつには自由に力を使えと言ってある」
それが、これまでノヴィアと共に旅した上でのジークの態度だった。老女は微笑した。
「この街でさまよう子供たちに必要なのは、あなたのような父親になってくれる人ね」
ジークは、ちらりと老女を見た。ジークには珍しい、咎めるような視線である。
「分かっているわ……本来、親の無い子供たちを健全に育てるのは聖堂と修道院の仕事。あなたが来てくれたお陰で、権力を振りかざし、子供を道具としか考えなかったラフィエット聖堂も大人しくなるわ。後は、私たちが本当にすべきことをするだけね。親も家も無いからといって、子供たちに、希望までなくさせないために」

ジークはうなずき、そのまま部屋を出て行こうとした。老女はその後についてゆき、
「あなたは許せるかしら、ジーク？」
そう訊いた。ジークは足を止め、無言で老女を振り返った。
「正義も悪も……人の営みの結果でしかないわ。しかもそれは常に変化してゆく。聖法庁が法を整え、それを厳しく守ろうとするのも、めまぐるしく変わる善悪を何とかしようとするから。でも今の世の中では力さえあれば偽りの善を作り出すことさえ出来るのが現実……あなたは、力があってなお自分に都合の良い正義を作らずにいられるかしら？」
「いつか棄てる力だ」
躊躇なく断定した。己の旅の全てをかけた言葉として。老女は祈るように目を閉じた。
「期待しているわ……あなたがドラクロワを許し、その上で、彼を止められることを」
ジークは返事をせず、ただ行動した。再び老女が目を開いたとき、ジークは既に修道院を出て行くところだった。多くを背負いながら、毅然として進みゆくために。

4

「やれやれ……ラフィエット聖堂に伝わる秘儀を、ドラクロワの助けを借りて復活させたが……結局、ほとんどが失敗だったな。成功したもの以外、全て始末せねばならん」

船の上で、聖堂長が不機嫌そうに言った。
「もう少し出来が良ければ、ドラクロワから莫大な金額をせしめられたというのに……」
それが不機嫌さの理由だった。アキレスは面白そうに笑った。
「失敗作とはいえ、最後の荷としてドラクロワに渡すために多くの処置を施してあるのでしょう……？　ただ始末するだけでは勿体ない……私が頂きますよ」
「貴様がやってくれると助かる。兵も抵抗を覚えておってな。なにせ、元はただの……」
「私は、何の抵抗も感じておりませんよ。〈蛭氷〉の良い餌になりますのでね」
アキレスはにたっと笑った。さしもの聖堂長も忌まわしく思うほどの不気味な笑みだ。
だが聖堂長にとっては渡りに船だった。アキレスに任せれば何の罪悪感も感じずに済む。
逆にアキレスに嫌悪を抱くことで自分が正常であると認識できるのだ。汚れ仕事をさせるには、うってつけの男だった。しかもアキレス自身がそれを望んでいるのである。
「恐ろしい男だ……貴様なら、親しい者でさえ平然と魔獣の餌にしかねないな」
聖堂長が言った。嘲笑うような口調の底には、意識せぬ恐怖がある。扱いを間違えれば、アキレスはたちまち無差別に殺しまくるだろう。そのとき聖堂長が安全であるという確証など全くない。便利な男だが、決して背中を向けたいと思える相手ではなかった——
「その通りですよ、聖堂長」

アキレスは当然のように微笑している。
「たとえ親友であろうと、恋人（こいびと）であろうとね。私を裏切（うらぎ）る者は、全（すべ）て、私の愛（いと）しい魔獣（バロール）に食わせてきました。もう二度と裏切れないようにね」
その瞬間（しゅんかん）、聖堂長は全身に鳥肌（とりはだ）が立つのを覚えた。アキレスの口ぶりには誇張（こちょう）がない。
この男は実際（じっさい）にそうしたのだ――！　親友だろうと恋人だろうと、あるいは家族でさえ、その魔獣（バロール）に血を吸（す）わせ、からからに干涸（ひか）らびた屍（しかばね）にしてきた――
聖堂長は、その光景を想像（そうぞう）しかけて慌（あわ）ててやめた。この男は危険（きけん）人物などでさえない。人語を喋（しゃべ）る魔獣（バロール）だ。こいつ自身が血に飢（う）えた蛭（ひる）だ。聖堂長は戦慄（せんりつ）とともにそう悟（さと）った。
「しかし……そもそも兵とは非情（ひじょう）なもの。それなのに、たかが失敗作の始末などを嫌（いや）がるとは……いささか教育が悪いのではありませんか？」
アキレスはからかうように言う。世間話でもしているつもりなのだろうか。
「失敗作とはいえ、拾われて来たときに面識のある兵もおる。そうそう非情にはなれん」
言い訳（わけ）めいた聖堂長の返答だった。だがアキレスは予想に反して、こう言った。
「分かりますよ、その気持ち。人は、そう簡単（かんたん）には非情になれませんからねえ」
これは聖堂長をやや安心させた。だがそこから先は、聖堂長の理解（りかい）を完全に超（こ）えた。
「最初はね……非情になれないことを悔（く）やむのです。しかし案ずるなかれ。非情になろう

としてなるのではありません。それはいわば……生まれ変わりなのです。親しい者をこの手で殺める苦しさは、心が生まれ変わる苦しさです。そしてそれを乗り越えたとき……」
アキレスの目が、ぎょろりと見開かれた。聖堂長がびくっとなる。
「新しい自分に生まれ変わるのです。真の自分に。そうなれば心から愛おしく思う相手にさえ、考えつく限り最も残酷な苦痛を与えられるようにもなるのですよ。まさに超越。まさに解放。自由なる心の誕生です。もう正義も悪もなく、あるのは力への欲求のみ。人を生かすも殺すも自由という素晴らしい力を求めるままに生きてゆけるのです……」
激烈な狂気をたたえた目で、アキレスはうっとりと空を見上げた。
「レオニス様は、今まさに変貌の時期に来ていらっしゃる。レオニス様が真の王に生まれ変わるとき——私は永遠の君主を得るでしょう。この世で最も素晴らしい王の、最も忠実なる臣下となるためにも……私はジークを殺し、その力を奪わねばならない——」
アキレスはひとしきり口にし終えると、ふと穏やかな表情を取り戻し、聖堂長を見た。
そして、ひどく優しく微笑んだ。まるで共感を求めるように。
かろうじて聖堂長は笑い返したが、内心ではアキレスに対する考えを再び改めていた。
この男は人語を話す魔獣でさえない。一切の理屈が通用しない怪物だ。

かつて怪物が炸裂した場所に、トールは呆然と立っていた。
聖地シャイオンの象徴たる湖から、西へ離れた河の手前であった。
焼き尽くされた大地には堕気が染み込み、もはや草木も生えぬ焦土と化している。
そこに、無数の彫刻が並んでいた。苦しみもだえ、のたうち回る人間が、どろどろに溶け合ってそのまま凍りついたような像である。その異様な像は地面にも彫り込まれ、いまや一帯は見渡す限りの悪夢の庭園であった。
全て、頭蓋骨を抱く娘——レティーシャが彫り上げた像である。
トールも初めてこの一帯を見たときは、あまりの凄まじさに言葉を失ったものだ。
まるで自分たちの戦いの意味も結末も全てこのような地獄を招くものでしかないと言われているような気がして、心底からぞっとなった。このようなものを聖地に出現させたレティーシャこそ、なんとしても殺さねばならぬ相手である気さえした。
今、その庭園に、レオニスとレティーシャがいた。
他にも大勢の付き人や廷臣たち、またレオニスに呼ばれた石工や建築家たちが集まり、みな声を失っている。地獄の彫刻群と、そしてまた、それを彫る者のあまりの異様さに。
「うるるぐああおうるるぬむるぬるあぐあ♪　おろろろるるむぬいいあおうるるむぐがが♪」
彼らの沈黙をよそに、レティーシャは朗々と声を上げている。まるで酔っぱらった獣が、

自分のはらわたをむさぼり食うかのような、歓喜と自虐に満ちた奇声であった。
それは呪文や祈りなどでさえない。レティーシャが力を行使するときの癖なのである。
その異様な歌声とともに、ぶんぶん唸りを上げて、真っ黒いものが飛び交っていた。
小指の先ほどの、人の形をしたもの――背中に羽があり、黒い妖精にも見えるが、その頭部も羽も、蠅そっくりだった。しかも本物の蠅と違い、鋭い牙をかつかつ鳴らしている。
レティーシャがその影から招き出す、堕界の魔獣――〈邪妖精〉であった。
その何万匹という蠅の群が、レティーシャの足の下や服の至るところから、うじゃうじゃと湧き出していた。捧げ持つ頭蓋骨の両方の眼窩からも泥水のように溢れ出し、それら全てが彫刻用の石にたかって、小さな牙でかじってゆく。
牙は非常に小さいが、いかなる物質でも削り取ってしまうという。その牙が石をかじる音ときたら、削るような引っ掻くような、耳障りなことこの上ない騒音だ。
レティーシャの奇声、蠅の羽音、蠅が石をかじる音と、辺りは耐え難いまでの騒音に満ちている。そしてその音がひと段落し、蠅が石から離れると、そこには息をのむほど見事な――おどろおどろしい彫刻が現れるのだった。
何十万という蠅を一匹一匹、正確に操れねば、このような彫刻は作り出せない。
まさしく〈蠅姫〉たるレティーシャの力を、レオニスは楽しげに――わくわくするよう

な微笑をたたえて見つめている。
「完璧だ、レティーシャ。そろそろ本番といこう」
レオニスが言って、石工や建築家たちに手振りで指示した。
レティーシャは、ぴたりと声を収めた。全身に蝿をたからせたまま、石工たちが、黒い石材を組み立てる様子を、ぼんやりと見ている。あるいは期待に満ちた眼差しだろうか。
黒曜石――きわめて高価な石で、おいそれとは彫刻に使えるしろものではない。それを、レオニスはレティーシャに彫らせるために、ふんだんに用意していた。
今まで彫っていたのは全て習作だったのだ。それもレオニスの指示するままに、苦しみもだえる像の全てに、可憐な白水仙の花が彫り込まれている。
トールは、レオニスがこのような像を所望すること自体、耐え難かった。それでいて何も言えぬまま、この一連の作業を見守っていたのだ。
(必要なのだ――今のレオニス様には、これが……)
たとえどれほど悪趣味なものであろうと、レオニスの胸中にわだかまる鬱屈した感情を解消するためには致し方ない処置だと――そうトールは無理にも思い込もうとしていた。
そしてそれが全くの誤りであることを思い知らされることとなった。
「わあ」

レティーシャが、茫洋とした顔のまま、感心したような声を上げた。
石工たちが、いったい何を組み立てていたか——それが明らかになるにつれ、トールも、付き人や廷臣たちも、驚愕の呻きを零していた。
一見して巨大な扉にも見える枠組みに、斜めに研がれた刃がはめ込まれた。その刃が凄まじい勢いで落下し、真下に置かれた木材に、音を立てて食い込んだのだ。
「組み上がりました、レオニス様」
石工の一人が報告した。レオニスは満足そうにうなずいた。実際、それはそれで見事な腕前だった。馬でも両断出来そうな巨大な刃が、ひどく滑らかに、勢いを失わず投下され、真下にあるものを一瞬で切り落としてのち、簡単な操作でまた元の位置に戻せる。入念な設計と、注意深い組み立てによる、最高の処刑器具。
断頭台であった。
本来は木材で組まれるそれを、高価な黒曜石で造り上げたのだ。だからトールは最後まで愚かな期待を抱いた。今組み立てられているこれは、何か違うものだと。レオニスがこんなものを求めるはずがないと。
「さあ、僕に綺麗なものを見せろ。この聖地を綺麗にするものを、レティーシャ」
レティーシャは、断頭台の前へ歩いていった。ぼんやりした顔でいるくせに、ひどく嬉

しそうに。綺麗に切り揃えた白髪に近い前髪の下で、碧の目が、うきうきと輝いている。
かかとを履き潰した靴を、ぺたぺた鳴らしながら、足下の蠅を平気で踏み潰してゆく。
潰された蠅はどろりとした黒い液体となってレティーシャの影に吸い込まれた。
　レティーシャは断頭台の前に立ち、
「綺麗ね、兄様。本当に綺麗なものに会えたね、兄様。兄様の言う通り、レオニス様に会いに来て良かったね。ずっと待ってたものね、兄様。全部、綺麗にすることをね、兄様」
　そして、蠅の羽音がひときわ激しく鳴り響いた。
「ぐおろろろろろろろるるるらららいいいぐぐぐああおおぐぐぐがごがが♪」
　蠅が、黒曜石で出来た断頭台にたかっていった。その騒音をもって祝福を授けるように。
　トールは、その場にひざまずきそうになった。
　いったいこれは何なのか。なぜこんなものを見なければならないのか。誰か止めてくれ。
これをやめさせてくれ――
　思わず他の付き人や廷臣たちを見回した。そしてさらに愕然となった。
　誰もが騒音に顔をしかめていながら、レオニスに反対する者は皆無だった。それどころかみな、完全にこの若い領主のやることとなすことを信じ切っている。
　異議を唱えるには、レオニスの執政は完璧すぎた。これまで何一つとして失敗していな

いのだ。賞賛されこそすれ、批判されるべき点は無かった。無さすぎるほどに。

付き人も廷臣たちも、石工も建築家たちも、聖地シャイオンをどこよりも豊かにしようとするレオニスの思いを汲み、協力を惜しまなかった。

あるのは心からの信頼と忠誠ばかり――無責任と紙一重の。レオニスの言う通りにしていれば、何もかも必ず上手く行くと考える者たちしか、ここにはいなかった。

そう。この自分もそうだ。いまだにそうなのだ。トールは痛烈な思いでそう悟った。

「良いぞ、レティーシャ！　その調子だ！」

レオニスが朗らかな笑い声を上げた。

蝿が断頭台の上部から徐々に離れ、輝くばかりの地獄の彫刻が出現してゆくのだ。

「この聖地を汚す罪人どもに死を！　それがこの聖地をさらに美しくする方法だ！」

トールは、よろよろとレオニスの傍らに歩み寄った。勇気を振り絞り、

「レオニス様……なぜ……このような……」

やっとのことでそう口にした。レオニスは面白そうにトールを振り返り、

「何を言ってるんだ、トール。ここは僕の国だよ」

にこりと微笑んだ。まるで自由に壊せる玩具を手にした子供のように。

ぞくり。トールの全身に鳥肌が立った。虫酸が走る思いさえした。やめてくれと叫びた

かった。だがそれでもなおレオニスを信じたかった。

レオニスはすぐに彫刻されゆく断頭台に目を戻している。トールはその横顔を見つめ、

(友達だもの、そばにいてあげないとね)

アリスハートの言葉が甦るのを覚えた。トールは無念さに目を閉じた。誰もがレオニスを欲していた。廷臣や客人たちは豊かな生活を保証してくれる存在として、アキレスは己の主君として、レティーシャは己の同胞として、レオニスを求めていた。

その中で、自分はただ友でありたかったのだ。レオニスと思いを共有し、その傍らにいたいと欲し——そしてそれを自覚したときには、もう全てが遅かった。

気づけば相手も自分も、引き返しようのない場所にまで来てしまっている気がした。

「ねえ、トール。きっと……喜んでくれるよ」

レオニスが断頭台を見つめたまま言った。トールは目を開いた。

「全ての悪人をこの聖地から消し去れば……きっとノヴィアだって喜んでくれるよ」

ひどく切々とした声音。砕けそうになる心を必死に保とうとするような眼差し。

トールは、のろのろと、蠅まみれの断頭台に顔を向けた。そして、

「はい……レオニス様」

こだまのように、ただそう返していた。

5

少女が走っていた。
青い目に赤茶の髪。建物の屋根や壁の上、あるいは何もない宙を跳び渡ってゆく。
ノヴィアから金を盗んだ少女――キリであった。
仲間から渡された荷を担ぎ、それ以外は着の身着のままで追い出されたのだ。
自分が力を使って宙を踏んでいるのかどうかも分からぬまま、キリは、ただ走り続けた。
気づけば橋を越え、西側にいた。ラフィエット聖堂のある方へ――フモが決して行っては駄目だと言っていた辺りに。
夕陽が赤く辺りを染め、それをキリは自分の心の傷から噴き出す血のようだと思った。
(出て行け――)
死ねと言われるよりも辛い言葉だった。それが、頭の中や胸の奥や、体中のあちこちで繰り返されては、取り返しのつかぬ深い傷となって染みこんでゆく。
「海へ行こうって……みなで……海へ……」
青い目をした六人の仲間。青――自分の名前の由来。みなが海の色をした目をしている。
同じ故郷――同じ海を持つ仲間。そのはずだった。それなのに――

いったいなぜ、自分だけが追い出されたのか。漠然とした答えが浮かぶ。それは自分だけが違うからだ。六人の中で、たった一人、自分だけが——

受け入れがたい苦しみに駆られて走るキリ目掛けて、突然、横合いから金の輝きが飛来した。はっと息をのんだ。キリは宙を蹴り、反射的にそれを避けた。

そのまま街路に着地しつつ、そこで初めて自分が何かをかわしたことに気づいていた。本能であり、野性的でさえある対処であった。たまらない悲しみに苦しんでいるまっただ中だというのに、降りかかる危機に対し、心より体の方が先に動いたのだ。

さっと溢れる涙を拭ったのも、無意識だった。泣いていては視界が狭まる。めそめそ泣いていたせいで聖堂の者につかまっては、それこそ泣くに泣けない。泣いて相手の情けを期待しようとは一切考えない。それを当然と思えるのがこの少女の——キリの精神だった。

「やっと……やっと見つけました！」

もう一人の少女——ノヴィアが、息をきらして街路から飛び出した。やや遅れて、アリスハートがふわりと宙を舞って現れる。ノヴィアは必死に息を整え、きっと睨んだ。

「もう逃がしませんよ」

「……誰だ、お前？」

キリは真顔で訊いた。ノヴィアは息をのんだ。まさか忘れられてるとは思わなかったの

だ。わなわなと宝杖を握りしめるノヴィアに、アリスハートが必死で言い聞かせた。
「お……落ち着いて、ノヴィア。冷静に、冷静に」
「わ、わ、私を覚えていないんですかっ！」
「知らねぇよ。誰だよ」
キリがふてくされたように返す。ノヴィアの顔が、怒りで真っ青になった。
「私は、あなたに大事な物を盗まれた者です！」
「大事な物……？」
「お金の入った袋ですっ！　これくらいの大きさのっ……、ほら、こんな感じで！」
なんで自分が盗まれたものをいちいち盗んだ相手に説明せねばならないのか。ノヴィアは我ながら情けない思いで細かく説明してやった。そうするうち、ふと、
「ああ、あれか……って、お前っ！　俺に矢を飛ばして来たやつじゃんか！」
キリが目を丸くしてわめいた。ノヴィアは正直、泣けてきた。
「だから、さっきからそう言ってるでしょう！」
「そっかそっか、悪かったよ。また会うなんて思わなかったから」
キリは平然と言った。
「で……何か用か？」

ノヴィアは慌てて目をそらした。一瞬、問答無用で相手に矢を放ちかけたのだ。ノヴィアは、ゆっくりと目を戻し、押し殺した怖い声を放った。
「用……？　何の用だと思うの？　自分が何をしたか分かってて言ってるんですか？」
「だからあの袋のことだろ？　そう言や、けっこう入ってたしな」
「ノ……ノヴィア、冷静に、冷静に」
「私から盗った物を返しなさい！　今すぐ！」
「人にやっちまったよ」
キリがむすっと返す。仲間のことを思い出したのだ。今日、盗んだものをどうしたか――それは、自分がなぜこんなところに独りでいるかということと同じ答えだった。
ノヴィアが唖然となるのをよそに、キリは精一杯の強がりで言った。
「そっか……自分でもらっとけば良かったな。ま、良いや。また盗めば良いさ」
もう仲間の分まで盗むことはないんだ。そう思い、たちまち涙がにじみ、荷袋を担ぎ直すふりをして、それを隠した。
何にせよノヴィアには信じがたい態度である。怒りが沸騰し、ついに金の矢を幻視した。
「誰に渡したのか言いなさいっ！　そして私に謝りなさい！　今すぐにっ！」
かつてアリスハートが聞いたことのない、ノヴィアの真正の怒りがこもった声だった。

だがその声も矢も、キリに対しては威嚇にもならなかった。逆に宙に浮かぶ矢を一瞥し、ノヴィアの心をかきむしるようなことを言った。
「面白い力だな。どうせ無理やり修行させられたんだろ。大人の言いなりになってさ」
それはノヴィアの深い部分をえぐった。かつて無理やり力を継承させられたと思い、母を恨んでいたノヴィアなのである。
「余計なお世話よっ！　聖堂から逃げた人が何を言うの！」
思わず叫んだ。もはや我慢の限界だった。
「あなたみたいな人っ、どうせみんなに嫌われてるんでしょうっ！」
猛然と矢を放った。今回も尖端は丸いが、完全に容赦のない、骨をも砕く勢いである。
しかしその矢以前に、ノヴィアの言葉がキリを深く傷つけていた。信じていた仲間に追い出されたのだ。自分一人だけ違うせいで。自分だけ女の子だから――
「なんだとーっ！　このくそったれぇっ！」
荷袋を放り捨て、なんと飛来する矢へ踏み込んだ。
矢が届く寸前、その引き締まった足が、しなやかに跳ね上がっている。
そして次の瞬間、矢がキリの頭上高く弾き飛ばされ、くるくると舞い、消えた。
「ノヴィアの矢を……蹴った」

あまりのことに、アリスハートがあんぐり大口を開けた。
「もう一度言ってみろっ！　顎を蹴っ飛ばしてセラヴィの橋から落っことしてやる！」
「あなたみたいな人、世界中から嫌われれば良いのよっ！」
ノヴィアが叫び、矢を幻視した。一つや二つではない。いきなり百本近い金の輝きが、宙を埋め尽くしたのだ。我を忘れるほどの怒りがそれを可能にしていた。
さすがのキリが唖然となった。アリスハートも言葉を失っている。
ざあっと音を立てて、矢が一挙に奔った。全て尖端は丸く、多くの矢を一度に幻視したせいで大きさも威力も非常に弱い。だがキリが跳び、更に宙を蹴って横っ飛びに跳んでもかわしきれる数ではなかった。
矢の一つが宙でキリの肩を打った。転がるように着地するや、矢の雨が一斉にこづいた。
「痛い、痛、痛っ、痛ってぇーっ！」
ごろごろのたうち回るキリにたっぷりと矢を叩き込んでから、ようやくノヴィアは矢を消した。それから放り捨てられた荷袋に歩み寄ると、問答無用で持ち上げた。
「な……なにすんだよっ、この凶暴女っ！」
わめくキリをよそに、荷袋の中身を全て路面にぶちまけてしまった。キリが仲間から最後に渡されたものを。それが何であるかも分からず抱えて走っていたものだった。

「この野郎っ！　本当に蹴っ飛ばして河に落としてやるっ！」
キリが怒りに任せて飛び起きる。
ノヴィアは、静かにぶちまけられた中身の一つを手にとってみせた。
「どうせこんなことだろうと思ってました。人にやったなんて下手な嘘ですね」
キリがぽかんとなった。間違いなかった。それは紛れもなくノヴィアから盗み、そして仲間に与えた袋だった。
「なんで……そんなところに……」
「うわー、これ全部あんたが盗んだのぉ？」
アリスハートが感心した。キリは、のろのろと、ぶちまけられた物を見た。
衣服や紙や布に包まれた金を。自分一人で盗んだわけがない。仲間みんなで盗んだ金だった。みんなのための金だった。それが全部、渡された袋の中に入っていた。
「あいつら……」
キリの目にふいに涙がにじんだ。先ほど流したものとはまるで違う。嬉しさと――たまらない不安が混ざり合った涙だった。
「まさか……まさか……」
自分は追い出されたのだ。何のために？　もう無理だというフモの声が甦る。誰かが生

き残らなきゃいけない――フモは確かにそう言った。フモの決意。そしてみなの――
途端に、キリの手足が震えだした。
「反省しましたか……？」
ノヴィアが穏やかになってキリに歩み寄る。てっきり相手が後悔の念に襲われているものとばかり思ったのだ。だがキリは弾かれたように立ち上がるや、
「くそっ！」
なんとノヴィアなど見もせず走り出したではないか。
「ま……待ちなさい！」
慌てて矢を幻視し、キリの背に向かって放とうとした。だがキリは立て続けに宙を蹴り、
「全部返すよっ！　そんな金いるかっ！　いるもんかっ！　俺……俺は……！」
叫びながら、ノヴィアの目でさえ追いつけぬ勢いで右へ左へと跳び渡ってゆく。
「逃がすもんですか！」
ノヴィアは矢を消し、すぐさまキリを追った。アリスハートもそれに従う。
キリはもと来た道を走っていった。仲間達のもとへ向かって。優しいフモのもとへ。
「慌てずに食え。まだ沢山ある」

ジークが言った。傍らでは子供たちがパンや骨付きの肉をむさぼるように食っている。
「なぁ、本当に全部、食って良いのか？」
子供の一人が用心深そうな目つきをして訊いてくる。ジークはうなずき、自分も、近くの食堂から買ってきたパンをかじった。それで、その子も同じようにパンをかじった。
街の倉庫街の一角であった。一刻ほど前——ジークはそこで火を焚き、食事を用意し始めたのだ。するとそこら中から、隠れ住んでいる子供たちが出て来た。彼らがこっそりジークの背後に忍び寄り、山のように食料を買い込んだ袋を盗もうとするのへ、
「取引をするなら、それをやる」
ぴしりとした声で告げたのだった。年長の少年が一人、それに応じた。
「取引って何だよ」
「子供を捜している。ラフィエット聖堂にいた者たちを」
「あんた聖堂の人間？」
「ラフィエット聖堂とは無関係だ」
「そいつらを連れ戻しに来たのかい？」
「保護しに来た」
少年はせせら笑った。聖堂に対する強い不信感が見て取れた。

「保護か。どうせ働かせる人手が足りなくて子供が欲しくなったってことだろ。食い物でそいつらを売れってのかい。どこまでも俺たちを馬鹿にしてやがるな」
「命が危ない。聖堂の者に殺されるかもしれん」
「へっ、そいつらが殺されりゃ、その分、俺たちの分け前が増えるさ」
「ならば話は終わりだ。消えろ」
ジークは冷厳と言った。少年が笑いを消した。
「あんた……そいつらを本気で助ける気か？　なんでだよ？」
「お前たちが知る必要はない」
少年は思案げにジークを見つめた。その少年に、別の少年が、ひそひそと耳打ちした。
「へぇ……。そういやラフィエット聖堂で大勢、人が死んだってな。噂じゃ聖法庁が、あの聖堂のひどさを知って罰を与えに来たってさ。それで聖堂長は逃げ回ってるって」
「罰ではない。兵に囲まれたから戦っただけだ」
少年は口笛を吹いて、他の子供たちを見渡した。それからジークに目を戻し、言った。
「あんたが、あの聖堂を、良い聖堂に変えてくれるのかい？」
「俺ではない」
ジークは少年を真っ直ぐ見つめ返し、言った。

「変えるのは、お前たちだ」
少年は口笛も吹かず、笑いもしなかった。じっとジークの言葉の意味を考えた。
「聖堂から逃げたやつは沢山いるぜ。あの聖堂と関係のある建物だって沢山あるんだ。大勢の子供が、そこで働かされてる」
「聖堂から特殊な修行をさせられていた者たちだ」
「フモたちか」
少年は即座に言って、難しい顔で腕組みした。
「この街で一番、用心深くて手強い奴らだぜ。仲間以外、誰も信用しねえ。どこで暮らしてるのかも誰にも言わねえんだ。変な力を持ってて誰にも捕まえられないしな」
「どうすればいい？」
少年はにやりと笑った。大人顔負けの不敵さであり、どこか誇らしげでもあった。大人であるジークが対等な立場で意見を求めてきたのが嬉しかったのだ。
「良い考えがあるぜ。たらふく食わせてくれる奴が、ここにいるって教えて回るんだ。そいつは聖堂の兵隊をぶった斬った奴だってな。そうすりゃフモたちも顔を出す。あいつら聖堂を本気で恨んでるから、あんたに興味がわくだろう。でも、そうすると街中の子供がここに集まってくるぜ。これっぽっちの食い物じゃ足りなくなるな」

ジークはうなずいた。懐から金を出し、少年に渡した。食料を買い足させるためだった。
「俺がこの金を持って逃げちまうって、思わないのか？」
「お前は、俺と取引をした」
重く鋭い声で返した。ただ信用するよりも遥かに厳然とした態度だった。
「ま……そういうこった。後は任せな」
少年は誇らしげに言って、駆け出した。子供たちが散り、ジークの存在を告げて回った。
そうして——百人近い子供たちが続々と現れ、食事を求め、あるいはジークを遠巻きに眺めるのだった。中でも勇気ある者たちはジークに話しかけ、そばに座ったりしたものだ。
「おーい、誰かフモたちを見たか？」
ジークと取引した少年は、一人前に責任を感じているのか、食事もそっちのけで声をかけて回っている。かと思うと子供たちの一人がその少年をつかまえ、早口で何かを告げた。
「……なんだって⁉」
少年が血相を変えて叫ぶ。ジークはすっと立ち上がり、少年に歩み寄った。
「どうした」
「聖堂の連中が、この近くの倉庫を燃やしてるって言うんだ。兵隊がぞろぞろいて、誰もそこに近づかせないようにしてるって。まさか、フモたち……」

「場所を教えろ」
少年が思わずびくっとなるほど厳しい声でジークは言った。少年が急いで説明した。
「な……なあ、本当にそこへ行くのか？　兵隊が沢山いるんだぜ……」
ジークは無言でシャベルを担いだ。その全身が、苛烈な戦いの気配に満ちていた。
「そんなシャベルで戦うの……？」
急に年相応の口調になって少年が訊いた。ジークは少年を安心させるように言った。
「これは、聖堂の者たちを葬るためのものだ」
少年はシャベルからジークに目を戻し、必死の声を放った。
「頼むよっ、フモたちを助けてよっ」
ジークはうなずき、すぐさま身を翻した。大勢の子供たちがそれを見送っていた。
「なんだ……これ……」
禍々しく燃え盛る炎に、キリは我が目を疑った。とても信じられなかった。
つい先ほどまで隠れ家として住み暮らしていた倉庫が、ごうごうと音を立てて燃えているのだ。真っ赤な炎――そしてまた、窓の向こうに緑色の炎が見えた。あんな色の火は見たこともない。いったいいあれは何が燃えているのか？

キリは宙を蹴るのをやめ、地面に下りて一目散に倉庫に向かって走った。
その足が、急に止まった。すぐ向こうに、炎以上に信じられないものがあった。
大量の血だ。倉庫の入り口で、倒れて動かぬ仲間の体から零れる血だった。
キリは震える声で相手の名を呼んだ。だがその仲間はぴくりとも動かなかった。
「嘘だ……こんな……」
足から力が抜け、その場にへたり込みそうになったそのとき、
「キリーっ！　なんで戻ってきたーっ！」
突然、血を吐くような絶叫が上がった。二階の窓——炎の向こうでフモが叫んでいた。
「フモ！」
キリの胸に、かっと熱いものが生じた。生きていた。仲間が——フモが生きていた。
「今助けるからな、フモ！」
叫びながらキリは何もない宙を踏み、二階の窓へと駆け上がった。自分を追い出したフモに向かって。自分を守ろうとしてくれた人のもとへ。
「馬鹿野郎っ!!　早く行っちまえっ……」
フモの叫びが、いきなり途絶えた。
かつてキリが想像したこともない光景がそこにあった。炎の向こうでフモの体が何かに

串刺しにされるのが影絵のように見えた。キリはその悪夢の前に立ちすくんだ。
炎が巻き起こり、その後でフモの体を襲う惨劇は見ずに済んでいた。だが続いて起こったことはキリの脳裏にまざまざと焼きついた。フモの体が燃え上がったのだ。
緑色の炎――まるで蠟のように。
キリはほとんど無意識に宙を下り、気づけば地面にひざまずき――座りこんでいた。
倉庫が燃え、入り口で倒れていた仲間も、鮮やかな緑の炎を上げて燃えていた。
あまりのことに涙も出なかった。自分の魂がガラス細工のように粉々に砕けて、炎が起こす熱風と一緒にどこかへ消えてなくなってゆく気がした。
「おやおや、こんなところにいましたよ」
ふいに声が起こった。
「なかなか楽しい余興でしたが……肝心の最後の荷が見つからず、困っていたのですよ」
キリはのろのろと声の方へ顔を向けた。そこに、貴族服を着た男がいた。長い黒髪に黒い目。ただそこにいるだけで背筋が寒くなるような雰囲気を漂わせ、にっこりと笑った。
「あなたは串刺しにしませんよ。特別にね」
吸血医師アキレスは、そう言った。かと思うと、あちこちから人影が現れ、こちらへ近づいてきた。剣を持つ兵たち。そしてラフィエット聖堂長が。

「おお、よく戻った、キリ。〈踏む者〉の聖印を刻んで、死蠟症にならなかったのはお前だけだ。力を使う様子も、観察させてもらっていたよ」
キリはぼうっとした顔のまま、
「観……察……」
「そうだ。盗みで食いつなぐお前達をね。どうせ大半は聖印の悪影響で病気になるのは分かっていた。病気の仲間を置いて街を出たりしないだろうということも」
「俺たちを……今まで……ずっと……」
力なく呟きながら、聖堂長を見もせず、うなだれ、顔を伏せた。
「そうだ。成功したのは、お前だけだ。お前は素晴らしい逸材だ。さ、来なさい。お前を欲しがっている方がいる。その方のところに行けば、もうみじめな生活をしなくてすむ」
キリはうつむいたまま立ち上がった。炎に煽られるかのように、ふらふらと揺れながら、聖堂長のところへ歩み寄った。その様子をアキレスが面白そうに見ていた。
「うむうむ。素直で良い子だ。お前の仲間には悪いことをしたな。だが仕方なかったのだ。聖堂の秘儀を復活させるためには、お前たちが必要だったのだ」
聖堂長が微笑んで両手を広げ、キリを抱きしめようとした。
その瞬間、にわかにキリが顔を上げた。屹然とした光をやどす青い目が、聖堂長を睨み

つけた。同時に、その左足が宙を踏み、キリの頭が、聖堂長よりも高い位置に来ている。
ぽかんとなる聖堂長に向かってキリの右足がしなやかに跳ね上がった。がつん。もの凄い音を立てて歯と歯が鳴った。
聖堂長がもんどり打って倒れた。キリの右足が、見事に聖堂長の顎を蹴り上げたのだ。
「みじめだって!? お前みたいな野郎に何が分かるんだよっ! みんながいた! 俺には優しい仲間がいたんだっ! みじめなもんかよっ!」
キリは猛然と叫ぶと、ぺっと聖堂長の顔面に向かって唾を吐いた。
すぐに兵が槍で打ち据えようとするが、キリはさっと跳んでかわしている。
「こ、こ……この薄汚い盗人の悪童めっ! わ、わしに向かって唾を吐くとは!」
聖堂長が、蹴られた顎を押さえながら、ふがふがわめく。
「取り押さえろ! わし自ら、その悪童の手足を叩き折ってやる! どうせ聖印と人体の試作品だ、生きていればいい!」
キリは素早く左右を見回した。どこも兵でいっぱいで脱出路は皆無だ。しかもあちこち網を構える兵がいる。キリが跳んだ瞬間、それで捕らえるつもりなのだ。
聖堂長は、顔にかけられた唾を慌てて拭いながら、一方の手を兵に差し向け、
「貴様の槍を貸せ! そら、さっさと取り押さえんか……」

槍を受け取ろうとしたそのとき——物凄い勢いで飛来した金の輝きが聖堂長の手を刺し貫いた。甲高い悲鳴が聖堂長の口から迸った。キリも兵たちも唖然となる。
アキレスが凄まじい笑みを浮かべ、いち早く、矢を放った者の方へ目を向けた。
「その子には指一本触れさせません。お引き取り下さい」
ノヴィアが真っ直ぐ歩み寄りながら言った。なんとキリが持っていた荷袋を重そうに担いでいる。それを持ってここまで走ってきたのだ。
「はあ……いっつも大人が馬鹿なことするせいで、子供が迷惑すんのよねぇ」
アリスハートが頭上からふわりと舞い降りてきた。
兵たちには、いったい何が何だか分からない。ただノヴィアの胸元を飾る紋章に、
「ぎ……〈銀の乙女〉……？」
仰天し、思わず、つかつかと歩みゆくノヴィアに、道を譲ってしまうのだった。
ノヴィアは、そのまま呆気に取られるキリの前まで来ると、
「私だってこんなお金、いりません」
どさっと荷袋を置き、きっぱりと言ったものだ。
「お、お前、何しに来たんだよ。危ねえだろ。見て分かんないのかよ。早く帰れよ」
キリが慌てた。ノヴィアは眉間に皺を寄せ、きっとキリを指さした。

「まだ私に謝っていないでしょう！」
「な……」
「私に謝るまで金輪際、あなたから目を離しません！」
ノヴィアは大真面目である。キリはあまりのことに目をまん丸に見開き、
「馬鹿か、お前」
やっとのことでそう言った。ノヴィアがもの凄い目でキリを睨んだ。
そこへ、聖堂長が、貫かれた手を押さえながら怒声を飛ばしてきた。
「あ……あれはジークの従士だ！　アキレスっ、串刺しにしてやれっ！」
アキレスは肩をすくめ、一歩、ノヴィアとキリに向かって近寄った。
「串刺し……？」
ノヴィアがアキレスを振り返り、真顔で訊く。
「〈串刺し魔〉が、私の異名でしてね。初めまして……ノヴィア様」
アキレスが笑った。ノヴィアが自分の名を呼ばれて驚いた。途端――足下に凄まじい勢いで堕気が生じた。ノヴィアの背を恐怖が走り、反射的に飛び退いていた。
一瞬だった。それまでノヴィアがいた場所に、槍の如き氷柱が生え出したのだ。
「な……なにこれぇっ？」

アリスハートが仰天してわめく。キリは、かっと目を見開いてその氷を見つめている。
ノヴィアは幻視の矢をアキレスに向かって放った。ノヴィアには珍しい、即座の反撃である。やらねばやられるといった異様な切迫感を、目の前の男から感じていたのだ。
アキレスは一歩も動かず、その爪の無い手を翻している。その指先で紋様が――堕界に属する聖印が輝くや、新たな氷柱が現れて矢を受け止めたのだった。
「〈蛭氷〉……堕界の魔獣の一種です。本気で串刺しにするつもりはありません。ほんのご挨拶代わりですよ。あなたにお会いできるとは思いませんでしたのでね」
きしきし軋み音を立てる氷の向こうで、アキレスが笑った。殺す気はないと言っておきながら、平然とそれとは逆のことをしてきそうな笑みだ。
「なぜ私のことを……」
「あなたを殺さぬようレオニス様から言われています。黙って見ていれば殺しません」
「レオニスの……」
ノヴィアが息をのむ。そのとき――アキレスに向かってキリが走り出していた。
「危ない！」
ノヴィアが叫ぶ。同時にアキレスがその手を翻した。
地面からにわかに生え出す鋭い氷柱を、キリは宙を蹴って、かわした。

「お前が……お前が、フモをっ！」

真っ直ぐアキレスに迫り、その顔面を蹴りにかかるや——ひときわ太い氷柱が現れて楯となった。キリは構わず、思いっきり氷を蹴った。まるで鉄のように硬かった。

氷にはひび一つ入らず、キリは苦悶の声を上げて地面に着地した。

「よくも仲間をっ！　このクソ野郎、頭を蹴り割って中身を魚の餌にしてやる!!」

キリが泣くような声で叫ぶ。その隣に、つとノヴィアが立った。

「下品な言い方は好きではありませんが、私も、この子と似たような気持ちです」

その傍らで、ふわりとアリスハートが宙を舞う。

「ううう……気をつけてよぉ、ノヴィアぁ。あの人、見てるだけで怖くなるよぉ」

アキレスの唇の両端が、異様な高さにまで吊り上がった。

「串刺しにされて干涸らびたあなたを見たら、ジークはどんな顔をするんでしょう？」

「そちらにいる本人に聞いて下さい」

アキレスも聖堂長も、眉をひそめた。ノヴィアの言葉の意味がわからなかったのだ。

ずどん！　爆弾でも炸裂したかのような音が響いた。

アキレスが目を皿のように見開き、聖堂長が悲鳴を上げた。

燃え盛る倉庫を背に、ジークがいた。その全身から、凄まじいまでの怒りを発している。

かちり。シャベルの柄が回り、引き抜かれた。新たに現れた柄を握り、抜き放った。
「聖印を刻み入れた子供らを……殺したか」
その銀の剣さえ、怒りに満ちた輝きを放つようだった。鋭くキリを見やり、言った。
「——彼女が、最後の荷か」
聖堂長が震え上がった。
「ジ、ジ、ジーク・ヴァールハイト……な、な……なんで貴様……わ、わかった」
「聖者〈踏む者〉は、セラヴィの橋を架けるために聖印を両足に刻み、宙を踏み歩いた。聖堂に伝わる聖印を、子供で試したか……」
声にみなぎる怒気に、聖堂長も兵も慄然となった。アキレスでさえにわかに動けない。
キリだけが、アキレスへ向かって走ろうとした。逃げようという気などとっくになくなっている。何としても一矢報いたかった。そのキリの肩を、ノヴィアがつかんで止めた。
「動かないで。ジーク様に任せて」
「たった一人で何が出来るってんだ！　どうせ殺されるんだ！　せめて……」
その声が、突如として吹き荒ぶ風と凄まじい稲妻の音にかき消された。
キリは愕然となって、左手に白熱する雷花を迸らせるジークを見た。
それはキリが知るいかなるものをも超える力の奔流であった。

「おのれ――！」
　アキレスが慌てて両手を翻す。だがジークは、足下に生じる堕気にも構わず、
「ジーク・ヴァールハイトが招く！」
　烈声を上げて、左手を地面に叩きつけた。
「無念の魂よ！　海刻星の連なりの下、迅魔オウディウムとなりて我が敵に走れ！」
　稲妻が吹き荒れ、アキレスが放った氷の魔獣を粉々にしながら無数の影が飛び出した。
「山羊座の陣！」
　言下、影が目にもとまらぬ速度で扇状に迅った。大人の腰ほどしかない小柄な魔兵だ。長い手足、両手に長い深紅の爪が生え、疾風のごとく兵達を切り裂いてゆく。
「なんだ……あれ。なんなんだよ、あの化け物……」
　怯えて後ずさるキリに、ノヴィアが、静かに告げた。
「怨みに汚れた魂が、堕気による新たな肉体を得て、復讐してるんです。ジーク様は〈招く者〉――堕界の魂を招く、たった一人の軍団」
「魂を……招く……？」
　そのとき突然、兵の一人が、ノヴィアとキリに向かって見境なく槍を振りかざしてきた。すぐさまノヴィアが矢を現し、キリが宙を踏む。二人の前に、卒然と影が走り込んだ。

兵の槍が、魔兵の胸を深々と貫いていた。だがすぐに深紅の爪が槍を切断し、兵は首を裂かれて倒れた。魔兵がキリを振り返った。キリはぎょっとなり——ふと、その魔兵が自分を守ってくれたことに気づいた。その異形の姿に、誰か、別の姿が重なるのを覚えた。
「魂を……招く……。まさか……」
呆然となってその言葉を繰り返した。その途端、胸を貫くような悲しみがキリを襲った。
「フモ……」
その名を呼んだとき、既に魔兵は影のように跳び、消えていた。

聖堂長は、四方から近づく魔兵に目を剝き、完全に居直ってわめき散らした。
「か、金で買われた孤児どもがっ！　わしはお前達を有効に使ってやっただけだっ！」
そして一斉に深紅の爪に襲われた。全身に聖印に似た傷を刻み入れられ、ずたずたになって息絶える聖堂長を、恍惚の笑みを浮かべて眺める者がいた。アキレスである。
「なんと美しい殺戮でしょう……」
氷柱で魔兵の攻撃を防ぎ、退きつつ笑う。そのアキレスに、ジークが歩み寄った。
「魔獣使いか……聖堂でも俺を狙ったな」
アキレスはにたっと相好を崩し、

「この状況では、あなたに有利すぎますね」
言うや、ジークに顔を向けたまま、背後へと大きく跳躍していた。背後は河だ。そしてそこに浮かぶ巨大な氷の上に、綺麗に着地した。魔兵がそれを追おうとし、足を止めた。
「ふふ……水の上では魔兵は形を保てない。逆に水は、私の得意な領域でしてね」
アキレスの周囲で、河面から氷柱が群をなして生えた。ぎしぎしと軋むような音を立てて、氷の牙を鳴らす。氷の塊からも櫓のように氷柱が生えて水を漕いでいる。
「ドラクロワを追って河を下りなさい……あなたのその背を、私が狙いますよ」
「なぜ、俺を追う」
「全ては我が主と……楽園たる聖地のために。あなたを殺し……その力を頂きます」
ジークの脳裏に、車椅子に乗った少年の姿が浮かんでいた。歩けぬ代わりに多くの知識を求める、危うくも頼もしい諸刃の刃のような少年の姿が。
「レオニスに雇われたか……。それとも、俺自身の因縁か」
ジークは、アキレスと氷の群とを見比べ、言った。
「ふふ……血を吸われて死んだ者に、見覚えでもあるのですか？　ふふふ……あなたがね……奪ったのですよ。私から、全てをね。そしてそのお陰で……私は生まれ変わることが出来たのです。私はね……あなたに感謝しているのですよ」

アキレスの真っ白い頬に、ゆっくりと皺が寄り、それが笑みの形になった。その顔の皮がめくれて巨大な蛭が現れたとしても、何の不思議もないような笑いだった。
「感謝を込めて……あなたから奪わせて頂きますよ……。その力……その全てを」
低く囁いたとき、アキレスの姿は、河面に立ちこめる夕闇の向こうに完全に消えていた。
「葬ったものを、掘り起こしたか……レオニス」
ジークは、じっとアキレスが消えた闇を見つめ、
「ならば……再び葬るだけだ」
我が身に言い聞かせるように、そう呟いていた。

燃える倉庫が、がらがらと音を立てて崩れた。
兵は一人として生きておらず、みな絶息して地に伏している。その血の海に立ち並ぶ魔兵たちもまた、次々にその身がぼろりと崩れ去ってゆく。
「みんな……そこにいるんだろう？」
キリは、おずおずと魔兵たちに近づいていった。
「なあ……そうなんだろう？」
すると魔兵の一体が、鋭い爪を上げて追い払う素振りを見せた。

胸に槍を刺された魔兵——先ほどキリを守り、戦ってくれた魔兵だった。
キリは止まらなかった。爪が頬をかすめるのも構わず、その魔兵に思いきり抱きついた。
「フモ——！」
魔兵の体に両手を回して泣きわめいた。魔兵はそれ以上、追い払おうとはしなかった。
気づけば更に四体の魔兵が、キリの周りに集まってきていた。
キリは自分を守るために突き放し、そして今また優しく突き放そうとするフモを、みなを、繰り返し呼んだ。そのキリの頭を、ふと魔兵の手が、優しく撫でた。もう一方の手がキリの背に回り——抱きしめようとして、両手とも崩れた。
キリの腕の中で、フモの最後の肉体が砕け散った。周囲で仲間達が形を失い、崩れ去る身から、ふわりと淡い輝きが立ち昇った。キリの腕をすり抜けて、淡い輝きが天に昇った。
悄然と空を見上げるキリの隣に、ノヴィアが立った。
「ごめんな……盗んで」
キリが言った。ノヴィアは何か言おうとして何も言えなくなっている自分に気づいた。
「ごめんなぁ……盗んで。でも……仲間の病気を治したかったんだ」
そう告げながら、キリは、仲間の去った空を見て泣いていた。
ノヴィアは謝罪を求めてここまで追ってきたはずなのに、何も嬉しくなかった。許さな

いという思いが、どこかへ行ってしまっていた。代わりに、なぜこの少女が金を盗んだか、知ろうともしなかった自分がいたことに気づいて、呆然となった。

悪いことは悪いこと——ならば何が本当に正しいことなのだろう。そんな風に思った。

「海に行きたかったんだ……みなで一緒に。海が故郷だって、フモが言ってくれたんだ」

ノヴィアはやはり何も言えず、ただそっと、キリの肩に触れていた。

「海が……俺たちみんなの故郷なんだって……」

ノヴィアは、返事をする代わりに、キリを抱きしめていた。魔兵が、最後の瞬間そうしようとしたように。キリはそれでも空を見ていたが、すぐに震えだし、

「だから一緒に……海に行こうって……」

その声が、細い嗚咽に変わった。

キリはノヴィアにしがみついて泣きじゃくった。長いことずっと泣き続けた。

6

その日の夕刻——聖地シャイオンの街の広場に、それが設置された。

領民たちは、その異様さに驚愕し、ついでその使い道を悟って声を失った。

美しい黒曜石で作られた断頭台——その柱や土台の至るところに、苦しみ悶える人間の

奇怪な像と、白水仙の可憐な花の姿が、彫り込まれている。処刑器具とは思えぬ出来映えであり、またその目的を雄弁に語るおどろおどろしさであった。
広場に集まった領民たちは、突如として現れたこの恐るべき物体に、困惑と不安を隠せずにいる。そしてトールは、彼らと全く同じ思いで広場に立っている自分に気づいていた。
それでいながらレオニスが、屈強な刑吏たちに担がせる御輿に乗り、朗々と声を放つのを、止めることも出来ずにいた。
「罰せられるべき者たちよ、お前たちは、正当なる報いを与えられなければならない。それは我が善良なる領民に法の裁きを目にする機会を与えることでもある」
今、三人の死刑囚が鎖につながれ、並ばされていた。全員が断頭台を前にして、既に死んだように顔を青ざめさせている。
一人一人が確かに死罪に値する者たちであることをトールは知っている。そしてまた、レオニスが、彼らをどのように処罰するかで悩んでいたことも。
レオニスの父は、罪人に対して苛烈な処罰を行うことで知られていた。位が高かろうが低かろうが関係ない。とにかく容赦のない裁きを下すのだ。それは、聖地を巡って対立する二つの民を統一するために必要な処置でもあった。
ついにレオニスも父に倣い、断固とした裁きを下す決心をしたのだ——廷臣たちはそう

理解した。領民たちも、そう思うようになるだろう。
だがトールにはとてもそうは思えなかった。これは何かが根本的に違った。前領主が心を鬼にして行ったことを、レオニスは今、嬉々としてやろうとしていた。
「さあ、くじを引け。この裁きの像に登る、記念すべき最初の一人を選ぶのだ。これはお前たちにとって報いであるとともに栄誉でもある」
三人の罪人は、刑吏に強要され、くじを引かされた。一人が赤く印のついたくじを引き当てるや、すぐさま袋を顔にかぶせられ、見ることも叫ぶことも出来なくさせられた。
そして引っ立てられ、その首と両手を断頭台に固定された。
その様子をレオニスは笑みを押し殺して見ていた。どれほど冷厳さを装うとも、トールには、レオニスが面白がっていることがはっきりと分かる。
これは刑の執行だろうか？　確かにそうだ。だが同時に、これはただの試し切りだ。出来上がったばかりの玩具の具合を試すようなものでしかないのだ。トールはそう悟り、
（やめさせなければ――）
強く思った。だが御輿に乗ったレオニスの傍らにいるだけで、どうすることも出来ずにいた。やめてくれ――心の中で何度もそう叫んだ。それを口にすることが出来るのは、いまや自分一人なのだという思いがあった。それなのに――怖くて何も言えなかった。

レオニスが怖いのではない。レオニスから、影法師と見なされるのが怖かった。幼い頃から互いにただ一人の理解者であったレオニスから、影は黙って立っていろと言われてしまうだろう。それがたとえようもなく怖かった。
トール自身、信じがたい臆病さである。自分がそうまで怯懦の精神を抱えていることを悟り、死にたくなるほどの羞恥を感じ、かつてない無力さを味わった。
そしてその間にも、壮大にして自虐に満ちた儀式は進行してゆくのだった。
「やれ」
レオニスが言った。トールが、はっと息をのんだ。袋をかぶせられた罪人がくぐもった悲鳴を上げ——刑吏が、領民に見せつけるようにして斧を振り下ろし、縄を切った。
巨大な刃が、精緻な石像の間を滑り落ちた。
どん、という鈍い音。そして一瞬遅れて、切断された首と両手が、駕籠の中に落ちた。
血が迸り、計算され尽くした溝の中を流れ——なんと領民たちの前で、地獄の彫刻に鮮やかな色彩を巡らせた。悶え苦しむ人間の像の、口や目や髪が真っ赤に染まったのだ。
まさに彫刻が生命を与えられた瞬間だった。領民たちが恐怖の声を上げ、気を失って倒れる者が続出した。生き残った二人の罪人が、揃って力を失ってひざまずいた。
トールは、自分も失神してしまえれば、どんなに楽だろうと思った。

「真っ赤だ……なんて綺麗なんだろう。母さんみたいに綺麗だ。なあ、トール。これで、この聖地は、ますます美しくなるぞ。そうだろう、トール」
レオニスは言った。トールは、かろうじて頭を垂れた。
「これをノヴィアに見せてやりたいな……この美しい代物を」
トールは血の気が引くのを覚えた。ノヴィアをこの地獄の断頭台に捧げたいと、レオニスが言ったように思えたからだった。トールは顔を上げ、赤く染まる醜悪な像を見つめた。
何も出来なかった。どうすれば良いのか、まるで分からなかった。

同じ頃、聖地シャイオンの城の地下牢に、愛おしそうに頭蓋骨を撫でるレティーシャの姿があった。いまやすっかり住居となった牢に両足を投げ出し、ぼそぼそ呟き続けていた。
「流れて行くね……兄様。沢山の未来、幾つも流れて一つになるね……兄様。一番、哀しい未来に、兄様。一番、綺麗な未来に。一番、汚い未来に。でも一番、本当の未来に。全部が綺麗になる未来……あともう少しね。あたし、綺麗に綺麗にするね。レオニス様もあたしも綺麗にするね。ふー、おかしいね、みんな流れて行くね、兄様。どこまでも、どこまでも、どこまでも、どこまでも……」

夜が降り、大河はいまや深い闇をはらむように流れてゆく。
河岸の古い聖堂に、アキレスは降りた。背後の河では氷が軋んだ音を立てている。
「ふふ……血の臭いにはしゃいでいるのですか。大人しくしていなさい、〈蛭氷〉よ」
手を翻すと、途端に氷が形を失って河面に溶けていった。アキレスは灯りとてない聖堂を振り返り、階段を登った。濃密な臭いがした。むせかえるような血の臭い——
建物に入り、ほう……と感嘆の声を上げた。見渡す限りの屍だ。聖堂の司祭や兵、あるいはただの労働者たち。みな無慈悲な殺傷の犠牲となって倒れ伏している。
「これはこれは……〈蛭氷〉がはしゃぐわけですね。良いでしょう……食らいなさい」
幾つもの氷柱が生え、屍を貫いて血を吸った。そこへ突然——声が響いた。
「面白い魔獣だ……堕気に意志を持たせ、氷と蛭という形質を与えたか」
優しく語りかけるような、ひどく穏やかな声音だった。
「魔獣を作り出す堕法は、現聖王が禁止させ、王弟が復活させようとしたものだったな」
アキレスは目を見開いた。気配など全くなかったのだ。氷を消し、闇に目をこらした。
窓辺に、悠然と座る一人の男の姿があった。
蒼く浮かぶ、長い銀髪。透徹とした表情をたたえた白皙のおもて。
長い放浪生活にもかかわらず、その貴族服にはしみ一つ無い。まるで優れた彫刻師の手

による氷像が、青ざめたマントを羽織って座るかのような優雅さだった。
その右手に、何かを握っている。鎖――その先で、十字形の紋章が揺れていた。
左右に揺れる紋章を見つめながら、男は、言った。
「セラヴィの街から最後の荷が届けられるはずだったが……闇に葬られたようだな」
「はい……ヴィクトール・ドラクロワ卿閣下。我々の共通の敵である男によって……」
「大いなる流れにおいて……敵か味方かは、結果に過ぎん」
ドラクロワは、紋章を右手の中に収め、ゆっくりと立ち上がった。
「お前が、レオニス・ジェルミナルに雇われた狩人かね？」
そこで初めて、群青の目をアキレスに向けた。穏やかな口ぶりからは想像もつかぬほどの苛烈な意志がみなぎる眼差し――その圧倒的な存在感がにわかにアキレスを打った。
「はい……アキレス・ツェペットと申します。以後、お見知り置きを……」
そう答えてから、無意識に後ずさっていたことに気づいた。屈辱がアキレスの笑みを凄惨なものにした。しいて足を前へ踏み出しながら言った。
「あなたを追う黒き騎士を、背後から襲って仕留めるよう命じられております。その報賞として、黒き騎士の偉大なる〈招く者〉の力を、我が物として良いと……。よろしいのでしょう？　かつてあなたが授けた力を、あの男から奪っても？」

粘つくような声音で、アキレスが言質を求める。ドラクロワはあっさりそれを与えた。
「好きにするがいい。お前の魔獣は、面白い。色々と、役立つかもしれん……」
アキレスには意味が分からない。ドラクロワは微笑んだ。
「お前は、力を得て、それでどうするのかね？」
「それは力を得た後で語るべきことです。あなたも力を求めておられるのでしょう？」
「そうだ……完全な力をな」
「完全な力……？」
「お前が、その魔獣を手に入れたのも……私が、あの男に力を授けたのも、全ては過去から現在へと続く、大いなる流れの中でのこと。所詮、いかなる力も……その力を生み出した流れから逃れることも、その流れを変えることさえも出来はしない」
この男は何を言っているのか？　アキレスは咄嗟にドラクロワの意図をつかみ損ねた。
「いかなる力も……どのような人間も……時の流れを逆巻かせることは出来ない。このネルヴァ河のように……ただ流されてゆくだけだ。そんなことが許せるかね？」
「あなたは、許せぬと……？」
「そうだ。人がただ大いなる流れに運ばれるままでいるなど許せるものではない。完全な力とは、すなわち逆流だ。運命の流れを覆し、過ぎ去った過去でさえ再び取り戻す……そ

れが出来てこそ完全な力だ。その力が生み出された流れさえも、変えてしまう力だ」
アキレスには何のことやら分からない。ただ一つ——過去を取り戻すということを除いて。おそらくそれがドラクロワの望みなのだ。そしてそれこそアキレスの興味の外だった。
アキレスにとって過去とは蛭の腹に収められた血に等しい。既に食い尽くし、十分に己の養分としたものを、わざわざ吐き出して何になるのか。いかなる人間も出来事も、アキレスにとっては、己の餌食になるかならないかの問題だった。
そのときふと外で気配が起こった。何人かが足音も隠さず、こちらへやって来る。
「来たか……。〈運びゆく者〉の筆頭たちよ」
ドラクロワが言った。現れたのは三人の男たちであった。みな上背は高く、手足は太く、体は分厚い。ドラクロワに呼応した大河の河賊たち——様々な理由から、河を巡る権利を奪われ、盗賊行為を通して反抗する者たちであった。
「その男が、我らと協力して黒き騎士を討つ刺客ですか、ドラクロワ様？」
男たちの一人が訊いた。いかにも信用していない口ぶりである。
「ジークに、盗賊などを対決させるつもりなのですか？」
アキレスも肩をすくめる。男は、すうっと目を細めた。下手に睨むより迫力がある。その額から左頬にかけて何でつけられたのか想像もしたくないような傷跡が走っていた。

「我らは義賊だ。盗賊ではない。我らは河を占有する聖堂に抵抗する者だ」
アキレスは頭を下げた。内心では、せいぜい〈蛭氷〉の餌にしようとしか考えていない。
そのアキレスの心を読んだように、ドラクロワが言った。
「彼らはみな、私が授けた聖印を、その身に刻み入れている」
アキレスは驚いた。聖印を体に刻めば死の危険を伴う。セラヴィの街で始末した子供たちのように、十人中九人は聖印の悪影響で体が蠟のようになる病――死蠟病に陥って死ぬ。その危険を冒して生き延びたのが、この三人というわけだ。彼らがどういう力を持っているにせよ、どれほどの犠牲者を出したか知れなかった。
「なるほど。セラヴィから運ばれる最後の荷が届けば、彼らの一員として働かせるはずだった、と言うわけですか。あいにく、ジークに保護されてしまいましたがね」
アキレスは言った。少なくとも三人のことを、ただの餌とは思えなくなっていた。〈蛭氷〉の力を飛躍的に向上させられる、素晴らしい餌だった。
「あなた方とともに戦えることを嬉しく思いますよ」
アキレスは全くの本音を告げた。男はさして感じた風もなく、言った。
「我らは荷を運ぶため、自らを楯にして黒き騎士を食い止める。そして絶対の正義をもって傲慢なる聖法庁に鉄槌を下す。そのためにネルヴァ河を人血で赤く染めようともだ」

では存分に、その血をすすらせてもらうとしよう——アキレスは内心でそう付け加えた。

男たちは、胸に手を当て、ドラクロワに向かって頭を垂れた。アキレスもそれに倣った。

ドラクロワの冷厳とした声が、彼ら全員の頭上に降りかかった。

「行け……聖地より遣わされし狩人と〈運びゆく者〉の戦士たちよ。ともに最強の軍団たる男を迎え撃ち、この大河に動乱の波を立てるため、大いなる流れに命を投げ入れよ」

ジークを足止めするために、死んで来い——ドラクロワはそう言っていた。男たちの誰一人として、それに逆らわなかった。

アキレスは相手を見ようとして、寸前でやめた。視線を感じた。ドラクロワが、じっと自分を見ていた。まるでドラクロワの欲するものをアキレスが持っているというように。

「狩人よ……お前の力が助けになることを、期待しているぞ」

一瞬、お前の力を根こそぎ奪うぞ、と言われたような気がした。

アキレスは従順に頭を垂れつつ、かつてレオニスが思ったのと同じことを心に抱いた。

必ずやジークとドラクロワの二人が持つ力を奪い——我が物にしてみせると。

第二章　クランの聖母

1

むすっとしていた。大河を下る船の甲板で、ノヴィアが、むっつり河面を眺めている。
爽やかな朝陽に、栗色の髪や淡い紫の瞳が輝く——が、憤然と宝杖を握りしめるのへ、
「ねぇ……ノヴィアぁ、なに怒ってるのぉ……？」
アリスハートが、こわごわと訊いた。
「別に……。怒ってなんかいないわよ……」
素っ気なく答えたとき、その背後で、いきなり元気な声が上がった。
「あっ、河の先に何か見えるぜ！　ほら、お前の万里眼ってやつで見てみろよ！」
などとノヴィアの首に腕を回し、がくがく揺さぶるのは、どきりとするほど鮮やかな青い目をした少女だ。日焼けした肌に、短い赤茶の髪。短ズボンからすらりと引き締まった脚が伸びている。外見も口調も少年のようだが、その笑顔はまぎれもなく少女のものだ。

セラヴィの街でノヴィアから金を盗んだ少女——キリである。
「わ……私の力は望遠鏡じゃありません！」
慌ててノヴィアが身を離すと、キリは、
「ねえ、なんだいあれ、ジーク？」
一瞬のうちにノヴィアから他へ興味が移った様子で、背後のジークに声をかけている。
「クランの街だ」
ジークが、河の中州に目を向け、淡々と言った。アリスハートが感嘆の声を上げた。
「うわぁー河の真ん中に街があるよぉ」
中州を石壁で囲った街であった。全体が楕円形をしており、さながら河面に浮かぶ、巨大な木の葉のようだ。すぐさまノヴィアは、全てを見通す万里眼で、河港を見渡し、敵の有無を確認している。その背に、キリが、どかっともたれた。
「なぁ何が見えるんだ。俺にも教えろよ」
「あ、あなたがどいたら教えてあげます！」
「あ、あなたなんて堅っ苦しい呼び方すんなよ。俺にはキリって立派な名前があるんだぜ」
青——それが名の由来だとキリは言った。身寄りがなく、聖堂に拾われ、海のように青い目からそう名づけられたという。同時にそれがキリの力の由縁でもあった。

聖者〈踏む者〉も、目が青かったのだ。目や髪の色が同じほど聖性を受け継ぎやすいという理由から、一方的に聖印の力を受け継ぐ人材とされたのである。

その聖印の悪影響で死病に陥った仲間も、既にジークの手で葬られた。一人ぼっちになったキリは、河を下って海へ向かうジークに、すがりつくようにして頼んだものだった。

「俺もつれてってよ。海に行きたいんだ。海が俺たちの故郷だってフモが言ったんだ」

フモが告げたことは、身寄りの無いキリたちにとって福音だった。みなの目が青いのは海が故郷だからだ――決して聖者の模造品になるためではなく。キリはその言葉に従い、仲間と海を見に行くという願いにすがって生きてきた。その願いが断たれた今、自分だけでも海を見ることが仲間への弔いであり、生きる希望だった。

「子供一人じゃ船にも乗せてくれないよ」

切々と頼むキリに、ジークは、ノヴィアが驚くほどあっさりとうなずき返し、言った。

「ただし、盗んだ金を返してからだ」

使ってしまった分はともかく、仲間の病を治すために盗んだ金は、返すのが道理だ。

「……一緒に謝ってくれたら、そうする」

キリが心細そうに言うと、これもジークは承知した。呆然となったのはノヴィアだ。

盗んだ金を返して回るのに半日かかった。多くの者が咎めず、子供が生きていくための

ジークは聖法庁からの報酬の一部をキリに与えた。
「お前が戦った分の金だ」
キリは、その金を呆然と握りしめ、
「俺……二度と金は盗まない。約束する」
涙ぐんで誓う様子を、ノヴィアは、何とも苦い思いで見ていた。かつてジーク自身も孤児であり、似た境遇のキリを助ける気持ちは分かる。
だがノヴィアもキリに金を盗まれた一人である。その自分の前でなぜそうもキリに優しくするのか。そう思うと、やけに頭にくるし、悲しくなる。
また、ノヴィアがジークと旅を共にするのを望んだときは何度も頼んでやっと許されたのに――キリの場合は、一言二言で話がすんでしまっていた。いくら河の終点までの短期間の同行とはいえ、自分と差がありすぎはしないか。
更に、最も許せないのは、誰に対しても馴れ馴れしいキリの態度だ。特にジークへの甘えた態度は耐え難かった。当初はキリも、ジークには遠慮し警戒する様子で、
「足を見せてみろ」
とジークが言ったときも、おずおずという感じで靴を脱いだものだ。キリの両足は一見

して何の変哲もないが、その足の裏に、青く輝く精緻な聖印が刻まれているのを見て、ノヴィアもアリスハートも息をのんだ。それが、宙を踏み、自在に跳び回るキリの力の源だった。だがこれでは聖印の悪影響で死病に陥った場合、両足を切断するしかない。さすがにこのときだけは必死に生き延びてきたキリへの同情がノヴィアの中で芽生えた。

だがジークが、キリの脚を撫でるように手を当て、聖印の影響を調べてゆくのを見て、たちまちノヴィアは気分が悪くなった。

「あんたの手……大きくてあったかいな」

いつしかジークの手の感触にうっとりとなるキリから、ノヴィアは思わず目をそらし、

「フモが大人になれたら……きっとあんたみたいな男になっただろうな」

死んだ仲間を想うキリの言葉さえ、何をぬけぬけと……と眉根をしかめてしまう自分が意外でもあり、嫌でもあるノヴィアだった。

「手足に痺れが起きたら、すぐに言え」

ジークが言うと、キリは素直にうなずいた。

以来――キリは何かとジークに甘え、ノヴィアはそのたびに苛立った。キリが自然体なのが余計に癇に障る。ノヴィアには自然と人に甘えるような真似は出来ないのだ。

そういう「苦手な相手」に対し、ノヴィアはきわめて冷淡になる。ぷいと顔を背けて相

手を見もしない。だがキリは、ノヴィアが無視すればするほど、ちょっかいをかけてくる。
「遠くばっかり見てると足下が危ないぜ」
と河港を調べるノヴィアの足を引っかけ、
「綺麗な紋章だなぁ。俺も欲しいなぁ」
紋章を引っぱって首を絞めたりする。とうとうノヴィアも我慢ならず、きっと睨んで、
「船の上でふざけて落ちたらどうするの！」
するとキリは何が嬉しいのか笑顔になり、
「俺が跳んで拾ってやるさ。そんなに犬みたいに吠えるなよ。蔵の番犬みたいだぞ」
「い、犬……。ど……泥棒猫みたいな人が、何を言うのっ！」
「ま、まぁまぁ……ノヴィア落ち着いて」
アリスハートが困った顔で仲裁する一方、キリはジークの腕に、ひしと抱きつき、
「泥棒じゃねぇよ。もう金は盗まないって約束したんだ。信じてくれるだろジーク？」
その猫なで声に、ノヴィアは総毛立った。
「誰が信じるもんですかっ！」
宝杖を振りかざして追い払うや、キリはひょいと何もない宙を踏んで跳び、
「ははは、船の上で暴れると危ねぇぞぉ、番犬女！」

「だ……黙りなさいっ、この泥棒猫っ！」
憤然と追うノヴィアと、逃げ回るキリに、
「もぉ……なんか言ってやってよぉ」
アリスハートが呆れてジークを仰ぐが、
「放っておけ」
ジークは、いつも通り全く気にもしない。

2

聖地シャイオンの東の国境に、トールがいた。
「こんな風に、ここを出て行かなければならないとは……」
年かさの男が嗄れた声を洩らした。トールはたまらない気持ちになりながらも、
「しばらくしたら……必ず戻って来られるでしょう。それまでの辛抱です」
努めて内心を顔に出さぬよう、そう言った。
男は疲れたように、傍らにいる者たちを見回した。老若男女が、大きな荷物を抱え、あるいは荷を満載した馬車に乗り、陰鬱とした顔でいる。
まるで夜逃げだった。だが事態はいっそう深刻である。みな、レオニスが広場に設置し

た断頭台の餌食となった者たち——あの三人の死刑囚の、類縁であったのである。
既に残り二人の死刑囚も、断頭台を赤く染めるために命を捧げさせられている。
あるいはそれが契機となり、レオニスを夢中にさせた。
刑法をより厳格なものに改訂させ、共同責任の原則を持ち出したのだ。つまり誰かが罪を犯せば、その親兄弟、果ては友人さえ、責任を問われることになったのである。
また殺人や盗みやその他様々な悪事を犯した者を筆頭に、その類縁から、それに関わった者、それを見逃した者、さらには噂を振りまいた者にさえ細かな罰が設定されていた。
それだけ複雑な法体系を、短期間でまとめ上げたのである。レオニスの異常なほど優秀な頭脳があってこその産物であり、暴虐を求める心の盛大な開花だった。
「いかなる罪人も見逃しはしない。この聖地から、あらゆる汚れを消し去る」
レオニスは冷厳と告示した。それは確かに正義の執行であり、喜ばしい面があることも確かだ。だが一方でそれは悪を開発した。様々な罪を作り上げ、それに適合する者を全て悪としたのだ。それまで真っ白かった布を、黒々と染め上げるように。
かくして死罪に値する罪人の家族もまた、相当の罪を背負わされることとなった。家財を没収され、牢に拘禁され、苦痛と労働を強要され、ときには同じく死罪とされる——
トールは何としてもそれを止めたかった。レオニスの中で膨れあがる加虐の欲求に歯止

めをかけたかったのだ。だが法執行に口を出せるわけでもなく、出来ることは一つだった。
本来ならば何の罪もない者を、実際に罪を背負わされる前に、いち早く逃がす――
この聖地から離れさせ、そんな法のない土地に行くよう、うながすのである。
「あなた様は……わしらを逃がしたりして、大丈夫なのですか？」
男がトールを振り返る。トールはうなずいた。もしレオニスに知れれば――いや、早晩、知られることになるだろう。そのときはそのときだった。どんな罪を自分に背負わせるか、レオニスが決めるのを見守るだけだ。
何も言えないのならば、無言のまま、せめて行動で、異議を唱えるために。
「急いで下さい。咎められ、拘束される前に」
トールがうながすと、男たちは、沈んだ顔でぞろぞろと動き始めた。領門を出るときも咎める者はいない。門兵たちには金を渡して、話は通してあるのだ。
彼らが無事に国境を出る様子をトールが見守っていると、ふと男が聖地を振り返った。
「家族の一人が、馬鹿なことをしでかしたせいで、追放されるとは……」
そう言って目を伏せ、とぼとぼと門を出て行った。
トールは凍りついたようにその場に立ちすくんだ。追放――それが結局のところ、トールがしていることなのだ。罪から逃すために、別の罪を与えているようなものだった。

やがて誰もいなくなり、トールはのろのろと城に戻った。
レオニスが、罪人の膨大なリストを作らせていることは知っていた。じきに聖地シャイオンは、罪悪と罰則の嵐に見舞われることになる。その象徴があの断頭台だった。
せめて一人でも、あの醜悪な断頭台の餌食となることから救わねばならない。
その悲壮な思いだけが、今のトールを支えていた。

「ね……あの人、綺麗にした方が良いかな、兄様。あたしの蠅で綺麗にしようよ、兄様」
レティーシャが丘の上に立ち、ぼそぼそと頭蓋骨に向かって囁いた。
その碧の目が、木陰を歩むトールの姿を、ひたととらえている。
ふいに、かたかたと頭蓋骨が歯を鳴らした。レティーシャは頭蓋骨に顔を寄せ、
「なぁに、兄様。お日様があると兄様の声、聞こえにくいの。……ふぅん、そぉ、はい、そうなの、兄様。あの人はまだレオニス様の中にいるの。未来につながってるの。そうなんだ。綺麗に出来ないんだ。ふー。でももうすぐ流れが変わるのね兄様。そうなったら、あたし、あの影法師の人を綺麗にして首だけにするね。それをレオニス様にあげるね。そうすればレオニス様、ますますあたしと同じになるね、兄様。あたしが兄様を持つみたいに、レオニス様はあの影法師の人の首、持つのね、兄様。それからだね。兄様を綺麗にし

た人を、あたしが綺麗にするね。ジークっていう人を首だけにして、レオニス様のお姉様も首だけにして、ドラクロワっていう人も首だけにして、聖王様っていう人も首だけにして、みんな一緒に首だけにして。レオニス様とあたしで、大事な人の首をみんな持つの。そのための道具もあるよ。みんな首だけになるためのね。ふー、ふー、ふー。素敵」

「アキレスが、ジークたちと接触した」

レオニスが言った。王座ではなく、久々に執務室の椅子に座っていた。

膨大な犯罪者リストを作成させていると思っていたトールは、レオニスが書状を眺めるのを見やって、やや安心した。だがそれはまた、別の不安を生み出すものでもあった。

「あの吸血鬼め……相変わらず、しつこくノヴィアのことを書いてくるな」

レオニスが面白そうに口にする。トールはひやりとするものを感じた。平然とノヴィアの名を口に出来る時点で、レオニスが何か痛切な感情を押し殺しているのが分かるからだ。

「やれやれ……お前も読んでみるかい」

レオニスに言われるまま、トールはそのアキレスからの報告書を読んだ。たまらなく胸が悪くなった。証拠を隠滅するために子供を五人、始末しただと！

またジークとドラクロワの動きを報告しつつ、自分がいかに忠実で役に立っているか、

さりげなく誇示した文面が綴られている。それはいい。我慢ならないのは、ノヴィアについての忠言だ。遠回しな言い方をしているが、意味することはただ一つ——殺させてくれ。ノヴィアがジークを補佐している実情から、レオニスのあるべき立場（聖地の後継者は一人でいい）まで事細かに書き、言質を得ようとしていた。ノヴィアを殺す許可を。

「身勝手な男ですね」

それがトールなりの、精一杯の侮蔑だった。書状を畳み、机に置いた。

「役には立つ。獰猛な獣と同じさ。鞭と飴でしつける。いや、あの男の場合、鞭と血か」

レオニスは笑っている。トールにとっての問題はレオニスの態度である。アキレスの執拗な要求に——ノヴィアを殺させてくれという言葉に、どう応じるのか。

問いただすべきなのだ。そして言うべきなのだ。決してノヴィアを殺そうとしてはならないと。それだけは守らねばならない——だがトールは何も訊けないし、言えなかった。

影のように、ただ黙って立っているだけだった。

「真の王……か。確かに魅惑的な響きだ。そのために全て棄てる……」

レオニスは冗談のように呟き、トールを心底からぞっとさせた。だがすぐに肩をすくめ、

「でも今は、打倒すべき相手がいる。ジークとドラクロワ、そして聖法庁……真の王になるなんていう夢を見る前に、彼らを倒さなければ意味がないよ。この聖地でさえ、まだま

だ本当に美しく豊かにはなっていないんだ。そうだろう、トール」
にこりと笑う。トールは、複雑な思いを抱いたまま、頭を垂れた。
「お前を呼んだのは、別の件で訊きたいことがあるからなんだ、トール」
トールは、危うく身を強ばらせそうになった。罪人たちを逃がしていることがバレたか？　だが顔を上げると、レオニスは別の書状を開きながら、こう言った。
「ドラクロワが密使としてお前を要求してるんだ。ずいぶん気に入られたみたいだぞ」
「……は？」
思わず、ぽかんとなった。確かにドラクロワとは面識があるが――気に入られた？
「ドラクロワは、お前のことを高く評価してる。アキレスだけではなく、お前も派遣して欲しいそうだ。こうまで言われる心当たりはあるかい、トール？」
「いえ……」
としかトールも返答のしようがない。困惑するトールを、レオニスは面白そうに眺め、
「凄いぞ、トール。お前をドラクロワ専属の密使にすることを僕が了解すれば、ドラクロワは〈刻の竜頭〉の秘儀の情報さえ交換すると言ってきている」
「訳が分かりません」
トールは正直に言った。自分の存在が、それほどの秘儀と同じ価値を持つなどと、とて

も思えなかった。あの圧倒的な存在感を持つ男から、そこまで優秀な人材とみなされることは、ひどく魅力的である。だが一方で、たまらない危惧感を覚えていた。
「おそらく罠でしょう」
そうとしか思えない。それはレオニスも同じだった。
「多分ね。僕からお前を奪う気かもしれない。ただ、なぜそんなことをドラクロワがするのか分からないんだ。秘儀の情報というのは、外典イザーク書の内容に違いない。それほどのものを僕に渡すなんて、何を狙っているのか……」
思案するレオニスを、トールは黙って見守っている。実際にトールを派遣すれば分かることかもしれないのだ。だがそうなればトールは罪人たちを逃がすことが出来なくなる。その代わり、レオニスをドラクロワの意図から守ることが出来るかもしれない――
「いずれにせよ、お前を派遣することについては保留にしておこう。アキレスならともかく、僕のたった一人の大事な友人を、獣の巣に放り込むような真似は出来ないからな」
それは紛れもないレオニスの本音だった。トールは不覚にも胸が熱くなるのを覚えた。
「……はい、レオニス様」
頭を垂れつつ、レオニスが自分をそのように見てくれていることに感謝した。
「本当に……お前とは、一度だって喧嘩をしたことがない。子供の頃から一緒にいるのに

ね。お前とは今のままでいたい……ずうっと、この先も」
真情のこもった声だった。トールは万感の思いを胸に、顔を上げ——
「レオニス様……」
背筋がそそけ立つような、悽愴の微笑を浮かべているレオニスに、絶句した。
「お前は優しいからね、トール。僕は知っているよ。お前が罪人の家族に余計な情けをかけていることも、僕は責めたりはしない。だってそれはお前の優しさなんだから。でもね、トール。その優しさは、いったい誰にだけ向けられるべきなんだろうね、トール。今、お前の目の前にいる相手にだけ、その優しさを向ければ良いんじゃないかな、トール」
トールは凍りついたまま動けない。ただレオニスの眼光に圧倒される思いだった。
レオニスの形の良い唇が、ひどく残酷に吊り上がった。
「僕はね、トール……自分の影と喧嘩をするような愚かな真似はしたくないんだ。言っている意味が分かるよね。このままずうっと、お互いに喧嘩をせずに、一緒にいたいんだよ。一緒にこの国を綺麗にしたいんだよ。そうだろう、トール」
トールはかろうじて震え出さずにいられた。魂が砕ける思いで頭を垂れた。
「ふふ……きっとまだ余計な情けという意味が分かっていないよ。お前がしたことは、単に彼らを追いつめただけなんだ。ふふ……すぐに分かるよ、トール」

何かを言い返したかった。顔を上げて相手を見たかった。耳を塞いで逃げたかった。
だが何一つとして出来なかった。トールはひたすら大人しく頭を垂れ続けた。
脳裏に、一緒にいてあげないとね——というアリスハートの声が、繰り返し甦っていた。
アリスハートはノヴィアと喧嘩をしたことがあるのだろうか——そんな風に思った。

3

船で河を下ること数泊——ジークら一行は、河の中州に築かれたクランの街に降りた。
水に囲まれた街に、ジークもノヴィアも、強く警戒している。ジークの〈招く者〉の力は水上では発揮出来ないのだ。なのに——
「悪党をやっつけるんだろ。俺も手伝うぜ」
気楽に言うキリに、ノヴィアがむかっとなった。
「せいぜい足手まといにならないで下さいね。ろくに戦いも経験してないくせに」
つんとなって言う。キリが、かちんとなって眉をひそめる。
「へっ紋章があるからって偉そうに。俺も紋章があれば良い稼ぎになるんだろうなぁ」
「か、稼ぎってなんですか！　私は別に……」
「あ、アリスハート、あれ見てみろよ」

だが、あっという間にキリの興味は他へいっている。アリスハートもつられて、
「わぁ……綺麗な女の人ぉ」
と声を上げるのがノヴィアには悔しい。
「あなたみたいな人が、紋章なんて授かるもんですか……」
ノヴィアもしいて平静を保ち、それを見た。市庁舎への道に見事な石像が立っているのだ。質素な衣服の、静謐とした女性像だった。
「クランの聖母だ」
ジークが告げ、ノヴィアを驚かせた。「聖母」の尊称は〈銀の乙女〉が公認せねばつけられない定めだが、女性像のどこにも紋章が無い。像の台座を見ると『無位・無名』の文字が、称号の代わりのように刻まれている。これは聖母自身が位や紋章を辞退し、己の名を後世に残すことさえ拒んだということだ。
「それでも像が建てられるなんて……」
それだけ民衆に愛されている証拠だった。
「へえ、紋章が無いんだ。格好いいな。俺もこんな風になれるかな」
刻まれた文字の意味をアリスハートに教えてもらったキリが言う。
絶対に無理に決まってる——そうノヴィアは心の中で呟くが、

「この聖母は、もとは罪人だった」
ジークが言うのへ、みな目を丸くした。
「だから、名を残すことを自ら拒んだ」
ジークが告げて歩き出す。ノヴィアとキリが、ふと互いに顔を見合わせた。二人とも、むっとなった。そして競うようにジークの後を追った。

「ようこそ、はるばるクランの街へ」
クランの市長は、端正な老人であった。ジークが子供をつれているのに驚きつつ、
「聖王の騎士の供として、さぞ偉大な力を身につけられておるのでしょうな」
目ざとくノヴィアの紋章を見て言ったものだ。
市庁舎の応接室にも聖母の肖像画があり、ノヴィアとキリがそれを見ていると、
「聖堂も市庁舎も聖母を崇めてましてな。ここでは政治も商売も信仰も一体なのです」
市長は言った。今でこそ東西南北の流通を担って繁栄するクランの街も、かつては洪水に悩まされる貧しい川べりの街だったという。だがいつしか街に一致団結の気運が起こり、商業のための新たな街づくりが始まった。その気運をもたらしたのがクランの聖母である。
貧しさゆえに荒れていた街の男たちを従え、地盤も弱く洪水の危険に満ちた中州に街を

築くという一大事業を開始したのだ。聖母が祈ると洪水もぴたりと治まったという。
「その聖母のもとでみなが協力し合い、ついに街を完成させたのですよ」
ノヴィアはつくづく感心して聖母の肖像画を見上げた。洪水を宥めるなど途方もない力である。紋章を授かっていたら最高位の称号が与えられたのは間違いない。
一方で市長が別のことを言っているのもノヴィアには分かった。もしジークが対立するなら、街の人間一人残らず戦うぞと言っているのだ。それほどの団結力を持った街だった。
「あなたは、かつてドラクロワとともに、この街の利益を守って下さった方だ」
市長の言葉は、ノヴィアたちを大いに驚かせた。
かつて――聖法庁が河沿いの街に多額の税を要求したとき、ドラクロワは、街の利益を優先するよう便宜をはかったのだという。それゆえネルヴァ河沿いの街のほとんどが、ドラクロワに好意的なのだ。聖法庁の支配を快く思わない者にとっては英雄に等しかった。
「ドラクロワが望む戦乱に参加する気か」
だが鋭くジークが訊くと、市長は笑って手を振ってみせた。
「いや、まさか。戦乱など冗談ではない」
クランの街は商売上は絶好の地形だが、戦乱になれば河の両岸・上流下流、全方角を守るため、莫大な費用がかかってしまうのだ……商業都市の市長らしい言い分だった。

「一通りの検分は、させてもらう」
ジークはそう言い置き、市庁舎を去った。

ジークは聖堂に、ノヴィアたちは修道院に、それぞれ宿を求めた。
その間際に、ノヴィアはある決心をしていた。声を低めて、こうジークに告げたのだ。
「あの……ジーク様、申し上げたいことが」
「どうした」
「実は……物がなくなるんです」
船上でも修道院でもノヴィアはキリと同室となる。問題はノヴィアの持ち物がなくなることだった。金や高価な物ではなく髪留めや衣服の飾りや細かな品である。旅で失うことも多く、最初は気にしなかったが、どうも頻繁になくなるのでジークに告げたのだった。
「キリが盗んだ証拠はないんだな？」
ノヴィアは素直にうなずいた。キリに疑いをふっかけて腹いせしているのではないことをジークにだけは分かって欲しかった。そしてジークはこういうとき非常に公正になる。
「もしそうだとしても悪意はないだろう」
ノヴィアの言い分を容れつつ、必要以上に相手を咎めることを諫めた。

「お前の目でしばらく様子を見ろ」
ノヴィアはまたうなずいた。正直、ジークが味方してくれるだけで満足なのだ。
だがその思いは、早々に打ち砕かれることになった。

「俺、こっちのベッドが良い！」
キリが、修道院の部屋の二つ並んだベッドのうち壁際の方へ転がり、手足を伸ばす。
ノヴィアはノヴィアで、窓際を好むので何の問題もないのだが、
「わがままばっかり。靴くらい脱ぎなさい」
ちょっと癪に障って、冷たく言い放った。
「べ、別にどっちでも良いじゃない、ねぇ」
アリスハートが困ったように仲裁するが、ノヴィアはつんとして荷物を整理している。
「怖ぇなぁ。番犬女は、しつけが厳しいんだなぁ。靴くらい良いだろ」
キリが笑って、靴を履いたままの足をベッドの背もたれにのっける。単に行儀が悪いというより足の聖印を人目に触れさせたくないのだとノヴィアにも察せられたが、
「泥棒猫さんらしく、いつでも逃げられるように靴を履いてるわけですか」
「そうさ。しっかり荷物を見張っとけよ。でないと全部、俺がかっさらっちまうぜ」

言われずとも、そのつもりだった。
夕食どきになり——ノヴィアたちは食事の用意をしにジークのいる聖堂へ赴いている。
「最初見たときは犬の餌かと思ったけど、食ってみると美味いんだよなぁ」
ちゃっかりジークの隣に座るキリが、ひどいことを言う。そのくせ、まだらに濁ったスープや、元は何であったか分からぬ形状をした緑色の物体を、さも美味そうに食らうのだ。
最初にノヴィアの料理を見たときはキリも目をまん丸にして凍りつき、恐る恐る食べ、その極上の味わいにさらに仰天したものだ。
「まあ、外見は不細工でも、中身は良いってやつだな」
しげしげとノヴィアを見つめてそう口にした。ノヴィアが凄い目つきになって睨む。
「誰の外見がなんですって？」
「い……いやいや、料理のことだってば。な、ノヴィア。俺にも料理を教えてくれよ。仲間とは、みんなで食事を用意してたんだ。俺だって何か作れるもの、あるだろ？」
「……行儀よくするなら教えます」
そう答えると、キリはとても嬉しそうに念を押した。
「約束だぜ。ちゃんと靴も脱ぐからさ」
その無邪気な様子にうっかり気を許しかけ、慌ててかぶりを振るノヴィアだった。

「明日、早朝から街を調べる。今晩(こんばん)は休め」
ジークが言い、ノヴィアたちは早々に辞去(じきょ)した。修道院に戻(もど)り、交代で湯浴(ゆあ)みを済(す)ませ、
「……俺も、ジークの役に立てるかなぁ」
呟(つぶや)くキリに、またぞろノヴィアはむかむかした。そう簡単(かんたん)にジークの役に立つなど——
「お前、今、俺には無理だとか思ったろ」
気づけばキリが、どきりとするほど綺麗(きれい)な青い目をこちらに向けている。
「べ……別に、私は……」
「まぁ見てな。そのうち俺もお前みたいに立派(りっぱ)な紋章(もんしょう)もらって、お前より稼(かせ)いでやる」
「お金を稼ぐための旅ではありません……。まったく、何を考えてるんですか」
ノヴィアは溜息(ためいき)まじりに言った。
「もう寝(ね)ましょう」
「おう、おやすみ」
「おやすみ、ノヴィアぁ」
ランプの灯(あか)りを消して横になると、どっと疲(つか)れて眠(ねむ)りに落ちるノヴィアであった。
その夜——
ノヴィアはふいに目覚めた。ほとんど反射(はんしゃ)的に身を起こし、辺りを見回している。

誰かが近づいたような気配がしたのだ。だがドアは閉じられ、窓もちゃんと鍵をかけてある。ふと窓枠が濡れているのに気づいた。
「水……？　雨でも降ったのかしら……？」
首を傾げたとき、キリが寝返りを打った。見れば毛布を蹴飛ばしている。ノヴィアは溜息してキリに毛布をかけ直してやった。何となく散らかったものを片付ける気分だった。

「今のうちに仕留めるか、捕らえるかすれば良いのではないか、アキレス」
修道院の庭で、夜闇に隠れて囁く者がいた。
〈運びゆく者〉の一人である。名をカンディードと言った。額から左頬にかけて凄まじい傷跡が走っている。とにかくでかい男で、体格顔立ちともに岩を連想させた。腕力は桁外れで、過去に聖堂の兵士をその長い腕で抱きすくめ、鎧ごと全身の骨を砕いたという。
そのくせ全く物音を立てず忍び歩くことも出来た。今も水夫が好む薄手の外套を羽織っているが、ほとんど衣服が擦れる音さえ立てない。
「まさか。危ないところでした。聖性の塊のような少女ですね。堕気には敏感ですし、少しでも敵意を出すと感づかれますよ、カンディード」
アキレスが応える。黒髪をかきあげる指が異様に細長く、白い。爪を全て剥ぎ取り、紋

様を刻み込んだ指が、青く光っている。カンディードは無表情にその指を見ていた。
氷が、軋み音を立てて帰って来た。その氷がくわえるものを、アキレスが手にした。
「今は〈蛭氷〉に、これを盗ませるので十分……後は手筈通りに罠を仕掛けましょう」
すっとアキレスが退く。カンディードもそれに倣いつつ、ぼそりと呟いた。
「何をするかと思えば、盗人の真似とはな。隙を見て、背後から襲うのが好みか」
正確に言えば真下からだが、アキレスはそれには言及しなかった。
「私と行動をともにする必要はないのですよ。それぞれの戦法で戦えば良いのです」
「お前の小細工を知っておかねば、間違えてお前を潰すかもしれん」
ずけずけとカンディードは言った。アキレスは肩をすくめた。
「あなたは、本気で、正面からジークと戦う気ですか？」
「戦うのではない。潰すだけだ。義賊の誇りにかけて」
義賊——正義の盗賊か。実に馬鹿馬鹿しい。アキレスはそう思いながら修道院の敷地を出た。すぐに馬車がやって来て、アキレスとカンディードをともに乗せた。
ほとんどカンディード一人でいっぱいになる客席に辟易しながら、アキレスが言った。
「あなたの戦い方を、参考までに教えて頂けませんか。私が邪魔をしないようにね」
カンディードは巨大な手の平を開いた。

「これで、頭を潰す」
「——素手で戦うのですか？」
アキレスが呆れ返った。カンディードは指をゆっくりと閉じながら、うなずいた。
「剣や棍棒では、砕けてしまう。以前、ドラクロワ様が聖銀の剣を授けて下さったが、まるで役に立たなかった。すぐに砕けた」
「聖銀の剣が……砕けた——？」
聖銀製の剣より硬いものなどない。ジークが振るう銀剣も同じ材質だった。
「いったい、どのような振り回し方をしたら、聖銀が砕けるのでしょうね」
「振り回す……？」
カンディードは不思議そうにアキレスを見た。
「握っただけだ。それだけで柄が砕けてしまう。だから全く役に立たない」
アキレスの頬が、笑みとも何ともつかぬ形に引きつった。
「握っただけ……」
たちまちアキレスの目の色が変わった。想像を超える腕力である。この男の血を奪えば、〈蛭氷〉もそれと同じ力を得ることが出来る。何とも素晴らしい餌だった。
「俺の血を、お前の氷に吸わせる気か？」

いきなりカンディードが訊いた。アキレスは平静を装って微笑している。
「ドラクロワ様からお前の力は聞いている。好きにしろ」
「は……？　好きにしろ……？」
「俺の戦い方を教えてやる。まず、ジークとやらに、俺を斬らせる。俺はそれでも、まだしばらく生きている。そして、ジークとやらの頭を潰して、一緒に死ぬ。お前は俺とそいつの血を吸えばいい。ドラクロワ様は、そうしろと仰っている」
アキレスは今度こそ本当に微笑んだ。義賊——その意味がやっと分かった。正義のために何の躊躇もなく自分の命を放り出せる者たちなのだ。何と素晴らしい集団だろう。
「あなたのような方と一緒に戦えることを、本当に幸運に思いますよ」
カンディードも、にやりと笑った。
「俺もだ。自分の死体を片付ける手間が省ける」
そうして共闘の意志を固める二人を乗せ、馬車は間もなく街の北辺に着いていた。
豪奢な邸宅へと入ったアキレスとカンディードを迎えたのは、端正な老人であった。
「首尾はいかがかな？　困ったことがあれば何でもご用意しますぞ」
アキレスたちを座らせながら、クランの街の市長は言った。

「準備は万端ですよ、市長。私は、これを使って、罠をしかけます」
アキレスが、先ほど盗んだものを手にして言う。市長はうなずき、カンディードを見た。
「〈運びゆく者〉は、予定通り、お前たちから荷を受け取る。荷が見つかった場合、その一部を、ジークを倒すために使っても良いとドラクロワ様は仰っている」
「ドラクロワ殿は……この街の聖母の力について、何か仰っていたかな？」
「ジークを倒せば教えてやるそうだ。それ以上のことは、俺は知らない」
カンディードはその凶器でもある両手を開いて肩をすくめた。アキレスが身を乗り出し、
「聖母の力……？　ははあ、市長様はそれが目的なのですね」
「そうだ。洪水を宥め、この街を建設させるほどの力だ。その力があったからこそ、かつて罪人であった女が、聖母とさえ呼ばれるに至ったのだ。聖法庁は、我らがその力を自由に使えぬよう、隠匿しおった。聖母にまつわる一切の記録を、封じたのだ」
悔しげにわめく市長をよそに、アキレスはもはや涎をしたたらせんばかりでいる。
カンディードの力も、聖母の力も、全てが極上の餌だった。必ずジークの力も奪ってみせる。そのための策をこれから用意するのだ。アキレスはこの狩りの主導権を与えてくれたレオニスに心の底から感謝し、胸の中で繰り返し忠誠を誓った。

4

早朝、ノヴィアが目を覚ますと既にキリの姿はなかった。いったいどこを跳び回っているのかと思いながらカーテンと窓を開くと——

「お、やっと起きたか」

なんとキリが外の宙に立ってパンを齧っている。

ノヴィアは遅れて目が覚めたことに妙に腹が立った。

「……朝早くからパン泥棒ですか」

「腹減ったたって言ったら、修道院の人がくれたのさ。あ……ジークが来た」

「え……。嘘……」

ノヴィアが窓の外に身を乗り出すと、向こうの道からジークがやって来ている。確かに早朝から街を調べると言っていた。ノヴィアは身を翻し、慌ただしく着替えだした。

「はは、番犬女のくせに寝坊してら。急がないとジークに着替えてるところ見られるぞ」

「だっ、黙りなさい！　すぐに準備します！」

ノヴィアが真っ赤になって怒鳴る。アリスハートがむにゃむにゃ目覚め、

「うーん……みんな早起きねぇ」

のほほんと呟いていた。
「――早いな。もう起きていたか」
息せき切って出迎えたノヴィアに、ジークは言った。伝言だけ残し、朝一番に街を見回ってから、朝食を摂りに再び来るつもりだったのだという。ノヴィアはがっくりきた。
結局みなで出ることになった。食事を終え、ノヴィアは準備のため部屋に行った。だが、
「すぐに用意します」
と言ったきり、なかなか戻って来ない。
「遅いなぁ。何やってんだろ」
キリが待ちくたびれてぼんやり呟いたとき――異変が起こった。
「ちょっと、ちょっと、ノヴィアぁっ。落ち着いてよぉっ」
アリスハートの声がしたかと思うと、もの凄い勢いでノヴィアが階段を降りてきたのだ。顔を真っ赤にし、目に涙を溜めている。その顔のまま、きっとキリを睨みつけた。キリが啞然となる。ジークが眉をひそめた。
「どうした」
だがノヴィアは答えない。つかつかとキリに迫り、修道院中に響くような大声を上げた。
「返してっ!!」

「な……？　な、なんだよ。どうしたってんだよ？」
キリは仰天している。ノヴィアはアリスハートの制止もきかずキリにつかみかかった。
「嘘つきっ！　泥棒っ！　私の紋章を返しなさいっ！　今すぐっ！」
「紋章ぉ⁉　ちょ、ちょっと待て……そんな、俺……知らないって……」
「──紋章がないのか？」
すっとジークが間に入って、ノヴィアをキリから離す。
「泥棒、泥棒、泥棒っ！　母さんの形見なのよ！　私がどんなに苦しんで母さんの力を受け継いだと思ってるの！　紋章を盗まれたなんて、母さんに……母さんに怒られる……」
これまでの憤懣もあり、どうにも涙が止まらず、
「紋章を受け継ぐだけで、どれだけ辛かったか……苦しかったか……」
真っ赤になって泣きじゃくるノヴィアに、キリは目を細め、言った。
「母親が死んだ後でも……言いなりかよ」
アリスハートがぎくっとなった。ノヴィアは、その信じがたい言葉に目を見開いている。
「あなたなんか……」
ぼろぼろ涙が零れた。総身が怒りで震え、気づけば思いっきり掌を振るっていた。
「あなたなんか母親もいないくせに！」

どうせキリは身軽にかわすだろうと頭のどこかで思っていた。だが、ぱーんと盛大な音がし、逆にノヴィアの方がはっとした。キリは、逃げもせず黙って横面を叩かれ、

「……こんなの、痛くもねぇよ」

ぼつっと言った。今度はノヴィアが啞然となる番だった。

「母親がいないから……なんだってんだ」

そう言うと、キリはぱっと身を翻し、身軽に宙を跳んで、開いた窓から出て行った。

「ノヴィアっ！　ちょっと、ひどいよ！　キリが可哀想だよっ！」

アリスハートが怒った。ノヴィアはなぜ自分が怒られるのか、咄嗟に分からなくなっている。何も言えずにいると、なんとアリスハートまでもが窓から飛んで行くではないか。

「な、なんで、そっちに行くの……アリスハート」

ノヴィアは、おろおろとなって、助けを求めるようにジークを振り返った。

「少し、頭を冷やせ」

ぽんと肩を叩かれた。それがジークの優しさであり叱責だった。

そのままシャベルを担ぐと、すたすた修道院を出て行った。冷静さを欠いた者をジークがつれてゆくわけがない。ノヴィアは、ただ呆然とジークの背を見送るしかなかった。

アリスハートは、建物の屋根に座るキリを見つけ、しょんぼりして声をかけた。
「……ねぇ、キリぃ。……泣いてるのぉ？」
「はっ、馬鹿言え。こんなんで、めそめそしたりしねえよ」
キリは、しれっとした顔で振り返った。そのくせ目元が赤くなっている。
「それより、なんで俺のところに来るんだよ。ノヴィアを放っといて良いのか」
「だってあれじゃノヴィアが悪者になっちゃうよ。紋章……盗んでないんでしょぉ？」
「はは、ノヴィアのために来たんだな、お前」
キリは、ちょっと寂しげに笑った。
「盗んだのは、俺じゃねえよ」
「じゃ、なんでわざと叩かれたのぉ？」
「あんなに怒ると思わなかったから……」
「言いなりだなんて言うからよぉ」
キリはうつむいて唇を噛んだ。ひどく幼い仕草だった。
「……だって、あいつの母さんが可哀想だ」
「――へ？……お母さん？」
「あいつの母さんだって、あいつを苦しめたくて力を受け継がせたわけじゃないだろ。な

のに、あんな風にあいつが言ったら、きっとあいつの母さん、悲しいだろ」
そう言って、青い瞳を遠くへ向けていた。親を持たぬ者ゆえの真剣な眼差しに、アリスハートはほろりときた。
「ごめんねぇ。ノヴィアもあんなこと言うつもりじゃなかったのよ。ごめんねぇ」
「分かってるよ。俺だって……わざとあいつを怒らせるような言い方したんだ」
キリは、どこまでもあっけらかんとして、
「じゃ、そろそろ行くか」
「え、行くって……？　どこ行くのよぉ？」
「決まってんだろ。あいつの紋章、捜しに行くんだよ」
「え……？　ど……どうして？」
「喧嘩の後は仲直りが普通だろ」
キリは大真面目な顔でいる。宙を蹴り、身軽に屋根の向こうへと跳んだ。
「それに、あいつにとって大事なもの、見つけてやりたいしさ」
その後を、アリスハートが込み上げてくるものに目を潤ませながら追って行った。
ノヴィアは、紋章を求めて修道院中を捜し回った。壁に飾られた聖母の絵にさえ、

「お願いします……どうか返して下さい。私の大事な紋章を……お願いです」
ひざまずいて、そう懇願したものだった。
紋章の無い聖母は、そんなノヴィアを目を細めて見つめている。
「う……。なんで……。アリスハートまで……なんで……」
ひっきりなしに涙がにじんだ。大事な物をなくしたばかりか、独りぼっちにされてしまったのだ。悲しいやら情けないやらで、いっそ部屋に閉じこもって泣きたい気持ちだった。
紋章をなくした可能性のある場所を思い出そうとしながら、とぼとぼ廊下を歩いていると、ふいに修道女の一人が声をかけてきた。市長の使いが来て、呼んでいるというのだ。
こんな早朝に呼び出されるとは、何かよほどのことが起こったのだろうか。そう思いながら、ノヴィアは泣き顔を隠すようにうつむいて応えた。
「ジーク様は、今、街に出ております……呼んで来た方がよろしいでしょうか」
「あなたにご用みたいよ。何でも、大事なものが市庁舎に落ちてたって……」
予想外の言葉が来た。思わずノヴィアは目をみはって顔を上げた。まさに光明だった。
「わ、私の大事なもの……そう仰ったんですか」
修道女はうなずいた。ノヴィアは何の疑いもなく建物を走り出た。
そこに、市長から遣わされた馬車が止まっていた。ノヴィアはそれに乗り込んでから、

慌てて万里眼で周囲を見やった。御者と使いの者だけで、武装した者はいない。思わず、ほっと胸を撫で下ろした。こんなときに敵の罠にかかっては、ジークに会わせる顔がない。
ノヴィアは用心しつつも、紋章が見つかることを祈りながら、馬車に運ばれて行った。

市庁舎に行くと、市長は来客中とのことだった。ノヴィアは応接室に通され、紅茶を出された。ゆっくり茶を飲む気になれるはずもなく、じりじりして待った。
落ちていたというのは自分の紋章だろうか。市庁舎にそれを落として行くとは、とても考えられない。鎖が外れれば、すぐにそれと分かるのだ。そもそも最後に紋章を身につけていたのは修道院のはずである。もしかすると――キリではなく他の誰かが盗み出し、それが見つかって市庁舎に届けられたのかもしれない。それが最も可能性が高い。
悶々と考えるうち、無意識にカップを手にとっていた。
すっかりぬるくなっている――そう思ったとき、急にひやりとした。見ると、カップの中に氷が浮いている。ぬるいどころではない。手が冷気に覆われ、カップの中の氷がいきなり膨れあがった。猛烈な堕気が生じ、一瞬で氷の塊がノヴィアの両手を封じ込んだ。
さながら氷の手錠だ。鉄のように重く、あっという間に両手をテーブルに押さえられ、身動き出来なくなった。ノヴィアは信じられない気持ちで拘束された両手を見た。

「やれやれ……上手く行きましたね。堕気を隠すのに苦労しましたよ」
聞き覚えのある声とともに、部屋のドアが開いた。そこに、アキレスがいた。
「おっと視覚の力を使ってはいけませんよ。あなたの手の〈蛭氷〉が聖性に反応して、あなたの目を切り裂きますからね」
「わ……私を人質にする気ですか」
かろうじて気丈さを保って言った。アキレスの顔に寒気のするような笑みが浮かび、
「残念ですが、あなたに危害を加えぬよう念を押されてましてね。まあ、いずれ我が主も考えを改めるでしょう。あなたを串刺しにするのは、それからでも遅くはありません」
「な、なぜですか。なぜレオニスは、こんなことを……」
ノヴィアの声が尻すぼみに消えた。アキレスの背後から、一人の少女が現れたからだ。
その少女の姿に、ノヴィアは危うく悲鳴を上げかけた。
少女が近寄り、両手でノヴィアの頬に触れた。血の通わぬ、恐ろしく冷たい手だった。
「こんにちは、ノヴィア」
そう言って、にこっと笑った。ノヴィアはぞっと総毛立った。慌ててその手から逃れようとして、少女の胸元を飾るものに気づいていた。
「こ、これは……！　私の……！」

「〈蛭氷〉の擬態のために拝借しました。思いがこもった物を与えることで、その持ち主に化けさせるのですよ。しかも、その紋章にやどるあなたの聖性が〈蛭氷〉の堕気を覆い隠してくれます……ジークといえども、簡単には見破れないはず」
「わ、私の紋章を……こんなことに……」
ノヴィアが慌てて氷の呪縛をほどこうとすると、いきなり氷から透明な刃が生え、ぴたりと顔へ向いた。自分の目を狙っているのだ。そう思うと恐怖で動けなくなった。
「大人しくしていて下さい。ジークを仕留めるには本物のあなたがいては困ります」
アキレスは笑って、ノヴィアそっくりの氷の人形と部屋を出て行った。
ドアが閉まり、鍵がかけられた。ノヴィアは独りだった。

あらかじめ見当をつけておいた倉庫街へとジークは躊躇なく踏み込んでいった。
「こ、ここは立ち入り禁止でして……」
慌てて止める水夫たちにも全く構わず、
「検分をすることは通達してある」
ジークは尊大ともいえる態度で中へ押し入った。水夫たちが殺気立つ。だが誰一人、つかみかかることも出来ない。ジークの総身にみなぎる烈気が彼らをたじろがせていた。

いつでも襲って来いといわんばかりに、薄暗い倉庫街の奥へと進むジークを、物見の塔から見下ろす者がいた。〈運びゆく者〉のカンディードである。
「思ったよりも小さい頭だ。あれなら片手で潰せる」
つまらなそうに呟き、傍らの水夫を振り返った。
「荷の積み上げを急がせろ。最後の荷は積まなくて良い。あの男にぶつけてやれ。市長とアキレスに連絡しろ。罠を仕掛けたいなら、俺が奴を潰す前に、さっさとやれとな」

「ノヴィアが紋章を落とすわけないだろ。きっと、俺以外の誰かが盗んだんだな」
アリスハートは羽で飛び、キリは宙を蹴っては、建物の屋根などを踏み、また宙に戻る。すぐに修道院の宿泊した部屋の外まで来た。キリは丹念に窓を調べ、にっと笑った。
「思った通りだ。見ろよ、面白いもんがついてるぜ」
窓枠に小さな金具がついており、キリが指をかけて引くと音もなく窓が開いた。アリスハートがぽかんとなる。キリが窓を戻して再び金具を上げると、中で鍵が閉まった。
「へえ、便利だな。これなら窓から手を伸ばすだけで、中の物を盗れるってわけだ」
キリは、ひさしの上に立った。宙で同じ場所に立ち続けるのは十秒程度が限界なのだ。
「す……すごーい。なんで分かったのぉ？」

「棚やベッドが、変に窓に近すぎるだろ」
言われてみると確かに家具の配置が妙におかしい。アリスハートははたと気づいて、
「じゃ、じゃあ、あんたがあのベッドを選んだのって……」
「泥棒宿っぽいから用心したんだ。次はこいつを仕掛けた奴だ。ま、修道女だろうな」
「修道女ぉ……？　まさかぁ。何でそんなことするのよぉ」
「どうせ金でももらったんだろ」
呆れたことに、キリの予想は的中した。しかもキリのとった手段もまた法の埒外だった。
清掃の当番だった修道女を突き止め、小金を握らせたのである。修道女は、市長の部下に頼まれてやったの、もう少しもらえると思ったの、ぺらぺら喋った。ノヴィアやジークではこうはいかない。キリというういわば「同類」だからこそ喋ったのだ。
「院長には黙っててよね。バレたら、あたしここを追い出されちゃう」
「誰にも言わないよ。ありがとさん。あ……窓の仕掛けは外しといた方が良いぜ」
キリが笑って返す。修道女は感謝して、窓から出て行くキリに手を振った。
アリスハートはつくづく、この善悪ごっちゃになった少女に驚き呆れる思いだった。
「さて……こうなりゃ、盗ませた本人に訊こうか」
「ど、どうすんのぉ……？」

「この市長を、蹴っ飛ばしに行くのさ」
キリは楽しげに言って宙を蹴った。アリスハートもちょっぴりわくわくして追った。

「ジークは西の倉庫か……荷が見つかるな」
市長は、市庁舎の一角で部下から報告を受け、厳しい顔つきになった。
「よし、手はず通り事を進めろ。アキレスを呼べ。今こそ策を実行に……」
「おい、おっさん、ノヴィアの紋章返せよ」
どこからともなく声をかけられ、市長と部下がぽかんとなった。
次の瞬間、窓からしなやかな肢体の少女が跳び込んできたかと思うと、いきなり部下の顎を蹴り上げたのだった。部下が呻いて昏倒する様子に、アリスハートが呆気に取られた。
「ちょ……ちょ、ちょっとぉ、いきなり過ぎない？」
「良いんだよ、どうせ悪党なんだから。そうだろ、おっさん。あんたが盗ませたんだろ」
「お、おいっ、衛兵っ！　早く来いっ！　賊だっ、早くっ！」
市長はキリには応えず、慌てて兵を呼んでいる。キリは平然と構え、
「なんだよ。子供相手に、ぞろぞろ出てくんなよな」
兵が雪崩れ込んで来るや、素早く宙を跳んで翻弄した。

キリにとっては、あらゆる空間が地面である。上下左右に跳んだかと思うと、兵の一人を兜の上から蹴り跳ばした。兵は面白いようにひっくり返って気絶している。
足の力だけでなく、キリの体重を空中で支える聖印の力そのものを、ぶつけたのだ。
「す……凄ぉい……」
アリスハートがひやひやしつつ感心した。キリは剣も槍もことごとくかわして笑った。
「はっ、ずいぶん大騒ぎするな。なんか悪いこと企んでんのかい」
次々に兵を蹴り倒しつつ、キリがそろそろ脱出しようと思い始めたときだった。
ふいに、槍や剣とは違うもの——巨大な氷柱が床から生え、襲いかかってきた。
キリは間一髪で宙を蹴って逃げ、氷に上着を裂かれただけで、床に降りている。
「また会いましたね、元気な子猫さん」
アキレスが部屋に現れ、言った。キリの表情が一変した。凄まじい目で相手を睨み、
「ジークと一緒にいれば会えると思ってたぜ……蛭野郎。お前の頭を蹴り割って、ついでにノヴィアの紋章を取り戻してやる……」
キリが宙を踏もうとした。そこへ、部屋に一人の少女が現れ、
「ノ……ノヴィア!?」
アリスハートが仰天して叫んだ。キリも驚きに目をみはった。

「お、お前、どうして……!?」
そしてふと、歩み寄る少女の胸の紋章に気づいた。
キリの背を嫌な予感が走った。思わず飛び退こうとするや――いきなり少女の胸から蜘蛛の足にも似た氷の棘が生え伸び、キリの左腕に食いついたではないか。
「う……うわっ!?」
キリは慌てて棘を蹴り砕き、窓際に退いた。
「ふふ……〈蛭氷〉の断片が食いつきましたね」
アキレスが笑った。キリの左腕に氷が食い込み、みしみし音を立てて広がってゆくのだ。
「下手に動いて体の血の巡りが良くなると、良き獲物と思ってその氷があなたの血を吸い尽くします。大人しく、この擬態した〈蛭氷〉がジークを仕留めるのを見守りなさい」
じりじり退くキリへ、ノヴィアの姿をした氷人形が迫った。キリが笑った。
「へっ……良く見りゃ、全然似てねぇや」
刹那、氷人形の全身から氷の刃が放たれた。まるで爆発だった。無数の氷片が舞い散り、壁も窓もずたずたに引き裂かれた。粉塵が舞い散る中、市長が身を乗り出し、
「や……やったのか?」
アキレスは、ぽっかりと壁に空いた穴から顔を出し、かぶりを振った。

「逃げました。ですが、あの調子ならすぐに〈蛭氷〉に血を吸われて死にますよ。ふふ、思わぬ獲物でしたね。さあ、改めて本命を……ジークを仕留めにゆくとしましょうか」

同じ頃——
ノヴィアは、両手を氷に縛られたまま、ようやく自分が冷静になるのを感じていた。紋章がなくなって取り乱したことや、なぜ、ああもキリに心乱されるのかを思い返した。答えは分からない。分かるのは、同い年の相手と真っ向から接するのは、考えてみればキリが初めてだということだけだ。自分は誰とも、正面切って喧嘩をしたことがなかった。それは自分だけが正しいと思う道を歩み、他の道に目を向けなかったということだ。
いったい何が正しいんだろう——そう思うが、やはり答えは分からない。ただ、今まで持たずにいたものを持とうとしていることだけは分かった。
何かを手に入れるには、失う覚悟が必要だ——ふいに紋章を授かったときの教えを思い出した。その紋章がなくなったことでうろたえ、ひどいことを言ってしまった。
一言で良い、謝るための勇気が欲しかった。そしてその勇気は静かに満ちていった。
ノヴィアは両手を覆う氷を見た。実際の氷ほど冷たくない。ひやりとする鉄か石のようだ。その氷の表面に、ざわざわと刃が生えた。力を発揮する気配に感づいたらしい。

ノヴィアは、ひたと自分の目を狙う刃を見すえ、
「見えません」
真っ向から言い放っていた。
「この氷は、私には見えません」

5

――ずん！　ジークがシャベルを床に突き立て、水夫たちをぎょっとさせた。
かちり。シャベルの柄を回し、新たな柄を現す。それを抜き放ち、一瞬で銀剣を手にした。そうして、鎖がかけられた鉄扉の前に立ち――にわかに斬った。
鎖が両断され、鉄扉が開く。中は闇だ。わだかまる闇の向こうに異様な気配があった。
「荷の中身が見たいか、ジーク・ヴァールハイト」
闇に灯りがともり、倉庫の奥から、ぬっと巨大な男が姿を現した。
「お前は？」
構わず中に入りながらジークが問う。
「〈運びゆく者〉――剛き手のカンディード」
男は太い指を開いてみせながら、そう名乗った。

「ドラクロワの手勢か……どこの領国の兵だ」
「属する国とてない義賊だ」
「……義賊」
呟いたとき、ジークの足が止まった。倉庫のそこかしこで低い唸り声が起こった。異様な気配が強まり、ジークはその正体をすぐさま悟った。
「……魔獣か」
カンディードがにやりと笑った。同時に、別の一角で灯りが生じた。
「クランの街を守る、真の兵団だ」
市長が、兵とともに現れ、言った。市長の手に、精緻な紋様の刻まれた杖があり、それが青白い光を放っているのだ。魔獣に自分たちを襲わせないようにする道具らしい。
「これらの魔獣が荷の中身だ。増殖器はここにはないぞ。我々は魔獣の成育を請け負い、各地に送る。それが、この街の新たな商売であり力だ」
「……聖母を崇める者がなぜ戦乱を望む」
「望むのは聖母の力だ。聖法庁が恐れて隠した力を取り戻し、さらなる繁栄を得るのだ」
ふいに、ジークの背後で鉄扉が閉ざされた。続けて、檻が開く音が次々に響く。
ぬっと、蜘蛛や猿に似た巨大な怪物が、檻から這い出してきた。

カンディードが、丸太のような両腕を開き、歩を進めた。

にわかにジークの左腕にまばゆい雷花が迸り、

「ジーク・ヴァールハイトが招く！」

烈声を上げて、左手を床に叩きつけた。

「悲憤の魂よ！　地刻星の連なりの下、巌魔ヘイトレッドとなりて我が敵を払え！」

稲妻とともに巨人のごとき魔兵が現れ、牙を剝く魔獣と真っ向から激突したのだった。

カンディードはいささかも動じない。自分よりもさらに一回りは大きい巌魔に、ずんずんと迫って行く。それへ巌魔が馬の胴ほどもある右腕を振り下ろし、叩き潰しにかかった。

異様なことが起こった。カンディードの左腕が、巌魔の腕を正面から受け止めたのだ。

そのまま、がっちりと組み合う。僅かの間だった。巌魔が両手首をへし折られ、咆吼を上げるや――それが途絶えた。カンディードが、巌魔の顔面を、逆にその掌で叩き潰したのである。まるで柔らかい果物か何かの上に、思い切り掌を叩きつけたような粉砕だった。

ジークがその異常な光景に、目をみはった。

「貴様の頭も潰してやるぞ、ジーク！」

カンディードが吠えた。数体の巌魔が一度に躍りかかり、カンディードの、およそあり得ぬ膂力が、存分に振るわれた。巌魔の巨体が次々になぎ倒され、その腕や脚がいともた

やすく折られ、砕かれた。真っ直ぐ歩みを止めぬカンディードに巌魔たちがつかみかかる。
カンディードは止まらない。その外套が巌魔の手で引きちぎられ、ぼろ切れのようになった。カンディードの鋼のような上半身が剝き出しになり、そこでようやくジークは相手の異常な剛力の正体を悟った。カンディードの両肩に、それぞれ聖印が刻まれていたのだ。
巌魔の頭を楽々と握り潰して歩み寄るカンディードに、ジークが鋭く声を放った。
「その力、いったいどれだけの命を犠牲にした」
脳裏にセラヴィの子供たちの姿があった。試作のための犠牲にされた者たちの姿が。
「多くの雑魚を食わねば、大魚にはなれん」
カンディードが笑った。いきなり巌魔の体をジーク目掛けて投げ放った。
頭を失った巌魔の体が、砲弾のようにすっ飛んできた。
ジークは横に跳んでかわしている。そこに両腕を大きく左右に開いたカンディードがつかみかかってきた。ジークが素早く剣を振るうが、僅かに遅れた。
振り下ろされる刃の下に、カンディードが飛び込んできたのだ。斬られることなど何とも思っていない前進であった。そのせいで剣の鍔元で相手を斬ることとなった。
刃はカンディードの肩に浅く潜り込んだだけで致命傷には至らない。逆にその剣身を、カンディードの万力のような左手の指に、がっちりつかまれた。

同時にもう一方の手が、ジークの頭につかみかかってくる。ジークは左腕で咄嗟に頭をかばった。カンディードの右手が、籠手の上からジークの左腕をつかんだ。
「潰れろ」
カンディードが、その両手に渾身の力を込めた。剣と籠手が、みしりと軋んだ。

キリの左腕全体を氷が覆い、血を吸って赤く輝いていた。
「よーし……行くぞ」
緊迫した顔でキリが言う。アリスハートは愕然とした顔でいる。
キリの右手に小さな革袋があった。その栓を抜き、中身を左腕の氷にかけた。ランプの灯油をかっぱらってきたのだ。同じく盗んできた火打ち石を持ち、火を放った。
ぼっと音を立てて腕が燃え上がった。氷を溶かすためとはいえ、平然と自分の体に火をつけるキリに、アリスハートは言葉もない。
キリが歯を食いしばっていると、いきなり氷が弾けた。油がついた部分を振り払ったのだ。当然のことながら、そこら中に火の粉が飛んだ。
「うわっ、熱っちーっ!!」
キリがじたばたと飛び散った火を払う。腕の氷は、依然として食いついたままだ。

「くそっ、火でもダメだ。こうなったら斧でもかっぱらってくるか」
いったい斧などで何をするつもりか。アリスハートはそれを悟ってさあっと青ざめた。
「まままさか……」
「腕ごとぶった切ろう」
完全に思い詰めた様子でキリが言う。アリスハートは泣き顔になった。
「やめようよぉ。じっとしてなよぉ、あたしが狼男を捜してくるからぁ……」
「そのジークが危ないんだ」
キリは必死の顔で言った。
「奴ら、あの氷の人形でジークを襲う気だ。それだけは止めなきゃ、ノヴィアが……」
そのとき――いきなり声が飛んだ。
「私が、なあに？」
キリとアリスハートがぎょっと振り向くと、そこに少女がいた。
「人形野郎が、また現れやがったな！　ちょうど良い、今ぶっ壊してやる！」
おろおろするアリスハートをよそに身構えるキリを、少女は冷たく見つめた。
「なぜ、大人しくしていないの？」
「余計なお世話だ、くそったれ！　ノヴィアに化けてジークを襲うなんて、ノヴィアがど

んなに悲しむと思ってんだ。そんなひどいことを黙って見てろってのかよっ！」
「あなたには関係のない人たちじゃない」
「そうかもな。でも俺はあいつらの仲間になりたいんだよ」
「なんのために？　仲間の仇を討つため？　海へ行くため？」
「そうさ。仇を討って、故郷の海へ行って、仲間を持って、全部欲しくて悪いかよ！　全部叶う相手なんて、あいつらしかいないんだよっ！」
「彼女があなたに何をしたか覚えてないの」
「寝てる俺に、毛布かけてくれた」
きっぱりとキリが言う。何とも誇らしげだった。少女が沈黙した。キリは足を踏み出し、
「こんな俺に、優しくしてくれたんだ。俺だって何かしなきゃ気が済まねぇんだよ」
「じっとしていなさい」
「うるせぇっ！　今すぐお前をぶっ倒して……」
「仲間として言いますから」
少女が苛立ったような声を放つ。キリが、ぽかんとなって立ち止まった。アリスハート
が、あっと声を上げた。少女の胸元を飾る物が、ないことに気づいたのだ。
つかつかと少女が歩み寄った。そこでキリもようやく悟った。

「紋章が、ない……」
「私……優しくなんかありませんから」
ノヴィアは、そう言って、ぐいっとキリの左腕を引っぱった。あまりの痛みにキリが大きな悲鳴を上げるのをよそに、
「見えません」
屹然と、氷の棘を見つめた。
「こんな氷……私には、見えません」
見えないという幻視——無視の具現によって、にわかに氷に亀裂が走っていた。

「義賊と言ったな」
ジークが、ぼそりとした声音を零した。
「命を雑魚と呼ぶことが、お前たちの正義か」
今、その籠手が、凄まじい力でひしゃげている。だがそれだけだった。カンディードは、我が目を疑った。ジークの剣も、左腕も、一向に砕ける気配がないのだ。
「……馬鹿な。なんだ、この剣……貴様……」
カンディードが顔を真っ赤にして力を込めたとき——ごうごうと唸りを上げて辺りに飛

び交うものがあった。周囲で渦を巻く堕気に、倉庫全体が振動していた。怨みと慟哭の声であり、力の奔流であった。そしてその奔流が、ジークの身に猛然と流れ込み、荒れ狂うのだった。ジークが力を込めた。カンディードの巨体が押し返され、その目が畏怖に見開かれた。厳魔さえたやすく潰したその膂力が、一瞬にして無に帰すようだった。

「俺の手は……聖銀さえ砕く……」

歯を食いしばって押し戻そうとする。ジークは構わず踏み込み、言った。

「聖銀は、堕気にひたせばひたすほど硬くなる。お前に砕けるのは最も弱い聖銀だけだ」

恐慌がカンディードを襲った。その肩に、剣がどんどん潜り込んでゆくのだ。このままでは、なすすべもなく真っ二つにされるだけだった。

慌ててジークの左腕から右手を離した。その手で、剣を握るジークの右手首をつかむ。刃をつかんでいた左手も、同じくジークの右腕に当てた。

今やカンディードは、両手で、剣を振り下ろすジークの右腕を押しとどめていた。いや、握り潰そうとした。だが堕気の奔流がジークの肉体に満ちて、びくともしない。

「お……おのれ……」

剣はなおも止まらない。カンディードの隆々たる筋肉が風船のように膨らみきって太い血管を浮かばせた。満面に汗がしたたり——その両肩の聖印が、血を流し始めた。

ジークの、ひしゃげた籠手の隙間からも、ぽつぽつと血がしたたっている。
力と力が真っ向からせめぎ合い——カンディードが言葉にならぬ声を上げた。ついに、どっと片膝をついた。その巨体が、ジークの右腕一つで、完全に抑え込まれたのだ。
周囲では、魔兵が怪物どもを片端からなぎ倒している。
市長と兵が、わなわなと震える一方——闇の奥からひたとジークを見つめる者がいた。
アキレスである。積み重ねられた荷の狭間から、戦いの光景をじっと観察し、喜悦の表情を浮かべていた。聖印の力による剛力でさえ、ジークには全く通用しない。そのことに喜びと恐怖をともに抱きながら、ひたと勝機を窺っていた。
その黒い目が、倉庫の扉の方を向いた。ほとんど同時に、扉が大きく開かれ、
「ジーク様！　ご無事ですか！」
ノヴィアが現れ、叫ぶではないか。ジークはカンディードを抑え込んだまま、左手を振って陣を開かせている。ノヴィアは厳魔たちの間を走り、ジークのそばへやって来た。
「その紋章……見つかったのか」
「はい。この通り、無事に。この男の人は——？」
「物資の運搬に関わる者だ。捕らえて尋問する」
ジークが、カンディードに目を戻した。

刹那——爆発的な瘴気がノヴィアの体から発された。ジークは瞠目し、咄嗟に左腕をかざした。その腕に、氷の棘がびっしり食いつき、さしものジークも息をのんだ。
目の前のノヴィアの顔や体から、氷の怪物がきしきし軋み音を立てて姿を現した。
ジークの左腕に、雷花が咲き乱れた。それが氷の浸食を押しとどめる。稲妻と氷が真っ向からせめぎ合ったその隙に、カンディードが唸り声を上げてジークの右腕を押し返した。
二つの力に同時に対処したため、ジークの力が分散したのだ。
カンディードは左手でジークの腕を握ったまま、右手でジークの顔面をつかんだ。
「潰す!!」
カンディードが、咆吼を上げた。
「殺った——!!」
アキレスが、さらに〈蛭氷〉を放ってジークを串刺しにしようと叫んだとき。
「——矢が、見えます!」
果敢な声とともに、どこからともなく飛来した金の矢が、アキレスの肩を貫いていた。
「な……なに……」
アキレスがよろめき、そして——
「ぶっ壊れろ、人形野郎っ!」

キリが、ジークのもとへと宙を駆け、氷人形の頭を、粉々に蹴り砕いたのだった。
宙を踏む力——キリの聖印の聖性を受けて、氷の魔獣の力が弱まる。ジークの左腕が氷を振り払い——自由を取り戻した拳を、凄まじい勢いでカンディードの脇腹に叩き込んだ。
カンディードの巨体が、一瞬、宙に浮かんだ。それほどの力だった。
カンディードの手が顔から離れ、ジークの凄気のこもった目が現れた。
ジークは、もう一方の手を振り払ってそちらも自由を取り戻した。一瞬だった。剣閃が下へ、横へ迅った。カンディードが斬り伏せられ、氷人形の胴体が真横に両断された。
ずん。カンディードが絶息して倒れた。氷人形が粉々に砕ける。
一方——肩に矢を受け、よろめくアキレスの前にノヴィアが立ち、
「急所は外しています。動かないで下さい。今、傷の手当てをします」
「ふ……ふふ、お優しい……我が主も、その優しさゆえにあなたを慕うのでしょうか」
アキレスが嗤った。ノヴィアは一瞬、悲しみに顔を曇らせたが、
「レオニスに伝えて下さい。ジーク様を狙うのであれば、私があなたと戦いますと」
すぐに屹然となって言い放っていた。途端——アキレスの体が半透明になり、
「では……主を守るため、その目を引き裂かせて頂きますよ」
突然その胸から氷の刃が生えた。アキレス本人ではなく、身代わりの氷人形だったのだ。

ノヴィアの顔へ刃が迫り――ふいに逞しい手がノヴィアの肩をつかみ、後ろへ倒した。
氷の刃が空を切り、代わりにジークの剣が、氷人形の首や胴を存分に斬り飛ばした。
そのときには、背から倒れ込むノヴィアを、キリが素早く体全体で受け止めている。
アキレスの顔をした氷人形の首が転がり、
「やはり……身代わりを通して〈蛭氷〉を使役したのでは力が鈍りますね……」
笑う首の前に、ジークが立った。その腕の氷が剝がれ落ちてゆく。ジークの身にやどる堕気が、氷の堕気を上回り、弾いているのだ。
「どこまでも素晴らしい……あなたのような力……この手につかんでみたいものです」
「なぜ力に執着する」
アキレスは答えず、にたりと笑った。その目がちらりとジークの背後を見た。ジークが振り返ると、カンディードの死体の血を、氷の怪物が吸っているところだった。カンディードの体は干涸らび、氷が消えた。アキレスは満足そうにジークを見上げた。
「あなたの血も、ああして吸ってあげますよ……そして、その力を必ずや我が物に……」
「――お前に背負える力ではない」
言いざま、無造作に氷の首を両断した。そのジークへ、市長が震えながら叫んだ。
「殺すなら殺せ！　必ずや他の者が、聖法庁が隠匿した聖母の力を手に入れてみせる！」

「聖母の力など、勝手な伝説だ」
ジークが言った。市長の顔が引きつった。
「な……何を……。そうやって貴様ら聖法庁が、聖母の記録を隠し……」
「そんな記録は存在しないだけだ。聖母には何の力もなかったことを彼らが知っている」
市長は、愕然となって魔兵たちを見た。ずらりと並ぶ厳魔の群を。
「ま、まさか……こ、これらが……聖母に従って、街を作った男たち……」
「聖母に洪水を宥める力などない。ただ信じただけだ。街が出来れば貧しさゆえの争いをなくせると。彼らが聖母を信じ、街を作った。それが、お前が欲しがる力の正体だ」
市長が力なく膝をついた。ごうごうと魔兵たちが咆吼を上げ、次々に形を失っていった。

「聖母が……何の力も持たない人だった……」
ノヴィアも呆然と呟いていた。それなのに〈銀の乙女〉が聖母の尊称を認めるとは——
修道院で見た聖母の肖像画が思い浮かんだ。罪人であったという女性。何の力も持たぬまま、絶望的な貧困と戦うことを決意した彼女に、いったい人々は何を見たのだろう。
きっとそれこそ想像を絶する力だったのではないか。何の権威も後ろ盾もないまま、希望に向かって孤独に歩む力だ。その力を失わぬためにこそ、聖母は無名のまま、どんな栄

誉も持とうとしなかったのではないか。ノヴィアには到底、計り知れない強さだった。
「だから……紋章ももらわなかったんだ。だから〈銀の乙女〉も、彼女を聖母に……」
「お前も、紋章なんて捨てちまうか？」
キリがひょいとノヴィアの顔を覗き込む。
「そ、それとこれとは違います！」
慌てるノヴィアの胸に、キリが、手にしたものを押しつけた。
「ほらよ。大事なものなんだろ」
ノヴィアは紋章を受け取り、傷だらけになったキリの左腕を見つめた。
「ごめんなさい……私のために……」
「違うな。俺が好きでやったことさ」
ノヴィアは言葉につまった。聖母に感じたのと同じようなものを、今、目の前のキリに感じていた。思わず抱きしめたくなるほどの気持ちが込み上げてくる。
「母さんからもらったもの……苦しいとか怒られるとか言うなよ。母さん、可哀想だろ」
キリは言った。ノヴィアはうなずいた。拍子に涙が零れた。
「ありがとう……」
キリは笑って、両手を頭の後ろで組んだ。

「良いって。これで、仲間にしてもらえるんだ。安いもんさ」
ノヴィアも泣きながら微笑んだ。そのときである。キリの脇の辺りから、ぼろぼろと何かが落ちた。見れば、ノヴィアの髪留めや服の飾りなどである。
旅で失いがちなもの――もしやと思いつつ黙っていたものだった。
「やべっ。蛭野郎、服に穴空けやがったな」
「やべっ……ですか」
ノヴィアがうつむき、暗い声を放った。キリがぎょっとなって後ずさる。
「……もう、盗まないんじゃなかったんですか」
「ま、まあ金は盗まないいって言ったけど……。あ、いや、そんな氷人形みたいな顔すんなよ。ほら、聖母だって人を信じることで……」
「ええ、仲間ですものね。気にしてません」
ノヴィアがぱっと顔を上げて、明るい声を放った。
「そ、そうそう。俺たち仲間なんだから……」
「――なんて言うと思ったら大間違いです」
刹那、黄金色の輝きが宙を飛来し、倉庫の壁に突き刺さった。
「まだ揉めてるのか」

ジークが眉をひそめて、壁に刺さった矢を見た。
「うーん、仲直りしたんだけどねぇ……」
また矢が飛んだ。その数がどんどん増えてゆく。本気の矢ではなく脅して動きを止めるためだが、キリが逃げ回るため流れ矢となり、市長も兵も逃げ惑う始末だった。
「お、お前、なんてことすんだっ！　仲間に矢を飛ばす奴がいるかよっ！」
「何を言うの！　私の姿をした人形、平気で蹴って壊したくせに！」
「ジークなんか真っ二つにしたんだぞ！」
「お黙りなさい！　悔い改めて、私の言うことを聞くなら許してあげます！」
「誰が番犬女の言うことなんか聞くか！　説教好きの氷女っ！　泣き虫っ！」
「な、なんですってっ！　図々しい泥棒猫っ！　わがままっ！　嘘つきっ！」
アリスハートが、がっくりとなり、
「――ねぇちょっとぉ。あの二人、止めてよぉ」
「放っておけ」
ジークは全く気にもしない。魔獣が消えた倉庫に、二人の声は騒然と響き続けた。

6

その日――聖地シャイオンの街の広場に連行された者たちの姿に、トールは総毛立つほどの恐怖と後悔を覚えていた。

みな、自分がこの国から逃がそうとした者たち――処刑された罪人の類縁である。その中でも特に罪が重いとされた数名が、今、断頭台の前に並ばされていた。

捕まったのではない。帰って来てしまったのだ。罰せられることが分かっていながら、一度は逃げ出したこの聖地に再び舞い戻って来たのだった。

「なぜ……。どうして逃げずに……」

呆然とした声を上げるトールを、御輿に乗ったレオニスが面白そうに見つめた。

「簡単なことさ。どこの土地も気に入らなかったんだろう。それで彼らのうち一部が犠牲になって罰される代わりに、残りの者をここに再び住まわせてもらう気になったのさ。この聖地ほど美しく豊かな所は、他にないという証拠だよ」

レオニスは自信に溢れ、誇らしげでいる。トールは危うく叫び出しそうになった。違う。彼らが、それほどまでにこの聖地に愛着を持ってくれているということだ。これは彼らなりの抵抗だ。愛する土地に、突如として数々の罪と罰を吹き荒れさせたレオニスに対する、

無言の弾劾なのだ。その証拠に、罪人とされた者たちは揃って毅然としているではないか。
「やれ。罰せられるべき者たちよ。この聖地で命を終えることを光栄に思うがいい」
レオニスの容赦のない声が飛んだ。
罪人たちは一切の抵抗をしなかった。粛々と断頭台の餌食となり、その血で地獄の彫刻を赤く飾った。それこそが彼らのレオニスに対する、命をかけた非難となるように。
そしてトールは、見知った男が断頭台にかけられるのを見た。「追放」という言葉を残してトールを愕然とさせた、あの年かさの男だった。その男が、ちらりとトールを見た。
その目は限りなく静かでいながら、凄まじいまでの意志を秘めていた。
（我々はこうして死ぬ。お前は、そこで影のように黙って立っているだけか――）
男の目が、無言でそう言い放った気がした。
何も答えられないトールの目の前で、その男の首が斬られた。
トールは、自分が今まさに、気が狂いそうなほどの煩悶に叩き込まれたことを知った。
逃れるすべはただ一つ。自分の思いを口に出すのだ。レオニスの前で。そして忠実な影であることを、やめるのだ。たとえそのせいでレオニスが自分を殺す気になろうとも。
その結論にトールが達したのは、処刑から一昼夜経ってからのことだ。悩みに悩んだ末

に、トールは自然と決意が固まるのを覚えた。死のう。従容として死に赴いたあの男たちのように。レオニスにありったけの気持ちをぶつけた上で、黙って首を斬られよう。

ただし、その前にやることがあった。

レティーシャ――あの女を斬るのだ。トールは明確な殺意をもって城の地下牢へ降りていった。だがレティーシャは不在で、獄吏もどこへ行ったか分からぬと言う。

城の中を捜しても見つからない。胸騒ぎがした。嫌な予感がひたひたと押し寄せてくる。

片っ端から城の者に聞いて回るうち、逆にレオニスの付き人の一人に呼び止められた。

執務室でレオニスが待っているとのことだった。トールは嫌な予感に襲われながら、すぐに執務室に向かった。部屋に一歩入り、思わず息をのんだ。

頭蓋骨を撫でるレティーシャが、執務室の隅で、椅子に座って足を揺らしていた。

「やあ、トール。やっと来たね」

レオニスが微笑む。一方、レティーシャは、相変わらず頭蓋骨の方しか見ていない。

好都合だ――トールは殺意を秘めて歩み寄った。レオニスの目の前でこの女を斬り、思いを全て口にして、死のう。そう思ったとき、すうっと何かが足下を通り過ぎた。

黒いもの――何かの影だ。素早く目を走らせ、危うく呻きそうになった。

レティーシャの足下から音もなく影が伸び、トールの足下にまで達していたのだ。

何かがざわめく気配があった。レティーシャの影だ。いつでも、あの蠅の群を招き出す用意があるのだ。これでは刃を突きつけられたのと同じである。
トールが刃を現すのが先か――レティーシャが蠅を現すのが先か。
恐らく同時だろう。まず相討ちになる。それではレオニスに何も言えないまま死ぬことになる。トールは完全に機先を制されたことを悟った。今、斬ることは出来ない。
だがなぜ分かった？　まさか自分の殺意をいち早く読んだというのか。そんな馬鹿な。
レティーシャを斬る決意をしたのは、つい先ほどなのに――
「兄様の言う通りね……兄様。あの人、あたしのこと嫌いなんだね、兄様。でも、あたしには兄様がいるものね。兄様が未来を教えてくれるものね。ふー、兄様、ね」
レティーシャが、ぽそぽそと、ほとんど聞こえないような声で呟くのが聞こえた。
馬鹿な――思わず叫びそうになった。
確かに以前、そのことは聞かされている。レティーシャの兄は予言者で、白骨と化しても未来を教えてくれるのだと。それこそ信じがたいことだった。だが現実にレティーシャは事前にトールの襲撃を察知したのだ。そして先に仕掛けた――
立ちすくむトールに、レオニスが言った。
「ねえ、トール。僕は、喧嘩は嫌いだよ。貴重な人材同士、仲良くして欲しいんだ」

レオニスまでもがトールの殺意を知っていた。おそらくレティーシャが告げたのだ。
「私は、別に……」
やはり頭を垂れて従順さを示すしかない自分に、トールは目もくらむ怒りを覚えた。
駄目だ——このままでは決意が揺らぐ。今、ここで死ね。自分の思いをレオニスに告げ、その上で、レティーシャと相討ちになれ。そう悲壮な覚悟を抱いたとき——
「今日、お前たちを呼んだのは、ただ話したかったからさ。僕の決意について」
レオニスの言葉に、トールは、はっと顔を上げた。冷たいものが背筋を走った。
「決意……ですか」
「アキレスの報告が来てね。もう少しというところでノヴィアに邪魔されたそうだ。そして、ノヴィアは、こう言ったんだってさ。……彼女が、僕を止めると」
レオニスの目に、凄惨な光がよぎった。トールは一瞬、息がつまるほどの圧迫を覚えた。
「彼女はね……あの報告書を読んでいるんだ」
「報告書……ですか？」
おそるおそる息を吐きながらトールが聞き返す。
レオニスは笑って、引き出しから血染めの書状を取り出し、机の上に放った。
「最初の狩人……サガ・トルホーズが調査した、ノヴィアと僕の血縁の報告書だよ」

「まさか……」
「この報告書に用いられている紙は、諜報院でも使うものだ。重要書類を作成するときの特殊な紙さ。誰が触ったか、すぐに分かるんだ。ちょっと聖性を与えると――」
レオニスが書状を開き、掌で撫でた。すると、紙が聖性を受けて淡く輝くではないか。
トールは目をみはった。それまで何の変哲もなかった紙に、真っ黒い跡が点々と浮かび上がったのだ。手や指の跡だと、すぐに分かった。
「この黒い跡には、非常に細かな模様があるんだ。人それぞれ全く違う模様が。この模様を分類してゆくと、どの指で触ったかも分かるのさ。凄いだろう。そして、この模様は、工夫次第で、他の物からも採れるんだ。たとえばこの聖地にいたときに触った物とかね」
そう言ってレオニスは執務室の奥に目を向けた。トールも思わずそちらを見た。
いつも大陸の地図が広げられている円卓の上に、ありとあらゆる物が載っていた。コップや食器、ドアの取っ手、カーテン、窓ガラス、柱の飾り、ロウソク立て、ランプ――
「全部、ノヴィアが触った物だよ。ノヴィアのどの指にどんな模様があるか、僕はもう全部分かってるんだ。この書状についていたのと、同じ模様であることもね」
玩具でも自慢するような口調でレオニスは言った。トールは震えた。にわかに先の戦いで――城塞都市ルカで見た光景が、甦っていた。ジークとノヴィアが忘却の力によって操

られたとき、確かにノヴィアは何か書状のようなものを見ていた。
　トールはその様子を、アリスハートとともに遠巻きに眺めていたのだ。まさか――
「彼女は、僕との血縁を知っている。その上で僕を止めると言ってきたのさ。ジークの味方をすると。僕の敵になると。この聖地シャイオンと敵対すると」
　レオニスの声が上ずった。トールにはレオニスが泣き出すかに見えた。そして――
「だから僕は許可を出したんだ。殺して良いと」
　その言葉が響き渡り――トールは、あまりのことに、ひざまずきそうになった。
「許可を……出した……」
「そうだ。ノヴィアを串刺しにして良いという許可だ」
　その瞬間、トールは自分がレオニスと一緒に、奈落の淵に放り込まれたような気分に陥った。どこまでも落下する他なく、何かに激突して粉々に砕け散るまで、延々と深い闇に呑み込まれ続けるしかない――そういう奈落だった。
「返書を、早馬で届けさせた。数日のうちにアキレスのもとに届くだろう。やっと決意したんだ。苦しかった。でも今はひどく気分が良い。彼女の頭蓋骨を、この部屋に飾るつもりさ。彼女が永遠にここにいられるように。もう二度と僕の敵になんかならないように」
　トールは何とかレオニスの名を呼ぼうとした。だが声が出ない。何も喋れない。レオニ

スがそう望んでいるのが分かるからだ。レオニスは、トールに黙って話を聞くことを望んでいた。何も反論せず、全てを無言で肯定することを。いつもそうしていたように。
これほど近くにいるのに——もう声も届かぬほど遠く離れたところに、レオニスはいた。

ついにトールは一言としてその内心を語ることなく、執務室を去った。
それも、レオニスに去るよう言われたからである。何から何まで影法師のままだった。
レティーシャも同じように部屋を出た。レティーシャはトールを見もせず、
「流れて行くね、兄様。みんな一緒に綺麗になる未来。一番、綺麗な未来にね、兄様」
ぼそぼそ頭蓋骨に囁きかけながら、いつものように地下牢へと降りていった。
トールは、ぼんやりとそのレティーシャの背を見つめた。殺そう——単純にそう思った。
それが何の意味もないとしても。レオニスの心に近づこうとする者は皆殺しにしよう。
最初からそうすべきだったのだ。もうそれ以外に何も考えられない——心が殺戮の荒廃へと傾きかけたときである。トールはふと思った。一番、綺麗な未来——？
レティーシャが持つ、あの頭蓋骨が予言する未来には、幾つも選択肢があるのか？
あるいは、どうすれば望む未来を引き寄せられるのかを教えてくれるのか？
トールはじっと考え込んだ。みんな一緒に綺麗になる未来。一緒に——流れて行く。そ

れがあの頭蓋骨の力なのか？　幾つもある選択肢を、一つの流れにすることが？
　こんな訳の分からないことを考えていること自体、レティーシャの術中にはまっている証拠のような気がする。だが――もし術中にはまっているとして、どうすれば、そこから抜け出しているという証拠をつかめるのか？　すなわちレティーシャの望む未来から逃れているという証拠を？　それは、先の戦いで忘却の力に襲われたとき、自分が忘れているということを、どう思い出すか、ということに似ていた。
　トールは城の自室に戻り、その方法を考えた。そうするうちに、だんだんと決意が甦るのを覚えた。死をもって忠言すること――ただしレオニスに思いを告げるのではない。どんな忠言も、今のレオニスに届くとは思えなかった。またトールが死んだところで、アキレスが嬉々としてノヴィアを殺すだけだ。レティーシャも同じように喜ぶに違いない。それでは意味がなかった。何とかしてレオニスにもう一度近づき、心を取り戻させたかった。だが、どうすれば良いのか。レオニスは既に返書を出してしまったというのに。
　返書――そう思い、はっとなった。数日のうちに届く。レオニスはそう言った。
（まだ間に合う）
　返書がアキレスに届く前に握り潰すのだ。にわかにその思いが湧き起こった。だがどうやって？　レオニスは密書をやり取りする際、巧妙に他の報告書に紛れさせ、自分との関

係が分からないようにさせている。どの経路で届けるかも、そのつど変更していた。アキレスの潜伏先さえ刻々と変化しているのだ。いったいどこへ返書を送ったか、レオニスに訊いても教えてはくれぬだろう。誰もアキレスの居場所を知る者はいない――

（ドラクロワ！）

突然その名が浮かんだ。アキレスはドラクロワの手勢と共闘していた。ドラクロワならばアキレスの居場所を――密書のやり取りの全貌さえ把握しているに違いない。

同時に、書状のことを思い出していた。サガが記した血染めの書状ではない。ドラクロワが、ト、ト、ト、トールの派遣を要請していると、いう書状だった。

トールは、今度こそ本当に、己の決意が固まるのを悟った。

夜半――トールは再び、レオニスの執務室を訪れていた。音も気配もなく部屋を横切り、レオニスの机を調べる。すぐに書状の束が見つかった。さすがに暗闇では区別が付かない。用心しながらロウソクに火を灯す。橙色の小さな光が周囲を照らした。あった。数通の書状の中身を素早く確認し、束ねて懐に入れた。そうして、火を消そうとしたとき――

頭蓋骨を抱いた女が、部屋の隅にいるのが、視界の片端に映っていた。

そのあまりの不気味さに、思わず、ぞくっと鳥肌が立った。

まさか、と思った。影法師と渾名される自分に匹敵するほどの、気配のなさだ。
「馬鹿は死んじゃえ」
レティーシャの碧の目が、ほとんど初めて、真っ直ぐトールを見ていた。
トールが火のついたロウソクをレティーシャ目掛けて投げ放った。同時にもう一方の手を、さっと翻している。そのときにはレティーシャの口が大きく開かれ、
「ぐるるるらああごうえあえいがえいあがえあげあげあげあげあえあ♪」
その凄まじい奇声とともに、耳をつんざかんばかりの蝿の羽音が響き渡っていた。
ロウソクが一瞬にして、黒煙のごとき蝿の群にのまれた。
ざぁっと水でもまき散らすような音がした。
トールが、その手に出現させた鉄鞭で、蝿の群をなぎ払ったのだ。
聖性と堕気を混ぜ合わせて作る、剃刀のごとき鋭さの鞭である。それで、蝿の群に隠れたレティーシャを両断するつもりだったが——手応えはなかった。
トールは素早く後方に跳び退きながら鞭を舞わせた。だがどれほど刃風が乱れ交おうと、蝿の群を鞭で止められるわけがない。一瞬にして全身にたかられるかに見えたとき——
いきなりトールの周囲で爆発が起こり、泥水のごとき蝿の群を吹き飛ばしていた。
トールが、鞭の柄を、もう一方の手で叩き、聖性と堕気を分解したのだ。その結果、鞭

が細かな鋼の針と化し、四方八方に飛び散ったのである。炸裂と呼ぶにふさわしい威力であり、無差別さだった。周囲の椅子や机や窓ガラスが、粉々になっていた。
トールはそのまま砕かれた窓から飛び出し、テラスに立った。
部屋の中から、亡霊のごとき姿のレティーシャが、碧の目にどんよりとした怒りを込めて、トールを見ていた。ふとトールは、その怒りの理由を察した。
レティーシャの左頬が、すっぱりと切り裂かれ、血がしたたっているのだ。
おそらく最初の一撃が、その頬をかすめたのだろう。
ぶんぶん唸る蝿の羽音さえ、怒りに満ちているようだった。
だが、すぐにはその蝿の濁流を放とうとはしない。先ほどの鉄鞭の炸裂を警戒しているのだろう。かと思うと、蝿の羽音が層倍の騒々しさになった。これまで以上の数の蝿を招き出し、鉄鞭の炸裂でさえしのげぬほどの大群で攻めてくるつもりなのだ。
ならばトールのすべきことは一つだった。手を翻して鞭を現し、ぴたりと構えた。
蝿の群に自ら飛び込み、レティーシャに致命的な一撃を与えるのだ。同時に自分の肉体も食い尽くされることは百も承知だった。完全な相討ち狙いである。レティーシャもそれを悟ったのか、微動だにしないでいる。ふと――
「あなたが、ここに現れたというだけで、十分です」

トールの頬に、あるかなしかの笑みが浮かんでいた。
「私が、あなたにとっての綺麗な未来から逃れたから……止めに来たのでしょう？」
レティーシャの目が大きく見開かれた。図星だったのだろう。トールは満足した。ここで相討ちになっても良かったが、その前にすべきことがあった。
レティーシャの手の中で、かたかたと頭蓋骨が鳴った。
「ふぅん、そぉ、兄様。あの人、逃げる気なんだ。捕まえないと……ね、レオニス様」
今度は、トールが目をみはる番だった。
蠅の群の一角が晴れたかと思うと、そこに、なんと車椅子に座るレオニスがいたのだ。
「……トール、何をしてるんだい？　僕の影であるお前が……どういうつもりなの？」
すうっと冷たい笑みを浮かべて、レオニスが言った。
だがトールは、そう言われても、意外なほど傷ついていない自分を感じていた。
「喧嘩ですよ、レオニス様」
そんな言葉が、自然と口をついて出た。レオニスの顔から笑みが消えた。
「つまらない冗談だな、トール。今、衛兵が来る。またしばらく牢に入っていろ」
兵が来たら厄介だった。捕まるという意味ではなく、自分と同じ聖地シャイオンの人間を殺すことになってしまうからだ。それだけは、なるべくなら避けたかった。

そういう同胞意識が自分にあることもまた意外に思いつつ、すっと退いた。
にわかに蠅の群が動いた。あっという間に、黒雲のごとき蠅の群に囲まれた。
ここで鞭を炸裂させればレオニスに危害が及ぶ――それを読んだ上での動きであった。
「捕まえたよ、レオニス様」
レティーシャが、うっすらと笑う。だがトールは構わず、テラスの柵に飛び乗った。
「生まれて初めての喧嘩をしているんです。新参者が、余計な邪魔をしないで下さい」
かたかたと頭蓋骨が鳴った。レティーシャの目に驚きと怒りの色が浮かんだ。
「影が勝手に動くなっ！」
レオニスが怒号を放った。トールが微笑した。レオニスが初めて見る、トールの優しさに満ちた微笑だった。レオニスが息をのんだとき、トールが跳躍した。
「トール……」
弱々しいレオニスの声を、凄まじい蠅の羽音がかき消した。一瞬後、テラスのすぐ下で、炸裂が起こった。テラスの柵がずたずたになった。だがレオニスには一片として届いていない。レオニスに危険が及ばぬよう、トールは自ら蠅の群に飛び込んだのだ。
レティーシャが、裸足のまま、ぺたぺたと足音を立てて走った。テラスから身を乗り出し、辺りを見回す。蠅の群がそこら中を舞った。だがやがて、ぽそっと呟いた。

「……行っちゃった。ね……兄様」

レオニスは、ぶるぶる震えている。ふいに両手で車椅子の取っ手をつかんだかと思うと、無理やり立ち上がろうとした。レティーシャが振り返り、きょとんと目を見開いた。

レオニスが身を起こしかけ、そのまま力なく倒れ込んだのだ。冷たい床に伏したまま、ぐったりと動かなくなる。レティーシャが駆け寄り、そっとレオニスの頬に触れた。すぐに、ぱっとその手を離している。ぺたっとレオニスの傍らに座りこみ、呟いた。

「……熱い」

間もなく、衛兵や付き人たちが大挙してやって来て、レオニスを慌てて介抱した。レオニスは意識を失っていた。その全身が、熱病に罹ったように熱くなっていた。

馬を駆りながら、トールは何とも爽快な気分でいた。

やっと答えが見つかったのだと思った。なんと素晴らしい大喧嘩だろう。レオニスが自分を影と呼んで罵ったことさえ嬉しくて仕方がない。後は自分のすべきことをするだけだった。遠く離れてしまったレオニスの心を、もう一度呼び戻し、守るために――

とてつもない解放感とともに、トールは一路、ネルヴァ河を目指した。

第三章　カスバルの手紙

1

大河を下る客船の大部屋に、ノヴィアとキリがいた。向かい合って座る二人を、横からアリスハートが覗き込んでいる。ノヴィアは何やら紙に書きつけると、こう訊いた。

「次の問題。これは何と読みますか、キリ」

キリは唸った。鮮やかな青い目を文字に向け、難しい顔で腕組みする。ちらりと、アリスハートを見た。アリスハートが口をすぼめて読み方を示唆すると、

「ど……ど・う・と・く……道徳！」

キリはたちまち笑顔になって字を読み取った。じろっ。ノヴィアがアリスハートを睨む。

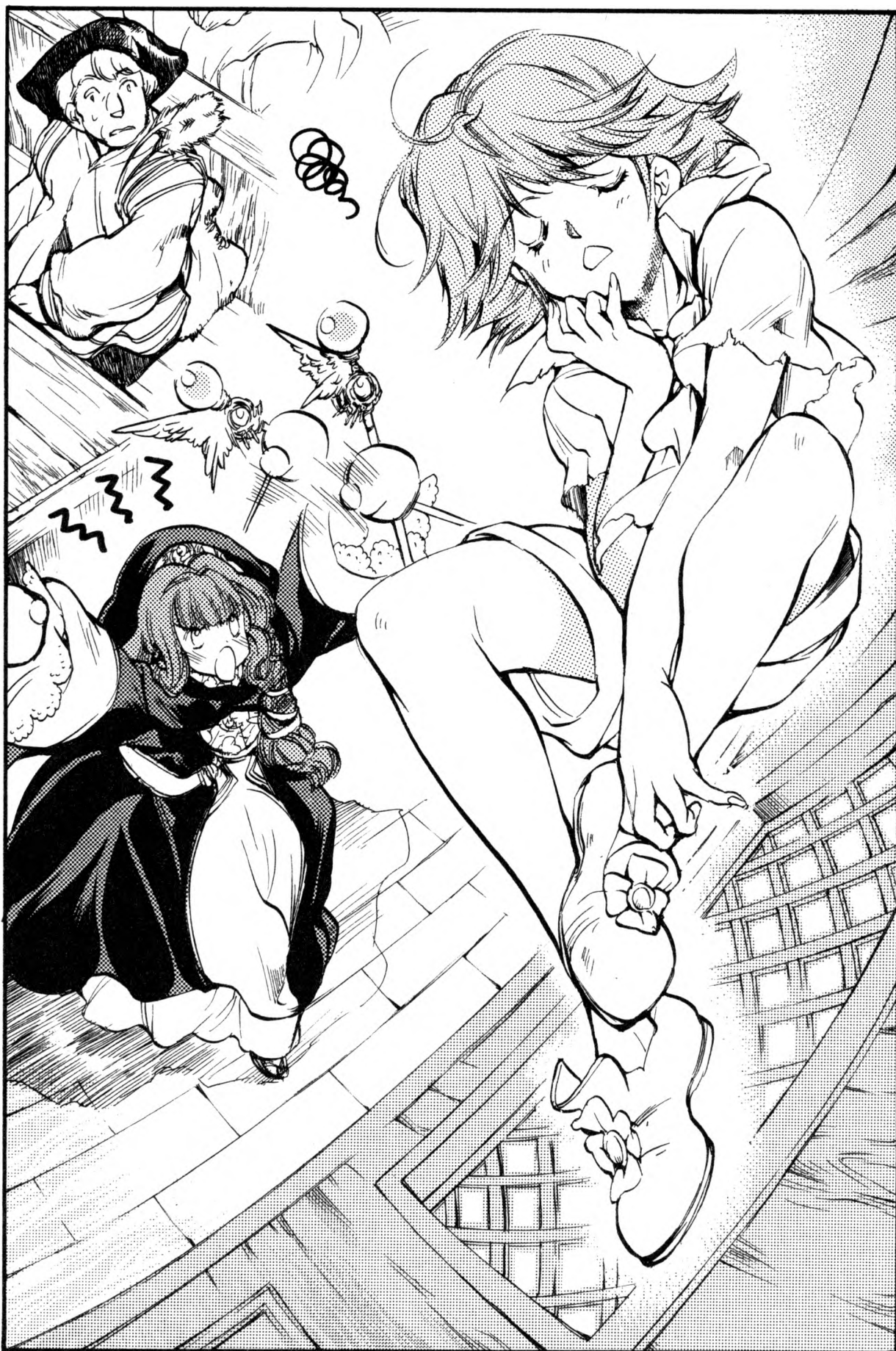
「ずるはダメよ、アリスハート。答えられなかったので書取り十回ですからね、キリ」

アリスハートが、いやぁ、つい……と頭をかく。キリは、むっと唇を尖らせている。

「さ、次はこれです、キリ。何と読みますか」

「ちょっと、たんま。ノヴィア。休憩しよ、休憩」
「ではこれを読んだら休憩にします」
「み、み……み・ん……あー分からねぇ」
「民衆です。これは書取り二十回」
キリがぐったりとなってテーブルに突っ伏す。その間にもノヴィアはさらさらと綺麗な字で幾つもの言葉を書き並べ、キリに差し出していた。
「はい、明日までの宿題です」
キリにはすぐに読めないが、「掟」「道徳」「民衆」「加護」などと難しげな言葉が並んでいる。どれも聖法庁が定める、大陸標準語であった。
「うわー、沢山あるわねぇ」
ずらりと並んだ言葉の数にアリスハートが同情した。キリは情けなさそうな顔になり、
「お前が選ぶ言葉は、みんな堅っ苦しいんだよぉ。こんなんじゃ覚えられねぇよ。なぁ、もっと楽しいのにしようぜ。ご飯とか宝石とかお金とか……」
「盗みとかですか」
「そうそう、そういうの……」
と返しかけ、ノヴィアに睨まれて口ごもる。

「あなたが字を覚えたいと言ったんですから我慢なさい。ジーク様も、旅に読み書きは必要だとおっしゃってたでしょう」
そこへ当のジークが大部屋に現れた。肩に担いだ銀色のシャベルに、水夫や他の客たちが呆気に取られる。先の戦いで破損した左腕の籠手も、既に腕の良い鍛冶屋を探して修繕させていた。凄まじい力で握り潰された鋼を鍛え直すのに、丸一日を要した。
「じきに次の街に着く。準備をしておけ」
そう言いつつ、ジークはテーブルに歩み寄り、
「ほう……上達したな」
キリが書いた、ぎざぎざの字を見て言った。キリがにんまりと笑顔になり、
「もうご褒美もらえる、ジーク？」
べたっとジークに抱きつく。その猫なで声と図々しい行為にノヴィアが眉を逆立てた。
「まだまだ、全然ダメです！」
宝杖を振るってキリをジークから追い払う。キリはひょいと宙を跳んでかわし、
「ちぇっ、けちっ」
何もない空間に立ってすねてみせ、他の客たちが唖然となる。ノヴィアが言った。
「あなたに字を教えているのは私です。ご褒美をあげるかどうかは、私が判断します」

ご褒美とは、次から次へと興味が移るキリに大人しく学ばせるため、ジークが施した方策だった。ご褒美がもらえるとなるや、現金なキリの集中力は確実に増した。
キリに読み書きを教えることは、ジークの籠手を修繕している間に決まったことである。先の戦いでキリに紋章を取り戻してもらった手前、ノヴィアはそれを渋々と承知した。
だがノヴィアにしてみれば何とも世話が焼けた。ジークの命令でなければとっくにこの傍若無人な生徒を放り出している。最初の出会いからだいぶ経ち、ノヴィアも今ではだいぶキリを理解し受け入れてもいるが、それでもキリのやることなすこと頭にくる。
そもそもジークがキリを気にかけること自体、大変面白くない。たやすく人を助けるような甘いジークではなく、何か理由があるのだろうが、それが何か、いまだに分からない。
一方でキリは日増しにジークに親しくし、それが自然に見えるのがなおさらノヴィアの癇に障った。ノヴィアには自然体でジークに甘えるような真似などしたことがないし、出来るとも思えないのだ。つい羨ましささえ感じてしまい、それがまた非常に頭にくる。
「なぁ、ノヴィア。せめてご褒美が何なのかくらい教えてよ」
キリが宙から降り、今度はノヴィアに甘えた。その節操のなさに思わず厳しく言った。
「まだダメです。場合によっては与えられるどころか失うかもしれないんですからね」
「……どういうことだよ、それ」

キリは驚き、不安な顔になった。
「〈銀の乙女〉の教えです。手に入れるためには失う覚悟がなければなりません」
するとキリは、ふんと鼻を鳴らし、皮肉そうに——少し寂しく笑った。
「これ以上、俺が何を失うってんだよ」
棘をふくんだ返事に、今度はノヴィアが口ごもった。孤児として聖堂に拾われ、盗むことでしか生きていけず、仲間も亡くした。もう失う物など何もない。そういう棘だった。
「そ……そんな態度では何も得られません！」
「沢山持ってる奴が、偉そうに言うなよっ！」
ノヴィアがむきになり、キリが突き刺すように返す。アリスハートが慌てて宥め、
「まぁまぁ二人とも落ち着いて……」
そこへジークがすっと間に入った。
「失う物などないと思えば、何もかも失う」
ノヴィアとキリが、ぴたりと黙った。
「お前は、この旅に同行するために、盗みを捨てた」
キリがおずおずとうなずく。故郷と信じる海へ行くため、仕方なくそうしたのだが——
「手に入れるために捨てるべきものと、捨ててはならないものとを一緒にするな」

キリばかりかノヴィアまで、ちょっとひやりとするような、厳しいジークの声音だった。

そもそもキリが容易に盗むのも、何も持っていないという意識が強いからだ。

だがそうではない。命を持ち、心を持ち、五体を持ち、今は共に旅する者までいる。失う物などないと信じれば、それらをも失う道に入り込むことになる。

「お前は多くのものを持ち、これからも多くを手に入れる。今回の褒美もその一つだ」

キリは、今度はしっかりとうなずいてみせた。ノヴィアは、じっとジークを見ていた。

「やはりジークは、この街で降りるようですね……」

アキレスが呟いた。港へ入る客船を、遠間から覗き込んでいる。眼前に透明な氷を出現させ、それで光を歪ませ、彼方にある物を望遠鏡のように映し出しているのだ。

河岸に広がる街の一角――倉庫の屋根の上だった。そこに、もう一人の男がいた。

「便利なもんだ。武器だけじゃなく、このような玩具にもなるか」

アキレスの氷を横から覗いて笑う。異常なほどの長身だった。分厚い筋肉をしているが、その背丈のせいでむしろ細く見える。水夫が好む薄手の外套を羽織っているが、この男の体に合わせて仕立てているため、とんでもなく袖が長い。

ドラクロワに従う〈運びゆく者〉の一人――名をセルソロスといった。

「ほう……こちらから見ると、お前の姿が、えらく遠くに見えるぞ」
氷の向こう側に回って、にたりと笑う。その幾つも傷跡を帯びた殺伐とした顔が、氷を通して、アキレスの目の前で何倍もの大きさとなる。
この男、聞くところでは血の気の多さは人一倍で、強盗、誘拐、拷問、何でも嬉々としてこなすという。そんな男の顔を拡大しても、あまり気持ちの良いものではない。
だがアキレスにとっては貴重な餌である。この男がいかなる力をドラクロワから授かっているにせよ、このまま血を吸ってしまえば、自分の力にしてしまえるのだ……
そのアキレスの殺気——というより食欲に等しい欲求を察したのか、
「この氷は、血を吸うのだったな」
呟くや、セルソロスの姿が、ふっと消えた。
まるで幻のような消失の仕方である。アキレスが目をみはった。
「ふむ、やはり、こちらからの方が、見ていて楽しいな」
気づけばなんと背後にしゃがみ込み、アキレスの肩越しに、氷を覗き込んでいるではないか。一瞬の早業だった。背後から喉をかき切られても、果たして気づけたかどうか——
アキレスはにんまりと微笑んだ。この男もまた、実に素晴らしい餌なのだ。
「どうするんだ。ここであいつらを殺るか？　俺は今からでも良いぞ」

セルソロスが、遠方のジークを眺めて言う。
「この街で罠を仕掛けるのは難しいでしょう。この街は、誰の言うことも聞かず、協力もしないことで有名ですからね。まあ、だからこそレオニス様もドラクロワも、この街を利用してきたわけですが……。まだ、例の物を運び出すのに手間取っているのですか？」
「決まった時間にしか書庫が開かないからな。ぼやぼやしてると大事なものを突き止められてしまうぞ。さっさと殺してしまえばいい。ドラクロワ様もそれをお望みだ」
「簡単には殺せませんよ。カンディードの怪力でさえ全く歯が立たなかったのです」
「カンディードなら、俺でも殺れる」
　セルソロスが物騒な笑みを浮かべた。おそらく本当だろうとアキレスは思った。
「期待していますよ。ふむ……しかし不思議ですね」
「何がだ……？」
「あのセラヴィで保護した荷を、なぜジークがいつまでも連れ歩いているのか……」
　アキレスが爪の無い指をひるがえすと、氷がきしきし軋んで角度を変えた。遠くでジークの傍らを走り回る、青い目の少女の姿が大きく映し出された。
「あの子供も戦力になると判断したのでしょうか……。それとも……」
　思案げなアキレスの横で、セルソロスがつまらなそうに肩をすくめた。

「どうせ運びきれなかった荷だ。このガキどもも一緒に始末して良いんだろう？」
「こちらの〈銀の乙女〉の少女については、殺す許可を待っているところでしてね」
「殺してから許可をもらえば良いだろうが」
「私と気が合いますねぇ、あなた。ですが……今はまだよしておくとしましょう」
「なら、ジークとやらが一人になったところを殺ればいいんだな？」
「ええ……。私が、ジークから、従士を引き離します」
「どうやって？」
アキレスは、青い目の少女――キリに、すっとその爪の無い指を向け、
「最も弱い部分から攻めましょう。本当に彼女がジークの戦力なのか試すためにもね」
それから、その指を、もう一方の少女――ノヴィアに向けて、薄く笑った。
「ノヴィア様を串刺しにするのは、それからでも遅くはありませんからね……」
「レオニス様、熱いね、兄様。なんで熱いの、兄様？　ふぅん……そうなの、兄様」
レティーシャが、部屋の隅にうずくまって、ぼそぼそと呟いていた。
聖地シャイオンの城の一角――レオニスの寝室である。
突然の発熱に見舞われ、ベッドに横たわるレオニスを、大勢の付き人やら医師やらが入

れ替わり立ち替わり看病していた。本来なら一国の領主の寝室に、じとっとレティーシャが居座れる道理はないのだが、誰も彼女を追い払える人間がいないのである。
というより、まともに会話が成り立つ相手ではなかった。廷臣たちが、犬か猫のように追い払っても、それこそ犬か猫のように、いつの間にか再び同じ場所に座っているのだ。レティーシャなりにレオニスを心配してのことだろうと、仕方なく廷臣たちも放置することに決めていた。看病を邪魔するわけでもなく単に座ってるだけだし、何しろ、異変に際してレオニスを助けたのが、レティーシャということになっていたのだ。
異変——執務室に賊が侵入したのだと、レオニスは高熱で朦朧となりながら城の者に言い含めていた。どこかの隣国が、聖地シャイオンの富を狙って放った間者だと。決してトールがレオニスの書類を盗んで逃走したわけではないのだ。
トールはその賊を追って出て行った——レオニスは、そう告げた。城の者が無断で出奔すれば死罪に当たる。そのような罪をトールに負わせせないためだ。
だがなぜ叛逆とも言える行為をしでかしたトールを庇うのか。熱にうなされるレオニスの真意がどのようなものか、誰にも——レオニス自身にも分かりはしなかった。
「……トール……苦しいんだ……トール」
ときおり苦悶に満ちた声がレオニスの口から零れ、かと思うと、

「ノヴィア……」

ふいに安らいだ表情になり、深い眠りに落ちる。目覚めて食事をすることも僅かで、後はひたすら熱に脅かされるという状態が、何日も続いた。

医師によればこれは疫病や毒物による熱ではなかった。緊張と疲労が積もりに積もったせいで、ついに体が悲鳴を上げたのだろう——そういう医師の報告に、

「おいたわしい……たった一人で、どれだけの重責を背負われていたのか……」

急に、レオニスが生身の人間であることを思い出したような廷臣たちの言いざまだった。

とりあえずは廷臣たちが執政を司り、重要な決めごとはレオニスの病状回復まで先送りとなった。これに、ほっと胸をなで下ろしたのが刑吏たちである。このままでは常識を外れた数の死罪宣告が下されかねなかったのだ。

領主の病状とその回復は、恩赦のきっかけにもなる。罪人たち、その家族や友人たちは、表立っては口に出来ぬものの、ひそかな安心と期待を抱いた。

そうした領民の思いを察しているのかどうか——レオニスは熱にうなされ続け、多くの断片的な夢を見た。無数の顔が現れては、その全てが血に染まった。どこかに正しいもの、より良いもの、本当に美しいものがないかと探しては泥沼にはまる。そういう夢だった。

そのレオニスを、部屋の隅からレティーシャがじっと見つめていた。

レティーシャが、破壊された執務室の書類の大半を、蠅に食い尽くさせたことは誰も知らない。ドラクロワとの同盟を示唆するものを付き人たちが見つける前に、隠滅するようにとレオニスが指示したのだ。熱に脅かされながらの咄嗟の対処だった。

レティーシャは頭蓋骨を抱きつつ、しきりともう一方の手を顔に当てていた。

ほっぺたについた傷——トールの鞭に切られた箇所に、付き人の一人が薬布を貼ってくれたのだ。その小さな布の上から、傷を指で押し揉みつつ、

「平気だよ、兄様。こんなのまだ全然、綺麗じゃないよ、兄様。うん、そぉ、ちっとも平気、兄様。あの人の方が痛いものね、兄様。蠅が食べたものね、兄様。ふー」

ぼそぼそ呟くうち、傷から血がにじみ、小さな頬を垂れていった。

「ふー。沢山の未来が、レオニス様の中にあるのね、兄様。沢山の未来が、渦になってね、兄様。そのせいでレオニス様、熱いのね。でも少しずつ流れて行くよ、兄様。レオニス様の中で、少しずつ、少しずつ……流れて行くよ……未来がね。そうよね……兄様」

なんという雄大な流れだろう——

トールは馬上からネルヴァ河を見渡し、そのあまりの長大さに息をのんでいた。陽を受けてきらきら輝く河面が、どこまでも続いている。そしてその周囲に広がる木々や街並み

――それら全てを生み出し、そして抱きながら、大河は果てることなく流れてゆく。
いつかレオニスにもこれを見せたい。今の自分の立場を忘れてそう思った。足が弱いから何だというのだろう。自分がレオニスを馬に乗せ、ここに連れて来たかった。
そしてともに、思い出したかった。何の力も持たなかった頃の自分たちを。そのとき感じていた世界の匂い――無力でいながら、期待に満ちていた思いを。
そのような感慨にふけりながらも、一方で、トールは今後の算段を立てていた。
ドラクロワの書状には、落ち合う場所や連絡手段が、暗号化されて記されている。それとアキレスからの報告書とを参照しながら、向かうべき場所を定め、ドラクロワの手勢と接触する方法を考えねばならなかった。
大河一帯の地図を広げたとき、ずきりと痛みを感じた。
思わず顔をしかめ、包帯を巻いた左手を見やった。
薬指と小指が綺麗に消えた手――レティーシャの蝿に食われたのだ。
だが指だけで済んで良かった。もう少しで顔に蝿がたかるところだったのである。両眼を蝿に食い潰されるところを想像すると、さすがにぞっとしない。
途中の街で医者にかかって治療を受け、今は自身の聖性で痛みを抑えている。この程度で怯んではいられなかった。トールは地図に目を戻し、それから河を見た。

眼下に、面白い形の街があった。河面に木の葉を浮かべたような中州の街――クランの街である。そこでジークとアキレスが接触したと報告書にはあった。
それからどこに向かったか――トールは算段を整えると、地図を畳み、手綱を握った。
目的は、レオニスが放ったノヴィア抹殺の返書である。それだけは必ず握り潰すのだ。
そしてドラクロワの意図を計りつつ、アキレスの暴走を止め、その上でレオニスに、己の身を自由に裁かせる。それこそが、トールの命をかけた忠心だった。
さあ、行こう。馬を駆りながら、強く思った。未来をつかみ――取り戻しに行こう。

破壊し尽くされた聖堂に、美貌の男が佇んでいた。
ドラクロワである。苛烈な意志をたたえた群青の瞳を、じっと眼前を流れる大河に向けている。ふと、その背後に人影が現れ、ひざまずきながら告げた。
「じきにカスバルの街に、聖王の騎士が入ります」
〈運びゆく者〉の男――ドラクロワから聖印を授けられたうちの一人だった。ひざまずいているというより、巨大な猛獣がうずくまっているような雰囲気がある。
「セルソロスと少数の手勢、そしてアキレスとやらが、数日以内に仕掛ける様子です。その前に、密書のたぐいは回収出来るかと……。新たに送られた全ての書状も、全て別の経

路で流しております。間もなく、ドラクロワ様のお手に届くでしょう」
ドラクロワは男に背を向けたまま、その報告を聞いている。
「またここ数日、ネルヴァ河の上流域で、ひそかに我らに呼びかけている者がおります。どうやら聖地シャイオンの密使のようです。どうされますか？」
ほう、とドラクロワがそこで初めて声を発した。
「来る者は拒まず受け入れてやるがいい。……かの聖地からの書状は？」
「既に、こちらで手に入れております」
ドラクロワのおもてに酷薄な微笑が浮かんだ。
「よかろう……。じきに全ての協力者たちに最後の通達を行い、動乱の時を知らせることになる。聖地シャイオンへの通達は、密使の素性を確認してから行うとしよう」
「は……」
「今必要なのは時を稼ぐことだ。大いなる流れをせき止め、来るべき時に放つために」
「はい……我らの命、そのために存分にお使い下さい。我らの血が河となり、全ての荷を運び去りましょう。あなた様とともにいる限り、もはや死さえ恐れるに値しません」
「そうだ……完全なる力が、人を命から解放し、永遠の地にてお前たちを不死とする」
ドラクロワは男を振り返り、冷厳と告げた。

「行け。あの男がカスバルの街に留まる間に、動乱の波を起こす用意を全て調えよ」
男は立ち上がった。その顔が、戦いへの期待に凄まじい笑みを浮かべている。無言で胸に手を当て、荒廃した建物を出て行った。猛獣さながらの、ゆっくりとした歩みだった。
ドラクロワは再び大河に目を戻し、低く呟いた。
「聖地シャイオンの同盟者よ……そなたには秘儀を受け渡し……大いなる秘儀の一端を担ってもらう。そして刻を逆巻かせ……ついに飛び立つのだ……。シーラ……」
その右手に握りしめた鎖の先で、十字形の紋章が、小さく揺れていた。

2

客船を降りて、港に足を踏み出しながら、キリが面白がるような声を上げた。
「おい見ろよ！　あの沢山の船、全部同じ印だ！」
ノヴィアとアリスハートもつられて見た。港には小型の船が所狭しと並び、船の舳先に、鳩が何かをくわえた姿の紋章が施されているのだ。
「鳩の紋章……ですか、ジーク様？　あの船は……」
「カスバルの街の紋章――郵便船だ」
ジークが言った。鳩がくわえているのは、手紙だった。この一帯では、鳩はメッセージ

を運ぶ鳥とされ、その紋章は郵便船を示すのだ。カスバルとは今いる街の名である。郵便船の発着所として名高く、河一帯の郵便が経由する、いわば情報の集積地であった。
　手紙から密書まで、カスバルの街を経由せねばどこにも届けられない。完全中立であり、どの陣営もここを必要とするため、一度も戦乱に巻き込まれたことがないという。
　ノヴィアはすぐにここを訪れた理由を察している。ドラクロワに呼応する者が情報をやり取りするには、この街を利用せざるを得ない。ドラクロワ自身もこの街を利用しているだろう。ここの郵送記録から、ジークはドラクロワの足跡を追うつもりなのだ。だが、
「手紙かあ。いつか俺も書けるかなぁ」
「沢山勉強すれば書けるわよぉ」
　キリもアリスハートも相変わらず呑気な調子でいる。ノヴィアは思わず溜息をついた。
「手紙を書く前に、字を覚えなさい」
「へーい。そしたら最初にお前に手紙を書くよ。字を教えてくれたお礼に」
　そう言って、キリは、ぽんとノヴィアの背を叩いた。キリらしい、親しみに満ちた行為だった。ノヴィアは、かつてこんな風に誰からも背など叩かれたことがなかった。
「……手紙は、遠くにいる相手に出すものですよ」
　呆れつつ、まんざらでもないノヴィアだった。

「なんでだよぉ。なんで俺もついてっちゃいけないのぉ」
ふくれっ面で抗議するキリへ、
「郵政舎の倉庫へは、責任ある高位の者しか入れぬ。郵便内容は絶対に秘密なのだ」
カスバルの市長は、にべもなく言った。誰がどこへ連絡したかを守秘することで完全中立は保たれているのであり、それが破られれば街の存続が危うくなる。
ジークとノヴィアが入れるのは、聖王直属として絶対に秘密を守る義務があるからだ。
「しょうがないよぉ、お留守番してようよ」
同じく立ち入りが禁じられたアリスハートに宥められ、キリはしょんぼりと承知した。
「……ジークもノヴィアも、偉いんだ」
二人を見送りながら、そんな呟きが零れた。ジークもノヴィアも、自分より遥かに高位の存在なのだ。自分との差を見せつけられ、置いて行かれた。そんな気持ちが胸で疼いた。
「俺、何にもないんだな」
そのせいで聖堂に利用され、聖印を刻まれた上に仲間を殺された——そんな怒りとも悲しみともつかない思いが、たちまち腹の底から湧いてくる。たまらない辛さだった。
「ジークはなんで俺に優しいんだろ……」

同情だ——と心のどこかが囁いた。みじめな気分が襲ってきた。
海を見たい、仲間の仇を討ちたい——そういう思いさえ、一片の同情の中に収まってしまうほどのものでしかないのではないか。そう思えるほど自分が小さく感じられた。
「ノヴィアが羨ましいな……」
「そんなこと言ったら、あたしなんか本当になんにもないわよぉ。キリには海に行くっていう目的があるじゃないのぉ。狼男にこき使われる必要ないってことよぉ」
アリスハートがのほほんと言う。キリは苦笑した。
「こき使われたくないけど、役に立ちたいんだ……返せる物が何もないのは辛いよ」
「じゃあ、お夕飯の用意でもしよっか」
どこまでも明るいアリスハートに、ついにキリもくすくす笑ってうなずいていた。

「差し出がましいようですが……聖王の騎士の供にしては、いささか危うい者ですな」
市長が言った。キリのことだ。キリが問題を起こせばジークの責任になる。
何の地位もないキリが聖法庁の秘事に関われば、ジークが漏洩の罪を責められるのだ。
「キリはドラクロワに呼応する者から聖印を刻まれた。野放しには出来ない」
ジークが淡々と返す。市長が驚いた。同時にノヴィアもはっとなっている。初めてジー

クがキリに関する気持ちを口にしたからだった。

「し、しかし聖印を刻まれた体では、なおさら旅には……聖堂に身柄を預けては？」

「本人に行きたい所がある」

有無を言わせぬ返答に、市長が口を閉ざす。一方、ノヴィアはようやくジークの思いを知った気持ちでいる。なぜキリを同行させるのか——かつてジークも孤児であるゆえ、見捨てておけない思いもあるだろう。だがそれ以上にキリはドラクロワがもたらす犠牲者の一人だった。ジークは、キリに、その責任を感じているのではないか。

そこで郵政舎の書庫に入り——ノヴィアの目が見開かれた。

凄まじい量の郵便物だった。巨大な倉庫に書棚が並び、大勢の人間が仕分けしている。何から手を付ければ良いのか分からぬ膨大さだった。そこへさらに市長がこう言った。

「期限は四日……それ以上は部外者の立ち入りを認められない。よろしいですかな」

たった四日でこの中からドラクロワに関する情報を見つけ出せというのか。ノヴィアは愕然となって声もない。その横でジークは鋭く郵便の山を見つめ、小さくうなずいていた。

「思い出すわぁ。ノヴィアも、以前は狼男につれてってもらえなかったっけぇ」

アリスハートの言葉にキリは目を丸くした。キリが知るのは、万里眼と幻視の力を持つ

ノヴィアだけである。それ以前のノヴィアが、母親から受け継いだ力を使いこなせず盲目に陥っていたことさえ知らなかったのだ。

「もともと持ってたわけじゃないんだ……。あいつ……目も見えなかったなんて……」

ちょっと呆然となって言った。二人とも聖堂にいた。まだ食事時には早く、キリは中庭で宿題を片付けているところだった。木の枝で地面に字を書いて練習しているのである。

「狼男に置いてかれそうになったこともあったのよぉ。〈銀の乙女〉に預けられてさ」

紋章を正式に授ける代わりに、ジークがノヴィアを置いて独り旅立とうとしたのだ。

「狼男にしてみればノヴィアにご褒美を上げるつもりだったんだろうけどねぇ。それでノヴィアったら紋章も力も棄てる気だったのよぉ」

キリはつくづくノヴィアの頑固さに感心しつつ、

「そりゃあ置いてかれることがご褒美だなんて、あいつも思わないよなぁ……」

呟いた途端、何かが胸をよぎった。

「字を覚えたら、何をくれるんだろう……」

地面に字を書く手を止め、顔を上げた。

「うーん。何かしらねぇ……」

腕組みをするアリスハートの背後に、大きな聖堂がそびえ立っている。

キリは、そちらに目を向けた。聖堂の建物を見つめるうちに——突然、最悪の光景が甦ってきた。それは戦乱で親を失った子供たちが聖堂にもらわれてきたときの光景だった。

ふいにキリの中で、遠い過去から今なお響く子供たちの悲鳴が甦り、両足の裏に聖印を刻まれたときの痛みが思い出された。力の奔流が稲妻となって輝き、足の裏を灼く——青——それが名の由来。聖堂は青い目の子供を求めていた。聖者と同じ目の色。

とっくに忘れたはずのみじめさが甦る。目が青いというだけで子供たちが押さえつけられ足を灼かれる。誰も抵抗出来ず、自分の番が来るのを泣きながら待つしかなかった。だが地獄はそれからだった。子供の大半は聖印の悪影響で体が蠟のようになって死んだ。次に死ぬのは自分かと誰もが不安がった。誰かが息絶えるたび、仲間を失う悲しさよりも自分でなくて良かったと喜ぶ気持ちの方が強かった。それは本当に情けないことだった。

そんな状態からやっとの思いで逃げ出したのだ。仲間と一緒に。みなの青い目は、海の青さだ——フモは言った。自分に海という故郷を与えてくれた人。帰るべき場所を。

フモの名を思い出しただけで胸を裂かれるような悲しみに襲われた。聖堂からキリ一人を逃がすために、みんなが犠牲になった。それを決めたのもフモだ。大好きなフモだ。

二度と聖堂に捕まりたくなかった。ジークに助けられて以来、聖堂全部がひどい場所ではないことは承知している。それでも聖堂に住めと言われれば力の限り抵抗するだろう。

――聖堂に住む？
自分の思考に、どきっとなった。なぜそんなことを考えねばならないのか。
「ご褒美……」
ジークにしてみれば、危険な旅に同行させず、預けることがご褒美だった。置いて行くことが。ジークもノヴィアも偉い。なのに、何も持たない自分が一緒にいられるなど――
早鐘のように鼓動が鳴り、背に冷たい汗がにじむ。
「だ、大丈夫？　顔が真っ青だよぉ」
アリスハートがおろおろと声をかけた。キリがはっと辺りを振り返った。聖堂の庭を。
「こんな……こんな所に居たくない」
何かに追いつめられたように、キリは宙を蹴った。
アリスハートが慌てるのをよそに、あっという間に聖堂の塀を越えていた。

ジークとノヴィアは郵政舎の郵送記録を片っ端から調べた。これまで判明した反聖法庁の者達が、どこと連絡を取っていたかを突き止め、ドラクロワの行方を追うのだ。
だがいきなり壁にぶつかった。何の記録も残っていないのである。
ジークが戦ってきたどの相手も、全く他と連絡せず、単独で動いたかのようなのだ。

明らかに異常だった。今や、ネルヴァ河一帯にドラクロワに呼応する反聖法庁の勢力がいる。郵政舎を利用せずに謀略を巡らせるなど不可能のはずだった。
やがて、もうここは閉めます、と書庫番が申し訳なさそうに言った。
規則通り閉めねば管理に支障が出る。ジークは何の成果もないまま最初の一日を失った。
「記録が無いこと自体、何者かの意図が働いている証拠だ」
だがジークは焦りを見せることなく、そう口にし、ノヴィアと書庫を出た。
「あれは……？」
ふと別の書庫の存在に気づいた。どうやら、一般市民もある程度は自由に入れるらしい。
「あれは、宛先が不明のものを保存する書庫です」
「宛先が……？」
「はい。午前中と夕刻にだけ開きます。まだ開いていますので、ご覧になりますか？」
書庫番はそう言って、その書庫に案内してくれた。
「たとえばこの手紙ですが――」
と、カスバルの街宛の手紙を一つ手に取ってみせる。
宛名には、第七区の三番街の十番地と記されている。ただ送り主は不明だった。
「この街には、第五区までで第七区はありません。こうした宛先・送り主ともに不明の手

紙を保存し続けるための書庫です」
「処分しないのか？」
ジークが問うと、書庫番はきっぱりかぶりを振った。街が洪水に遭うなどして再建されれば住所は変わる。戦場から手紙を出せば送り主の居場所が不明なのは当然である。そうした手紙を届けることは出来ないが、手紙を待つ者は居る。もしや届けられなかった手紙がここにあるのでは――という希望を守り続けるのが、この書庫の役目だという。
「この書庫があるお陰で、届けられなかった手紙と出会う人は大勢います」
その種の手紙を、人は「カスパルの手紙」と呼び、この街がなくてはならないものだという評価に一役買っているのだという。
「届けられなかった手紙……」
ジークは外に出て、その書庫を見つめた。そこの紋章だけ二羽の鳩が両側から手紙をくわえている。一羽が送り主で、もう一羽が届かなかった手紙の受取人だろう。
思案げな眼差しのままジークは書庫に背を向け、郵政舎を出た。
ノヴィアは、膨大な調査でくたくたただった。
「キリとチビはどうしている？」
ジークに訊かれても、疲労のため周囲を万里眼で確かめるだけの気力が湧かず、

「最後に見たときは聖堂で一緒にいました」
「キリは間に合いそうか」
「本人のやる気次第だと思います」
ちょっと冷淡に返した。一緒に仕事をしていたノヴィアに何の労いもなく、キリのことを気にかけられては面白くない。当然のことながら、むすっとなった。
「お前しか与えてやれる者がいない」
だがその言葉に、ノヴィアは沈黙した。
ジークと旅するには、キリは立場が低すぎた。いずれ聖法庁からキリをどこかの聖堂に預けるよう命令されるのは時間の問題なのである。聖法庁は決して聖印の力を有する者を野放しにしたりはせず、必ず特定の聖堂に帰属させて管理する。
だがキリは聖堂を嫌っている。もしそれでキリが逃げれば聖法庁から追っ手がかかる。もしキリが何か悪事を働けば、最悪の場合、ジークが責任を取って斬らねばならなくなる。
そうならないためにも、ジークは既にある算段を調えていた。だがそれには、キリ自身の努力と、またノヴィアの助力が必要なのだ。
ノヴィアにしてみれば、自分までもがジークに試されているような気分だった。
キリに居なくなって欲しいと思ったことは数知れず、といってこのまま追い出したとこ

ろで気が晴れるものでもない。それどころか、キリが居なくなれば悔しくてたまらないに違いないのだ。それは、これまでキリの放つ一言一句にノヴィアの価値観が揺さぶられ、善悪が一瞬でひっくり返る思いを味わってきたせいだった。それまで正しいと思っていたものに、大きな疑問符をぶつけられたまま相手を退けては、疑問だけが残ってしまう。

またノヴィアには、口が裂けても言えない思いがあった。それはキリのようになりたいという、ごまかせない思いだ。あのように野放図で気ままで、そのくせ仲間を想う優しさを失わぬ生き方があるとは考えてもみなかった。何と自由なのかと羨ましくさえ思う。

「キリの身分を〈銀の乙女〉に預ければ……キリはジーク様の同行者ではなくなります。キリが納得するとは思えないのですが……」

溜息混じりに、そう口にした。だがジークは厳しく返した。

「聖堂ではなく〈銀の乙女〉なら、キリも納得しやすいだろう。キリの立場を〈銀の乙女〉に託さねば、末路は危うい」

ノヴィアは渋々とうなずいた。生まれて初めて真正面から付き合う同い年の少女は、ノヴィアにとって、尽きぬ悩みの種となっていた。

「託す……」

キリの口から、力なくその言葉が零れた。
聖堂から無我夢中で駆けてきたのだ。ジークとノヴィアの姿を見たときは安堵で震えそうになった。この先も一緒に居て良いのだという一言を、心の底から求めていた。
ジークとノヴィアが建物の角を曲がるところへ駆け寄り——同行者では、な、い、と、い、う
ノヴィアの声が、キリの足を止めた。〈銀の乙女〉に預ける。同行者ではなくなる。納得しやすい。託す。末路——いったいどういうことなのか。飛び出していって訊きたかった。
だが足は動かず、ジークとノヴィアが去るまで、じっと建物の陰に隠れ続けた。
「……おーい、キリーっ。ちょっとぉ、急にどうしたのよぉ」
アリスハートが飛んできた。ふとキリの口の端に笑みが浮かんだ。全くの無意識だった。
「何でもないよ。最初っから……失う物なんか、何もなかったんだから」
アリスハートがきょとんとなるのをよそに、からっと笑って言った。
「戻ろっか。晩飯の用意をしないとな」
その横顔が、アリスハートには今にも泣き出しそうに見えていた。
「キリ……？」
だがキリは宙を踏むと、再びアリスハートにも追いつけぬほどの勢いで走り出していた。

ジークとノヴィアは、郵政舎を出た後も、市庁舎で色々と調べたが成果はなかった。
日が暮れ、聖堂に戻ると、キリとアリスハートが食事の用意をして待っていた。
「助かります、キリ、アリスハート」
ノヴィアは本心から二人に感謝した。戦いとはまた違う疲労のため、へとへとだった。
だがキリは無言でうなずいただけだ。食事中も珍しく言葉少なだった。声をかけても、ぼんやり短く返すだけで、放っておかれたのがよほど堪えたのだろうとノヴィアは思った。
だがご褒美を与えられれば、もうそんなことはなくなるだろう。努力次第でそれは手に入る。キリは決して持たざる者ではないのだ。いつの間にか心の中でキリを励ましている自分に、ノヴィアは気づいていない。ただ食事の後で、ふと思いついたことがあった。
宿泊する修道院に戻り、院長に頼んでそれを用意した。
専用の紙と印章が必要で、院長の指導のもと、書斎を借りて仕上げた。
それを手にしてノヴィアが部屋に戻ると、湯浴みを終えたキリがぼんやりベッドに寝そべり、アリスハートはうとうとしていた。
ノヴィアは、手にしたものをキリの傍らに置いた。一通の手紙だった。
「これに、ご褒美の内容が書いてあります」
「……なんで口で言わないんだよ」

キリがぽつっと返す。だが理由は明白だった。文字が読めるようになれば分かることなのだ。キリのやる気をうながすためのノヴィアなりの工夫だった。
「字が読めなければ、この先困りますから。しっかり学べば……良いことがありますよ」
ノヴィアが意味深に笑ってみせる。だがキリは悄然とうなずいていた。
この先困る――それはキリにとって独りになることを意味した。もしジーク達とともにいられたら、字が読めないせいで困っても助けてもらえるのだ。
その手紙はキリにとって、別れの言葉に等しかった。

闇の中で炎が燃えていた。仲間たちの遺体が燃え上がり、キリの身にも炎がうつった。
必死に叫ぶが誰も助けてはくれない。泣きながら炎から逃げたところへ、さらに最悪のものが現れた。あの聖堂の門だ。悪夢の入り口が待ちかまえ、背後からは炎が迫った。
キリは門へ入れもせず、炎から逃げられもせず、ただ絶望して立ちすくんだ――
そこで、はっと目覚めた。心臓が恐ろしいほどの勢いで打っている。夢の中の絶望が、まだ深く胸に突き刺さっている気がした。その痛みが収まるのを待ったが、いつまでも、しくしくと胸の奥で疼き続けた。やがてキリは、のろのろとベッドから降りた。
ノヴィアもアリスハートも眠っている。二人の寝顔をぼんやり見つめた。突然、涙が零

れた。結論は出ていた。夢から目覚めるよりも前に。あとは自分が決めるだけだった。
涙が引くとともに決心が訪れた。出て行こう。追い出される前に。
キリはそっと荷物をまとめ、ふと枕元に置いたままのノヴィアからの手紙に気づいた。
それを懐に入れ、机の上のペンと紙を見た。
キリは静かに荷物を置き、ペンを手に取った。一字一字、月明かりの中で丁寧に書いた。
字を教えてくれたノヴィアへの精一杯の感謝を込めて。それでも、こんなものしか残せない自分が哀しくなった。こんなものでも残せる自分にすがりたかった。
もし面と向かって追い出されたら、本当に全てを失うだろう――字を書きながらそう思った。一緒にいられる希望を与えられた上で奪われたら、もう立ち直れない。それは最初から何も持たなかった以上に恐ろしい。命を奪われるよりも恐ろしいことだ。
やがてキリは、自分の人生で、最初で最後の手紙を書き終えた。
それを丹念にたたんで机の上に置き、窓を開いた。丸い月が輝いていた。
その月に向かって、キリは跳んだ。小柄な影が、月光に沈む夜の街へと跳んでいった。
月光さえ届かぬ闇の中に、じっとアキレスが潜んでいた。
遠方から修道院を覗き見るうち、ふと笑みを浮かべた。小柄な人影が、夜の街へ――ジ

ークとノヴィアの警戒の届かぬ所へ跳んで行こうとしているのだ。
「ほう……動きましたか。ふふ……まだ時間はありますが、一つ、仕掛けてみますか」
ゆらりと立ち上がった。優雅な動作のくせに、巨大な蛭が動くような不気味さだった。

3

月夜――大河からやや離れた場所にある、半ば崩れ落ちた古い聖堂に、男がいた。
遠目には均整の取れた体つきをしているが、近づけば目をみはるほどの巨体である。
精悍そのものといった面構えで、切れ上がった目に獰猛な光を帯びている。静かに立っているだけで全身から猛気を発散させるような男だった。
ふいに、すぐ近くで物音がした。男が音の方へ顔を巡らせる。何の気配もない。老朽した壁が崩れただけだろう――そう判断して顔を戻したとき、
「あなたが、連絡をつけた者ですか」
先ほどの物音よりも、遥かに近い場所から、声が飛んだ。
男は表情一つ変えず、ゆっくりと声がした方へ体ごと顔を向け、
「そうだ。〈運びゆく者〉――ロイヒルトという」
そう名乗った。すると、すうっとそこらの影が立ち上がるかのように青年が姿を現した。

「聖地シャイオンの使い……トール・ヴュラード」
青年——トールが名乗り返す。先ほどの物音は、男の気を引いて有利な位置取りを確保するためのものだ。男もそれを察しているのだろうが、いささかも動じていない。というより、いつどのように斬りかかられようと全く気にしていないような無頓着さだった。
「遠路、ご苦労。お前が到着し次第、お前の主に、書状を送るとドラクロワ様は仰った」
トールの派遣と引き替えに受け渡すという、秘儀の内容だろう。トールはうなずき、肝心なことを訊いた。
「一名、聖地から派遣されているはずですが……今、どこに？」
「アキレスならば、カスバルの街で、我らの同胞とともにジークを迎え撃っている」
男——ロイヒルトは全く警戒せず、すらすらと答えている。
「その街に、聖地からの返書が、届いているのでしょうか？」
「返書……？」
「我が主からの命令で……内容に誤りがあり、それを訂正する必要があります」
「カスバルの街にジークが現れた時点で、全ての連絡は一時的に停止している。その返書もまだ届いていないだろう。俺の部下に連絡させる。お前は俺とともに来い」
「いえ……私が直接、その返書を受け取り、誤りを正さねばなりません」

「駄目だ。お前をドラクロワ様の所へ連れてゆく」
ロイヒルトが有無を言わさぬ断定口調で告げた。トールはすっと退いた。アキレスの居場所が分かったなら、だいたい返書の経路も推察出来る。もう用はない。
「どこへ行く」
「私もそのカスバルという街へ行きます」
こだまのように、つかみどころのない声音をトールが返す。だがロイヒルトの態度は、それ以上に相手の事情などお構いなしだった。
「お前に耳がないのなら、俺がこの手で貴様の頭に耳の代わりになる穴を空けてやる」
すぐそこまで送ってやるとでもいうような無造作な声とともに、肌に感じられるほどの猛烈な殺気が吹き寄せてきた。そのまま無警戒に、大股で歩み寄ってくる。
お互いに素手であるための自信か？　いや、この男であればトールが抜き身の剣を持っていたところで構わず歩み寄ってくるだろう。それほどの剛毅さを持った男だとトールは判断した。何となく自分の父親を思い出し、面白くないものを感じた。
大きく後方に跳躍しながら、トールは右手を翻し、漆黒の鉄鞭を現した。
「このまま行かせて下さるなら、危害は加えません」
着地しざま、ひゅっと鞭を迅らせた。一瞬遅れて、ばさばさと何かが派手に倒れた。

ロイヒルトが足を止めて、そちらを見た。トールの胴ほどもある樹の幹が、真横に両断されているのだ。切り口が月光を受けて白く光り、その切れ味の凄まじさを物語っていた。
ロイヒルトの唇に、獰猛な笑みが浮かんだ。トールに目を戻し、再び歩み始めた。
「──我ら〈運びゆく者〉は、ドラクロワ様に命を捧げる義賊だ」
死など恐れていないと言わんばかりである。ますます父そっくりだとトールは思った。
だが父と違うのは、むざむざ命を投げ出す男の姿勢だ。これでは戦闘放棄に等しい。
「なら死んで下さい」
無造作に鞭を振るった。ただし殺す気はない。ジークなら無抵抗に近づいてくるだけの男を斬りはしないだろう──そんな風に思った。きっとアリスハートだって喜ばないに違いない。そんなわけで額を切ることにした。そうすれば相手は己の血で視覚を奪われる。
皮膚を裂くだけの素晴らしい正確さで、鞭の尖端が、ロイヒルトの額をかすめた。
「──その武器は、人を撫でるためのものか？」
だがロイヒルトは頓着せず歩んでいる。額に出血は見られない。
何だ？　妙な手応えがあった。トールは素早く、鞭を縦横に振るった。
身の毛もよだつ刃風とともに、ロイヒルトの全身を鞭の尖端がかすめる。
その外套がずたずたに切り裂かれるが、ロイヒルト自身は何の痛痒も感じていない。

まさか!? トールは容赦を棄てた。相手が、ただ近づいてくるだけではないことを悟ったのだ。剃刀のごとき鉄鞭が、人間の目では追いつけぬ速度で迅った。

激しく叩きつけるような音とともに、ロイヒルトの肩口から胸にかけて、盛大な火花が飛び散った。トールは愕然となりながらも、続けざまに鞭でなで斬りにかかった。

凄まじい火花の嵐がロイヒルトの肉体の周囲で舞い飛んだ。その歩みは止まらず、かすり傷一つ負いもしない。鋼鉄を遥かに上回る硬さを、トールはその手に感じていた。

「堅牢なるロイヒルト——ドラクロワ様に聖印を授かりし者の一人だ」

ロイヒルトが笑って手を伸ばし、己の身を叩く鞭をつかむや、凄まじい剛力で引いた。

思わず前のめりになるトールの首を、ロイヒルトの馬鹿でかい手がつかんだ。

引き裂かれた外套の下で、ロイヒルトの胸に刻まれた聖印が輝くのを、トールは見た。

だがそれも一瞬だった。首をつかむ手に力がこもり、息がつまった。

視野が狭まり、トールの体から力が抜け——ふっと意識が途絶えた。

「トール……苦しいよ、トール……どこにいるの……」

熱にうなされながら、レオニスは息を喘がせている。

体はベッドに横たわっているが、心は悪夢のまっただ中にあった。

おどろおどろしい断頭台にレオニス自身がかけられ、刃が落とされた。かと思うと自分の体が膨れあがって怪物となり、閃光を放って吹き飛ぶ。勇気と希望をもって車椅子から立ち上がり、一歩ずつ歩みゆき、その足が腐ってゆく。ぼろりと取れてしまった自分の両足を抱えて王座に座っている自分。ノヴィアとともに歩く訓練をしたあの湖畔の一角に、白水仙が咲き乱れ、一斉に赤黒い血を流す。聖母像が真っ赤に染まり、その周囲に無数の人間の首が堆く積み上げられてゆく。目を開けばベッドの上に沢山の首があって自分を押し潰そうとしている。毛布の中からも沢山の首が自分を見ている。

部屋中が首だらけで頭蓋骨を抱いた女が言う――欲しかったんでしょ、これが。ノヴィアの首を皿の上に載せて近づいてくる。それを果物のようにちぎって食べさせられる。

トールを呼ぶが、取れてしまったレオニスの足が勝手に歩き始める。

影が自分を置いて走る。沢山の書状に同じ言葉が書いてある――何と覇気のないことか。僕は歩けないんです許して下さいと泣きながら、極彩色の針を自分の顔に刺してゆく。ただ欲しかっただけなのだ。自分が生きて良いという証拠を。一緒に死のうと血まみれの母が這って来る。ベッドの下に隠れたレオニスは震えて小さくなり、取り返しのつかない過ちを立て続けに犯してしまった自分を消してしまいたくて、僕は花だ、僕は花だと繰り返し呟く。血みどろの沼に咲く花を、ドラクロワとジークの手が容赦なく摘んでしまう。

正しいものを求めながら過ちに満ち、美しいものを求めながら醜悪の沼にはまり込む。真実は遠ざかり、あらゆる未来が、自分が断罪した死者の怨みでどす黒く塗り潰される。
「トール……助けてよ……誰か……」
弱々しい声で喘ぎ続けるレオニスを、部屋の隅から、じっとレティーシャが見ていた。
「レオニス様、沈んで行くね……兄様。大きな流れにね、兄様。後は運ばれるだけだね、兄様。どこまでも流されて行くね、兄様。一番、汚くて、一番、綺麗な未来にね……」

4

曙光が昇り、ノヴィアは肌寒さで目覚めた。
気づけば窓が開いている。どうせキリの仕業だろう。溜息をつきながらベッドから降り、窓を閉めた。ふと机の上に一枚の紙片があるのに気づいた。表に『ノヴィアへ』とある。
ぎざぎざの金釘文字――キリの字なのは明らかだ。
ノヴィアは眠気の残る目をこすりつつ紙を開いた。たった一言だけの手紙だった。
一瞥して、ぴたりとノヴィアが動きを止めた。その目が大きく見開かれ、わなわなと体が震えてきた。そこへアリスハートがぼんやり目覚め、
「おはよう、ノヴィ……」

かつて見たことのない怒りの形相のノヴィアに、絶句した。
「いったい……あの人は……」
一瞬、震えが止まった。かと思うと、もの凄い音を立てて紙片を机に叩きつけるや、
「どこまで私を怒らせれば気が済むのっ！」
街中に響くような声を放ったものだ。
「どど、どうしたのノヴィアぁぁ」
アリスハートが驚いて飛び上がり、紙片を覗き込む。たちまち呆気に取られた。
「これって……キリの……？」
ぼんやり訊いた。ノヴィアは答えず、紙片を睨んでいる。ノヴィアが見たことも聞いたこともない、単純きわまるメッセージ――
『さよなら』
それが、その手紙の全てだった。

ジークはしげしげとその手紙を見ていた。
「私、キリを捜してきます」
ノヴィアが断言した。絶対に逃すものかという思いがありありと見える。

「……それにしても、一生懸命書いたのねぇ」
アリスハートが紙片を覗き込んで、のほほんと言う。
なんとか間違えずに書こうと確かめながら書いたのだろう。これを書いた人間の誠意が、字の汚さとは無関係ににじみ出るような手紙だった。だがノヴィアの感想は違った。
「この人は、こんな言葉をもらうために、私が字を教えたと思っているのね」
怒りで煮えくりかえるノヴィアに、さすがのアリスハートも怖くて何も言えなかった。
「こんな言葉に限って、間違えずに書くなんて……」
声が尻すぼみになった。怒りが落ち込み、悲しみが湧いたのだ。そのとき、
「間違えずに……か」
ふとジークが呟いた。ノヴィアとアリスハートが振り返る。
ジークは、手紙をノヴィアに返すと、鋭く言った。
「急いでキリを捜し出せ。俺は、郵政舎に行く」
倉庫の片隅で、うずくまって膝を抱えるキリの姿があった。
朝になって客船が来るのを待ち、それに潜り込んで街を出るつもりなのだ。
それまで、キリは押し潰されそうになる哀しさにじっと耐えていた。

浅い眠りが訪れるたびに、それにすがるようにして心を眠りに預けた。だがすぐに聖堂の悪夢に再び陥り、慌てて目覚めるということの繰り返しだった。

怖さと悲しさがごっちゃになって、体が内側から痺れるような感じさえした。そのせいで、じわじわと迫る異様な冷気に気づくのが遅れた。

朝の光が窓から射し込み、ふと起き上がろうとして膝や手に感覚がないことに気づいた。慌てて自分の体を見て、愕然となった。なんと手足に、真っ白い霜が降りているのだ。

「大人しくしていて下さい。今、あなたに〈蛭氷〉の一部を分け与えているところです」

突然の声に、反射的に宙を跳ぼうとした。だが異様な冷気で手足がうまく動かず、少し離れたところでキリは膝をついたまま、まともに身動きを取ることさえ出来なくなった。

「くそっ……なんだ……これ……」

倉庫の扉が開き、アキレスが嗤いながら入ってきた。キリは総毛立つほどの怒りと恐怖とに襲われた。よろめきながらも何とか立ち上がり、きっと相手を睨みつける。

「この蛭野郎っ……こんなところで仲間の仇に会えるとは思わなかったぜ」

「アキレス・ツェペットですよ、子猫さん」

アキレスが、さっと爪の無い手を翻す。鋭い氷の棘が、茨のように生えてキリを真下から捕らえにかかった。キリは渾身の力を込めて宙を跳んでかわしたが――すぐに体が言う

ことを聞かなくなり、もんどり打って床に倒れ込んでしまった。
「て、てめぇ……俺に何しやがった！」
「〈蛭氷〉の一部をあなたの体にやどらせたのですよ。もう少しで頭の中まで支配出来たのですがね……まあ良いでしょう。ジークたちに助けを求めさせるには十分です」
床に這いつくばったまま、けっ、とキリが鼻で笑った。
「あいつらが今さら俺を助けるもんか。とっくに、おさらばしてきた所だよ」
「ほう……」
氷の棘が伸びて、何かをくわえた。一通の封筒である。先ほど跳びのいたとき、キリの懐から落ちたものだ。それが、アキレスの手に渡された。
「〈銀の乙女〉の刻印付きとは……」
「や……やめろっ、それに触るなっ！」
だがアキレスはにたっと笑って封筒を破り、手紙を広げると、声に出して読み上げた。
「……ノヴィア・エルダーシャの名において、以下の者を、聖道女の位階に推薦する。この者が正当なる力を有し、その行い、言動、考えが、聖なる力の道を歩むにふさわしいと認めるゆえである。その者の名は、キリ……ふぅん、あなたの名前ですね」
キリは声もなく驚いていた。アキレスが笑いかけた。

「あなたを聖道女見習いとする承認書ですね。これほど見込まれているのなら、助けを求めても良いのではないですか？　きっとあなたを救おうと努力してくれますよ」
手紙を放り捨て、キリに近寄った。だがキリは今こそ合点していた。聖道女の立場を与えられる代わりに、ジークたちに置いて行かれるのだと。
「余計なことしやがって……ノヴィアのやつ……」
聖道女になどなる気はさらさらなかった。これまでのように盗みで食いつなぐ。自分一人のために盗みを働く。そして自力で海に辿り着いてみせる。そう思っていたのだ。
「さあ……私のために働いてもらいますよ」
アキレスが迫った。キリは歯を食いしばって立ち上がり――いきなり甲高い悲鳴を上げていた。体の内側で、到底、耐え難い冷気が生じたのだ。
まるで氷の棘で、体の中身を引っかき回されるようだった。あまりの冷たさに、むしろ焼けつく思いがした。自分まで仲間のようにあの緑の炎となって燃え上がるかと思った。
「その程度で音を上げるとは……私はその何倍もの冷気を常に抱いているのですよ？」
すぐそばに立って、アキレスが面白そうにキリを見下ろす。
「う……ぐあっ……あっ……」
己の身を抱いたまま、キリはあまりのことに身動きすら出来ない。そのまま大人しくし

ていると、徐々に冷気が体内から消えていった。思わず安堵の息をついた。だが逆らえばまたすぐにも冷気に襲われるのは明らかだ。悔しさに涙がにじんだ。

「いずれ慣れますよ……魂まで冷気にひたせばね、むしろ心地よく感じるようになるんです。さ……ジークがどうやってあなたの中の〈蛭氷〉と戦うか……見物ですね」

「ひ、卑怯者っ……！　こんな……こんなことして、恥ずかしくないのかよっ！」

「恥ずかしい？」

アキレスが不思議そうに聞き返す。

「ふむ……そんな感情は、もう思い出せもしませんね……。どういう感情だったか……」

己の頬に爪の無い指を当て、真顔になって呟いている。演技ではなく、本当に自分の感情を思い出そうとしているのだ。キリはあまりの不気味さに、ぞっとなった。

「な、なんなんだ……お前……気持ち悪い……」

思わず後ずさり、途端に冷気に襲われて悲鳴を上げた。

「私からすれば、恥ずかしいなどと言う余計な感情を持っているあなたの方が、よほど気持ちが悪いのですがねえ……。私はね、力を手に入れるために捨てたんですよ。誇りや憐れみや信頼といった、余計な感情……全てをね」

「へっ……それで独りぼっちになっちまったんだろっ！」

それがキリの精一杯の罵倒だった。だがアキレスはにっこり微笑んだ。
「望んでね。しかしあなたの言う独りぼっちとは違いますよ。彼らはね……今でも私の、そ、ばにいるのです。友人も恋人も仲間も、全て、〈蛭氷〉に食らわせたのですから。彼らの血と魂は、私の力の一部となって、生き続けているのです」
想像を絶する言葉に、キリは唖然となった。
「失う物など何もない……同時に全てを持ち合わせている。それが私の強さなんです」
ひどく誇らしげなアキレスを、キリは目を細めて見上げた。
「……可哀想だな、お前」
全く無意識に、そんな言葉が零れた。アキレスの笑みは全く変化しなかった。
代わりに、頬が真っ赤になるほどの勢いで、ひっぱたかれた。
「口の減らない子猫さん……そろそろ散歩に参りましょうか」
じんじん痛む頬に、かえって抵抗心が湧き起こり、
「誰がてめえの言うことなんか聞くかっ！　そんなことするなら河に飛び込んで死……」
だがまたもや冷気に襲われ、息もつけなくなる。しかも今度はそれだけではなく、自分の意志を離れて、勝手に足が動き出していた。キリは、ひっと悲鳴を零した。何もかもを操られる恐怖に泣きわめきたくなるのを、かろうじて堪えた。

キリはそのままアキレスとともに倉庫を出て、河沿いに歩いていった。早朝から働く水夫たちや郵便船の乗組員と、何度もすれ違ったが、キリには助けを呼ぶことも出来ない。声を上げようとすれば、途端に冷気が口元を襲い、息を封じてしまうのだった。

やがて倉庫街の外れに来た。辺りには誰もいない。アキレスはにこっと笑った。

「ここならば、ノヴィア様も、あなたを見つけやすいでしょう。セルソロスの手勢も動いていることですし、あとは上手くノヴィア様をおびき寄せられれば……」

「……様？　なんであいつのこと、様なんて呼ぶんだよ？」

「なに、こちらの事情ですよ。我が主にとって、彼女は、大きな障害でしてね」

そのまま立ち去ろうとするアキレスに、キリが叫んだ。

「その大きな障害ってやつを、お前は何でもかんでも食ってきたんだろ。友達もさ」

アキレスが立ち止まった。キリは、せせら笑って言った。

「ジークは絶対にそんなことしないぜ。なのに、お前より強いんだ」

恐ろしい笑みを浮かべてアキレスが振り返る。キリはまたひっぱたかれるかと身を強ばらせた。だがそれで良い。それがキリなりの策だった。キリ一人ではノヴィアが無警戒にこちらに来てしまう。アキレスがいれば、ノヴィアとともにジークが来る。そうしたらジークに頼むのだ。自分を斬ってくれと。それが今のキリに考えつく最良の選択だった。

アキレスはひっぱたきはしなかった。ただ、爪のない指で、キリの髪をつかんだ。
「お前が……ジークの何を、知っているというのです？」
いきなり引っ張り上げた。キリの体が持ち上がるほどの力だった。頭皮が剝がされるかと思うほどの痛みにキリが言葉にならぬ声を上げた。その赤茶色の髪が抜け、
「あの男はね……私など及びもつかぬほどの数の人間を殺し、葬ってきたのですよ」
引き抜かれた髪を手から払いながら、アキレスが言った。キリはなおも歯を食いしばり、
「どうせみんな悪党だろう、お前みたいなっ！」
「ふふ……あの男はね、自分の従士さえも、同じように葬ってきたのです。ノヴィア様が何人目の従士か知っていますか？　五人目ですよ。四人の従士は一人残らず死んだのです。自分のために働く者さえことごとく死なせ……ときに殺した。それがジークです」
　キリが息をのむ。だがそのとき、ふと——
「そう……ジークが葬ったのです。従士を……私の親友を」
呟くアキレスの顔に、キリは一瞬、別人の面影を見た気がした。
「彼の心をね、ジークは粉々に打ち砕いてしまったのです。そのせいで、ともに見た夢を棄て、守るべきものさえ棄てて……裏切った……私を……」
巨大な蛭を連想させせないアキレス——それは深い嘆きを抱えた、ごく普通の男だった。

もし、その身にやどらせたという魔獣が消えたなら、きっと現れるだろう素顔——
「そう……あの男の力が、全てを奪った……私から……友も……最愛の人も……」
そしてその顔が、あっという間に消え去り、アキレスのぬめるような笑みだけが残った。
「もう失う物とてない……あるのは力への欲求のみ。それが、今の私の強さなのですよ」
そうしてアキレスが今度こそきびすを返し、立ち去ろうとした、そのとき——
「空っぽの心が、強さですか？」
厳しい声とともに、猛然と飛来した金の矢が、アキレスの胸を貫いていた。

郵政舎の書庫に、ジークはいた。
それも、この街の通常の紋章と違う、もう一つの紋章を掲げる書庫である。
入り口で、書庫番が、鍵を手に生あくびをしていた。ジークに引っ立てられるようにして、大急ぎで書庫を開けさせられたのである。
シャベルを担いだまま書棚の間を歩むジークが、ふと足を止めた。幾つかの手紙を取り、ひょいひょいと懐に入れた。書庫番がぎょっとなる。だがジークは構わずに手紙一つを手に取ると、何の許可もなく封を破りにかかった。
「あ……ちょっと、駄目ですよ。ちゃんと記録を取ってから……」

その書庫番の声が、いきなり、こもったような呻き声に変わった。
ジークが素早く入り口を振り返る。書庫番が、どっと倒れ込んだ。
ついでその背後から、ぬっと男が現れた。異常な長身の男――セルソロスであった。
その手に、短い矛を握っていた。槍ほど長くなく、刃は槍の穂に鎌をつけたような形をしている。河賊が好んで使う武器だ。揺れる船の上では非常に便利で、鎌を船の舳先に引っかけて乗り込んだり、相手の体に引っかけて水に落としたりする。
その鎌で、書庫番の喉首をかき切ったのだった。
「ジーク・ヴァールハイト……〈運びゆく者〉がお前を切り刻みに来た」
セルソロスが、にたっと笑んだ。さらに十数名の男たちが武器を手に、入ってくる。
「中立地帯で、騒乱を起こす気か」
ジークが淡々と呟き、破りかけた手紙を元に戻す。セルソロスは当然のように、
「お前が来た時点で、ドラクロワ様はもう、この街を必要としていない。これからは動乱が始まるんだぜ。手紙のやり取りなんざ関係ねえ。表立って殺し合う日々が始まるんだ」
その言葉を証明するように、男たちが次々に書棚をひっくり返し、ジークを囲みにかかった。男たちのどの武器も血で濡れている。既に書庫の周囲の人間を殺戮してきたのだ。
「義賊が、なぜ無関係の者を殺す？」

シャベルをすっと掲げながら、ジークが問う。セルソロスは鼻を鳴らして笑った。
「便利な言葉だろうが。正義の賊ってのは。幾ら殺しても良いんだからな」
ずん！　凄まじい勢いでジークがシャベルを床に突き立てた。その左腕に雷花が迸り、
「ジーク・ヴァールハイトが解き放つ！」
稲妻の奔流が、にわかにシャベルを覆い尽くした。
「水刻星の連なりの下、凄魔ギルトとなりて我が敵に見せしめよ！」
シャベルが水銀の粒子となって飛散し、双剣を持つトカゲのごとき面相の魔兵へと変貌した。総勢十六体。一瞬の遅滞もなくジークが銀剣を握りしめ、命令を放つ。
「蠍座の陣！」
凄魔たちが一斉に円陣を展開させ、男たちに跳びかかる。修羅の咆吼を上げる凄魔たちを、男たちが愕然となって迎え撃ち、またたく間に斬り屠られる。
圧倒的な力で賊をなぎ倒すかに見えたそのとき――異変が起こった。
セルソロスの姿がいつの間にか消えたのだ。目を離したわけではない。一瞬でいなくなったのである。幻術か――？　そう思いながらもジークは咄嗟に、懐深く剣を構えた。
完全な守りの構えである。ジークの本能がそうすべきであることを告げていた。
果たして、来た。首筋に、ひやりとするような殺気を感じた。

続けて、ひゅっと鋭い刃風――ジークは素早く剣を掲げ、己の首を守った。
刃身に火花が爆ぜた。完全には防ぎきれず、敵の刃が首をかすめた。
すかさず剣を翻して斬り上げたジークは、そこで異様なものを見た。
銀剣の尖端に、セルソロスが立っているのである。しかも羽毛のごとき体重の軽さだ。
一瞬、やはり幻術かと思った。それほど信じがたい光景であった。
「軽快なるセルソロス――」
セルソロスが歯を剝いて笑う。同時にその矛が突き込まれた。ジークが首を振ってそれをかわす。そこへ、凄魔たちが、剣の上のセルソロスに跳びかかった。
再び、ふっとセルソロスの姿が消えた。いや――あり得ぬほどの速さで走ったのだ。
凄魔たちの竜巻のごとき剣さえ、止まっているのと同じだった。瞬きする間もなく凄魔の一体が首を引き裂かれ、もう一体が背後から貫かれた。その異常なほどの素早さに、
「その身に、聖印を刻まれたか――」
ジークが身構えながら、言った。セルソロスは、にやりと笑い、
「両膝にな。たまらなく痛かったが、お陰で、自由に体重を消せるようになったよ」
声が途中からは背後から響いていた。ジークはかろうじて身を翻し、左腕の籠手で、背後から襲いかかるセルソロスの刃を受けた。すかさず剣を振るうが、当たるものではない。

一瞬で、何歩も離れたところにセルソロスが立ち、面白そうにこちらを見ていた。
「この手数で殺せないとはな。はは、良い勘してやがる」
図星だった。攻撃を防げたのは、ジークの経験上、最も狙われやすい急所を無意識に庇ったからだ。決して攻撃が読めているわけではなく、いわば偶然かわせているだけなのだ。
このままでは、いずれ必ず刃を受けることになる――かといってジークから攻めれば、あっという間にかわされ、逆に致命的な傷を負うだけだった。
ジークは、ぴたりと守りの構えになり、動きを止めた。セルソロスが声を上げて笑った。
「さあ、今度はどこから来るかな？　右か、左か？　上か、後ろか？」
その言葉の最中に、セルソロスの姿が、ふっと消失していた。

アキレスは、胸に刺さった矢を、爪のない手ですうっと撫で上げ、笑った。
「来ましたね……」
その胸に亀裂が走り、顔がひび割れたかと思うと、がらがらと音を立てて崩れた。本人ではなく、氷人形だったのだ。
「本人はどこかで隠れているわけですか。キリを助けたらすぐに私が見つけます」
ノヴィアは軽蔑しきったように言って、真っ直ぐキリに歩み寄った。

「ノ、ノヴィア……？　く、来るなっ……」
キリは慌ててその場を離れようとし、にわかに体内に生じた冷気に苦悶の声を上げてひざまずいた。指先の感覚が全くない。このまま凍え死ぬかと思うほどの冷たさだった。
「なんですって」
キリの様子を見て、ノヴィアが眉を逆立てた。
「せっかく助けに来たのに、来るなとは何ですか。だいたいなぜ、あなたは――」
怒りの形相もあらわに、完全な説教口調になってキリに近づいてゆく。
「ば、馬鹿……来るなっ、俺の中に……」
キリが絶望的な声を上げたそのとき――
無数の氷の刃が、キリの体から、四方八方に奔流のごとく溢れ出したのだった。
さながらキリ自身が生きた爆弾と化したようだ。真っ直ぐ歩みゆくノヴィアに、かわせるものではない。怒濤のごとき刃の群に、あっという間に呑み込まれたかに見えた。
「い、い、見えません！」
ノヴィアの一喝が高らかに上がった。まるで第二の爆発だった。氷の刃が立て続けに砕け散り、辺り一面に飛び散っていた。
幻視の力――無視の具現が、氷の堕気を霧散させたのだ。

「先ほどから見てましたから……何かあるとは思っていました」
霧のごとく舞い散る氷のかけらの向こうで、ノヴィアが言った。
その姿にキリは呆然となった。ノヴィアは、急所を狙う氷は防いだが、それ以外は消しきれていなかったのだ。幾つもの刃が、ノヴィアの肩を、腕を、脚をかすめていた。衣服が裂け、血がにじんで零れ落ちるノヴィアの手足に、キリが戦慄いた。
さらにキリの体から刃が生え伸びた。
「……見えません！」
真っ向から見すえるや、氷の刃が一挙に吹き飛ぶ。だがまたもや消しきれなかった刃が体をかすめた。それでもノヴィアは真っ直ぐやって来る。キリは冷気に耐えて後ずさった。
「や……やめろっ！　お、俺なんかに構うなっ！」
泣きわめいて退こうとするキリの袖を、ついにノヴィアがつかんだ。
「なぜ出て行ったの！　なぜ黙って……っ、もうっ、あなたはっ、じっとしなさいっ！」
「お……置いて行く気だっただろ！　聖道女にしてやるから、ついて来るなって！」
「なんですって……あなた、本気でそう……」
「あの手紙は、そういうことだろ！　離せよ！　お前に俺の気持ちが分かるもん……」
「馬鹿――――――――あっ!!」

「……かっ」
もの凄い叫び声に、キリが息をつまらせた。ノヴィアの怒りの表情が一変していた。
屹然と眉を逆立てたまま、今にも泣きそうな目になってキリを見ている。自分は何か大きな間違いをしでかしたのではないか――そんな不安が急にキリを襲った。
そのキリの袖をしっかりと握りしめながら、ひどくもの悲しい声で、ノヴィアは言った。
「置いて行かれる辛さを……私が知らないとでも思っているんですか……あなたは」
キリは返す言葉もない。ノヴィアの目に涙がにじみ、その視覚がぼやけたとき――
それまでに層倍する数の氷の刃が、一斉にキリの体から噴き出したのだった。

一瞬だった。ジークは僅かに身を沈めざま、左腕の籠手をかかげていた。それで敵の刃を受け弾くや、すくい上げるようにして剣を一閃させたのである。
どれほどセルソロスが身軽であろうと、キリのように宙で自由に動けるわけではない。
「……なっ!?」
宙で慌てて身をひねり、剣をかわすセルソロスの姿が、にわかにジークの目に映じた。
さらに剣をなぎ払うが、セルソロスは寸前でかわし、
「なんでだ……!?　見えるのか!?」

一瞬で遠距離に逃げながら、驚愕の声を上げていた。その周囲では、男たちがほぼ全滅している。凄魔たちが唸りを上げてジークとセルソロスの戦いを見守った。
ジークが元通り、ぴたりと守りの構えに入る。ふとセルソロスが合点した顔になった。
「……いや、見えてるわけじゃねぇ。そうか……誘いやがったな」
ジークは堅く守りに入りつつ、わざと一部に隙を作ったのだ。隙のある部分をセルソロスに狙わせるためである。どこを狙われるか分かっていれば、どれほど相手が早く動こうとも、最低限の対処で反撃に転じることが出来る。
「ちっ、頭の良い野郎だ……」
舌打ちしつつ、セルソロスは内心でほくそ笑んだ。それならば、よくよくジークの気配を探り、わざと隙を作る部分以外を狙えば良いだけなのである。
じいっとジークを見つめるセルソロスの目が、いきなり見開かれた。
なんとジークが守りに入ったと見せかけ、凄まじい勢いで懐に飛び込んできたのだ。
「う……うぉっ⁉」
まさか剣が届くとは思わぬ距離である。それが一挙に詰まった。
ジークの剣が突き込まれ、セルソロスは慌てて横っ飛びに逃げた。ジークの気配を探るあまり自分の動きが完全に止まっていたのである。ジークの絶妙な駆け引きだった。

「く……くそっ、ずる賢い野郎だ」

慌てて体勢を整えたときには、既にジークはまた同じ守りの構えに入っている。

しかも先ほどとは状況が一変していた。ジークの右側には柱があり、背後には書棚がそびえ立っている。これでは上からか左からか、二択の攻撃しかない。周囲に何も遮るものがなかった状態と比べて、格段に身を守りやすくなっていた。

間合いを詰めて攻撃すると見せかけて、実はこの有利な位置に飛び込むのが、ジークの目的だったのだ。セルソロスの怒りは心頭に発した。しかもジークは、あからさまに左側に隙を作っている。完全な誘いであり、真っ向からの一騎打ちと大差なかった。

「この野郎っ！　いちいちむかつく野郎だっ！」

だがそのとき、ジークでさえ予測出来ぬはずの攻撃を、セルソロスは思いついていた。

たちまち凄惨な笑みを満面に浮かべるや――その姿が、ふっと消えた。瞬きする間もないほどの速度で走り、回り込んでいた。ジークの背後に。

背後を守ったつもりでいるジークを、その書棚ごと、刺し貫くのだ。逆にジークからは完全にセルソロスが見えない。有利な位置を求めたジークの死角であり自滅だった。

どすっ、と刃が体に潜り込む音がした。全く容赦のない一撃であった。

セルソロスは、半ば笑みを浮かべたまま――呆然となって、それを見た。

書棚ごと自分の胸を刺し貫く、ジークの銀剣を。

「こ、こ、この野郎……まさか……わざと……」

大量の血反吐を溢れさせながら呻いた。ジークは、セルソロスに背後を狙わせるため、あえて書棚を背にしたのだ。背後を守ると見せかけるために。隙を作って誘うのとは逆の、最も守ろうとする場所への誘い——それが、これまでの駆け引きの終着点だった。

そもそもジークにはセルソロスの動きが見えないのだ。わざわざ書棚の後ろに回れば、セルソロスからもジークが見えなくなる。完全にセルソロスの死角であり自滅だった。

「あ、悪魔みたいな野郎だ……」

それがセルソロスの最期の言葉となった。剣が引き抜かれ、セルソロスは大量の血をまき散らしながら倒れた。ジークは最初から最後まで、書棚に背を向けたままだ。

相手の絶命を察し、初めて背後を振り向いたとき——にわかに書棚の向こうで爆発的な堕気が生じた。ジークが飛び退くのと、氷の刃が書棚を吹き飛ばすのとが同時だった。

立て続けに生える氷柱を、ジークが猛然と剣でなぎ払った。

その向こうでは、氷の怪物がセルソロスの遺体から血を吸い尽くしている。

ジークが身構えるうちに、セルソロスはからからに干涸らび、やがて氷も消え去った。

なおもジークが警戒を解かずにいると、

「狼男ーっ！　大変、大変、ノヴィアとキリが大変だよーっ！」
　アリスハートの金の輝きが、書庫に飛び込んできた。
　完全な膠着状態だった。
　キリの体から溢れ出ようとする氷が、ノヴィアの視覚の力で、ぴたりと抑えられている。
少しでもノヴィアの力が弱まれば、一瞬で氷の刃が荒れ狂う。キリの胸や腹や、足からさえも、じわじわと氷が出現しようとしていた。
「う……うわっ、さっきより大変なことになってるっ！」
　アリスハートの声が上がった。駆けつけるジークの姿を、キリだけが振り返った。
「ノ、ノヴィアが……。ジーク、お願い……ノヴィアを助けて……」
　ノヴィアは懸命にその視覚の力で氷を抑え、ほとんど瞬きすら出来ないでいる。
「──よく持ちこたえた。もう少しだ」
　ジークが近寄って二人を励ます。そのジークへ、また別の者が声をかけた。
「ふふ……セルソロスのように簡単には片付けられませんよ。どうします……ジーク」
　なんと足下に転がる、アキレスの氷人形の首が、喋っていた。
　ジークはその首を一瞥しつつ、何も言わずに、すっとキリの背後に回った。

「じっとしていろ、キリ。痛みは一瞬だ」
断固とした声で告げた。ジークが剣を構えるのが、気配でキリにも分かった。
キリは呆然となり、すぐに、ぎゅっと目をつぶった。
「お願い……ジーク」
歯を食いしばって言った。ジークはすべきことをちゃんと知っていた。自分が頼むまでもなく——キリはそう思った。キリに出来ることは、黙って斬られることだけだった。
「やはり、あなたは、死とともにある人だ……ジーク」
アキレスの首が、凄まじい笑みを浮かべた。
「魔獣に侵された者を救うのは至難……ひと思いに斬りなさい。そしてその子供も葬りなさい……あなたが自分の従士を葬ったように」
キリは絶望に震えた。目尻に涙がにじみ、このまま気を失うのではないかと思えるほどの緊張に襲われた。そしてふと——感覚がないほど凍えていた手に、温もりを感じた。
「信じなさい、私たちを」
ノヴィアの凛とした声が聞こえた。気づけば、しっかりと手を握ってくれていた。温かい手だった。キリの体から力が抜けた。ノヴィアの手の温かさだけがキリの心を満たした。
ジークの、通常は剣には使わぬ左手が、柄に当てられた。

たちまち左腕の堕気が刃で発露し、青白い炎となって燃え上がったとき――
突如としてキリの背から、氷の刃が爆発的に生え伸び、ジークに襲いかかった。
ノヴィアが封じたのは前面だけで、キリの背後には視界が届いていないのだ。
ジークは動じず、猛然と剣をなぎ払っている。
たった一度の剣風が、氷の刃を、ことごとく砕き散らした。
そして氷の破片が舞い散る中――剣から左手が離れるや、にわかに雷花を迸らせ、
「ジーク・ヴァールハイトが招く！」
そのまま、なんと、掌をキリの背に叩きつけていた。
青白い稲妻がキリの全身を駆け巡り、烈風が吹き荒れた。キリの体中を燃えるような熱が駆け巡った。あまりのことに目を見開き、叫ぶことも動くことも出来なかった。
稲妻が収束し、ジークが左手を引いた。キリの背中から、ずるずると氷の塊が引きずり出されてゆく。それとともにノヴィアの目の前で、氷の刃が引っ込んでいった。
やがてキリの体から現れていた氷が消え――ジークが、それを放り出した。
ごとっ。重々しい音を立てて氷が落ちた。どうやってキリの中に入っていたかと思うほどの大きさである。その〈蛭氷〉の一部を、ジークの剣が一刀両断した。
氷の塊が解け崩れる様子を、アキレスの首が、歯を軋らせて見ていた。

「なんという力……我が魔獣の分身を、たやすく支配した……」
その首の前にジークが立った。アキレスが、よどんだ怒りをこめて言った。
「ふふ、なぜ助けたのです。聖印を刻まれた子の末路は知っているでしょう……」
「……本物のお前は今頃、郵政舎か？」
アキレスを遮り、ジークが懐から郵便を取り出す。先ほどセルソロスと戦った場所——二羽の鳩が手紙をくわえる紋章が掲げられた方の書庫で手に入れたものだった。
「宛先不明の郵便——カスバルの手紙が、お前たちの連絡手段だ。宛先不明で発送することで記録を残さない……単純だが効果的だ。ただし、仕分けが済むまで手が出せない管理の厳重さが裏目に出たな。まだだいぶ密書が残っている」
「ふ……ふふ……この短期間で、何が分かったというのです……？」
「特定の字をわざと間違え、どの字が間違っているかで密書かどうか判断しているな」
ジークは懐から、さらに郵便の束を出してアキレスの首の周囲に放った。
アキレスの首が、ぴしぴしと音を立てて、ささくれだった。
「戦場で使われる暗号の応用だ。たとえば第七区三番街十番地……七と三と十……合計で二十になれば、物資運搬の計画書。合計で十が反勢力からの報告という具合だろう」
「ふ……。ふふふ……許しませんよ……。あなたを……決して……」

「暗号で、同盟者からの連絡も選別出来る……レオニスからの密書もあるはずだな」
アキレスが、かっと口を開いた。その喉からいきなり氷柱が生え、ジークの顔を狙った。
鋭い音とともに、氷柱が砕けた。ジークは、無造作に剣を振るって、
「望み通り葬ってやろう……お前という亡霊を」
冷然と告げ、アキレスの首を斬って棄てた。

「痛ってぇー……。一瞬どころじゃねぇよ。まだ痛ぇよぉ……」
キリは情けなさそうに背中を撫でる。アリスハートが心配顔で一緒に撫でてやる。
「あの稲妻で死んじゃうかと思ったわよぉ……大丈夫ぅ？」
「助かったんだから、我慢なさい」
ノヴィアがぴしりと言う。キリは申し訳なさそうに、ノヴィアの手や足の傷を見た。
「ごめんな……怪我させて。お前の方が、痛かったろ……」
「何を馬鹿なことを言ってるの」
ノヴィアは心底から呆れたような様子でいる。キリは思わずむっとなった。
「ば、馬鹿って……何が馬鹿なんだよっ」
「馬鹿は馬鹿よ」

冷たく言い放った。懐から紙片を取り出し、ひらひらと振ってみせる。
「この……あなたの手紙の方が、よっぽど痛かったんだから……」
悲しそうにうつむくノヴィアに、キリがおろおろとなる。
「ご……ごめん……。俺……だって……」
ひょいとノヴィアは顔を上げ、じろりとキリを睨み、
「こんなものは、こうです」
紙片をくしゃくしゃに握り潰すや、
「えいっ」
河にぽいっと投げ棄ててしまった。ノヴィアにはきわめて珍しい、アリスハートが呆れ返るほどの容赦のなさだった。キリが河面に消え去る紙片に、泣きそうになる。
「ひ、ひでぇ……。俺だって頑張って書いたんだぞ。それをお前……」
「あんなものに頑張らなくても結構です。それより、これ……読めたんですか」
ノヴィアは新たに手紙を取り出して言った。アキレスが封を破った、ノヴィアからの手紙である。キリはふくれっつらになって、かぶりを振った。
「蛭野郎が読んだのを聞いただけだよ。そんな難しいの、俺に読めるわけないだろ」
「では三日以内に読めるようにします」

「み、三日!?　む、無理だよ……!」
仰天するキリに、ノヴィアがぐっと迫った。
「一緒に旅するために必要なんです!!　いちいち口答えするんじゃありません!!」
もの凄い怒鳴り声に、キリがぎょっとなった。それからふと、ぽかんとなり、
「一緒にって……」
「絶対に逃がしませんからね。分かりましたか。分かったら返事っ!!」
「は、はい……」
「ここであなたに居なくなられたら、承認書まで作った私の立場がないでしょう」
「う、うん……」
「確かに、あなたは聖道女になることで**ジーク様の同行者ではなく**、**私の同行者**になるわけですが、この際、そんなことにこだわっている場合じゃないでしょう?」
「え……それって……」
「良いですか。これから三日間、朝から晩まで、私があなたを見張ってますからね」
キリには正直、何が何だか訳が分からない。だがノヴィアが恐ろしく真剣なのは確かだった。この自分のために。それだけで十分だった。
キリは、うん、とうなずいた。

5

見知らぬ一室で、トールは目覚めた。
だいぶ時間が経っていることが体の調子で分かった。気絶させられたまま、すっかり眠り込んでしまったのだ。ここ何日も、ぶっ通しで馬を走らせ続けた疲労のせいだろう。
その疲労がだいぶ回復しているのを感じながら、部屋を出た。
古い聖堂らしい。瀟洒な廊下も、感じの良い中庭も無人だ。理由はすぐに分かった。あちこちに破壊と血の跡があるのだ。聖堂の人間を皆殺しにして乗っ取ったのだろう。
人の気配を探すうち、いきなり大河に出くわした。河岸に設けられた聖堂だったのだ。
どこまでも流れてゆくネルヴァ河に目を向けていると、ふいに声をかけられた。
「聖地からの密使……喜んで迎え入れよう。トール・ヴュラード……大事はないかね」
「絞め殺されるかと思いました」
またもや全く気配を読めなかった。その悔しさを押し隠し、トールは淡々と言った。
「ここはどこですか、ヴィクトール・ドラクロワ卿閣下？」
圧倒的な存在感が、傍らに来た。トールはそれでも平静さを保つよう努めた。
「カスバルの街から、船で一日ほど下った場所だ」

ドラクロワは、トールと並んで河面を眺めながら、言った。では、ずいぶんと運ばれて来たことになる。だがいきなりカスバルの街の名が出た理由が、咄嗟に分からなかった。
「誤った返書の内容を、訂正したいそうだな？」
いきなりドラクロワの群青の目が、こちらを向いた。相手の心の全てを一瞬で暴くような眼差しだった。トールは一切の感情を消し去り、こくっとうなずいた。
「私の一番の急務です」
その点だけは素直に告げた。だが内容まで喋る気は全くない。ノヴィアとレオニスの血縁を知られては、ドラクロワにどのように利用されるか分かったものではなかった。
それどころか、この地でアキレスと衝突した場合、ドラクロワとその配下とも敵対する可能性があった。トールの味方は、一人もいないのである。
「そうか……ならば、その急務を果たすがいい」
意外にもドラクロワは、あっさりと言った。なら、最初から部下にもそう言いつけておいて欲しいものだ――そう思いつつも、内心の安堵を隠せないトールだった。
「では、私は急いでカスバルの街に……」
「その必要はない。密書はここにある」
その一言で、氷を飲まされたように言葉を失った。

ドラクロワがすっと手を振ると、聖堂から男が現れた。トールを気絶させてここまで運んだ男――ロイヒルトである。その手に、幾つかの書状が束になって握られている。
ドラクロワは優しい微笑を浮かべて、トールをうながした。
「カスバルの街にジークが現れた時点で、連絡経路を変更したのだ。受け取るがいい」
トールは危うく震えそうになりながら、書状の束を受け取った。まさかドラクロワから渡されるとは――レオニスが駆使する情報経路が、ことごとく読まれている証拠だった。
トールは確かに、目的の返書があることを認めた。どれも封は切られていないが、中身を見られていない証拠にはならない。幾らでも細工できるのだ。果たして返書がアキレスの手に渡るのと、今ドラクロワから渡されたのと、どちらが良かったか――
「これで急務は果たされたわけだな、トールよ。以後は私と、行動をともにするがいい。お前から聖地に書状を送るときは、私が、無事に届くよう、はからおう」
ドラクロワが、穏やかに言う。まるで既にトールが自分の部下となったような口調だ。
トールは一瞬、ドラクロワの意図を探るべきか、このまま殺そうとすべきか迷った。
だがドラクロワばかりかロイヒルトまでいては殺されるのは間違いなく自分の方だ。
今はまだ殺されるわけにはいかない。返書の内容がアキレスに伝わらないことを確認するまで。しっかりとアキレスを抑えられるまでは――それが、トールの結論だった。

「はい……ドラクロワ様」
あえて相手の懐に飛び込むように——トールは、従順に頭を垂れていた。

6

ジークが、死者を葬り、カスバルの書庫の調査を終えた翌日——
街の修道院に、緊張するノヴィアとキリの姿があった。
院長が誓約文を唱え、アリスハートが固唾を呑み、ジークは悠然と儀式を眺めている。
「では……聖道女の位階に入る方、この誓約書を読み上げなさい」
院長が数枚の誓約書をキリに渡す。これは相手の基礎教養を試すためで、最低限の読み書きが出来ねば、どんな資格も与えられない。
キリは大きな声で読んでいった。〈銀の乙女〉として道徳を重んじ、民衆のために尽くし、大義を守り……堅苦しい言葉ばかりが並ぶ誓約書——ノヴィアが懸命に教えようとしてくれていた言葉ばかりがそこにあった。
このためにノヴィアは言葉を教えてくれていたのだ。キリはやっとそれを理解していた。
ときおりキリがとちり、傍らのノヴィアがひやりとした。一度だけつっかえ、ノヴィアが口をすぼめて助けかけたが、キリは誓約書だけを見つめ、とうとうその言葉を読んだ。

そうして最後まで自力で読み、文章を書く段になった。
誓約書の空欄に、院長が唱える〈銀の乙女〉の教えを書き込むのである。
キリは、ぎざぎざの字で必死にそれを書き、最後に自分の名を記した。それをノヴィアが手に取り、自分がキリを聖道女に推薦し、同行する者であることを告げた。
誓約書を渡された院長は、字の汚さに少し驚いた顔になった。
キリが恥ずかしげに縮こまるが、ノヴィアはいかにも誇らしげだ。自分がつききりで教えたキリが、一つの成果を遂げたのである。その字はノヴィアの誇りそのものだった。
その態度に、キリもやがて堂々と胸を張った。院長も微笑んで紋章をノヴィアに渡した。
「これより、新たな聖道女を、我らの位階に迎えましょう」
院長の言葉とともにノヴィアは紋章を掲げ、キリと向かい合った。
おずおずと頭を下げるキリに、ノヴィアが、大きな声で告げた。
「キリ・ラフィエット——あなたを〈銀の乙女〉の最初に位階に迎えます。あなたの道に、輝きのあらんことを」
随分と小さい見習い用の紋章である。だがそれこそご褒美の正体だった。
それをノヴィアがキリの首にかけたとき、キリはキリ・ラフィエットになった。
キリが何かを持った最初の瞬間——それをノヴィアが与えた瞬間だった。

「〈踏む者（ラフイエット）〉——俺の紋章……か」
修道院を出たキリは、壊（こわ）れ物でも扱（あつか）うかのように、そっと胸の紋章を撫（な）でている。
初めて見るキリのそんないじらしい姿（すがた）に、ノヴィアも思わず笑みが零（こぼ）れる。
「そうですよ、キリ。聖道女となったからには、〈銀の乙女〉としての責任（せきにん）を……」
「これでもう字の練習しなくて良いんだぁ」
「道徳を重んじ、民のために……」
「これさえありゃ〈銀の乙女〉が味方してくれるんだぁ」
ぐっと胸の紋章を握（にぎ）りしめ、キリは晴れ晴れとした声を上げた。ノヴィアが沈黙（ちんもく）した。
「これで、気に入らない聖堂の連中だって平気で蹴（け）っ飛ばせるってわけだ。ついでに、そいつらから、たっぷり金をかっさらってやるかぁ」
キリは何とも朗（ほが）らかな笑顔で、ノヴィアを振り返った。
「なあ、俺とお前が力を合わせりゃ……」
びゅん。キリの顔のすぐそばを、猛烈（もうれつ）な勢（いきお）いで金の矢が走り抜（ぬ）けた。続けて、おどろおどろしいノヴィアの声音（こわね）が響（ひび）いた。
「……一緒（いっしょ）に盗賊（とうぞく）になるための紋章ですか」

途端にキリが両手を上げて後ずさり、
「ま、待て、ノヴィア。冗談だっての、冗談……」
「あなたが言うと、冗談に聞こえません！」
そこへアリスハートが修道院から現れ、
「いやぁ無事に終わって良かっ……」
深々と壁に突き刺さった矢に、絶句した。
「今後、同行者として勝手は許しませんよ！　高位の私をきちんと敬いなさい！」
「なんだよ、大っきな紋章持ってるからって偉っそうに！　俺の勝手だろっ！」
「言うことを聞かなければ、私が責任をもって、あなたから紋章を剝奪します！」
「奪られるもんかよっ。これは俺のもんだ！　番犬女は引っ込んでろっ！」
「も、もう一度言ってみなさい、この泥棒猫っ！　今すぐ紋章を剝奪するわよっ！」
ジークが院長とともに修道院から出てきた。
「――また揉めてるのか」
「なんでこうなるのぉ。どうにかしてよぉ」
ジークは、全く気にもせず、きっぱりと言った。
「放っておけ」

がっくりくるアリスハートをよそに、ノヴィアとキリの喧噪はしばらく続いた。

7

ついさっきまで罪人たちの首が並んで合唱し、血を吐きながらレオニスを祝福していた。廷臣たちはみな、己の口を両手で塞いで馬鹿のように立っているだけだ。

腐り落ちた自分の両足を抱えて王座に座るレオニスに、血まみれの聖母像が厳かに歩み寄ってトールは今お前の父親と一緒にノヴィアに宛てて手紙を書いている最中だがドラクロワの足音が気になるため少し遅れているという報告を受けたところで、ふと目が覚めた。

「うんざりだ……」

呟いた唇さえ、けだるい熱を帯びていた。目を開いても、そこが現実なのか、それとも自分の狂った頭がでっち上げた地獄の延長なのかも定かではない。汗が首筋や脇腹にしたたり、生暖かい泥沼の中から這い上がってきたばかりのような気持ちにさせる。

レオニスは目蓋の重さをぎりぎり持ち上げるようにして、わざと視界を霞ませた。目を閉じるとも開くともつかないところで目蓋を震わせる。いかにも憔悴した感じがして嫌だが、仕方なかった。目を開いても閉じても生首が見える気がするため、かろうじて意識を取り戻したときは、こうして目を霞ませておかねば不安だった。

レオニスはこのときばかりは自分の記憶力を恨んだ。斬首させた罪人たちの顔をいちいち覚えているのである。誰をどの順番で断頭台に登らせたかも正確に言えた。夢の中で首が並んでいると、あいつとあいつの順番が違うから置き換えようなどと思ったりする。

その全ての命が自分の一言で露と消えた。命が紙のようだった。自由に折りたたみ、引き裂き、紙吹雪を作って遊んだ気分だ。それを思い出すと寒気と吐き気で死にそうになる。

「なぜ止めない……誰も……」

自分自身に対するのと同じくらい、廷臣、付き人、官吏ら全員に対し呆れる思いだった。罪人の処罰という格好の趣味を見つけてしまった領主の暴虐を、誰も止めないとは。

彼らは自分と同じような悪夢を見るだろうか？　もちろん見ないだろう。ただ命令に従って働いただけなのだ——彼らはそう思っているに違いない。

彼ら全員の家族や友人や恋人を、適当な罪をでっち上げて拘束させ、彼ら自身に殺させてやろうか。そうすれば彼らも同じように悪夢に苛まれる夜を過ごすに違いない。そんな嗜虐心が胸の底で疼いたが、体を蝕む熱のせいですぐに消えた。

「脆いもんだ……領主一人に頼る国なんて……」

代わりに、そのことを思った。

レオニスが倒れたときの廷臣たちのうろたえぶりは見ていて笑えるほどだった。

それほど一国の執政をレオニスに預けきっていたのだ。僕を何歳だと思ってるんだ。父の遺言を読み返せ馬鹿ども。常に僕を監視し、戒め、補佐しろと書いてあるはずだぞ。ただしその愚かさは、レオニス自身の盲点でもある。自分がいない場合を、まるで考えに入れていなかったのだ。万が一このまま熱病でレオニスが死ねば、聖地シャイオンは、後継者を巡って混乱に陥る。聖地がめざましい発展を遂げている分、反動も大きいはずだ。富を奪い合う抗争が、またたく間に聖地と周囲の隣国を巻き込んで勃発するだろう。

　そして聖地は、間違いなく荒廃する。

　そうならないための方策を全く用意していなかった。廷臣たちの合議は形骸化している。聖地全体のために知恵を出し合う場さえない。全てレオニスの計算と判断によって運営されていた。なんだこの馬鹿馬鹿しい政治体制は。聖地の財政が豊かだから良いものの、ひとたび貧窮すれば、殺し合い奪い合う戦乱に向かってまっしぐらだ。

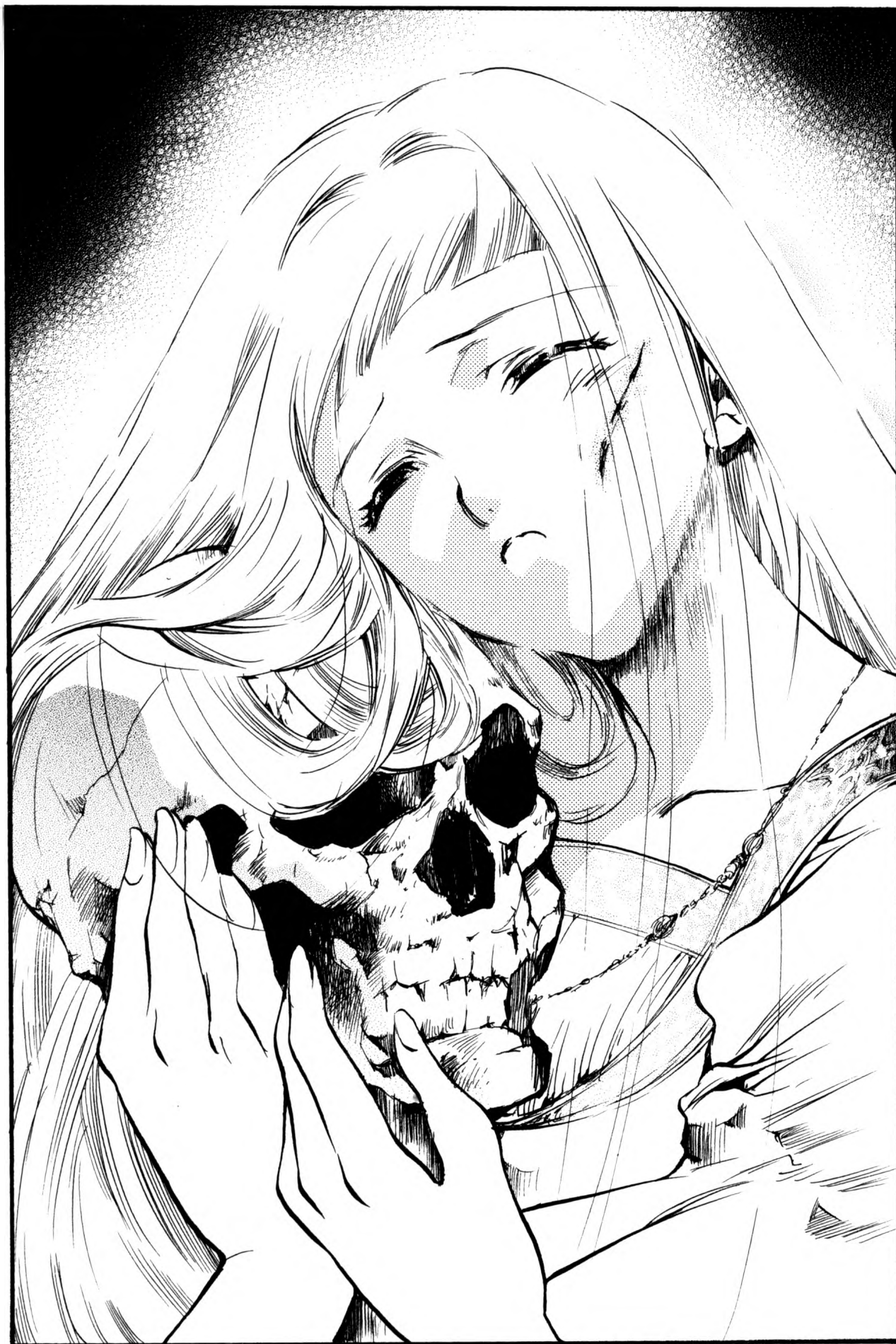
「独裁者なんて……ろくなもんじゃない。誰も……何が正しいかも分からなくなる」

　やがて段々とまた現実かも夢かも分からない状態に落ち込んでいった。必死で正気を保とうとするが体力も気力も湧いてこない。このまま狂った世界に閉じ込められ、二度とまともな生活が送れなくなるのではという恐怖に、ただただ呑み込まれるしかなかった。

もう嫌だ。また悪夢が始まる。何が正しいのかも分からなくなる。もう、いっそ――

そのとき、ふと部屋に人がいることを思い出していた。
「レティーシャ……」
夢うつつの意識で呼びかけた。本当にレティーシャがそこにいるかどうかも実は分からない。ただ廷臣たちがレティーシャを追っ払おうとしていたのを何となく覚えていた。
「死を見たいお前の気持ちが分かるよ……レティーシャ。誰かに死を見せたい気持ちが」
ほとんど魘されているような声音だった。返事はない。
レオニスは疲労で目が閉じられてしまう怖さを紛らわすためだけに、必死に声を搾った。
「お前は……本当は、何が見たいんだ……？　綺麗なものだけか……？　お前が僕に見いだそうとしているものも、今なら分かる気がする……。だが……本当にそれだけか？　お前にも……見えてないものがあるんじゃないのか？　お前の兄様は……なぜ死んだ？　未来……それが分かるなんてこと……あるのか……レティーシャ……答えろ……」
虚空に向かって声を零し、レオニスはやがてまた血の熱を帯びた悪夢へと沈んでいった。
結論から言ってレティーシャはそのとき、珍しくレオニスの寝室にはいなかった。
かたかた鳴る頭蓋骨を手に、執務室にいた。最近ではレティーシャがそこに入ることを、誰も咎めなくなっている。レオニスが平静のときは彫刻の依頼のために頻繁に呼び出され

ていたせいもあるが、やはり犬猫のようにしか城の者には思われていないせいであろう。裸足でうろつき回るレティーシャに、よく給仕の者などが、お菓子をあげたりする。
そういうときレティーシャの態度は二つに分かれる。一瞥もせず通り過ぎるか、礼も言わずに、ぽくぽく妙な音を立てて菓子を食らうかである。その音がまた小動物的な可愛らしさを演出するらしい。食い終わるや否や無言で立ち去るが誰も不満に思わない。また菓子でも余ったらレティーシャにやろうと考えるばかりである。
執務室に入ると小綺麗さが目につく。トールの鞭に切り刻まれた家具が片付けられ、壁や窓も修繕したばかりだからだろう。新しい机の上に、山と積まれた書状があった。
「ここね、兄様。この中ね、兄様。あるのね、兄様。ふー、ふー、ふー」
どことなく嬉しげに机に歩み寄り、頭蓋骨を腕に抱えたまま、もう一方の手でがさがさと書状を選り分ける。聖地シャイオンの領主に宛てて送られてくる様々な書状だが、政治を抜きにしたレオニス個人宛の手紙は皆無といっていい。かと思うと、
「あ……兄様。あったよ、兄様。これね、兄様」
ひょいと書状の一つを手に取った。紋章もなければ飾りっ気もない。何の変哲もない、ただの手紙と変わりなかった。くるりと書状を裏返すと、差出人の名があった。
トール・ヴュラード——聖地を出奔した者からの、レオニスへの手紙である。

たちまちレティーシャの目に、どんよりとした光が溜まる。ほっぺたの傷はかさぶたになっているが、何度もひっかいたりしたため傷の端がちょっと膿んでいた。
「……ふー、馬鹿、ふー。死んじゃえ、ふー」
ぼそぼそ呟いたかと思うと、その口から世にも奇妙な歌声が迸った。
「ふんぐるれるろごむぐだらえげむぐあうあえれお死んじゃえむるろぐごあばが♪」
書状を持つ手の陰から、うじゃうじゃと蠅が湧き出す。羽音を唸らせて書状にたかり、一秒とかからず食い尽くすかに見えたそのとき。
かっかかっ――ひときわ強く頭蓋骨が歯を鳴らした。
「兄様？」
レティーシャの碧の目が、きょとんと見開かれる。唸るような羽音が消え、
「兄様……なんで？　よすの、兄様？」
蠅どもが、どろりとした黒い液体となって、レティーシャの手の陰へと消えてゆく。
「この手紙なの、兄様？　これが未来？　兄様？　レオニス様の未来？」
かっ――と歯が鳴る。レティーシャは、ぽかんと口を開け、
「違う未来？……流れて行くの？」
書状を握りしめたまま、呆然と立ちつくすようだった。

「あたし、やだ……兄様。兄様にも分からない未来なんて……やだ。兄様の未来がいい、兄様。なに考えてるの……兄様……なんで？　ふぅん……そう、うん、へえ……」
レティーシャはしきりにうなずいた。書状を持っていた手を、だらりと垂らす。
「そうなの、兄様。このままだとレオニス様、みんなに首をあげちゃうの。昔、兄様がしたみたいに。みんなに首をあげちゃうの、兄様。そうなの……兄様。うん、分かるよ兄様。そんなの、あたしもやだよ、兄様。未来はまだまだ先だもの、兄様」
頭蓋骨を抱きしめ、頬をすり寄せた。幼児が泣くような仕草だった。
「兄様……もう一度会いたいのね。うん、兄様。兄様を首だけにしちゃった人にね……。あたしがその人、綺麗にするね……兄様。きっと綺麗にするよ……兄様。あたしたちみたいに……兄様。みんなみんな、あたしたちみたいにするんだよ……兄様」
そっと頭蓋骨から頬を離した。窓を振り返る。書状を握りしめ、トールが逃げ去った方を見た。そうして、ぽそっと呟いた。
「流れて行くね……兄様。みんな流れて行くね……」
河面を滑る船の上――互いに刺々しい嫌悪をあらわにする二人の男がいた。
「まさか、あなたが来るとはねえ。偉大なるネルヴァ河の藻屑となりに来ましたか？」

アキレスは凶暴な光を目にたたえて微笑んでいる。トールはしれっと返した。
「まあ、そのようなところです」
事実、死ぬために来たのだ。命を差し出してレオニスに忠言する。そのためにノヴィアを守る。アキレスを抑える。ドラクロワの意図を探る。
それだけのことをしようとして生きて帰れるとは思っていない。生きて帰ったところでレオニスに処刑されるだけだ。無断の出奔は死罪であることくらい、わきまえている。
願わくばジークと一対一で戦って殺されたい。だが、それも叶うかどうか――
一方アキレスは、そんなトールの思いなど知ったことではない。
この上ない邪魔者に怒り狂わんばかりだった。だがトールの同行を要請したのがドラクロワその人であるため、うかつに反対することも出来ない。それが何とも癪に障る。
「狩りの主導権は私にあります。レオニス様の御意志でもあることを忘れないように」
声に、隙あらば始末してやると言わんばかりの殺気がこもっていた。
「はい。あなたが、どのようにしてジークを狩るか見届けさせて頂きます」
トールは淡々と強調した。アキレスが目にどぎつい怒りをあらわしたところを見ると、ノヴィア抹殺の返書を受け取っていないのは間違いない。
ぎりぎり間に合った――内心の安堵を隠すのに一苦労のトールだった。

たとえ今、アキレスがトールについてレオニスに抗議しても無意味だ。ドラクロワがトールを迎えた以上、レオニスも今さら派遣するつもりはありませんでしたとは言えない。

しかもドラクロワは既に、約束した秘儀の情報をレオニスに送る算段を整えている。

今トールがここにいることを否定すれば、同盟に齟齬をきたしかねなかった。

「ジークの従士に関しては、いずれレオニス様も考え直すに違いありませんよ。あるいは、もう気が変わっているかもしれません。ただ連絡が滞っているだけでね」

非常に正しいアキレスの指摘だが、トールは無表情を保っている。

アキレスは非人間的な高さにまで唇を吊り上げ、ぞっとする笑みを浮かべた。

「小娘の命の心配などせず、あなたは、せいぜいドラクロワに媚を売っていなさい」

これまた実に正しい言葉だとトールは思う。ドラクロワの思惑次第で、トールはいつでも不要となる。そうなればアキレスは問答無用でトールを殺しにかかるだろう。

現在ドラクロワは謀議のため、とある街に先行している。トールには、アキレスと合流してから〈運びゆく者〉の一団が操る船で来るようにと指示していた。

問題はあの叛逆者が何をトールに期待しているかだ。トールにしか出来ないことをさせたいらしいが、それが何かは不明である。〈運びゆく者〉もトールを戦力と考えていない。

ならば密偵活動か——それとも以前のように、書状のやり取りを任せたいのか。

それなら渡りに船だ。もしレオニスが新たにノヴィア抹殺の指令を出している場合、自分がそれを握り潰さねばならない。ドラクロワ直属になれば、それもたやすいだろう。またレオニスに連絡する上でも便利だった。書状のやり取りは自分に頼め――そうドラクロワは言った。そしてトールは、あっさりそれに甘えた。
レオニスに手紙を書き、ドラクロワに渡したのである。ドラクロワの真意を試すためでもあったが、トールの正直な思いを書き綴った手紙であることも確かだった。
届いて欲しい――心からそう思う。手紙だけではなく、言葉に込めた思いも一緒に。
その思いが自分の中で生まれた同じ深さで、レオニスの心に、届いて欲しかった。
まさかレオニスが熱と悪夢に脅かされているとは、トールもアキレスも想像だにしない。
やがて船が街に着いた。二人は険悪な雰囲気をたたえながら河港に足を踏み入れた。
すぐに街の有力者が手配した馬車に乗り、移動している。
着いた先は、市街地から離れた邸宅だ。街の貴人の別宅だろう。豪勢な造りの中、当然のようにくつろぐドラクロワがいた。逃亡者とは思えぬ振る舞いである。幻術の達人であるドラクロワにとっては潜伏も逃走も、普通に旅をしているのと大差ないらしい。
「ご苦労。カスバルの街での働きは聞いている」
ゆったりとした姿勢のまま、ドラクロワが微笑んだ。労っているのか、ジークに撃退さ

れたことを嘲っているのかも分からない。ただそうして声をかけられるだけで、空気が泥にでも変わったかのような重々しさを感じさせた。
「は……かくなる上は、さらなる入念さをもって策を仕掛けるつもりでございます」
アキレスは頭を垂れ、不敵な笑みを浮かべた。だがそれもドラクロワの前では虚勢に等しい。アキレスの内心の畏怖を、トールは敏感に察していた。
「お前に、一つ、助言を与えよう」
ドラクロワの言葉に、アキレスが顔を上げた。ドラクロワは優しげな口調で告げた。
「過去だ……それが最大の弱点だ。ジークは決して過去を振り払えない。過去から来るもの全てを無視出来ない。お前の存在のようにだ……アキレスよ。かつて王弟派の堕法士として働いていたお前との因縁を、ジークは無視しきれまい」
「は……。確かに……」
返答しつつ、アキレスは戦慄していた。ドラクロワは自分の情報を深くつかんでいる。誰も知らないはずの自分の過去を。因縁——なぜジークを恨むのかまでも。いったいどういう情報網を持っていればこの短期間でそれだけのことをつかめるのか。
その傍らで、トールは別のことに驚いていた。
ドラクロワが、ジークの名を口にしたのだ。これまで頑ななまでに、あの男としか呼ば

なかったのに——何かがドラクロワの中で変化したのか？　トールは胸騒ぎを覚えた。
ドラクロワはいったい自分やアキレスに何を期待している？　ただ単にジークを撃退するための協力者などとは決して思ってはいまい。ならばいったい——
「アキレス・ツェペット……お前の力——氷の魔獣の性質は、非常に面白い」
ふいにドラクロワが立ち上がった。咄嗟にトールもアキレスも身をのけぞらせていた。いきなり巨大な何かが身を起こしたような錯覚を覚えたのだ。それほど苛烈な気配を発しながらも、ドラクロワの顔は相手を安らげるような微笑をたたえている。
ドラクロワはアキレスに歩み寄り、右手を差し出した。トールは思わず息をのんだ。
「これを、お前に託そう……」
ドラクロワが常に肌身離さず所持していた物——それをアキレスは恭しく受け取った。
「これは……〈銀の乙女〉の紋章？」
十字形の紋章——刻まれた称号は〈癒す者〉、高位の紋章だ。傍らのトールにさえ、紋章にやどる強い聖性が感じられた。それは元の持ち主の聖性の強さそのものだ。
「かつてジークとともにいた者の遺品だ……。ジークが最も心許した者の思いが、それに込められている。使い道は……分かるな？」
「はい。私めの魔獣に、この持ち主の姿を擬態させ、ジークを襲わせましょう」

アキレスが即答する。ドラクロワは、その通りだと誉めるように優しく目を細めている。
だがトールにはドラクロワが今にも憤怒をあらわすような気がしてならなかった。
本来ならドラクロワは、誰かがその紋章に触れるなど決して許さないのではないか——
だがやむを得ぬ事情から、それをアキレスに託すことを決意したのでは……
トールはそう推察した。そしてアキレスが質問を放ったとき、推察が確信に変わった。
「最高の氷人形を作るためにも……その人物の名を伺ってもよろしいでしょうか？」
一瞬、トールは、ドラクロワの双眸が燃えるような輝きをやどすのを見た気がした。
だがドラクロワは、あくまで表面上はひどく穏やかに微笑みながら——
「シーラ・リヴィエール」
と言った。

第四章　エノワの灯

1

あれは、いつのことだったろう――
「海ってどんなものなんだ、ドラクロワ？」
赤髪の騎士は、若々しい顔をむっつりしかめさせて訊いた。そんなことも知らないのかと馬鹿にされたくない反面、未知なるものへの興味を抑えられずにいる――そういう表情だった。すると、銀髪の男が真面目な口調でそれに答えて言った。
「広大だ……果てしないほどに。海が荒れ狂えば人間など塵に等しい。万軍さえも、ひと波で呑み込まれてしまう」
赤髪の騎士は、ごくっと唾を呑み、
「……そんな所に行くのは危険じゃないのか？」
「ほう。戦場では恐れ知らずのジークも、未知なるものには恐怖を抱くらしいな」

いたずらっぽい顔で男が言う。だが騎士は、
「戦場が怖くないなんて誰が言った。俺はいつだって戦いが怖い。俺は怖がりだ」
むしろ胸を張って宣言したものだ。男はこらえきれぬ様子で笑いを零した。
「我が最強の軍団たる男の言葉……聖法庁の騎士たちが聞けばさぞ仰天するだろうな」
「恐れ知らずなことを自慢する奴ほど、無駄死にする」
むっとなる騎士に、男は分かっているというように微笑んだ。男自身も、それを――戦いを恐れぬと公言する者ほど実は恐慌しやすく、無謀に死ぬことを知っているのだ。
「お前がやれと言うなら、いつでもどこでも戦う。たとえ海だろうと何だろうとだ」
騎士がむきになった。男はまたうなずいた。そのことも男はよく知っていた。男がひとたび命じれば、騎士はたとえ未知の戦場だろうと躊躇うことなく力の限り戦うだろう。
「それほど恐ろしい場所なら、なぜ事前に対策を協議しないんだ、ドラクロワ?」
騎士が詰問口調になる。完全に戦いの緊迫を帯びた顔だ。男は、ちょっとやり過ぎたかと反省するように頬をかき、
「まあ……実を言うと、そこまで用心するものでもなくてな。海は必ずしも……」
「恐ろしいばかりではないのよ、ジーク」
それまで黙って二人のやり取りを聞いていた女が、くすくす笑いながら口を挟んだ。

「海は美しいものでもあるの。その美しさは、どんな宝石にも優るわ」
「美しい……？」
ぽかんとなる騎士に、女がうなずく。騎士は思わずまじまじと女を見つめた。騎士にとって美しい者といえば、目の前にいる彼女のことだったからだ。
「海は、全てを受け入れ、全てを生み出すものよ。大陸中の河が注がれ……雨や風や神話でしか語られないようなものの全てが、そこからやって来る。その偉大さを知る者に、限りない恵みをもたらすもの。それが、海よ」
「……凄いな」
深々と感嘆の息をついた。何とも素直な反応である。女は微笑んで言った。
「あなたたち、の理想と同じよ、ジーク」
「同じ……？」
「全てがそこで終わり……そして全てがそこから始まる……海とはそういうものよ。あなたたちの理想の、あるべき姿……」
「それは少し違うな」
男が言って、ちらりと騎士を見た。騎士もすぐにその意図を察し、こう告げた。
「俺たち、の理想だ、シーラ。俺たち三人の」

女は少し驚いたように翡翠の目を見開き、やがて嬉しげな微笑がそのおもてに満ちた。
「ありがとう……ジーク……ドラクロワ」
騎士は鷹揚に肩をすくめた。ほとんど照れ隠しだった。
傍らで男が立ち上がり、雄大な河面へと目を向けながら、
「全てが終わり、全てが新しく始まる……シーラの言う通り、それが海だ。そして——」
それが我々の理想だ——と、言った。

溜息が出るほど美しい光景だった。
河の両岸に浮かぶ都市の無数の灯が、夜の河面に鮮やかに映っているのだ。灯の群は地上と河面の両方で輝き、その温かさと冷たさが同居したような光景に、
「うっわー、綺麗だなぁ」
キリが船の上から身を乗り出し、明るい声を上げた。その胸元では〈銀の乙女〉の見習い用の小さな紋章が揺れている。
「綺麗ねー、ほんと綺麗よ、ノヴィアぁ」
アリスハートも宙に浮かんで、のほほんと賛意を示す。ノヴィアはまるで構わず、
「観光ではないんです。キリもアリスハートも、少し静かにして下さい」

いつも通り、ぴしりと返していた。途端にキリが馬鹿にしたような笑みを浮かべ、
「こんな綺麗なもん見逃すなんて、せっかくの万里眼が勿体ねぇっての。なあジーク」
「……ゆっくりやればいい、ノヴィア」
ジークが言う。だがノヴィアは視覚の力を駆使しながら、頑固に返した。
「頑張ります。必ず見つけます」
そのノヴィアの肩を、ジークが軽く叩いた。励ましと感謝の込もった、本来ならノヴィアが驚喜する行為である。だがノヴィアは振り返りもせず、いっそう気負い立っている。
「絶対に……見つけてみせるのよ……。絶対に……」
そんなノヴィアにしばし目を当てつつ、やがてジークも河岸の闇に浮かぶ色鮮やかな灯の群に目を向けていた。
ネルヴァ河の宝石と謳われる、都市エノワの夜景であった。貿易で栄えに栄えた街で、美麗な建物が河岸に並び、河から引かれた水路が都市を網の目のように走っている。
その水路を巡る遊覧船の上に、ジークたちはいた。景色を楽しむためだけに都市を周回する船である。役人や貴族や聖堂の者が、談義や娯楽のために用いるものだ。
ここを訪れたのはカスバルの街で大量の密書を押さえたからだった。
それによればドラクロワは、この遊覧船で定期的に各地の有力者と密談しているらしい。

しかも近日中に、ここに来るという——

むろんジークが密書を押さえたことはドラクロワにも伝わっているだろう。そんな状況でドラクロワがのこのこ現れるはずがない。とっくに身を隠したと考えるのが普通である。

だが内容が内容だった。ドラクロワはここで動乱を起こすための最終的な声明を発するというのだ。自分からそう宣言しながら状況が不利だといって身を隠せば、有力者たちは呼応するに値しないとみなすだろう。

ここにドラクロワが現れるかどうかが、動乱が実現するかどうかを左右するのだ。

ジークにとっては、ここに自分がいることが重要だった。ドラクロワが現れればよし、現れねば、そのときはこれ以上の動乱を未然に防げる。

かくして船に立つジークは、夜景を見つめる一方、灯のどこかにいる相手に自分の姿を見せようとするようでもあった。自分を導く灯が、その夜景のどこかにあると信じて。

かつてともに理想を抱き合った男に、自分の存在を無言で訴えるように——

そんなジークの姿を見せられて、従士たるノヴィアが奮起しないわけがない。

何としても自分がジークの目となりドラクロワを見つけたかった。一方でノヴィアを意固地にさせる別の理由もある。キリだ。その傍若無人なまでの存在感である。

〈銀の乙女〉の紋章を得て以来、キリの存在は確然となった。平気でジークから任務の話を聞くし、親しげな態度も増すばかりである。それはノヴィアに対しても同じで、
「ほんっとノヴィアは真面目だなぁ。こうなりゃお前の分まで俺が楽しんでやるかぁ」
などと言いつつノヴィアの肩に腕を回し、楽しげに甲板から身を乗り出したものだ。遠くを見ていたせいで足下を疎かにしていたノヴィアは、危うく船外に倒れそうになった。
「か、河に落ちたらどうするんです！」
たまらず視界を戻し、キリを押しのけ宝杖を振るった。キリはひょいと跳んで避け、
「ははっ、そしたら俺が拾ってやるから安心しろよ」
そのまま甲板の向こう――暗い河面の上で、とん、と宙を踏んで船に戻ってきた。
「何度見ても、そのまま落っこちるんじゃないかと思ってひやひやするのよねぇ」
宙を自在に踏み歩く、〈踏む者〉の力にアリスハートが感心する。
「おっかねぇんだからノヴィアは。そんなんじゃジークに嫌われちまうぞ」
ノヴィアはどきっとして思わずジークを振り返るという我ながら情けないことをした。
だがジークは全く気にした風もなく、ちらりとノヴィアと目を合わせただけで、無言で夜景に目を戻している。
恥ずかしさで真っ赤になるノヴィアをよそに、キリはたちまち別のものに興味を移し、

「へえ、見ろよあの商館。凄い数の灯りだぜ。儲かってんだなあ。おい、あれの宝物庫の場所を教えろよ。きっと少しくらい盗んでも分かんないぜ」
「ばっ……馬鹿なことばかり言ってると、本当に紋章を剝奪しますよっ！」
キリを退け、ぷいっと顔を背ける。アリスハートが賢しげに、
「そうよぉ、少しは静かにして、じっとしてなきゃダメよぉ、キリ」
「チビもたまには良いことを言うな」
ぼそりとジークが口を挟む。ジークにとってアリスハートはやかましさの代名詞だった。
「チ、チビって言うなぁっ、この陰険狼男っ！」
「そうそう、アリスハートは小さいだけだもんな」
キリが笑って宥める。アリスハートは憤然と腕を組んでうなずいた。キリはにこにことジークの隣で甲板から身を乗り出すと、ふと目を細め、ぽつっと呟きを零した。
「ねえ……海は、この景色より綺麗かな」
「また違う美しさがある」
即答するジークに、キリと——そしてノヴィアが興味で目を丸くした。海を知らないという点では、キリもノヴィアも同じなのである。
「……ジークは、海を見たことがあるんだ」

ジークがうなずく。その二人の会話を、ノヴィアは背を向けながら聞いていた。
「ねえ……海ってどんなものなの？」
「広大だ、果てしないほどに。大陸中の河がそこへ注ぎ、雨や風や神話でしか語られないようなものがそこからやって来る」
ジークは灯の群に目を向けたまま、
「全てがそこで終わり……全てがそこから始まる。海とは、そういうものだ」
その胸中を追憶がよぎるのを感じていた。焦がれるような思いとともに、かつてともに理想を抱いた二人の男女の姿が目蓋に甦る。
過去――ジークはその男女とともにこのネルヴァ河一帯を訪れ、海岸へと旅したのだ。理想を実現するための支援を、河岸の豊かな都市から取り付けるために。その旅の途上で、今と全く同じように、このエノワの灯を見ながら訊いたのだ――海とはどんなものかと。
「海は……俺たちの理想そのものだ」
ジークの口をついて出たその声はあまりに低く、キリにもノヴィアにも聞こえなかった。
「終わりと始まりか……何だか、怖いな」
沈むようなキリの声に、アリスハートがちょっとびっくりした。
「怖い？　海に行きたいんでしょぉ？」

「行きたいさ。死んだ仲間のためにも……フモのためにも。この目で、海を見たい」
切々と、その名を口にした。自分に故郷を与え、最期まで自分を守ってくれた少年の名を。彼と仲間たちへの弔いのためにも自分一人で、海を見る——
「でも海に行けば……きっと何かが終わる。それが何か分からない。だから、怖いんだ。ねえ、ジークもそうなんじゃないの？　ドラクロワって人に会うの、怖いんじゃない？」
その質問にアリスハートがぽかんとなった。ノヴィアも呆然となり、
「ああ……怖い」
ジークが答えるや、驚きのあまり宝杖を落としかけた。ノヴィアにとって想像だにせぬ質問であり答えだった。
「でも会いたいんだよな……。会わなけりゃ、どうしようもないから。それ以外に何も考えつかないから。ジークにとって……ドラクロワは、海なんだ。そうでしょう？」
ジークは答えない。だが背を向けたままのノヴィアでさえ、ジークがキリの言葉を無言で肯定しているのが分かった。
ノヴィアはきつく唇を噛んだ。なぜ——？　痛切にそう思った。
なぜ、ともに旅して日も浅いキリが、そこまでジークの内心に踏み込めるのか。なぜ、今のような会話をするのが自分ではないのか。気づけばノヴィアは万里眼の力を発揮する

のをやめ、通常の視界に戻った眼差しで、弱々しくジークとキリを振り返っていた。
「でも怖がってばかりじゃいられないよな。海に行くことで、きっと何もかも新しく始まるんだから。まだまだこれから始まるんだって思うと……なんだか嬉しくなるよな」
キリは心底その瞬間を待ち望んでいた。鮮やかな青さをたたえる目で、海を見るときを。未来を見る目──見果てぬものを求める眼差し。ジークはそんなキリに、
「そうだな」
共感をこめて言ったものだった。嬉しそうな笑顔を浮かべるキリは、そのときノヴィアの目に、周囲の灯よりも輝いて見えた。哀しくなるほど悔しかった。
闇に、男が立っていた。周囲では河がごうごうと音を立てて流れている。氷塊が河に浮かび、沢山の氷の枝がきしきしと軋みながら水をかいているのだ。その氷塊の上で、
「この辺りですか……」
アキレスは、水流の変化を見極めるように、黒い目を、じっと闇に向けていた。
爪の無い指を翻すと、氷の枝が漕ぎ始めた。帆もないのに氷塊が河を遡ってゆく。
向かう先はエノワの街だ。今頃、ドラクロワは動乱の布告の用意を整えているだろう。
ジークも既に街に足を踏み入れている。この地こそアキレスにとって決戦の場だった。

あらゆる罠を仕掛け、ジークを絡め取る。ドラクロワの起こす動乱など眼中にない。狙いはジークの力を奪うことだけだ。アキレスが、ずっと渇望し続けた力――
(かつて王弟派の堕法士として働いていたお前との因縁を、ジークは無視しきれまい)
轟くような水音の向こうからドラクロワの放った言葉が聞こえてくる。そして――
(諦めたよ)
過去から響く声。棄て去ったはずの心の残滓が、アキレスの胸の奥で疼いた。
(私に、あんな力を奪えるわけがない。ジークの力は誰にも背負えない。諦めたよ)
そんな馬鹿な。それは全てを諦めるということだ。それまでの努力全てを――
甦る過去の思いに苛まれ、おお……と狂おしい声がアキレスの喉の奥から零れた。
(私は、聖騎士としての身分を返上し、あの男の従士となろう……あの方のために)
お前はそう告げたのだ友よ――お前は、王弟から授けられた称号を棄ててまでジークの懐に潜り込んだのだ。聖王の騎士の三人目の従士――お前こそ王弟派の最後の希望。
(あの方のために――)
アキレスとともに、王弟派を救うと言ったのだ。
当時、王弟の親族は、ほとんど聖王によって掃討され、あるいは政治的な地位から追放されていた。そんな中、ただ一つだけ残った王弟の直系勢力――王弟の長女。

アキレスとその友にとって、あの方といえば王弟の娘のことに他ならない。その言葉は彼女への敬愛をあらわす。彼女の慈悲への感謝を意味する。アキレスの友と、彼女との間に結ばれた、ひそかな愛を称える言葉――

二人のためならアキレスは何でもやった。己の命さえ捧げることも厭わずに。

無二の友と、主君の愛娘。その二人以上に貴いものなどないと全身全霊で信じていたのだ。それは王弟への恩義を土台としてアキレスの心に育った気高い大樹だった。

かつて聖王は、増殖器の使用を全面的に禁止し、堕界に属する秘儀の使用を制限した。そのため堕法を代々の生業としていたアキレスの一族は貧窮のどん底に陥ったのだ。

貴族の身分は名ばかりとなり、家に伝わる秘儀は聖法庁に没収された。僅かに守秘した技術を所有していた罪で父は処刑された。土地を次々に失い、幼い兄弟が飢えて死んだ。

土地の聖性を汚す者として、あらゆる差別を受けた。貧窮と汚名は、拷問のように執拗で、容赦なく、しかも逃れようがなかった。

その地獄の日々から救い出してくれたのが王弟なのだ。アキレスの一族に伝わる技術が必要なのだと言ってくれた。貧窮が嘘のように解消され、汚名の返上が約束された。

そして出会った友――代々の武門の子。その父は英雄にして虐殺者。難民が河を渡って領地に入ってきたとき、敵が彼らの中に紛れ込んでいた。そして英断にして暴虐――難民

を皆殺しにせよ。射られた何千もの矢。河は血に染まった。領地は守られた。
与えられたのは虐殺の汚名。それに苦しみぬいて死んだ父——その長男として生きた友。
彼とアキレスとの間には、まるで磁力があるかのように親交が生じた。
そして重ねられる友の武功——ついに王弟から聖騎士の称号を授けられた。背負わされた苦しみの中、やっとの思いで手に入れた喜びと希望。アキレスは友を誇りに思った。
そして王弟の愛娘の、ひそかな想い——友はうろたえ、喜び、誇りに思い、恐れ、受け入れた。半ば公認された二人。アキレスにとって至高の存在。親愛と忠誠の偉大なる結合。
王弟も二人のことを認めかけた矢先に——ドラクロワが全てを破壊した。
王弟が死んだ。父の死を嘆き悲しむ娘。瓦解する権力。その一派は次々に駆逐された。
アキレスのもとに貧窮と汚名が再び迫ろうとしていたとき——
最初に襲いかかってきたのは、かつてドラクロワの右腕として働いた黒き騎士だった。
聖王が手に入れた地獄の犬の名——ジーク・ヴァールハイト。
抵抗する王弟派を完膚なきまでに叩き潰して回る男に、誰もが恐れおののいた。
そしてアキレスの友が決意した起死回生の策——ジークの従士となる／かつて兵力を失ったドラクロワが王弟にしてみせたこと／降伏し、逆転の機会を窺う。
友は裏切り者の汚名を望んでかぶり、聖王に頭を垂れた。ジークの懐に入り、その力を

奪うために。王弟派の巻き返しをはかって。王弟の娘の――あの方のために。
アキレスは必死にそれに協力した。誤解する王弟派をなだめ、あの方を励まし、そして秘儀を究めた。聖法庁に没収された秘儀を、命懸けで奪い返した。堕界の力を我がものとするために。そうせねばジークの力を奪ったところで、もてあますだけだ。
やがてアキレスが得た秘儀の正体――肉体に聖印を刻み込み、魂を堕界に通じさせよ。
秘儀を究める過程でアキレスは堕気を氷の形にすることに成功した。堕気に形質を与える技術の一大成果――これでジークの力を奪える。魂を招く死の力を操れる。
ジークの肉体のどこかに刻まれた聖印さえ奪えば、その力は王弟派のものとなる――
その結論を、アキレスは堕気に蝕まれながら得た。もう顔つきの変化も、体の変調も気にならなくなっていた。両手の爪を剝がすことさえ、ためらいなくやってのけた。
その結果、何かの生き血をすすらねば堕気に冒されて死んでしまう体になってしまった。
それでもアキレスは愛する友と王女に、己の命を捧げる思いで心が満たされていた。
そしてアキレスが、友にジークの聖印を奪う方法を伝えたそのとき。
(諦めたよ――)
出迎えた友の微笑。それでいながらアキレスのことなど見もしないその眼差し。変貌したアキレスから、憐れみのあまり目を逸らす友。

（俺は、ジーク・ヴァールハイトの従士であることに、誇りを抱き始めている）
ジークという地獄の番犬に、心を食いちぎられた男が、そこにいた。
相手の懐に入り込んで奪うはずが、すっかり下僕と化したその友を——
堕界の力を究めるあまり魔獣に近い存在になってしまったアキレスが、食い殺した。
まだきちんとした形も持たない魔獣と一緒に、友の肉体を引き裂いた。後に残ったのは、からからに干涸らびた遺骸——その血は、それでも喜びと希望の味がした。

「ふ……ふふ……」
低く笑いを零しながら、アキレスは胸に手を当てた。爪があればそこをかきむしっていたかも知れない。裏切られた痛みを感じる心が残っていたのが自分でも意外だった。
だがすぐにその痛みも消えた。何も悲しむべきことはない。かつての友も、敬愛したあの方も、今は〈蛭氷〉の中で結ばれているのだから。
そう。王弟の愛娘であったあの方が、この魔獣に形質を授けたのだ。
（所詮は、お前も蛭よ——アキレス）
王女の、鋭くも甘美な声が甦る。アキレスは思わず、うっとりとなった。
（人はみな蛭よ。お互いに吸いつき、腹を満たせばすぐに離れる蛭。私に権力がなくなる

と、大勢の蛭が離れていったわ。愛を誓った男でさえ蛭のように離れていった)
ジークの力を解明する過程でアキレスが生み出した氷の魔獣は、素晴らしい形を得た。
蛭――純粋にして永遠の飢えをあらわす偉大なイメージ。それがあって、ようやく自由にこの魔獣を操れるようになったのだ。
(蛭に自分の血を吸わせ続けるのは、もう嫌……)
愛しき王女は、自ら望んで蛭となったのだとアキレスは信じている。
それまで血を吸われ続けてきた彼女が、血を吸う側へと導かれたのだと。
(聖王が権力を欲しがるなら、全部あげるわ。私は、もう疲れた……)
アキレスは愛を込めて王女の血を吸った。その廷臣たちの血も吸った。聖王に全面降伏をする準備していた彼らを一人残さず〈蛭氷〉に食わせ、アキレス自身も血を味わった。
もう止まらなかった。血を吸う快感に逆らえる者など誰がいるだろう。
かくして騎士と王女と王弟派の血と魂は、一匹の蛭となって永遠に結ばれた。
その後もアキレスは降伏しようとする王弟派の残党の血を吸って回った。
あるいは無関係の者を襲い、力を蓄え続けた。聖王もドラクロワも、もうどうでもよかった。ただ力を求めた。唯一の生きる希望は、いつかジークの力を奪うこと――
その機会を与えてくれたレオニスこそ真の王だ。聖法庁とドラクロワに匹敵するため、

力を渇望する——なんと素晴らしい王だろう。アキレスは王弟やその愛娘や友の面影を、レオニスに見る思いだった。失われたものを全て取り戻した気持ちにさえなった。
そして今——アキレスの異常な妄執は、ここエノワの街で実を結ぼうとしていた。
しかもあのドラクロワがアキレスに助力し、策まで託している。あのトールでさえそれを邪魔することは出来ない。今こそ悲願を果たすときだった。
やがて遠くに無数の灯が見えてきた。だがエノワの街の輝きには何の興味も示さず、アキレスは、背後の闇を振り返り、濡れたように紅い唇を笑みの形に吊り上げていた。
「ともに闇に沈みましょう……ジーク。あなたは誰よりもそれがふさわしい人だ。私の全存在にかけて……あなたを闇に堕とし、その血をすすらせて頂く」

2

へとへとだった。エノワに到着してから三日——ノヴィアは目覚めている限り万里眼を発揮し続けた。これまでのように、地形を調べ、敵の位置を確認するのとは根本的に違う。本当にいるのか分からない相手を、早朝から深夜まで探索し続けるのだ。
大勢の者が乗れる大型の遊覧船は全部で三つ。
その一つに乗りながら全船の客を見渡す一方、都市を見てはそれらしい人物を捜す。

この果てしない作業は、ノヴィアにかつてない疲労をもたらした。
キリがアリスハートと一緒になって止めようとするが、ノヴィアはきっとなって、
「なぁ、少し休めよ。疲れすぎだよ」
「これは私の仕事です。放っておいて」
むしろ冷たく言い放っていた。そもそもジーク自身が船上に立っているのだ。水がある所では〈招く者〉の力を発揮出来ないジークにとって死地に等しい。その危険を冒して船に乗るのは、もしかするとジークが乗る船にドラクロワが現れるかもしれないからだ。だからこそジーク自身、一日中、狭い船室からじっと客の出入りを監視しているのだ。
もし相手が別の船に乗った場合——ノヴィアの万里眼だけが頼りだった。
またドラクロワは幻術の達人である。完全に姿を隠すか、全く違う人間になりすましている可能性が高い。この場合も、それを見破れるのはノヴィアをおいて他にない。
今が一番ジークの役に立てるときなのだ。自分が役に立ち、自分がジークの期待に応え、ジークに自分を見てもらえるのだ。他ならぬノヴィアが、自分にはそれだけの力があるのだと思えることを望んでいた。
かつて何度となくノヴィアが陥ってきた心情である。だがこれまでと全く違うのはキリがいるということだ。キリに勝ちたいのだ。キリを羨ましいと思う自分から逃げたいのだ。

キリよりも劣っていることを恐れる自分など、何としてでも消さねばならなかったのだ。
そうせねば、自分が自分でなくなってしまう気さえしていた。
「ねぇノヴィアぁ……どうしちゃったのぉ」
気負い立つノヴィアに、アリスハートが心配でしょんぼりとなる。とうとうキリが、
「やめろよ馬鹿。無理して敵を見つけたって、それじゃジークの足を引っぱるだけだ」
怒ったようにノヴィアの腕をつかみ、無理やりこちらを見させて万里眼の発揮をやめさせようとする。だがノヴィアの反発はキリの予想を超えた。弾かれたように振りほどき、
「触らないで！」
大声で叫んだのだ。ひっぱたかれたように呆然となるキリを、きっと睨みつけ、
「黙っててっ！　あなたには関係ないでしょう！　あなたなんかに何が分かるの！」
まるで泣くように言い放つと、そのまま船室を出て行ってしまったではないか。
「ちょ、ちょっと待ってよ、ノヴィアぁ」
アリスハートが慌てて追いかける。ぽつんと取り残されたキリは、
「なんだよ、あいつ……」
自分も追いかけようとするが、ノヴィアに対する憤然とした気持ちが込み上げ、そのせいで両足が強ばって動かず、船室のソファに座りこんでしまった。

首にかけた小さな紋章が揺れ、それを握った。その鎖を引きちぎり、ノヴィアの背中に向かって投げつけたい気持ちが起こった――が、すぐに思いとどまった。
「ジークのために……か」
紋章から手を放し、ごろんとソファに横になった。
ノヴィアはジークのために頑張っている。そう思うと悔しかった。
ドラクロワの顔も知らないキリは、今のこの状況では全くの役立たずなのだ。
出来ればノヴィアがこの紋章をくれたように、自分もノヴィアに何かを与えたかった。
自分もノヴィアを助け、ジークの役に立ちたかった。だが自分には何もない。何もないと思ってしまうのが辛い。それはノヴィアと出会う前の自分に逆戻りしてしまう辛さだ。
いや、それよりももっとひどい。結局、自分はそもそも何かを持てるような星の下に生まれてきてはいないのではないか。一生、持たざる者として生きるのではないか。そういう思いにとらわれてしまうからだ。たまらなかった。
「ノヴィアが羨ましいな……」
ノヴィアのようになりたい――それがキリの正直な思いだ。ノヴィアは多くのものを精一杯の努力で手に入れてきた。とても敵わないと思う反面、自分だって、という思いがある。せめて苛立つノヴィアを宥めてやりたいが、怒らせてばかりだ。

「しゃぁない……もっと怒らせるか」
どうせ怒らせるなら徹底的にやろう。それで疲れて休む気になってくれるかもしれない。
ノヴィアが無理をする姿は見ていて辛い。怒られようが恨まれようが休ませるのだ。
そう思って立とうとしたとき――妙な感覚が両足に起こった。爪先から膝にかけて、ぴりっと痺れたのだ。両足をさすると、痺れた箇所がひどく強ばっていた。
(手足に痺れが起きたら、すぐに言え――)
突然、その言葉が甦った。旅に同行する前にジークから言われたことだ。
急に不安が込み上げてきた。不安から逃げるように、慌てて自分に言い聞かせた。
「ずっと船にいたから、鈍っちまったな。ひとっ走りすれば、すぐに……」
ふいに船室のドアが開いた。ノヴィアかと思って顔を上げると、ジークが、そこにいた。
「――ノヴィアはどうした?」
「そ、外に行ったよ。船のどこかに……」
「……どうした。足が痛むのか?」
「な、なんでもないよ」
慌てて立ち上がろうとするキリを止め、片膝をつくと、シャベルを置いて籠手を外した。
「診るだけだ。大したことはないだろう」

相手を安心させるように呟き、静かにキリの足に手を当てた。聖印がもたらす力を調べ、キリの足に何らかの異変がないか調べてゆく。緊張していたキリも、いつしか、
「ジークの手、あったかいな……」
目を細めて微笑んでいる。やがてジークが手を離すと、キリはひどく静かに言った。
「仲間はみんな、この力のせいで病気になったんだ。俺一人が無事なわけないよな」
「お前の体は、聖性を受け入れようとしている」
「ねえ、本当のこと言ってよ。俺の足、どこまで行ける？　海まで行ける？」
ひた向きな顔で訊いた。これまで明るい笑顔の裏ではいつもそのことを考え、恐れ続けてきたように。ぴんと張りつめた表情を浮かべ、今にも泣き出しそうなキリの澄んだ青い目を、ジークは真っ直ぐ見つめ返した。
「今は問題ない」
「でもそのうち……」
「どんな人間も、旅の途上……戦いの半ばで死ぬ。俺が死者の魂を通して知るのは、死のときに彼らの足がどこへ向かおうとしていたかだ。お前は、どこへ向かっている？」
「俺は、海へ……」
言いさし、うつむいた。ジークは具体的な目的地を訊いているわけではなかった。心の

向かう場所を訊いていた。今の思いの全てを口にしろと言っていた。
やがてキリは顔を上げた。心の全てを振り絞るようにして、それを告げた。
「全てが終わって、始まる場所だ……俺はそこに行きたいんだ。これから始まる場所へ。俺の足はいつだって海に向かってる。たとえ海を見た後でも……どこまでも新しく始まる場所へ向かう。あんただってそうなんだろう、ジーク？」
ジークは、うなずいた。深く、はっきりと。
「そうだ……俺もそこへ向かっている。そこが、俺やお前や全ての者が向かう場所だ」
キリのおもてに力強い笑顔が浮かんだ。未来を見る目——数日前のあの笑顔だった。

そのときノヴィアは船室にいるジークが微笑みさえ浮かべるのを見ていた。
むろんキリとジークが何を話しているかは分からない。だがジークの表情を見ているだけで、なぜ自分ではないのか、という思いがかつてないほどの強さで込み上げてくる。
自分の方が先にジークと出会っているのに——
ジークにとってキリは確かに、ドラクロワがもたらす多くの犠牲者の一人であり、決して放置できない存在だった。それこそ、かつて母を失ったノヴィアのように。
しかしキリは今やそれ以上にジークの内心に踏み込み、深い所で共感していた。まるで

遥かに親密な関係だった。そしてそれこそキリという少女なのだ。野放図でしたたかで、それでいて仲間を想う気持ちを決して失わない。全てが自然体で、自由だった。
キリのようになりたい——そういう、ごまかせない思いが膨らんでゆく。まるで自分で自分を否定しているようで、ひどく辛い。
「私だって……」
ノヴィアは唇を引き結び、船室のジークとキリから目をそらし、疲労をこらえて船や碇泊所を見た。ジークにとって一番大事なものを自分が捜し出すために。自分をジークに見てもらうために。アリスハートが心細げに、
「ねぇ少し休もうよぉ……ノヴィアぁ」
しきりと声をかけるが、ノヴィアは何も聞こえないかのように目を凝らしている。
と——ノヴィアの体が強ばった。その目が大きく見開かれ、震えながら息を吐いた。
「いた……」
え？　とアリスハートがびっくりした顔になる。
ノヴィアは、今自分が見ているものから決して目を離さぬまま、
「ジーク様にお伝えして、アリスハート。この船の後ろの方……船の倉庫にいるって」

アリスハートが緊張のあまり、ごくっと喉を鳴らしながら、うん、と返す。
「見つけた……私が見つけたって、い、い、い、い、伝えて」
そう繰り返しながらノヴィアはまるで引き寄せられるようにして、船の廊下を進み、
「ど、どこ行くの、ノヴィアぁ」
「確かめてくる！　アリスハートは早くジーク様を呼んで来て。早く、今すぐ！」
せっぱ詰まった声に追い立てられるようにして、アリスハートは船室へ飛んでいった。
ノヴィアは振り返りもしない。自分が何かをするのだという思いに駆られながら、船の後方――船底へと向かっていた。

ふいにジークが立ち上がり、鋭い顔つきで辺りを振り返った。キリも驚いて立ち上がる。
「なに、ジーク？　どうしたの？」
「妙だ……静かすぎる」
ジークはシャベルを手に船室を出た。周囲では夜の闇に、無数の灯がきらめいている。
キリは慌ててジークを追い、船室を出たところで、ぎょっとなった。
船の廊下を見つめるジークの全身から、触れれば切れそうなほどの壮烈な気配が漂い、
「ドラクロワ――」

低く、そう言ったのだ。キリも慌てて廊下を見たが——既に誰もいない。
「キリ、ノヴィアを呼べ。俺は、遊覧室の方に行く。ただし手出しはするな」
「わ、分かった、ジーク……気を付けて」
緊迫した気配に圧倒されつつキリが返す。そのときにはもうジークは廊下を進んでいる。
込み上げてくる思いを胸に抱えながら、船の前方——船首の方へと踏み込んでいた。

ノヴィアは獣油ランプに照らされた船底に下り、思わず立ちすくんだ。
誰もいないのだ。本来なら船員たちが乗客に振る舞う食料や酒を運んでいるはずなのに。
反射的にジークの姿を万里眼で捜し、愕然となった。客も船員も一人も見えなかった。
先ほどまで大勢いた者たちが、ほんの僅かの間に消えていた。
そのとき——空っぽの倉庫の向こうの闇に、かつん、と足音が響いた。
ノヴィアはぞっと総毛立った。男が、青ざめたマントを翻し、闇から現れたのだ。
長い銀髪に白皙たる相貌、苛烈な意志を秘めた群青の目が、ノヴィアを見た。
かつて一度だけ見た男——二度と忘れそうもない美貌と烈々たる気配をまとう男だ。
ノヴィアが声も出ず宝杖を握りしめた、そのときである。
男の顔が透明になり、きしきしと音を立てて変貌したのだ——氷の人形に。

その様子に、ノヴィアは驚きとともに哀しいまでの失望を覚えていた。
「ようこそ闇へ……ノヴィア様。このアキレスめが、あなたを歓迎させて頂きます」
氷人形が言った。その顔が、いつの間にかアキレスのものになっていた。ふいに闇から、きしきし軋む音が響き、何十という数の氷人形が現れた。みな、船員や乗客の姿だった。
「いつの間に……こんなに……」
「何日もかかりましたよ。あなたに気づかれないよう船にいる者を一人ずつ〈蛭氷〉の餌にし、氷人形と入れ替えるのにね。なかなか苦労しましたが……あなたが最大限に聖性を発揮してくれたお陰で、どこを見ているのか、大まかに察することが出来ました」
その言葉が、ノヴィアの心の奥深い場所に突き刺さった。
必死になればなるほど、それを利用して足下をすくわれた——
「許さない……」
かつてないほどの怒りと悔しさが、一瞬でノヴィアの心に満ちた。
「大人しく捕まれば、殺しはしません」
アキレスが唇を吊り上げて笑った。氷人形の群がわらわらと動き出すや、
「矢が——沢山の矢が、見えます！」
叫びざま、ノヴィアは怒りに任せて幻視の力を発揮させた。

ざあっと音を立てて百本近い矢が奔り、氷人形たちを次々に貫き倒したとき——
ノヴィアを、全く別のものが襲っていた。
暗闇だった。いきなり視界が暗くなったのだ。ランプを壊されたのかと思ったが、違う。
急激に目がかすみ、光が薄れてゆく。聖性を発揮しすぎたせいで目の奥が痛み、それが
ひときわ強い頭痛となってノヴィアを打ちのめしたとき——闇が降りた。
何の力も持たない、無力な自分が、そこにいた。
「目……目が……。見えない……」
必死に瞬きするが闇は濃くなるばかりだ。体が内側から凍りつくような恐怖に襲われ、
指一本動かせなくなるとともに——闇の向こうから、きしきし軋むような音が迫って来た。

ジークは階段を登り、船首に近い遊覧室に入り、広い部屋の中央で静かに足を止めた。
円卓が並び、食事で賑わっているはずのそこには、たった一人の男しかいなかった。
大きな窓から無数の灯を眺めながら、男は喜びの声で言った。
「このまま河を下れば三日ほどでシャングリラの海岸に着く……海が見れるぞ、ジーク」
ジークは無言でいる。失望が生まれ、シャベルを握る手に怒りがこもった。
「海は広大だ——果てしないほどに……」

男が振り返った。銀髪に飾られた白皙の顔が、ひどく優しく微笑んでいる。かつてともに戦い、理想を抱き合ったときのままの笑顔が、そこにあった。だがジークは固く口を閉ざし、凍りついたように動かない。そこへ、
「全てが終わる場所よ……ジーク」
ふいに、澄んだ女の声が背後から響いた。
ジークは、かっと目を見開いた。凄まじいまでの怒りをたぎらせ、背後を振り返る。
決しているはずのない女が、そこにいた。輝くような蜂蜜色の髪に、翡翠の瞳。黒い衣裳に身を包み、強い意志と無限の包容力をたたえた微笑みを浮かべ——女は、言った。
「何もかもが終わる場所……あなたにふさわしい場所。あなたは全てを失ったのよ、ジーク。理想も、友も、かつての栄光も、夢も、生き甲斐も、全て、何もかも。あなたに残されたのは、恐ろしい〈招く者〉の力だけ……」
女がジークに歩み寄り、両手を広げた。その胸にジークを抱こうとするように。
ジークは無言のまま手にしたものを掲げ——猛烈な勢いで振り下ろした。
シャベルの固い歯が、女の胸を貫き、その背から飛び出した。
そのまま床に叩きつけられ、氷の手足が砕けて辺りに散らばった。
「本当はあなただって、失うものさえない人間なのよ……そうでしょう、ジーク？」

シャベルの歯で床ごと貫かれた女が、微笑した。かと思うと、その全身から氷の棘が生え伸び、ジークの腕に、足に、猛然と絡みついてゆく。
「そうだ……お前には何もない……ただ一つ残された力さえ、この水上では使えまい」
男が背後からジークの左腕に触れた。その手が氷の棘と化し、ジークの腕や胴に絡みついた。かつてともに理想を抱いた男と女の姿が、今、鋭く冷たい氷の桎梏と化してジークの全身を縛りつけていた。
「なんと美しい姿でしょう……」
アキレスが広間に現れ、うっとりとジークの姿を眺めた。
「無駄な努力でしたね、ジーク。あなたが手に入れた密書……あれ自体が罠なのですよ。ドラクロワにとって有力者たちの協力など必要ではない。談義など、もうとっくに終わっていたのです。動乱は既に始まっているのですよ。あなたは、何も防げはしない……」
「お前がドラクロワに頼まれたか。それとも単に狩り場を与えられただけか」
「罠はドラクロワによるもの……私は、獲物を仕留める役ですよ」
「では、お前を捕らえて尋問しても、ドラクロワの居場所はつかめそうにないな」
ジークは、体中を氷の棘に食いつかれたまま、さもつまらなそうに言ったものだ。
アキレスの目に、どろりとした怒りの光が溜まった。

「余裕のつもりですか？」
爪のない手を翻すや、たちまちジークの全身を覆う棘が数を増した。
さらには窓やドアから氷人形たちがぞろぞろと現れ、ジークを取り囲んでゆく。
「長い間この瞬間を待ち望んできました……あなたをこの手に捕らえるときを。かつて聖王に反抗する勢力を、ほとんどただ一人で壊滅させた、あなたを……」
「当時……王弟の亡霊が、降伏する者たちを殺して回っているという噂があったな」
ジークが、ぼそっと声を放った。
「亡霊の正体はお前か……俺の過去の従士と因縁があるようだな」
アキレスはぎょろっと目を見開き、
「従士などではない……彼は、あくまでその力を奪うため屈辱に耐えた我が友だ……」
「ならば、なぜ殺した」
「殺してなど……彼は今も我が力の一部として生きています。あなたの魔兵のようにね。ふふ……あなたに同情しますよ。あなたも結局は全てを失い、力だけ残されたのだから。その力さえ自ら封じられに来るとは……そこまでドラクロワに会いたかったのですか」
ジークは応えない。いや――声が出ないのかも知れない。吐く息が白くなっていた。体が内側から凍てついてゆくのだ。全身が真っ白い霜に覆われ、外套まで凍ってゆく。全身

を冒されながら、ジークは、ただじっとアキレスを見つめている。
「さあ〈蛭氷〉にあなたの血を吸わせ、その〈招く者〉の力を頂きます……」
「好きにしろ」
ジークがふいに声を放った。冷気に嗄れた声だが、はっきりとアキレスの耳を打った。
「なんです……？　ふふ……この期に及んで、どういう魂胆ですか？」
「俺が、お前の友に言ったことだ。この力が欲しいなら、背負ってみればいいと」
「ほう……それで？　彼はなんと言ったのです……」
「あいつに、堕気の渦を経験させた。あいつは、諦めると言った」
まるで挑発するようにジークは告げた。アキレスの顔から一瞬で笑みが消えた。
「貴様が彼の心を打ち砕いたのだ!!」
アキレスが両手を翻した。氷の棘が牙へと変貌し、ジークを引き裂くべく全身に食いついた。その瞬間である。にわかにジークの左腕に眩いばかりの雷花が咲き乱れ、
「ジーク・ヴァールハイトが招く！」
握りしめたシャ、い、い、ベルに稲妻が走ったではないか。
それればかりかジークに絡みつくドラクロワとシーラの氷人形にまで、稲妻の青白い輝きが迸ったのだった。氷人形があっという間に溶け崩れ、水しぶきと化すや、

「い、稲妻が……氷を食った……!?」
アキレスが驚愕の叫びを上げ、それをジークの烈声が完全にかき消していた。
「水刻星の連なりの下、凄魔となりて我が敵に見せしめよ!」
冷気が氷とともに木っ端微塵に消し飛んだ。シャベルが銀の輝きとなり、双剣を握る凄魔に変貌する。総勢十六体。そして銀の輝きから現れた剣をジークが握りしめ、
「蠍座の陣!」
言下、魔兵が円陣を展開し、一斉に氷人形に襲いかかり、問答無用でなぎ倒してゆく。
「罠の場合……お前が来ることは分かっていた。堕気の使い手であるお前が」
鋭くジークが告げた。アキレスは慌てて手を翻し、
「さ、最初から私の堕気を奪う気で――」
氷柱を現すが、その氷の槍を素早くかわし、ジークが跳躍して剣を振るっていた。
間一髪で跳び退いたアキレスの首筋に、すうっと浅く傷が走り、血が一筋零れた。
「珍しく、氷人形でなく本人が来たか」
ジークは歩み寄り――ふとその足を止めた。アキレスの背後の窓を見て、息をのんだ。
「灯が――」
「ふ、ふふ……気づきましたか、ジーク。そう……これが、この罠の本当の狙いです」

ジークは遊覧室を見渡した。どの窓からも、先ほどまで輝いていた灯が見えない。
いつしか辺りは、灯り一つ無い、一面の闇となっていたのだった。

3

ジークがキリと別れて遊覧室へ向かった頃──
「時が来た」
ロイヒルトの巨体がぬっとトールのいる部屋に現れた。トールは邸宅を出てロイヒルトとともに馬車に乗った。向かう先は遊覧船の碇泊所である。
そこで何をしろとは言われていない。ドラクロワはアキレスに策を託す一方、トールには何の指示も与えていない。わざわざ派遣を要請したというのに何の意図があるのか。
外は夜だ。碇泊所に着くと、まさに豪華な遊覧船が近づいてくるところだった。百人近く宿泊出来る上に、宴席のための広間まである巨大な船だ。
左右を高い建物に挟まれた船着き場や、色とりどりの石が敷かれた広場に、市の衛兵がひしめいていた。貴人ばかり乗る船だから当然の警備だが、衛兵に混ざって屈強な水夫たちの姿がある。ドラクロワの手勢──〈運びゆく者〉たちだ。
「ドラクロワ様は、既に船に乗っておられる。お前は我々の行動をよく見て動け」

そう言ってロイヒルトは馬車を降りた。トールは素直にそれに従った。だがロイヒルトの言葉の意味を理解したのは、それから間もなくのことだった。
大勢の衛兵の監視のもと、ロイヒルトは当然のように碇泊する遊覧船に歩み寄った。
「待て。これ以上、近づくな」
衛兵が止めた。ロイヒルトは腰に吊った太い鉄鎖の束を手に取ると、無言で振るった。
鉄鎖が直撃し、衛兵の顔面が、踏み潰された果実のようになって吹っ飛んだ。
一瞬、何が起こったのか誰にも分からなかった。トールも唖然となっている。ドラクロワは動乱の布告をするのではなかったのか。つまりこの衛兵は味方ではないのか――
他の衛兵が、怒りと驚愕の叫びを上げてロイヒルトに槍を突き込んだ。
ロイヒルトは避けもしない。その分厚い胸で、槍が弾かれた。歯が立つはずがない。その肉体は聖印の力によって、トールの鉄鞭さえ弾き返す堅牢さを誇るのだ。
ロイヒルトは鉄鎖を振るって衛兵の頭を兜ごと叩き潰した。ただの鎖が、まるで鉄槌だ。
二人殺され、ようやくその場にいる衛兵が一斉に槍を構えた。だが遥かに早く水夫たちが手に手に武器を持って衛兵に襲いかかっている。たちまち碇泊所は戦場となった。
トールもやむをえず鉄鞭を現し、問答無用で突き込まれる槍を切り払っている。
訳が分からなかった。ロイヒルトを見ると、衛兵をなぎ倒しながら遊覧船に乗り込んで

ゆく。トールもそれを追った。ドラクロワの意図が知りたかった。
トールは船への渡し板を踏み、船首の辺りから乗り込んだ。あちこち水夫がいて船室を荒らしまくっている。ロイヒルトはずんずん階段を登って遊覧室の方へ向かっていた。
この船にジークやノヴィアたちが――アキレスが乗り込んでいるのだろうか？
その場合はノヴィアを守るという使命を優先させる。それからドラクロワの意図を探る。
トールは咄嗟にそう心に決め、ロイヒルトを追って自分も遊覧室に上り――
一面の血の海に、呆然となった。何人死んでいるか数えることも出来ない。吹き飛ばされた五体が、部屋中に飛び散っているのだ。中には黒こげになった手足もあった。
「まさか……これは……」
無惨な遺体は、例外なく瀟洒な衣服をまとっている。トールは愕然となって、部屋に立つロイヒルトと、窓辺から街を眺めるドラクロワを振り返った。
「みな、動乱に参加するつもりでいた、各地の有力者たちだ」
ドラクロワは、こちらに顔も向けず言った。その横顔が微笑している。有力者たちと同盟を組むふりをしてドラクロワ一人で全員殺害したのだ。逃げ場のない船上で。
「なぜ、彼らを……。味方ではないのですか……」
トールは不安に襲われながら訊いた。ドラクロワの意図など計ろうとした自分が愚かだ

ったのではないか。これはもう意図などではない。手当たり次第に破壊する狂気の行いだ。
「真の動乱が始まるのだ……トール・ヴュラード……」
それが全ての答えになるというように、ドラクロワは言った。
にわかに起こる喚声と怒号。甲高い悲鳴が、遠くから響いてくる。ドラクロワの手勢が
――碇泊所にいた何倍もの数の反逆者たちが、街中で殺戮を始めようとしていた。
ふいにトールは足場が揺れるのを感じた。なんと船が動き出しているではないか。
「いったいどこへ……」
トールが訊くと、ドラクロワは、ふっとおかしそうに笑った。
「どこへも行きはしない。これは遊覧船なのだ。聖地シャイオンの英雄の息子よ、ともに
この街の美しい夜景を眺め、お前の主人に、その様子を報告するがいい」
トールにはなすすべもない。ゆっくりと進む船の上から街の各所で火が放たれるのを見
た。優雅な街が、薪のように燃え始めた。ドラクロワもロイヒルトも眉一つ動かさない。
「ジークは……」
はっとトールが我に返った。いったいジークはどこにいるのか。この凶事に対抗できる
者はジークしかいない。ノヴィアの安否は――
「ジークは、ここにはいない」

ドラクロワのその返答は、トールの理解を超えた。
「いない……？」
ドラクロワは無言で微笑している。トールは声も出ない。いないだと？　ジークを街から退けたというのか？　いったいどういう策をドラクロワはアキレスに授けたのか――
完全な読み違いだった。ノヴィア抹殺指令さえ握り潰せば良いと思っていた。だがドラクロワにとって、それこそジークの従士の存在など無に等しい。アキレスにいかなる策を授けたにせよノヴィアの安全など微塵も気にかけてはいまい。トール一人が軟禁状態だったのは、アキレスの邪魔をさせないためだったのか――
トールは唐突に、自分が鉄鞭を握りしめていることに気づいた。左手の傷が疼いた。レティーシャの蝿に食いちぎられて三本しか指がない左手――その手を、己の胸に当てた。
凄まじい勢いで、鼓動が鳴っていた。
この男は、殺すべきだ。悠然と街を眺めるドラクロワを見ながら、そう思った。
街が焼かれる光景を眺めて楽しむ男など、ここで斬らねばならない。たとえ自分が殺されようとも――トールは一瞬で覚悟を決めた。生きた盾であるロイヒルトをかいくぐり、何としてもドラクロワの命を奪う。そのために、むしろぴたりと殺気を消し、いかなる感情も捨て、影のように何の気配もなくドラクロワに近づこうとした。そのとき――

「お前の主人レオニスは、領民に罪を着せて処刑することを楽しんでいるようだな」

　刃のような言葉をドラクロワは放った。トールの足がすくんだ。聖地シャイオンの内情を、そこまで正確につかんでいるとは――

「だがいずれ、お前の主人はまた違うものを求めるようになるだろう……。私の持つ秘儀を知ればな……。ところで、お前は、私がこの光景を楽しんでいると思うか……？」

「はい……」

　トールは正直に返した。舌打ちしたい気分だった。隠したはずの殺気をドラクロワに読まれたのだ。今やロイヒルトも、じっとトールの鉄鞭を睨んでいる。

「私は人民の血が欲しいわけではない。虐殺に意味などないのだ。復讐を恐れ、皆殺しにしようとする者もいるが、愚かなことだ。むしろ復讐が、力を育てるのだから……」

「復讐が……力を育てる？」

「そう……力は、ただ振るうだけでは成長しない。むしろ衰えるばかりなのだ。より強大な力とせめぎ合ってこそ力は成長する。それゆえ復讐こそ歓迎すべき因果だ。私がこの炎の向こうに望むものがあるとすれば、私に復讐する者に他ならない」

　だから、のんびり船に乗っているとでもいうのか――トールは怒りのまま、自滅覚悟で斬り込もうとした。そのとき、またもやドラクロワの言葉が、それを止めた。

「アキレスが、ジークをどこへ連れ去ったか、気にはならないのかね？」
それだけでトールは息の根を止められたようになってしまった。
ノヴィアの安全を確認したいという内心を読まれているのだ。ここでトールが死に、万が一アキレスが策を成功させれば、ノヴィアの命はないも同然だった。
「武器をしまったらどうかね。ここではそんなものは必要なかろう」
ドラクロワは優しく微笑んだ。トールは悔しさを噛み締め、さっと鉄鞭を消した。
何も出来ず、何一つとして意見を発せられない——影法師に逆戻りした思いだった。
「なぜ……私にこの光景を見せるのですか。私に何をさせたいのですか」
せめてもの抵抗としてドラクロワの意図を出来る限り探らねば気が済まなかった。
「いずれ分かる……それまで、ただ目の前のものを見ていればいい」
そのとき、ひときわ巨大な炎が上がった。見れば市庁舎が燃えている。身を強ばらせるトールの前で、エノワの街できらめいていた灯が、業火に変じて天を焦がしていた。

「ジーク様っ！　ここですっ！」
何も見えない真っ暗闇の向こうから氷の軋む音が迫る中、ノヴィアは必死に叫んでいた。
「ジーク様っ！　敵はここにいます！」

顔を真っ赤にし、涙をにじませて声を上げる。助けを求めているのではない。万里眼の使い手として最後まで敵の居場所を教えようというのだ。その声を聞いてジークが逃げても良い。むしろこんな自分など構わず水上からジークに脱して欲しかった。
悔しさと情けなさで涙を零すノヴィアのすぐそばで——突然、ごきっと鈍い音がした。
氷人形が倒れる派手な音が響き、ついで笑うような陽気な声が船底に響いた。
「ひゃあ、うじゃうじゃいやがる。ったく、何やってんだよ、ノヴィア」
キリの声に向かって、ノヴィアは慌てて宙に手を伸ばした。
「キリ!?　ジーク様は!?　そこにいるの!?」
キリが息をのんだ。
「お前まさか、目が……」
ノヴィアは感謝と悔しさがごっちゃになって言葉を失いながら懸命に相手を捜した。
いきなりノヴィアの体が持ち上がった。気づけばキリの背に負ぶさっている。
「しっかりつかまってろ！」
ノヴィアは宙を跳ぶキリにしがみつき、ただその背の温かさ、手の力強さを感じた。
「今すぐジークの所に連れてってやるからな。安心しろよ。すぐに目も治るからな」
敵を避け、船底から脱出しながら、キリは懸命にノヴィアを励まし続けた。

やがてノヴィアは、ひやりとした夜気を感じ、外に出たことを察した。
そしてそこで異常に気づいた。辺りの気配が違うのだ。人の気配が全くせず、都市にいるとは思えぬ静寂の中、河の流れる音がひどく大きく響いている。
「なんだ、これ……真っ暗だ……」
キリが呆然と言った。ノヴィアは不安に眉をひそめ、
「真っ暗？　どういうこと？」
「街の灯りが一つもないんだ。さっきまで……」
言いさし、はっとなった。目の前の河に浮かぶものに、愕然となったのだ。
「こ、氷だ……でっかい氷の柱が、沢山あるんだ……」

「氷で、灯が、あ、あるように、に、見、見せ、か、か、かけたか、か、か──」
河面に生える無数の氷柱の群に、ジークが言った。アキレスがにたりと笑う。
「はい。子供だましと思える単純な仕掛けほど、効果的なもの……。氷で都市の灯を鏡のように反射させながら、少しずつ船の進路をずらしました。あなたが気づかぬうちに船は都市を離れ……今、所定の位置に来たところです」
ふいに、船が大きく揺れ、そこかしこから何かが砕ける音が響いてきた。

ジークの目に、一瞬（いっしゅん）、驚愕（きょうがく）の色がよぎった。

「まさか――」

そのジークの様子に、アキレスの笑（え）みが、これ以上ないというほどの喜悦（きえつ）にまみれた。

「ドラクロワは正しい……あなたは過去（かこ）を無視（むし）できない。こうもたやすくあなたから目と時間を奪（うば）うことが出来るとは……。一つ教えて差し上げます。ここでの私の目的はね、あなたを完全に孤立（こりつ）させることなんです。街から離れ、従士（じゅうし）と別れ別れにする……」

刹那（せつな）、ジークは弾（はじ）かれたようにアキレスに背を向け、疾風（しっぷう）のごとく部屋を跳び出した。

凄魔（ギルト）たちがジークの背後（はいご）を守る――だがアキレスは追わない。声を上げて笑っている。

船の後部へと走るジークの周囲で、船全体がみしみしと軋むような音が響いた。

「まさか……船全体に魔獣（バロール）を……」

突然、床（ゆか）や壁（かべ）が爆発（ばくはつ）したようにめくれ返り、氷の牙（きば）が縦横無尽（じゅうおうむじん）に現（あらわ）れた。

ジークと凄魔（ギルト）たちが素早（すばや）くそれらを切り払（はら）う。かと思うと行く手に巨大な氷柱が一列になって生え、船を真っ二つに引き裂（さ）いてゆくではないか。船にやどった〈蛭氷（グ・リカ）〉が氷結し、内側から材木を破壊（はかい）しているのだ。氷人形は、船にやどる堕気（だき）から注意をそらすための罠（わな）だ。しかもそれ自体、船の移動（いどう）から注意をそらし、従士と分断（ぶんだん）させるための罠だった。

もしこれがドラクロワが授（さず）けた策（さく）であるなら――ジークがアキレスの堕気を奪って魔兵（まへい）

を招くことさえ計算に入れていたに違いない。目的はジークを倒すことではなく、エノワの街から遠ざけ、時間を奪うことだ。アキレスはその策に乗じた単独の刺客だ――
いずれにせよドラクロワとその勢力は既に動き始めている。動乱が始まるのだ。全てが手遅れだった。どうすれば相手に追いつけるのか。何も思いつかず、絶望的な気持ちに襲われ、歯を食いしばってそれに耐えた。今ここで自分が絶望して何になるのか。絶望する心では何も解決しない。一刻も早く従士と合流し、態勢を立て直し――
船の後部へ行くため、氷の刃を跳び越えようとしたときである。
ジークは、氷の一つが、宙を舞う金の輝きに向かって迅るさまを目にしていた。
「狼男ーっ！　ノヴィアが敵を見つけ――」
そのアリスハートの背を、次の瞬間、鋭い氷の槍がかすめた。
アリスハートが悲鳴を上げ、ジークはほとんど無意識にそちらに向かって跳躍の角度を変えていた。アリスハートの金の輝きが、ごうごうと流れる暗い河面へと落ちゆく寸前、甲板から伸びたジークの手に、ぱっとつかみ取られた。
「大丈夫か――」
「い……痛いよ……痛いよぉ……」
アリスハートが弱々しくすすり泣く。その背の右側の羽が、二枚とも、氷の一撃で根本

から引き裂かれていた。
その直後、船がついに真っ二つに分断された。船の前部も後部も、どちらも沈まない。破損部分が氷に覆われ、それぞれ四十人ほど乗れる巨大な筏のような有様になっていた。
船の後部が遠ざかってゆく。氷の枝が櫓のように船を漕いで河の流れに逆らっているのだ。跳び移ろうとすれば氷の槍の格好の餌食になる。ジークは、傷ついたアリスハートを懐に入れ、それから何歩か下がった。負傷覚悟で跳ぼうとする、その寸前だった。
離れゆく船の後部からノヴィアを背負ったキリが現れたのだ。
キリは河面へ跳び出し、そのまま宙を踏んで氷の牙から逃げながら叫んだ。
「ジーク！　ノヴィアの目が……！」
ジークはすぐにノヴィアの状態を悟り、痛恨の念に襲われた。ノヴィアを疲労の極みに陥らせたのは、ジークの失策以外の何ものでもない。
キリがジークのもとへと宙を走る。だが河の流れが早く、ノヴィアを背負っているせいでどうにも追いつけない。みるみる引き離され、キリが絶望的な表情になった。
「キリ、陸へ行け！　ノヴィア、シャングリラの海岸だ！　そこの灯台を目指せ！　俺もチビをつれてそこへ行く！」
「はい、ジーク様！　必ず、必ず……！」

「キリ、ノヴィアを頼む！」
ジークのその叫びを最後に、距離がぐんぐん離れた。やがてキリとノヴィアの姿が闇に没するように消えた。河は轟きを上げて流れ、船の後部は影も形もない。
「この辺りで河が分岐してましてね。船を二つに割り、彼女たちを別の支流に流して捕らえるはずだったのですが……あなたを倒してから彼女たちの面倒を見るとしましょう」
ジークが振り返ると、アキレスは青ざめた顔で笑っていた。その両手の指に刻んだ紋様から血がしたたっている。広範囲に強力な堕気を駆使したせいでアキレスも激しい疲労と苦痛に襲われているのだ。それでもなおアキレスは凄惨な笑みを浮かべて言った。
「過去にとらわれ、現在いる者を失念しましたね……。過去を振り払えないことが、あなたの最大の弱点なのですよ……ジーク」
そのアキレスを、氷人形を駆逐した凄魔が取り囲む――が、みな手足が溶け、水銀の雫を零している。〈蛭氷〉から奪った堕気が消費され、形を保てなくなっているのだ。
「痛いよ……ノヴィアぁ……」
懐ですすり泣くアリスハートに、
「すぐに会わせてやる。必ず……」
ジークはそう告げ、両手で剣を握りしめた。その左手から堕気がつたわり、剣身で青い

炎となって発露し、闇に猛然と燃え盛った。
「お前は、俺が斬る――」
船が揺れ、激流の向こうから凄まじいまでの水の轟きが響いてきた。この先に何、、、があるのか、、ジークはすぐに察した。だが烈気をみなぎらせて剣を構えたまま、微動だにしない。
「ようこそ、闇へ――ジーク」
アキレスが歓喜の顔で足下から氷の槍を現し、ジークが剣を振りかざして跳躍したとき、船は激流の向こう――滝へと落ち込んでいったのだった。

足下では恐ろしい勢いで河が流れている。落ちれば流れに呑まれて泳ぐことも出来ずに溺死するだろう。それが目の見えぬノヴィアにも分かった。それほどの水の轟きだった。
河のすぐ上の宙を、キリはノヴィアを背負って歩き続けた。
一面の闇のため本当にその先に陸があるのかも分からない。もしかすると河の真ん中を延々と歩いているだけかもしれないのだ。先の見えぬ恐怖と戦いながら、
「大丈夫だ、ノヴィア。じきに陸に着くからな。お前の目も、すぐ見えるようになるさ」
おぼろに見える陸を――そこに瞬くかすかな灯を目指して歩いてゆく。その背でノヴィアはただひたすらキリにしがみつき、申し訳なさと情けなさで泣いた。自分のせいでキリ

が限界をきたし、ともに河に落ちるところを何度も想像した。そしてそのたび、
「無理だと思ったら下ろして。私なんかと一緒に落ちたりしないで。お願い……」
「馬鹿言え。俺は〈踏む者〉だ。お前がその名前をくれたんだ。ネルヴァ河に橋をかけた聖人の名だぞ。お前一人くらい軽いもんさ」
足も腕も疲労と痛みで震えているのに、キリは歯を食いしばってそう繰り返すのだ。
「必ず陸まで運んでやるからな……必ず、お前をジークのところにつれてってやる」
灯の消えた闇を歩むキリの背で、ノヴィアはただ声を殺して泣いた。
陸は遠く、闇は深く、二人を助ける者は誰もいなかった。

4

ああ、ノヴィアが泣いている——
熱と悪夢にまみれた夜のどこかから、レオニスはその声を聞いた気がした。
生暖かい血の沼の中で、レオニスは腐敗した両足を引きずりながら這っていた。
沼の周囲には黒い木々が並び、枝にはレオニスが処刑した者たちの首が刺さっている。
それらの首が呻き、歌い、笑っていた。その彼らの声の向こうから——
確かにノヴィアが悲しんでいる声が聞こえたのだ。

「……僕は歩けないんだ」
力なくレオニスは言った。抵抗――殺される母の顔が血の沼のそこら中に浮かんでくる。死にたくない。だから心が歩くことを捨てた。もうどこへも歩いて行けない。そう思っていた。なぜその呪縛が揺らいだのかは分からない。ただ、行かねばならないことだけは分かっていた。ふいに――全く唐突に、その思いが湧いていたのだ。血と後悔の向こう側にあるものに向かって。悪夢の遥か彼方にある何かのために。立ち上がり、行かねばならない――
この醜悪な光景の彼方に、何があるというのだろう。何もないに決まっている。レオニスの心の一端はそう主張している。何もせず、このまま心が狂気に陥るのを待とうと。だがノヴィアが悲しむ声が聞こえるのだ。それは母の声でもある。行かなければ――当然のようにそう思い、レオニスはゆっくりと身を起こした。
腐り果てて茶色く変色した両足には蛆が湧いている。その足を震わせて立った。生暖かい血が頬をつたい首筋を濡らし、体中にしたたるのを感じた。
いっとき、花の香りがした。
湖畔にトールと二人でいたときのことを思い出した。ノヴィアと出会う前、歩けぬ苦痛に精一杯あらがいながら、いつも感じていた世界の匂い。何の力もないまま、ただ立とう

としていた頃の自分が現れて、ふいに今の自分と入れ替わった気がした。
木の枝に貫かれた首たちが一斉に声を上げた。
それは罵声であったし、祝福であった。怒りの声であり、笑い嘲る声であった。
レオニスは右足を持ち上げ、ゆっくりと血の沼から出し、前へと踏み出した。
大量の蛆が、うねうねと身をよじりながら、自分の膝から零れ出すのを感じた。
左足を持ち上げ、二歩目を進んだ。それだけで沼に倒れて沈みたくなる気持ちをこらえ、
「歩けるよ……」
弱々しい微笑を浮かべて、三歩目を進んだ。
悪夢が全身にまとわりついてきた。一緒に死のう——母の苦しむ声。だがレオニスは足を止めない。怖かったものの全てに向かって、むしろ踏み込んでゆく。
死と腐敗と後悔の向こう側に、何かがあるという確信が湧いた。それが何かは到底分かりようがない。もしかすると自分を断罪する何かかもしれない。だが、それでも良かった。
歩いている自分がここにいるというだけで。たった今まで忘れていた遠い昔の世界の匂いが、こうして自分の胸の内に戻ってきたというだけで——
腐った足を震わせて、レオニスは歩いていった。

レオニスの寝息が静かなものに変わっていた。
レティーシャは、じっとそのレオニスの顔を見つめている。
右手に頭蓋骨を抱き、左手に一通の手紙を持っていた。
「兄様……レオニス様が行くよ……」
ぎゅっと頭蓋骨を抱きしめ、レティーシャが、ぽそぽそと声を零す。
「二つだね……兄様。沢山の未来が二つになったね、兄様。未来が二つ……どっちに流れて行くんだろうね……兄様。あたしと兄様……レオニス様……みんな……どっちに……」
頭蓋骨は、答えない。ただレティーシャの腕の中で、頭蓋骨もまた、じっと眠れるレオニスを見つめているようだった。

第五章　カロンの花

1

河の激流が闇に轟く中、ジークは剣を握りしめ、言った。
「お前は、俺が斬る──」
気迫で鋭く引き締まった顔。両手で握る剣に堕気が発露し、青い炎となって燃え上がる。
その懐ではアリスハートが背の羽が破れた痛みに震え、周囲では忠実なる魔兵──銀色のトカゲのごとき凄魔たちが両手に双剣を構えている。
「ようこそ、闇へ──ジーク」
アキレスが笑う。瀟洒な貴族服姿、濡れたように光る黒い目。白い頰に不気味な笑みを浮かべ、爪を剝がして紋様を刻み込んだ両手の指を翻す。その足下から軋み音を立てて〈蛭氷〉が現れる。かつて友と想い人の血をすすった怪物が、氷の槍と化して生え伸びた。
ジークが船の甲板を蹴って跳躍し、氷をかわした。続けて凄魔が一斉に跳ぶ。

その瞬間、ついに船は滝へ落ち、誰もが水しぶきの舞う宙に放り出された。そのとき。
アキレスの周囲で、氷が異様な変化を見せた。
一瞬だった。甲板の上で、氷の棘が複雑な紋様を描いて広がったのだ。
その氷の紋様が爆発するようにして無数の触手を放ち、宙のジークに絡みついた。
「奪え〈蛭氷〉よ！〈招く者〉の力を奪い取れ！」
アキレスが絶叫した。落下する甲板の上で、氷の紋様がひときわ強く輝いた。
それこそ十字形の紋章とともにドラクロワから与えられたもう一つの業——ジークの肉体から聖印を分離するための秘儀であった。ただ氷の刃でジークの肉体を食い破ろうとしても効果がない。ジークにやどる強烈な堕気が、氷の攻撃を受けしのぐからである。肝心なのはジークの命ではなくその力を奪うことだ。
そしてその秘儀が発揮された直後——目も眩むような閃光が起こった。
ジークの左腕が稲妻を迸らせたのだ。稲妻が氷を食らい、溶け崩した。それでも氷の触手は執拗にジークの体に、外套に、その剣に絡みつき——稲妻の奔流とせめぎ合う。
氷に絡みつかれながらも迫るジークに、アキレスが第二の絶叫を放った。
「食い尽くせぇ————っ!!」
その十本の指先が真っ赤な血に染まった。指に刻まれた紋様が強すぎる力を発揮して肉

を裂き、骨を抉ったのだ。一度に全ての爪を剝がされるがごとき痛みに耐えてアキレスが力を発揮するや――なんと滝がジークに襲いかかった。

流れ落ちる水流の全てが一瞬で真っ白になり、氷の刃に変じたのだ。

まるで巨大な氷の獣が滝から飛び出し、牙を剝いたかのようだった。

無数の氷の刃が四方八方から迫り、宙を舞う船でさえ一瞬で氷の嵐に呑み込まれた。

その瀑氷が迫ったとき、凄魔たちがジークの周囲にいた。その凄魔の全員がジークを守って氷の刃を浴び、ずたずたに引き裂かれた。圧倒的な氷の奔流だった。

その真っ白い氷片が視界を埋め尽くしたとき――突如としてジークの左腕が爆発的な輝きを発し、アキレスを戦慄させていた。それはただ相手の力に恐怖したのではなかった。

ジークの身に渦巻く堕気がアキレスにも流れ込んできたのだ。ジークから聖印を奪い取ろうとした結果、尋常ならざる堕気の流入が起こったのである。

アキレスはその一瞬、完全な闇にいた。その闇に満ちる何千何万という数の死者の存在に畏怖した。その何千何万もの死者の向こうに、さらに認識も出来ぬ数の亡者がいた。

闇に堕ちるなどというものではない。自分が小さな水滴となって海に落ちるようなものだ。海に呑まれた瞬間、自分の存在など跡形もなく消し飛ぶ。それほど巨大な闇だった。

アキレスの口から、言葉にならぬ悲鳴が迸った。

(諦めたよ——)
友の声がした。怒り/恐怖が、悲しみ/過去が、執念/無力が、一度にアキレスの中で起こった。友はこれを見たのだ。ジークの従士となり、これを見て諦めた——
一瞬後、アキレスは闇から必死に逃れていた。その手につかみかけたもののあまりの凄まじさに慌てて手放したのだ。堕気の流入が遮断され、光が戻り——
アキレスは、目にしたものに愕然となった。
ばらばらに引き裂かれた凄魔の体と、荒れ狂う氷の向こうから、ジークが青く燃える剣を手に飛び出してきたのだ。そのときアキレスが見たのは、顔も腕も足も腹も氷に食いつかれて全身真っ白になったジークの姿である。その状態にもかかわらず、ジークは表情一つ変えずに真っ直ぐアキレスを見すえ、剣を振るったのだった。
「ば、化け物めっ!」
アキレスが金切り声を上げ、ジークはただ剣の唸りをもって返答に代えた。刃はアキレスの左手へ吸い込まれるようにして振るわれ——五本の指が切断されて宙を舞った。
恐ろしい勢いで流れる河の上に、ノヴィアを背負うキリの姿があった。
懸命に一歩また一歩と足を踏み出し、何もない宙を踏み渡ってゆく。

その胸では〈銀の乙女〉の見習い用の小さな紋章が揺れ、どきりとするほど鮮やかな青い目を闇に凝らし、陸地の方角を必死に探っている。疲労で腕も脚も震わせながら、
「大丈夫だ……ノヴィア。じきに陸だ……お前の目も、すぐ見えるようになるさ」
「無理だと思ったら下ろして、キリ。お願いだから私なんかと一緒に落ちないで」
ノヴィアは、聖性を発揮し過ぎたせいで盲目に陥った目を宙にさまよわせ、涙声で言う。
胸の〈銀の乙女〉の紋章も、手にした宝杖も、〈見守る者〉の力も称号も、今の状況では無に等しい。ジークの役に立とうとする余り、力を酷使し過ぎ、刺客の罠にまんまとかかって船を失ったのだ。そのせいでジークとアリスハートとも別れ別れになってしまった。
それればかりか、このままでは自分の体重でキリを疲労させ、二人とも河の激流に落ちてしまうのではないか。そう思うと今すぐ放り出して欲しくなる。
「俺は〈踏む者〉だ。お前が、その名をくれたんだ……」
だがキリは繰り返しそう呟き、自分を鼓舞し続けた。
「ジークが言ったんだ……お前を頼むって。あのジークが人に頼んだんだ。俺だって……何かやれるんだ。必ず海に行くぞ、ノヴィア……灯台で会おうってジークが言ったんだ」
そう口にする間も膝が疲労で震え、明らかに歩調が鈍くなってくる。
ノヴィアは声を殺して泣いた。闇の中、陸がどちらかも分からぬ不安に耐えながら、ノ

ヴィアを背負い、励まし続けるキリの強さ優しさに涙が止まらなかった。
　このまま自分は背負われるだけなのか。悲しさに襲われてノヴィアは見えぬ目をきつく閉じた。そのとき闇の向こうにはっきりとした気配を感じた。河の音の響き方から、水がどの方向へ流れているかが分かる。唐突に、かつて盲目だったときの感覚が甦り、
「キリ、少し左へ。そう、そっち」
　咄嗟に、手を伸ばして、キリの背後から方角を指示していた。
　キリは黙ってそちらに進路を修正している。疲労でもう声を返す余裕もないのだ。
「そう……陸地の気配がするの……そのまま真っ直ぐ」
　キリの手に力がこもる。汗が目に入ったが拭うことも出来ない。そのままキリも目を閉じ、ノヴィアの指示のまま歩み続けた。
「……あと十歩くらい……もう少し……」
　キリの膝が震え、いきなり両足に激痛が走った。目を剝いて悲鳴を飲み込み、必死に踏んばって転落を免れる。ふくらはぎを刃物で切られるような痛みが断続的に襲う。ノヴィアを不安にさせぬよう苦悶の声を押し殺し、痛みで泣きそうになりながら前へ踏み出す。
　ふとキリの耳にも河の音の変化が感じられた。陸地に水がぶつかる音――この苦難を乗り越える正しい方角に自分は向かっているのだという気持ちが、キリに最後の力を与えた。

「あと五歩……三歩……もうすぐよ、キリ」
ノヴィアが精一杯の冷静さで告げる。キリの足は明らかに限界だった。だが自分が焦ってもキリの邪魔になるだけだ。どれほどの恐怖や惨めな気持ちに襲われようとも、それを抑え、淡々と正しい方角と距離を示すことこそ二人を救うただ一つの手段だった。
「……あと一歩！」
ノヴィアのかけ声とともにキリの足が踏み出され――その体が前のめりに倒れ込んだ。真っ暗闇の宙に放り出される感覚がノヴィアを襲った。無我夢中だった。ノヴィアは陸地の気配に向かって左手の宝杖を振り下ろし、同時にキリの衣服をしっかりつかんだ。杖の柄を地面に突き刺して自分の体を支え、ノヴィアを残して河へ転がり落ちようとするキリの体を引っ張り上げる。焦りと不安で頭が真っ白になるような瞬間が過ぎ――二人の体が折り重なって河縁の土手に倒れ込んだ。しばらく二人とも声も出ず、荒い息を繰り返した。やがてキリが、衣服をつかんだままのノヴィアの手に、そっと触れた。
「お、俺一人じゃ、無理だった……。暗闇で、迷子になってた……ノヴィアのお陰だ」
ノヴィアは、きつくかぶりを振った。衣服をつかんだ手に、ぎゅっと力を込めた。
「あなたが……あなたが私を助けてくれたのよ。私の命を助けてくれたのよ」
まるで子供が泣くような口調だった。キリは、気持ちよさそうに笑った。

「はは、やっと……役に立てた。ずっと……ずっと役に立ちたいと思ってたんだ。お前に、この紋章をもらったときから……ずっと」
ノヴィアは、キリの背に頬をこすりつけるようにして、またかぶりを振った。
そもそもノヴィアの紋章が盗まれたときに取り戻してくれたのはキリではないか。
キリの紋章は、そのせめてもの返礼だし、だいいちそれはキリ自身の努力によるもので自分は何もしていない——そう言い返したいのだが、生き残った喜びやら感謝やら情けなさやらで声にならず、涙ばかりが溢れて声がつまり、
「ありがとう……キリ」
震える声で、やっとそれだけを言った。キリは照れ臭そうに汗で濡れた髪をかきあげた。
「ありがとな……ノヴィア」
まるで、お互いにそっと何かを告白するかのように、そう口にしていた。

船が轟音を上げて水面に叩き込まれ、深く沈んだ。
真っ白い氷が、文字通り滝となって水面に雪崩れ込み、溶けて消えてゆく。
やがて、ばらばらになった船の木材があちこちに浮かび、下流へ流れ始めた。
その船の残骸の間に浮かぶ、大きな氷の塊の上でアキレスがうずくまり、

「おおお……。おのれぇ……ジーク……」
　呻きながら、血まみれの左手に布を巻き付けていた。五本の指を全てジークの剣に切断されたのだ。ふいに、氷がぐらりと揺れた。きしきしと氷の棘がでたらめに生え、
「静まれ〈蛭氷〉……我が魔獣よ……」
　アキレスが右手の指を翻し、氷を抑えた。紋様を刻んだ指が半分なくなったせいで氷の操作に綻びが生じているのだ。ジークの狙いは正確だった。指を斬られたアキレスは必死に氷を操作した。そうせねば逆に自分が、この凶暴な吸血の氷に食い殺されるからだ。
　ジークはその隙に水中に没し、姿を消した。恐らく生きているだろう――そう思うと、愕然とした気持ちになる。あの瀑氷をものともせず、滝から落下した衝撃に耐え、濡れた衣服、鎧や剣、さらには体に食いついた氷の重さにまで耐えて激流を泳ぎ切ったのだ。
　尋常ならざる体力だが、あれほどの膨大な堕気を力に変えるジークならば可能なはずだ。
　水上でジークの〈招く者〉の力を封じ、何重にも罠を仕掛けた。乾坤一擲の勝負だった。
　それなのに、まさかこのような結果になるとは――いったい何という男か。
　危うくジークに恐怖しかけ、アキレスはありったけの憎悪を振り絞ってそれに耐えた。
「この苦しみ……必ずや、貴様と、貴様の従士にも味わってもらう……必ず……」

河の流れに逆らわず下流へと泳ぎ、ジークはずぶ濡れになって河縁に這い上がった。
「ううう……溺れ死ぬかと思ったぁ……」
懐から、同じく濡れそぼったアリスハートが、けんけん咳き込みながら出て来る。
「離れていろ、チビ」
「チ、チビじゃないやいっ。この狼男……」
アリスハートは土手に立ち、きっとジークを振り返って――絶句した。
ジークの全身に、真っ白い氷の棘が食いついているのだ。懐の辺りを見ると、そこだけ氷がなく、代わりに左腕や肩に鋭い氷の刃が突き刺さっている。
「あたしを庇って……」
アリスハートの声が、にわかにジークの左腕に咲き乱れる雷花の音にかき消された。
――おおっ！
凄まじい声が迸り、その左手がジーク自身の胸に叩きつけられた。青白い稲妻がジークの全身に走り、食いついて離れぬ吸血の氷を、一挙に吹き飛ばして溶解させたのだった。
そのままうずくまるジークに、アリスハートが慌てて駆け寄った。
「うわあああ、だだだ大丈夫ぅ？」
ジークは無言でうなずき、逆に訊いた。

「飛べるか？」
アリスハートは残った羽を震わせるが、左側だけでは宙に浮かぶことも出来ない。すぐに地面にぺたりと膝をついてしまった。
「強い聖性を与えられれば回復する」
しょんぼりするアリスハートに、ジークが言った。
これはノヴィアと再会することを意味した。アリスハートが心細げにうなずくと、ジークが右手を差し出した。その掌にアリスハートがおっかなびっくり乗る。
「ノヴィアとキリ……きっと大丈夫よねぇ」
「海を目指すよう言っておいた。早ければ三日で辿り着く。そこで必ず会える」
「なんで海なの？　近くの聖堂とか……」
「エノワの街で罠に遭ったということは、この一帯がドラクロワに呼応したんだろう」
どこも敵だらけということだ。下手に聖堂に助けを求めればさらに罠にかかることになる。アリスハートが不安に顔をしかめるが、
「ノヴィアの聖性もじきに回復する。あいつらなら必ず切り抜けてくれるだろう」
ジークはそう言って、まだ青白い堕気の輝きを帯びる左手で、ひょいと銀色に光る物を担いだ。凄魔たちが姿を変えた、巨大なシャベル——だが、何かが変なのにアリスハート

は気づいた。よくよく見ると、シャベルの歯が半分欠けているのである。
「ど……どしたの、それぇ。形が変だよぉ」
「河に流された」
あっさりとした返答が来た。なんと凄魔が数体、河に流されるままになったというのだ。
「だだ、大丈夫なのぉ？」
「合流地点は分かっている」
淡々と答える。歩き出しながら、アリスハートをひょいと肩に乗せた。
「あんたの肩、鎧がごつごつするぅ……」
「服が乾いたら懐に入れ」
「えー。だって、あんたの懐って……」
言いさし、ふと口ごもった。
「……血の臭いがするか」
ぽつりとジークが呟く。アリスハートは返答しない。だが図星だった。ジークの懐は戦いで染みついた血の臭いに満ちていた。
「すまんな」
ジークが言う。ノヴィアと別れ別れになったことを謝っているのだ。だがアリスハート

はかぶりを振った。何となく自分がジークを傷つけたような気になっていた。ジーク自身、血の臭いが拭えないことを悲しんでいるのではないか。そんな風に思った。

「あたしも、ごめん……」

小声で呟きつつ、ジークの赤い髪をひっぱる。ふと頭上を見上げ、そのまま髪をよじのぼり始めた。ジークが足を止めた。そのときにはアリスハートはジークの頭の上にいた。

「あたし、ここがいい。見晴らしいいいし」

アリスハートは真面目な口調でそう言った。

ジークはしばらく黙って立ち、やがて再び歩き出した。何となく憮然とした顔だった。

2

血の沼から出て、黒く刺々しい林を、レオニスは腐った足を震わせて歩いていった。

頭上から、枝に串刺しにされた首たちの零す血の雨が、さらさら音を立てて降ってくる。

ふいに林を出た。荒涼とした石だらけの河原だった。大きな赤い河が流れている。

ここはどこだろう――レオニスが思ったとき、河のほとりで何かが立ち上がった。

岩の一つかと思っていたが、灰色のぼろ布を着た人間だったのだ。

長身痩軀の男だった。レオニスに背を向けて河の方を見ている。

レオニスは何の考えもなしに、その男に近づいた。ここがどこなのか訊く気だったのかもしれない。何度も倒れそうになりながら、足を踏み出してゆく。気づけば靴も履いておらず、自分の足の爪先が黒く腐り、濁った血を零すのを見て吐き気がした。
それでもレオニスは足を止めず、かつてこれほどの距離を歩いたことがないという奇妙な充実感とともに男のすぐ近くにまで来た。
男が、くるりと振り向いた。レオニスの接近を予期していたような動作だった。
レオニスは思わず足を止めていた。何とも不気味な男が、そこにいた。
男の顔中に、何かの模様があった。入れ墨――？　そう思ったが違う。
なんと男の顔面に聖印が刻み込まれているのだ。青白く光る紋様が、まるで道化師の化粧のように見えた。だがこれは化粧などではない。問題は聖印が皮膚を食い破り、肉や骨にまで達している部分があることだ。左側など、傷から血がにじみ、膿が生じている部分さえある。皮膚病で顔が腐るよりもひどい。こんな無惨な顔は見たことがない。
ほとんど白に近い髪が、ゆらゆら揺れる鬼火のように男の顔を飾っている。
緑の目が、そんな無惨な顔にもかかわらず、妙な愛嬌をにじませていた。
レオニスはまじまじと男を見た。怖くはない。これまで悪夢にさんざん脅かされたのだ。
レオニスの恐怖心はすっかり麻痺している。怖がる代わりに、男のもとの顔立ちを見て取

ろうとした。整った顔だった。どこかで会ったような気もするが、全く記憶にない。
ふと男の唇が笑みの形になった。にっこり笑ったのだろうが顔面に刻まれた聖印のせいで不気味なことこの上ない。だが明らかに、ここまで歩いてきたレオニスを誉めるような表情をしていた。その緑の目をきょろきょろと動かし、首を傾げた。
さて、どう自己紹介したものか——男がそんな風に考えているのが分かった。
かと思うと、いきなり、かぱっと口を開いてみせた。
うっとレオニスは呻いた。男の口の中までも聖印の輝きが満ちていたのだ。舌や歯茎や喉にも青白い輝きが刻み込まれている。喋れないことはないだろうが、これでは聖印の力を発揮するたびに口中を切り刻まれる痛みに襲われることになる。
だが男がレオニスに見せたいものは、それではなかった。
かっ、かかっ——
大きな音を立てて歯を嚙み鳴らしたのだ。それが一番の自己紹介であるというように。
レオニスは呆然となった。確かにそれだけで、この男が何者か、一発で分かった。
「レティーシャの……兄か」
男が、にっと笑った。真っ白な歯がこぼれた。

「兄様……教えるの？」
ぎゅっと頭蓋骨を抱きしめ、レティーシャが囁く。
「レオニス様に、未来を教えるの？　どっちを選ぶか訊くの？　ふぅん、そぉ、兄様。レオニス様に、どんな風に死にたいか訊くの、兄様。止められないの……兄様」
一方の手に握った手紙に、ちらりと目を当て、ぽそぽそと声を零した。
「未来を一つにするものが生まれたの……兄様。そうなの……兄様を首だけにした人の力……流れて行くの。ドラクロワっていう人と一緒に……レオニス様も一緒に……」

ごうごうと轟き流れる暗い河の底に、それは沈んでいった。
十字形の紋章――刻まれた称号は〈癒す者〉、それが暗い闇の淵に到達したとき、かすかな輝きをともした。紋章にやどる聖性が、何かをきっかけにして目覚めていた。
その輝きとともに、紋章を核として、刺々しい氷の群が生え伸びた。
氷はみるみる大きくなり、軋みながら身をよじらせた。すぐに溶けて消えるはずだった魔獣の堕気が――今、紋章の聖性と混ざり合い、一つの形を求めて成長していった。
本来なら混ざり合うはずのなかった聖性と堕気だった。その証拠に、氷はすぐには形を整えられず、川底を洗う水の流れに溶けて崩れてゆく。だがそこで――

ふいに青白い雷花が、紋章の周囲で咲き乱れていた。それが闇に強く光を灯した。
青白い雷花が——死者の魂を招く力そのものが、分離しかけた聖性と堕気を番わせ、形を整えるきっかけを与えたのだ。
氷が一挙に成長し——同時に、河の流れをもろに受けた。押し流されそうになり、それに抗うようにして全身に氷の刃が生えた。刺々しい氷を川底の泥に突き刺し、這った。
そのまま少しずつ川底を進み、激流を横切ってゆく。
誰も知らない暗い闇の淵で、それは生まれ、やがて河岸に到達していた。
水面から、鋭い剣が幾つも突き出されるように——その刺々しい姿が現れた。
河岸の土を突き刺し、抉り、ひっかきながら、這い登ってくる。
水の底に比べて、地上の夜は格段に明るかった。身を翻弄する激流もない。
紋章を核とし、氷を形質とし、雷花によって出現したそれは、ゆっくりと顔を上げた。
這っていた姿から、静かに身を起こし、足を伸ばして地上に立った。
たちまち、全身から生え伸びていた氷の刃に亀裂が走った。もう逆らうべき激流はなく、無用となった刃が一斉に砕け散り、ほっそりとした足下にばらまかれたのだった。
そうして現れたもの——
それは、鮮血の色をした長い髪であった。同じく鮮やかに赤い瞳であった。白くたおや

かな裸身であった。胸のふくらみの間に、半ば鎖ごと埋め込まれた紋章であった。
一人の女が、そこに出現していた。
「ジー……ク――」
それが、暗い夜を見上げながら、その女が生まれて初めて口にした言葉であった。

船で河を下っていた。遊覧船ではなく、大型の荷船である。
後方では、エノワの街が巨大な竈のように炎を上げて燃えている。
トールは船の甲板から、無惨にも焼かれる街が遠ざかるのを呆然と見送っていた。
ただ傍観するしかなかった。まさかこんなことが起こるのかという気持ちだった。
ドラクロワは、街を一つ焼き払うことで動乱の開始を告げる狼煙としたのだ。
いまだかつて見たことのない暴虐であった。
その暴虐の光景を、ドラクロワもまた、トールのすぐそばで見送っている。
笑みもなく、満足そうな顔もせず、眉一つ動かさず、遠ざかる炎に目を向けていた。
ロイヒルトの姿はない。ドラクロワの命令で、ジークの行方を探りに行ったのだ。
果たしてアキレスの策は功を奏したのか――ノヴィアたちの安否はどうなったのか。
トールとしては、ただドラクロワのもとにいて、ロイヒルトの報告を待つしかない。

一度は自滅覚悟でドラクロワを斬ろうとしたトールにしてみれば、歯がみしたくなるような時間が過ぎてゆく。何も出来ず、ただ影のように傍観する自分が苦しかった。レティーシャの蝿に食いちぎられた指の傷が、しきりに疼く。

ロイヒルトがいない今、ドラクロワを守る者はいない。トールはしきりにドラクロワの隙を窺い、斬りかかろうとするが、そのたびに一瞬で吹き飛ばされる自分の姿ばかりが目に浮かぶ。ドラクロワの力の正体さえ分からなければ、なすすべもなく犬死にする他ない。なんとかドラクロワの意図なり力なり、その一端でも良いからつかめないか――

トールが焦慮していると、ふいに、ドラクロワの目の色が変わった。

すっとその顔が、河の向こう――どことも知れぬ闇の彼方に向けられ、

「おお……」

突然、狂おしい声がドラクロワの口から零れ、トールをぎょっとさせた。

「ついに招かれた……業火と闇の激流の中で。あの男の力に触れさせることで……最初の形が定まった。やっと……おお……そのために街を焼いたのだ。多くの死が必要だった。渦巻く堕気が、戦いの祝祭が……。無数の死の果てに誕生したものを……今こそ祝おう」

切々と不可思議な言葉を零すドラクロワに、トールは心底ぞっとなった。とてつもない執念がドラクロワの全身から発されていた。アキレスや自分など遠く及ばぬ凄烈な意志が

みなぎる眼差し。それが自分に向けられる前に斬りかかれ――一瞬の決心がトールを突き動かそうとした。ドラクロワが何に心を奪われているにせよ、今が好機――

「大人しく待つがいい……英雄の息子よ。じきにお前が欲する情報が入る。時期を逃すのと同じように……無理に時期を早めれば、本来の目的を失うことになる」

ドラクロワは、トールを見もせず言った。トールは動けない。根深い恐怖があった。これほどの事態を引き起こしていながら、ドラクロワには狂気とはほど遠い冷酷な現実感覚があった。執念に心震わせながら、一方でトールの気配一つ見逃さないのだ。

その怜悧さが人間離れしたものを感じさせた。この男は本当に人間か？　禍々しい怪物が人間の姿にやどっているだけではないのか？

この男は、人間の営みなど何とも思っていない。平然と大陸中の国を滅ぼすことさえやってのけるだろう。ドラクロワの意図を見極めねばならない――トールはこれまで以上に強い決意が湧くのを覚えた。レオニスやジークや、聖王でもいい。自分ではどうしようもない代わりに、ドラクロワに匹敵する力を持つ誰かに、この危機を伝えなければ――

船は進み、いつしか業火は、遠く闇の彼方に消え去っていた。

ロイヒルトは数人の手勢とともに馬を駆り、河縁に来ていた。アキレスが最後の罠を仕

掛けた滝の下流である。アキレスが生きていればこの先で合流出来るはずだった。
「船は跡形もないな……」
ロイヒルトが呟く。ランプに照らされた河面に、船の残骸が浮かんでいた。
「人がいます……ロイヒルト様」
ふいに、夜目の利く者が声を上げた。
「アキレスか……？」
ロイヒルトらがそちらに馬を進め、ややあって驚きとも感嘆ともつかぬ声を洩らした。
異様な女が、河縁を歩いていた。気味が悪いほど鮮やかな赤い髪と、一糸まとわぬ体が彼らの目を打った。女の前方へ回り込み、ランプで照らしながらみな馬を降りた。
女の足が止まった。美しい顔に幼女のような表情を浮かべて、不思議そうにロイヒルトたちを見ている。その瞳が、ランプの灯りに照らされて真っ赤に輝いていた。
野卑な言葉の一つもかけようとしていた男たちが、女の異様な雰囲気に息をのんだ。
「なんだ、お前は。なぜこんな所にいる」
ロイヒルトが声をかける。女は応えず、彼らを見つめ、ふと自分の体に目を向けた。胸に手を当て、自分には何かが足りないことに気づいたような表情になる。
その動作でロイヒルトは女の胸にあるものに気づいた。十字形の紋章――ドラクロワが

常に手にしていたものだ。それが女の胸を飾っている、というより埋め込まれているのだ。
「まさか……」
ロイヒルトが呟いたとき——異変が起こった。女の足下から、きしきし軋み音を立てて氷の棘が幾重にも生え伸びたのだ。それが女の体を覆い、あっという間に衣服や靴に変貌した。それが、男たちにあって女に足りないものだった。もはや間違いなかった。
「アキレスめの氷人形だ。ドラクロワ様から授けられた紋章を持っているとは……」
「どうしますか」
男たちが訊く。ロイヒルトは女に向かって顎をしゃくった。
「持ち帰る。手足を斬れ」
白刃を抜く音とともに、男たちの何人かが女に近寄った。女は首を傾げ、
「ジー……ク？」
男の一人に向かって訊いた。男は応えず、無言で剣を振り下ろした。
ぎん、という鈍い音を立てて、剣が女の肩に食い込んだ。女はじっと男を見ている。
「くそっ、なんて硬さだ」
剣を振るった男が舌打ちした。周囲の男たちが揶揄するように笑う。次々に女に剣が叩

き込まれた。女は剣で切り刻まれながら立ちつくしている。
かと思うと――突然、真っ赤な何かが迅った。
女の背に剣を突き立てていた男が、ぎゃっと悲鳴を上げた。男の胸を何かが貫いている。
髪だ――女の赤い髪が伸びて、槍のように男を串刺しにしていた。ロイヒルトが目をみはり、他の男たちが唖然となる。異変はそれだけにとどまらなかった。赤い髪にとらえられた男が、けたたましい絶叫を上げた。男の顔や手足が、みるみる干涸らびてゆく。
「血を吸っているのか……」
ロイヒルトが歩み寄ったとき――女の真っ赤な髪が四方へ伸びた。
一瞬だった。髪が束になって真っ赤な氷の槍と化し、男たちを貫き倒したのだ。鎧さえやすやすと切り裂く鋭さである。みな、ことごとく血を吸われて干涸らびるや――
女の赤い瞳と髪が、にわかに妖しく輝いた。鮮血を吸って、さらに鮮やかな赤さを帯びたのだ。そしてその吸血の髪が、鋭い刃と化して、目の前のロイヒルトにも襲いかかった。
凄まじい音とともに火花が散った。ロイヒルトの肉体が女の髪を弾き返したのである。
そのままロイヒルトは、女を抱きすくめた。問答無用で、その体をへし折ろうとした。
むうっ……とロイヒルトの口から驚きの声が零れた。
女の細い手が、平然とロイヒルトの腕を押し返したのだ。凄まじいまでの剛力だった。

その女の肩に、おぼろな輝きがともるのをロイヒルトは見た。なんと聖印の輝きである。
――カンディードの聖印！　ロイヒルトは驚愕とともに悟った。ドラクロワが授けた、尋常ならざる剛力をもたらす聖印である。それを、この女が有しているとは――！
ロイヒルトは女から身を離し、さっと退きながら、腰の鉄鎖を手に取った。
「どうやら……何としてもドラクロワ様のもとへ運ばねばならぬようだな」
鉄鎖で女の頭を砕こうとしたとき――また輝きがともった。今度は女の両膝である。
――セルソロスの聖印！　もはや驚きを通り越してロイヒルトは憤怒を抱いた。アキレスは片っ端から、ともに戦った同胞の力を奪っているのだ。
「おのれ……！」
怒りに任せて鉄鎖を振り下ろしたとき、ふっと女の姿が消えた。
体の重さを一瞬で消す聖印の力を発揮させ、目にも止まらぬ速さで移動したのだ。
ロイヒルトは慌てて周囲を見渡した。すぐに見つかった。なんと女は、河の上にいた。
まるで夢か幻のように、河面を踏んで移動し、あっという間に闇へ消えた。
ランプを掲げて捜すが見つからない。ロイヒルトは激しく舌打ちした。
闇の向こうで――女は河面を歩み、ふわっと対岸へ降り立った。

そのまま、どことも知れぬ方角へ、導かれるように歩んでゆく。
「ジー……ク……」
赤い目をさまよわせながら、女はその名を繰り返し呼び続けた。

3

真っ暗闇な森の中、ノヴィアがキリの手を引いて先導していた。
盲目であった頃の感覚で歩むノヴィアの後を、キリがおっかなびっくりついてゆく。
やがて街道に出たところでキリが祠を見つけ、そこで夜を明かすことにした。祭礼用の小さな洞窟である。人が泊まるような場所ではないが、疲労しきった二人には夜風をしのげるだけで十分だった。二人して体を押しつけながら入り込むと意外に暖かく、風の音も遠のき、ひどく静かだ。互いの息が聞こえるのが妙に頼もしく、不安を宥めてくれる。
「ジーク達も今頃、野宿かな」
キリがなるべく寝心地を良くしようともぞもぞ体を動かしながら、ぽつんと言った。
「私が、敵を見つけられなかったから……」
ノヴィアが悔やむように言う。横向きに寝ながら宝杖を額に当て、杖にやどる聖性で力を回復しようとしていた。だが予想以上に疲労がひどく、なかなか回復しそうにない。そ

のせいで余計に情けなくなる。
「もしこれで……従士を辞めさせられたら……。私、どうしたらいいんだろう……」
呟きのつもりが途中から泣き声に変わっていた。我慢しようとすればするほど涙が零れて止まらなくなる。ふとキリの手が頬に触れ、
「ジークはお前が頑張ってるの知ってた。お前が疲れる前に止めないジークが悪い」
そっと服の袖で涙を拭ってくれた。
「辞めさせられそうになったら、野垂れ死んじゃうって叫んですがるのも手かもな。ジークなら絶対、放っておけないぜ」
キリのいたずらげな笑顔が見える気がした。ノヴィアは子供のようにしゃくり上げ、頬を拭われる心地よさの中、うなずいた。
「ノヴィアにとって、ジークは海なんだな」
真面目な調子でキリが言った。途端に、こんなときなのにノヴィアは顔が真っ赤になるのを覚えた。ぐすっと洟をすすりつつ恥ずかしさで顔を背ける。だが闇の中でキリにノヴィアの表情が分かるわけがない。かえってその動作でキリがくすくす笑うのが聞こえた。
「なんで笑うのよお……」
まだ半分泣き声のままノヴィアが言うと、あっけらかんとした返事が来た。

「俺にも少し分かるな、その気持ち」
ノヴィアはどきっとなった。キリがジークに親密にしている光景が甦った。従士としての自分よりも遥かに近しく接する姿が――だが、キリが口にしたのは別のことだった。
「フモって奴がいてさ。好きだったんだ。みなフモのことが好きだった。でも……俺の好きは、他の奴らとは少し違う気がした」
キリは仲間の中でただ一人の女の子だった。仲間はみなキリを守るために死んだのだ。
「ジークは……フモに似てる」
安心しかけていたノヴィアは、それでまたどきっとなった。ジーク自身かつては孤児である。心情的にもキリに近しい。単純にジークが好意を抱くなら、自分よりもキリの方ではないのかという思いがノヴィアの胸をちくりと刺した。そしてそこでキリは声を低め、
「でもジークにはノヴィアがいるもんな。俺も、ノヴィアみたいになれたらな……」
と言った。ノヴィアはぽかんとなった。
「女の子っぽくて、何でも出来て、俺には絶対手に入らないものを沢山持ってて……」
「う、羨ましいのは私です」
身を起こして叫んだ。キリも仰天して飛び起きた。そのキリの袖を手探りでつかみ、
「あなたみたいに自由で、優しくて、誰とでも仲良くなれて……私……ずっと……」

羨ましかった、と消え入りそうな声で言った。キリは唖然としているようだった。沈黙が降り、かと思うと、キリがぷっと噴き出すのが聞こえた。今度ばかりは、なぜ笑うのかと訊かなかった。その間もなかった。つられてノヴィアも噴き出していたからだ。

何が何だか分からないまま、胸の内に抑えていたものがどっと堰を切って溢れ、それが全て笑い声になったようだった。狭い洞穴の中に二人分の笑いが響き渡り、気づけば再び互いの体を押し合うようにして横になっていた。ちょっとでも動けば互いにぶつかる近さである。それがなんだか余計におかしくて、押し合いへし合いしながら笑い転げた。

「あー……おかしい。俺たち、絶対変だ。羨ましいのに笑ってるなんて。本当に変だ」

「あなたがおかしなことを言うからでしょう。私のどこが羨ましいの」

「お前だって俺のどこが羨ましいんだよ」

そう言ってまた互いに大笑いした。暗闇がむしろ気持ちをどんどん優しくしてくれるようだった。ようやく笑いが収まる頃には、この状況に対する緊張も不安も綺麗に消し飛び、疲れを癒す安らぎが訪れていた。

その安らかさの中で、いつしか互いに自分のことを話していた。

キリは仲間たちのことや聖印を刻まれたときのこと、聖堂を逃げ出した後の生活を話した。ノヴィアは母のことや受け継いだ力のせいで盲目に陥ったこと、アリスハートやジー

クとの出会い、シーラやドラクロワについて自分が知っていることを話した。また自分がレオニスという少年と出会い、弟のように思っていること、そのレオニスが敵になった悲しみや戸惑いさえも話した。キリは、レオニスに会ってみたいと言った。ノヴィアは、フモやキリの仲間達と話してみたかったと言った。

二人とも、相手のことを知るのがなぜこんなに楽しいのか、不思議でしょうがなかった。やがて安らぎが眠気をもたらすと、海へ行こう、と合い言葉のように二人で繰り返していた。ジークとアリスハートが待っている海。キリにとって希望であり故郷である海。

全てが終わり、全てが始まる場所――それが海だとジークが言っていたのを二人して思い出し、海に辿り着いた後のことが、魔法のように二人の口をついて出ていた。

「一緒に旅していたい。海を見た後も」

そして、お互い、初めての同性で同年齢の友人なのだということに気づく頃には、二人とも眠りに落ちていた。

(手足に痺れが起きたら、すぐに言え――)

ジークの声が甦り、はっとキリは目を覚ました。

朝靄が洞窟の外を覆っている。恐る恐る足を動かした。両足とも膝から下に強い痺れが

あり、ふいに、ずきっと痛みが走った。声を押し殺して足に触れる。ひどく強ばり、ふくらはぎの辺りに何か所かしこりが出来ていた。仲間はみな病気になった。死蠟症——聖印の悪影響で体が蠟のように固くなる死病に。そのことがいやに冷静に思い出された。

（どんな人間も、旅の途上で死ぬ……）

またジークの声が甦る。大事なのは、死のときにその足がどこへ向かっていたかだと。

「俺の足は、いつだって海へ向かってるさ……。どこまでも新しく始まる場所へ……そうだろう、ジーク……フモ……」

　そのとき傍らでノヴィアが目を覚ました。

「どうしたの……キリ？」

「いや……なんでもないよ。目は……」

「ねえ、キリ……今は朝？　それとも……」

　キリが口ごもる。ノヴィアは深く溜息をついた。一晩だけでは回復しないほど自分を疲労させてしまった反省があった。だが、

「よく寝た、キリ？」

　努めて明るく訊いた。目が見えなくとも移動は出来る。一刻も早く海を目指すのだ。

「たっぷり寝たせいで腹が減ったよ。どこかの聖堂から食べ物をかっぱらってくるか」

「ジーク様は、聖堂ではなく海に行けとおっしゃったわ。きっと聖堂は敵だらけよ」
「なら遠慮はいらないってわけだ」
キリは笑い、ノヴィアの手を引いて洞窟を出た。
朝靄の立ちこめる森を街道が貫き、地形は起伏が激しく、そこら中に崖があった。
「夜中に俺一人だったら崖から落ちてたな」
「あなたは宙を歩けるじゃない」
手を引かれながら、ノヴィアが呆れたように返す。
キリは笑って、両足の痛みを隠した。歩くほどに痛みが足から腰へ這い登ってくる。この状態で力を使えばどうなるか、キリにも分からなかった。
「……誰かいるわ。沢山の気配がする」
ふいにノヴィアが言った。キリは素早くノヴィアをつれて茂みに隠れた。馬に乗った騎士達が崖のすぐ下を行くのがちらりと見えた。かと思うと頭上からも男達の声がする。
どうやら何かを――誰かを捜索しているらしい。息を潜めるうちに気配は遠のき、
「……敵が俺たちを捜してるのかな」
「分からない……早く行きましょう」
ひそひそ声を低めながら茂みから出た。周囲は崖か急勾配の斜面が多く、道沿いに行く

しかない。誰か近づいた場合、いつでもすぐ隠れられるよう注意しながら進んだ。
だが見晴らしの良い下り坂に差し掛かったとき、にわかに前方から馬蹄の音が響いた。
「……見張りを残していたんだわ」
ノヴィアが見えぬ目をさまよわせる。キリが道を戻ろうとするとそこからも数名の騎士がやって来る。その騎士の一人が叫んだ。
「ノヴィア殿ですな？　ジーク殿が我らの聖堂を訪れ、あなた方を捜すよう頼んだのだ」
嘘だとノヴィアは直感した。ジークが離反した可能性のある聖堂に捜索を頼むとは考えにくい。だが力が使えない今、抵抗するのはまずい。敵の狙いは自分だ。それなら——
「キリ、これまでありがとう。もう良いわ」
冷ややかな声音に、キリがきょとんとなる。
「私は彼らと行くわ。もし敵でも〈銀の乙女〉を無闇に傷つけたりしないでしょうから。目が見えないまま旅するのは、もう嫌。あなたにもうんざりする。ここで別れましょう」
そう言い放ち、乱暴に手を離した。だがキリがまだ黙ってそばにいるのが分かった。
「あなたとはうまくやっていけないのがよく分かったの。一緒に旅するなんてもう嫌」
つんとなって言った。早く怒れ。行ってしまえ。内心でそう繰り返しながら。
キリが足の痛みを隠していることとくらいとっくに感づいている。ここで抵抗すればその

キリに戦ってもらうしかないのだ。早く行け。逃げろ。
「さあ、我らの馬にお乗り下さい」
騎士たちが近づいてくる。丁寧な口調の底に、剣呑な響きがある。抵抗すればすぐに剣を抜く気でいるのだ。ノヴィアは焦った。
「じゃあね、キリ。ついてこないで頂戴」
くるりと馬蹄の音の方へ顔を向け、キリに背を見せた。そのつもりだった。ぷっと噴き出す笑い声が、頭上の宙から聞こえた。
「沢山、喧嘩したからなぁ！　お前が何を考えてるかくらい分かるぜノヴィア！」
何とも朗らかな声だった。キリが騎士に向かって宙を駆けるのが分かった。
騎士の慌てる声――そして、ごつっという鈍い音。キリが騎士を蹴り飛ばしたのだ。ただ蹴るのではない。体を宙で支える聖印の力をぶつけていた。鎧を着た騎士が馬上から吹っ飛ばされ、地べたに転がるほどの力だった。
「――キリっ！」
次々に剣を抜く音が響き、ノヴィアが叫んだ。まるで泣き声だった。だが返って来たのはキリの笑い声である。ノヴィアを安心させるために必死に出す笑いだ。剣が空を切る音がするたびにノヴィアをぞっとさせた。だが一人また一人と落馬し、やがて静かになった。

「おい見ろよ、食料と地図だ。やったな」
キリが言った。そこへ、さらに馬蹄の音が迫った。倒したのは数名の見張り役に過ぎない。大勢の部隊が他にいるのだ。キリは奪った食料と地図をノヴィアに手渡した。
「逃げるぞ、ノヴィア！」
ノヴィアを背負いながら叫ぶ。ノヴィアもキリにしがみついた。キリが崖から跳んだ。宙を踏み、敵が呆然とするのを尻目に下へ下へと跳び渡る。
ノヴィアの手が、ふと温かく水っぽいものに触れていた。血だ。
「キリ……怪我をしたの？」
「大した傷じゃねぇよ」
キリが明るく返す。事実、傷は浅く、足の痺れも痛みも、もう気にならなかった。自分を守って死んだ仲間の顔が思い浮かんでいた。
「今度は俺の番だ。俺が、誰かを守る番だ」
そう言いながら地面に下りた。ノヴィアも背から下り、キリに正面から抱きついた。
「なぜ……あなたはそんなに優しいの」
震えるノヴィアの頭を、キリはそっと肩に抱いた。
「俺が優しいんじゃない。仲間の優しさが俺の中にあるんだ。みんなが優しくしてくれた。

ノヴィアの優しさも俺の中にある。ほら、あんまり強く握ると食料が潰れちまうぞ」
キリが笑う。ノヴィアも目尻を拭った。なぜキリが羨ましいのか今やっと分かった。
自分は自分のために頑張って来た。だがキリは何の見返りもないまま誰か、の、ために頑張れるのだ。一人の人間として心から羨ましかった。
小川を見つけてキリが傷を洗い、遅い朝食を摂った。キリが再びノヴィアの手を取り、平地を進むうち、ふと足を止めた。
「なんだ……これ。地面が真っ赤だ」
同時に、甘い香りがノヴィアの鼻をついた。それも濃密な甘さだ。キリが愕然と言った。
「花だ……血みたいに真っ赤な花だ」

「なにこの花……そこら中に咲いてるぅ。なんか……気味悪いくらい真っ赤ねぇ」
ジークの頭の上でアリスハートが零す。
「カロンの花……弔いの花だ」
「……カロン？」
「堕気が強い場所に咲く……この辺りの風習では、葬儀のとき、この花で死者を飾る」
アリスハートがぞっとなる。葬儀の花が、道の両脇に咲き乱れているのだ。

そしてその花に囲まれるようにして聖堂があった。街はひっそりとして人気がない。
ジークが近づくと、街から十名ほどの騎士が現れた。
「カロンの花はいつから咲き始めた？」
騎士たちは答えず、無言で取り囲んだ。
「懐に入ってろ、チビ」
「え……だって……」
「外にいると血を浴びるぞ」
ぎょっとなるアリスハートを懐に入れ、
「増殖器を大量に生産し、土地に堕気が染みついたな。住民はどうした」
「疫病が流行り、ほとんど逃げ出した」
騎士が言う。みな顔が死人のように青白い。強い堕気による悪影響だった。
「堕気が疫病を招いたのは分かっているな」
「だがお陰で聖法庁に対抗する兵力を得た」
「そんな理由で大勢を病で死なせたか」
「ドラクロワ様が我らに授けてくれた力だ」
その名を騎士が告げた刹那、シャベルを握りしめたジークの左手に、稲妻が迸った。

騎士が剣を抜いて掲げた。途端に聖堂の門が開き、武装した兵の一団が声を上げて雪崩れてきた。赤い花が馬蹄に踏みしだかれて舞い散り、

「ジーク・ヴァールハイトが招く！」

死の香りの中、烈声が響き渡った。

4

花が舞い、血がしぶき、炎が燃え盛る——何もかもが恐ろしい赤さに染まる中、聖堂の兵が増殖器を用いて魔獣を招いて応戦するが、ジークと魔兵になぎ倒されるばかりだ。

聖法庁の軍に対抗するための布陣が、圧倒的な力で壊滅させられる様子を、遠間から、馬上のアキレスが血走った目で見ていた。

「〈招く者〉——ただ一人の軍団……」

声に、アキレス自身、認めざるをえないほどの強い畏怖がこもっていた。

昨夜の罠が失敗に終わった後、アキレスはドラクロワの手勢と合流せず、手近な聖堂に宿を取っていた。聖堂の兵にジークの従士たちの行方を捜索させる一方、アキレスはこうしてジークの動きを遠くから眺めるばかりだった。

ドラクロワの手勢と合流しなかった理由は、ジークと直接対決させられるのが怖かった

からだ。ドラクロワに会えば問答無用で捨て駒にされるだろう。新たな罠を仕掛け、今度こそジークに倒される自分を想像すると、恐ろしくてたまらなかった。

アキレスは己の左手を見た。指を切断され、包帯を巻かれた手だった。昨晩、アキレスは手の痛みを感じる神経を〈蛭氷〉に麻痺させ、ひと針ひと針、傷口を縫いながら、懸命にジークへの怒りと憎しみを駆り立てていた。だがそれでも恐怖が上回った。

なぜジークはあれほどの闇に耐えられるのか。精神力の問題ではない。ジークはほとんど自分の生命など眼中にないのではないのか。生きているのは目的があるからで、それがなくなればいつでもあの闇の渦に自分を放り込む用意があるのではないか。

そうでなければ無数の死者の群に這い寄られて正気を保てる理由がつかない。それがアキレスの考え方だった。死者への憐れみと共感が、恐怖に優るとは思えないのだ。

ジークに匹敵する力は、自分にはない。それがはっきりと分かった。悔しさで気が狂いそうになるのに、それでも恐怖があった。ジークに匹敵するのはドラクロワであり、レオニスであろう。もはやアキレスの希望はレオニスの存在しかない。レオニスが真の王となるために、ジークの力を奪う。自分にはジークの力は受け入れられないが、レオニスならばきっとあの恐るべき力の奔流を支配することが出来るに違いない。

「力なくば……ただ主人のため、力を渇望するのみ」

聖堂の斥候の報告によれば、ノヴィアの万里眼は回復していない。
今が好機だった。二人の少女のうちどちらでもいい。人質にし、ジークの力を奪う罠を、繰り返し仕掛けるのだ。昨夜の罠でも、ノヴィアたちを確保していればまだ有利に戦えたはずだった。ついでに、あの男の前で、少女たちの手足を切り落としてやる。ジークにも無力さと後悔を味わわせてやるのだ。
それはもはや作戦でさえなかった。そう思うとアキレスは幸福感さえ感じた。
危害を加えるなというレオニスの指示など、嗜虐心で己の無力さを慰めているのだ。ノヴィアにアキレスは、甲高い笑い声を上げながら陥落する聖堂に背を向けた。もはや綺麗にアキレスの中から消えていた。

船から降りると、そこは無惨なまでの廃墟だった。
焼け落ちた建物、おびただしい血の跡、河に放り出されて浮かぶ死者たち。
トールは見渡す限りの破壊の光景に、声も出ない。その街がどういう名で、どんな名物があり、何を誇りとして生活していたのか、全く分からなくなるほど叩き潰されていた。
ドラクロワは眉一つ動かさず下船し、血なまぐさい光景の広がる聖堂に入った。
すぐにロイヒルトがやって来て、
「聖地カロンで、ジークが兵と接触したようです。それと、昨夜……」

ひそひそとドラクロワの耳元で報告している。ドラクロワはうなずき、言った。
「それは、業火と闇の果てに誕生した、秘儀なる存在だ……歩みゆくままにしておけ」
「は……。動乱の火の手は、既にこの先の街にも及んでおります。もはや聖法庁の軍勢も追いつけぬ勢い。ただ邁進するのみ。問題はジークの接近ですが……」
「軍を二手に分けろ。一方は海岸に向かって進撃し、大乱を宣言しながら、ありとあらゆるものを破壊し尽くせ。聖法庁の軍勢が追ってきても満足に宿営も出来ぬよう、全ての施設に打撃を与えよ。もう一方はお前が指揮し、ジークを迎撃せよ、ロイヒルト」
ロイヒルトは勢いよく拳を胸に当て、
「我が命に代えても、あの男の息の根を止めてご覧に入れる」
そう言って深々と頭を垂れると、トールのことなど見もせずに聖堂を後にした。
今やネルヴァ河の流域一帯が戦場だった。その中で、ノヴィアたちはどうやら聖堂の追っ手から上手く逃げているらしいという情報がトールのもとにも入っていた。何とか逃げ切って欲しい。もし万が一捕まったら——そのときは我が身を挺して救わねばならない。
ドラクロワは礼拝堂を横切り、司祭の席に座ると、焼けこげた天蓋を見上げて言った。
「ジークのそばに死が満ちれば満ちるほど、ジークは強くなる。そしてその瘴気は、新たに誕生したものの形質を定着させる……。彼女が真の姿となって羽ばたくのは、それから

だ……。いずれ彼女は、膨大な聖性が集まる聖地に導かれ……真の姿を得る……」
得体の知れない言葉を零すドラクロワを、トールはただじっと見つめている。
彼女とは？　それがドラクロワの目的の中心にあるものなのか？　少しでもその意図を探ろうとするトールを、ドラクロワは静かに振り返った。
「お前の主人に、秘儀を届けたのだが……なぜか返答がなかった。その理由がつい先ほどようやく分かった。お前の主人はどうやら熱病に冒され、臥せっているらしい」
何気ない口調だが、トールにとっては雷撃に等しかった。
「レオニス様が……ご病気に……？」
道理で、トールがここに来てからというものレオニスからの指示が全くなかったわけだ。
予想もせぬ情報に愕然とするトールに、ドラクロワは優しく微笑みかけて言った。
「命に別状はないようだ。じきに回復し……私が授けた秘儀に、興味を抱くだろう」
トールは安堵すると同時に、聖地シャイオンの内情を完全に把握しているドラクロワに戦慄を覚えた。おそらく聖地に内通者がいるのだ。そうでなければ一国の領主の安否がそこまで正確に把握出来るわけがない。すぐにそのことをレオニスに報せねば――
そう思ったとき、ふいにドラクロワが立ち上がった。
「ようやく時が満ちた……。今までレオニス・ジェルミナルの動向が定まらず、お前の処

遇も決めかねていたのだが、これで確実となった」
　動向？　確実？　いったい何を言っているのか――
「是非とも、かの若き領主には、秘儀の発展のために力を尽くしてもらいたい」
「はい……。それはレオニス様も望むところでしょう……」
「いや、今のままでは単なる競争心や向上心でしかあるまい。より強い動機で秘儀を手に入れてもらわねば、あれの完成には漕ぎ着けないだろう」
「強い動機……？」
「そうだ。エノワの街で、私が言ったことを覚えているかね？　私が何を求めて、火を放ち、血を流させるのか。いったい何が、力を成長させるのか……」
「復讐……ですか」
「その通りだ。復讐心こそ力を発展させる最大の動機に他ならない。あの若者に必要なのはその動機だ。そしてそれを与えるにはどうしたら良いか……ようやく定まった」
　その瞬間――トールは、心が絶叫するのを覚えた。動け／抵抗しろ／今すぐに！
　だが凍りついたまま動くことも出来ずにいるトールに、ドラクロワは囁くように言った。
「主君の暴政に耐えられず故国を飛び出したか、英雄の息子よ。だがお前の心は今なお主君のためにある。レオニスは、うなされながら、お前の名を呼んでいるそうだ」

「私を密使として要請したのは……」

「レオニスに、私に対する復讐心を抱かせるためだ。ただし状況が込み入っていたため、しばらく様子を見させてもらったが……その必要もなくなったようだ。お前は確かに、レオニスという若き領主にとって、誰にも代えがたい大事な存在なのだよ」

刹那、ついにトールが動いた。ドラクロワへの恐怖が綺麗に消え去り、ただレオニスへの思いに満たされながら右手を翻し、かつてない速さで鉄鞭を出現させ、振るった。

そしてそれよりも早くドラクロワの左手がマントから現れた。その左手が持っているのは一冊の書物だ。聖法庁最大の禁忌たる外典イザーク書――ドラクロワが聖法庁から追われる最大の理由であるもの。〈刻の竜頭〉の秘儀が記されているというそれがひとりでに開かれるや、頁と頁の間に、漆黒の雷花が閃いた。

「死ぬがいい、トール・ヴュラード」

限りない優しさと共感を込めて、ドラクロワは言った。

レオニスは、目覚めたそこがまだ夢の続きであるかどうか探るように辺りを見た。

そして、寝室の隅でうつむいて立つレティーシャを見て、現実であることを知った。

「さっきまで、お前の兄と……会っていた」

レオニスは言った。応えないレティーシャに構わず、熱っぽい息を深々と吐いて、
「真っ赤な血の河だ。そこでお前の兄と会った。顔中に聖印を刻み入れた男だった。何も喋ってはくれなかった……ただ彼は、僕に会うと河に沿って歩き始めた。僕は彼の後をついて河を下った。そして石ばかりだった景色が……色とりどりの花園になった」
まるで現実に起こったことのようにレオニスは語った。声は熱で疲労し、ひどく掠れている。だが口調はひどく冷静で、病人のうわごとという雰囲気ではなかった。
「その花園に入ると、河が二つに分かれていた。いや……それまでの河が一つだったのではなく、多くの流れが、ようやく二つになったんだ。そうだろう……お前の兄はそう僕に伝えたかったんだ。どちらの流れに沿って歩むか……僕の心次第だと彼は告げた。一方の河の周りには白水仙の花が咲いていた。もう片方には、赤い花が……。あの花は……確か、堕気が染みついた土地に生える花だ。地域によっては弔いの花とされている……」
レオニスはそこでいったん口を閉ざした。自分がしたことをはっきりと思い出すように目を閉じた。それから、口だけを開いた。
「ノヴィアが泣いていた。赤い花の向こうで。だから僕はそちらを選んだ。するとお前の兄は微笑んだ。そして彼の声を……聞いた気がした。どんな声だったかは思い出せない。ただ、僕は彼と、死について話した。堕気が染みついた大地に咲く赤い花について。生命

が死を迎えることに、どんな意味があるのか。他にも、生命は本当に美しいのかとか……何かが萌芽するとき、同時に多くの死があることは正しいことなのかとか。彼と話していて分かったのは死と生命の真実についてだ。それは結局……未来とは何かということだ。未来は一つだろうか、それとも変化するものだろうか。未来の変化……生命にとって、それは選択の変化だ。心が選ぶものを変えれば……未来も変わる。選ばなければ……」
そこで、目を開いた。まだ熱で朦朧とする眼差しを、どうにかレティーシャに向ける。
「僕は選択した。レティーシャ」
弱々しく、しかし確かな意志のこもった声だった。
レティーシャは、左手を背中に隠したまま、そっぽを向いた。
「レティーシャ……お前の兄が、僕に告げたことだ」
レオニスは厳しく言って、レティーシャに向かって手を差し伸べた。
レティーシャは、ゆっくりと左手に握ったものを現し、つまらなそうに言った。
「やっぱり……教えたんだ、兄様。なんで教えたの、兄様」
ふと、レオニスのおもてに微笑が浮かんだ。
「それが……僕の未来だからだ。さあ……僕に、死の道を与えろ、レティーシャ」
レティーシャは渋々とレオニスに歩み寄り、手にしたものを渡した。

「手紙……？　トールから……」

レオニスは、渡されて初めてそれが何であるか知ったように、驚きに目をみはった。

「そうか……。あいつが、僕に……」

また微笑した。思い切ったように封を開いた。レオニスは霞む目をしばたかせ、手にしたものを見た。生まれたときから一緒にいる相手からの、生まれて初めての手紙——律儀で、遠慮深く、そのくせ偽りのない、強い意志のこめられた文面。

レオニスは、自分よりも遥かに早く、トールが選択を済ませていたことを知った。

5

〈主君にして友なるレオニス様へ〉

——それが手紙の書き出しだった。

〈こうして私から一方的に言葉をお送りすることをお許し下さい。主君に対する重大な裏切りを働いておいて、今さら何を弁明することがあるのかと思われるでしょう。しかしこれは出奔の罰を避けようとするものではありません。私がここで自分の信じる役目を果たしたなら、すぐにも聖地に戻り、法と友誼に従ってこの首を差し出すつもりでおります。

自分の信じる役目と書きましたが、もちろん臣下に役目を与えるのは主君の仕事であっ

て、私ごときが勝手に定めて良いものではありません。ただ私にはあなたが主君となる前から、手前勝手にこれと定めた役目があったのです。それを無に帰すことは私にはとても出来ず、こうして出奔に至りました。その役目とは、あなたのそばにいることです。
あなたを守り、あなたの足となり、同じものを見て、同じものを聞くことです。
あなたは私にとって幼い頃からの主君でした。主君の心身を守ること以外に、いかなる力も持ちたくはありませんでした。だからこそ私は、もう一人のあなたを、あなたから守るために無断で聖地を去りました。それがあなたを守ることになると信じたからです。そして今ここネルヴァ河に辿り着いて、ますますその確信が深まりました。
あなたが領民に与えた裁きは過酷で非情なものですが、領土を守るためという義があるのもまた事実です。行き過ぎた処罰を批判するつもりはありません。若いあなたを諫める者がいなかったことこそ批判されるべきでしょう。あなたはいずれ自ら過ちを認めると、私は信じています。そのとき、あなたは私には想像もつかない苦しみを受けるのでしょう。
出来れば私もともにその苦しみを分かち合いたいと思います。しかしそのとき私はもう、あなたのそばにはいないかもしれません。聖地に戻り、死罪を受けるか、あるいはこの旅で命を落とすでしょう。これほどのことをしでかしたのですから死は当然の結果です。
ただ私の魂は常にあなたとともにあります。あなたの手で死罪に処されても〉

漆黒の稲妻が迸り、その避けようもない速さ、耐えようのない力を、ただその身に受ける他なかった。衝撃――遠のく意識。ドラクロワは悠然と歩み寄り、言った。
「出来れば私の兵として迎えたかったが……お前は英雄の子にしては戦いを嫌う」
戦いを嫌う――？　まさか――だが、ああ――心は、すぐにその真実を認めた。
奪ってしまった命の重さが怖くて影になろうと／死んじゃ駄目――アリスハートの声が甦る／殺さなくて良かった――誰も傷つけたくなかった／それが答えなのだという思い。
込み上げてくる感情。殺されては駄目だ。逃げたい。レオニスのもとに生きて帰る――
だが心とは裏腹に体はドラクロワに向かってゆく。そして漆黒の稲妻が右足を打ち砕いた。
一瞬、完全に気を失うほどの痛み／自分の喉が絶叫を発していることに遅れて気づく。
無惨にも焼けこげた足を引きずる。死にたくない。帰りたい。それでも相手を睨み――
「復讐こそ我が望み……。お前の苦しみと死をレオニスに伝えよう。かの若者が私を心から恨むように。彼が秘儀を用いて私を倒そうとすることを願って……トール・ヴュラードよ、死ぬがいい。その苦痛はいっときのものだ。全ての命は、永遠の果てに甦る。私が逆巻かせる刻の彼方で、お前の存在もきっと復活するだろう。だから……抗うな」
せめてもの抵抗――一矢報いたくて。鞭を振るう。渾身の斬撃。生涯で二度とない鋭さ。

ドラクロワの銀髪が僅かに切られて宙を舞った／ああ、今すぐ帰りたい——
かつてレオニスとともに何の力も持たないまま、ただ感じていた世界の匂いが広がる。聖地／湖畔の木漏れ日。くすくす笑うレオニスの声。いつかみなを見返してやる。そうさ自分たちは何だって出来る。若さ——可能性——未来。その貴さを育んでくれた故郷の匂いが世界に満ちる中、ただ一つ思うこと。帰ろう——
トールは死の叫びを上げて、ドラクロワに向かって鞭を振るっていた。
一度たりとも相手に背を向けず、逃げようともしなかった。己のためではなく、ただレオニスのために。その命を尽くしてレオニスの未来から危機を取り去りたくて。
漆黒の稲妻が視界を覆ったとき、トールの脳裏によぎったのは、レオニスがアキレスに宛てたノヴィア抹殺の許可のことだ。あの書状がドラクロワの手に渡って良かった。あれを読む限り、ノヴィアのことはレオニスの復讐の動機になるような大事な存在に思えないだろう。ノヴィアがドラクロワに狙われることはない。狙われるのは自分だけで——
そこで意識が消えた。トールの肉体は衝撃に倒れた。致命傷だった。
〈私の魂は何の怨みもなくただあなたを守り続けます。ジークのように数え切れぬほどの死者の怨みを背負う戦い方もあるでしょう。ドラクロワのような全てを犠牲にする戦い方

もあるでしょう。しかしあなたが本来持っている力はそのどれとも違うのです。
幾つかの旅を通して私はそれを知りました。あなたの力と、聖地シャイオンの誉れを。
それはジークにもドラクロワにもない力です。彼らはどんなにそれを求めたことでしょう。
彼らがかつて抱いた理想を知れば知るほど、私はあなたを誇りに思います。
あなたは、豊かにすることが出来るのです。国を、土地を、人を。それこそジークやドラクロワにはない、あなただけの業です〉

赤い花園を進み、ようやく街道に戻るや、ノヴィアは行く手に強い堕気を感じていた。土地に染みついた堕気ではない。何かがそこで待っている気がしたのだ。
「この道は駄目。他を行きましょう」
ここは海へ行くなら必ず通る道だ。待ち伏せには格好の地点である。キリは緊張した顔でノヴィアの手を引きながら道を外れ、再び赤い花を踏んで森へ向かった。
そして突然、森から猛烈な堕気が迫った。かと思うと、辺りの木が内側から裂け、中から氷の刃が飛び出すではないか。その一つがノヴィアに迫り、キリが咄嗟に宙を跳んで刃を蹴り砕いていた。素早く着地してノヴィアの手を引くキリの体が、ふいに強ばった。
う……と隠しきれない呻き声が聞こえ、

「──キリ⁉」
ノヴィアが慌てた。かと思うといきなり突き飛ばされ、ノヴィアは後ろによろめいた。
「ノヴィア……逃げろっ！　俺がこいつをやる！　さあ来いよっ、蛭野郎っ！」
キリが果敢に叫ぶ。だが声にこもる苦痛の響きから負傷したのは明らかだ。そこへ、
「その傷で、威勢の良いことですね」
アキレスの笑い声が森から聞こえた。ノヴィアは凝然となった。何かがおかしい。自分は先ほど、強い堕気を道の行く手に感じた。だがアキレスは、それとは逆方向にいる。
──罠か？　だがそのとき、ノヴィアの脳裏にある考えが閃いていた。
「ジークは別の場所で戦っています。あなた方を助けず、己の任務を優先したのですよ」
アキレスが笑う。キリが呻く。だがそれがノヴィアを突き動かしていた。ジークもまた今まさに戦っているのだという、その言葉が。
ノヴィアは森に背を向け、目の見えない状態にもかかわらず、全力で走り出していた。
む……とアキレスが意外そうな声を零す。
「そうだノヴィア！　逃げろ！　早く逃げろーっ！」
キリが朗々と叫び、アキレスに向かってゆくのが分かった。
ノヴィアは暗闇を走った。盲目の状態で走るのは二度目だった。最初のときも今も怖く

てたまらなかった。いつ何に激突するかも分からない。その怖さに必死に耐えた。
生きるために。希望を求めて。何も見えぬまま。ただ先ほど感じた存在に向かって。
暗闇をひた走りに走り――そして、ついに辿り着いた。
猛烈な甘い匂いがした。花が咲き乱れているのだ。かと思うと、ふいに暗闇が薄らいだ。
視覚が回復し始め、周囲に咲き乱れる花の色がおぼろに浮かび上がったとき――
「ノヴィアっ!! 何してるっ! 逃げろーっ!」
背後から、キリの切迫した叫びが届いてきた。そしてアキレスの嘲笑。
「ははっ子猫さん! あなたも串刺しにしてあげますよ! あなたの仲間のように!」
キリが言葉にならぬ怒りの声を上げた。氷の刃が幾重にも飛び交う音――キリの押し殺した悲鳴がノヴィアの心臓を凍らせる。アキレスのおぞましい笑い声が背後から迫る。
そのときノヴィアは己の確信が正しいことを祈りながら、ただ声を限りに叫んでいた。
「い、い、い、私はここですっ! ジーク様っ、い、い、い、私はここにい、い、い、いますっ!!」
刹那――それが、真っ赤な花の下から、一斉に跳びだした。
堕気が染み込む大地の中、眠るようにしてノヴィアたちを待っていた、四体の凄魔が。
〈恐ろしいばかりが力ではないのだと思います。畏怖と名誉に満ちたジークの力でさえ、

守りきれないものがあるのです。むしろジークは、守りきれないものの方を、何とか守ろうとしてその力を駆使するのです。彼の戦いを見て、私はそう思いました。
ジークが見ているのは常に死者と過去です。生者であり未来であるものの多くが、彼の手から常に滑り落ちてゆくように思います。彼が本当に守ろうとしているものに一番手が届くのは、彼の従士でも、彼が追うあのドラクロワでもなく、レオニス様、あなたです。
かつてドラクロワとジークが抱いた理想のことは、あなたも既にご存じですが、調査だけでは分からないことがあります。ジークが本当は何を求めているのか、私には分かる気がするのです。いえ、はっきりと確信しています。これを言うとあなたは驚くかもしれません。ですが間違いのないことなのです。
ジークは、あの偉大な力を、棄てたがっています。剣を手放したがっているのです〉
魔兵が敵を駆逐し、ジークは聖堂に火をかけた。崩壊する建物の中で異様なものが震えている。獣の臓物をこねあわせたような肉色の柱――魔獣を招く増殖器が炎に包まれるのを見届けたジークは、ふと己の左手を見やった。河に流されるに任せ、ノヴィアとキリとの合流地点で待機させた魔兵が活動しているのが感じられた。
「……終わったんなら、早く行こうよぉ」

懐でアリスハートが泣きべそをかく。始終、戦いの絶叫や怒号を聞き続けていたのだ。
「まだ死者を葬っていない。それに、じきに新手が来る。ここで迎え撃つ」
「なんで、そんなに戦いたいのよぉ」
ジークは答えず魔兵に陣を敷かせている。アリスハートはふとジークの内心を察した。
ここでジークが派手に戦えば、それだけ敵の注意はノヴィアやキリからそらせるのだ。
「ノヴィアとキリのために……？　あんたがここら辺にいる敵全部と戦うのぉ？」
「キリの体は限界だ。重い症状が出ている」
その言葉はアリスハートの理解を超えた。いきなり何を言うのかと思った。
「それって……キリが……」
絶句するアリスハートの中で怒りがわいた。そんなキリを、なぜジークは黙って旅に参加させ続けたのか。だがそれは、キリ自身が望んだことだった。
「知ってたの……？　キリが……」
「最初に看たときに既に症状は出ていた。力を使いこなすことで聖印の悪影響を克服する可能性はあったが……もう難しいだろう」
キリは海を見たがっていた。同時に怖がってもいた。仲間とともに切望した海を、自分一人だけ見ることで何かが終わってしまうことを恐れていた。そしてその恐れを越えて踏

み出すには新たな仲間が、旅が必要だった。キリは生きていた。生きることを望んでいた。
「来た……」
ジークが剣を握りしめた。街の向こうから兵が続々と現れたのだ。
アリスハートの目に涙が溢れた。たまらなかった。
「怖いか……。すぐに済む……」
「怖くなんかないよっ」
思わず怒鳴り返した。ジークは眉をひそめ、訊いた。
「なら、なぜ泣く……?」
「分かんないよっ」
また怒鳴る。だが嘘だった。何もかもが悲しかった。戦いに勝っても、結局得るのは次の戦いでしかないジークが悲しかった。そんなジークだからこそキリを見捨てておけないのが分かった。そしてキリは、沢山の死を背負うこの男にとって、ドラクロワは海なのだと言った。それはジークにとって戦いを終わらせてくれるただ一人の相手なのだ。
そしてノヴィアはこの男を見ている。ノヴィアにとってはジークが海だからだ。
あたしは、あんたとノヴィアとドラクロワの代わりに泣いてるんだ。
アリスハートはそう心の中でわめいた。そして——海を求める少女のために。ノヴィア

を守り、命を削って戦ってくれているキリのために。海を目指す全ての者のために。
鬨の声が起こった。ジークの総身に凄まじいまでの烈気がみなぎる。アリスハートはその戦いの鼓動を聞きながら、ジークに代わって泣いていた。

アキレスは我が目を疑った。真っ赤な花弁をまき散らし、双剣を手に跳びかかってくる四体の凄魔――その光景に、切断された左手の指が、ずきりと痛みを発した。
「おおお……！　おのれジーク!!」
怒り狂ってそこら中から氷柱を現した。土地の堕気は〈蛭氷〉をも強力にする。氷は制御が利かぬほど肥大化してゆく。だがアキレスは氷の刃が荒れ狂うに任せた。今にもジークと他の魔兵が現れるのではないかという恐れがアキレスを狂乱させたのだ。
怒濤のごとき氷刃が凄魔を串刺しにし、引き裂き、食らった。圧倒的な力の差だった。
最後の一体が氷の刃を素早くかわしながら、両手の双剣をアキレス目掛けて投げ放った。
双つの剣の一つが盾となった氷の柱に食い込み、もう一つが氷に弾かれ宙を舞う。
武器を失った凄魔は、氷の刃に貫かれ、あっという間に八つ裂きにされた。
「ははっ！　はははっ！　恐れるものかっ！　ジークの力など恐れるものかっ！」
アキレスは、赤い花園に立つノヴィアを見た。狂気の目が、黒々と輝いていた。

「二度と力が使えぬよう、その目を潰す!!」
ノヴィアは逃げもせずひたすら眼差しの回復を待っている。ぼんやりとしていた視界が輪郭を帯び、アキレスや氷の魔獣の姿を映し出してゆく。そして、ふと、何か二つのものが宙を舞っているのに気づいた。一つは凄魔の剣だ。そしてもう一つは――
「くたばれ!!　蛭野郎っ！」
キリが宙で叫んだ。アキレスが、ぽかんとした表情になる。なぜそこにキリがいるのか不思議で仕方がないというような顔だった。
次の瞬間、キリが宙に舞う剣の柄を渾身の力を込めて蹴った。
分厚い剣が猛然と唸りを上げて回転し、矢のような速さで宙を走った。
「お……!?　お、おっ……!?」
アキレスが慌てて地面から現した氷の柱に、剣が食い込み――通り抜けた。
澄んだ音が響き渡るとともに、氷の柱が真っ二つに切断された。
どん！　重い音を立てて剣が地面に突き刺さる。アキレスは呆然と剣に目を向けた。
それから自分の右手を見た。綺麗に切断され、かろうじて皮一枚で腕にぶら下がる右手首。その五本の指に刻まれた紋様の輝きが徐々に弱まり――そして消えた。
宙で、キリが微笑し、

「仲間の……仇だ」

ふっと力を失った。小柄な体が宙での支えを失い、どさっと呆気なく地面に落ちた。

そこら中から生え伸びる氷が、一斉に蠢いた。アキレスの右手首から迸る血潮に反応し、にわかに牙を走らせたのだ。アキレスの傷口に、肉体に、次々に氷が食いついてゆく。

「お、おのれ！　おのれ、おのれ……！」

アキレスは氷を振り払おうとして愕然となった。自分に食いつく氷に、誰かの顔が映っている。凄まじいまでの怨みの顔。それは、かつての友の顔だった。忠誠を誓った王女の顔だった。王弟派の面々。ありとあらゆる亡者の顔ぶれ――

これまで自分が氷に食わせてきた者たちの無数の顔が、氷の中からアキレスを見ていた。氷に血と魂を食われた彼らが、今、アキレスの血と魂に食らいついたのだ。

（諦めたよ――）

底知れぬ恐怖がアキレスの心を砕いた。血を吸われて干涸らびる己の体に、一瞬で正気を失った。恐怖を和らげてくれる嗜虐の対象を求め――再びノヴィアを見た。

その瞬間、アキレスの中で何かが音を立てて切れた。凄まじいまでの恐怖を通り越し、痺れるような安堵さえ感じていた。食われる。血も魂も食い尽くされる。

（お前も蛭よ――）

一緒になる／呑み込まれる。
「きいやぁ――――――――――――――――――――――――あ!!」
狂気の声が迸った。
全身を氷に食いつかれたまま、アキレスはノヴィアに向かって走り出した。
蛭だ。みんな蛭だ。みんなで蛭になる。もうそれしか考えられなかった。見開いた目からはとめどなく涙を流し、血を吸われてかさつく顔には正気を失った笑顔が浮かんでいる。じたばたと切断された両手を振り回し、氷を背負って全力疾走するアキレスの姿を――
ノヴィアは静かに見つめ、力を発揮させた。
「矢が……見えます」
まばゆいばかりの金の輝きがノヴィアの眼前に生じ、それが一本の大きな金の矢と化すや、にわかに放たれた。
アキレスの甲高い絶叫が、ぷつんと絶えた。足が止まり、よろめいて後ずさりながら、胸に刺さった金の矢を見つめた。なぜそんなものがそこにあるのか、とても理解出来ないという顔でいる。その呆然とした顔のまま、ノヴィアに目を戻した。
途端に、アキレスの両眼が干涸らび、めりめりと音を立てて眼窩の奥に引っ込んだ。
もはや声もない。アキレスは立ったまま血を吸い尽くされ、からからの屍と化した。

凄まじい堕気が渦を巻いていた。氷は真紅に輝き、無数の亡者の声なき笑い声が響く中、やがて水しぶきを上げて氷解した。後にはアキレスの立ったままの屍が残された。
ノヴィアは、その無惨な死骸から目をそらし、急いでキリを捜した。
一刻も早くキリの元気な姿が見たかった。最後にキリの姿を見たのは喧嘩をしていたときだ。キリの存在がうとましい余り、その手を振り払ったとき以来なのだ。そのときのキリの悲しげな目、驚いたような表情が、急に強く甦ってくる。
途端に不安と悲しさが込み上げてきた。そんなのは嫌だった。それが最後に見たキリの元気な顔だなんて。やっと目が開いたのだ。早く、もう一度、キリの笑顔が見たかった。
「キリーっ！　どこにいるの!?　返事をしてっ、キリっ!!」
すると赤い花弁の向こうで、キリの手が上がった。ノヴィアは一目散に駆け寄り、
「キリ……！」
目に映ったものの余りの凄まじさに、愕然と凍りついていた。

〈私が旅で学んだことを一言で説明するのはとても難しいですが、その多くがジークの戦いから学んだことでもあるのです。彼の力の偉大さではなく、彼が戦いを通して見ているものをあなたに伝えられればと思います。ジークは剣を棄てることを望んで戦っています。

自分の今の力を絶対のものと思っていないのです。むしろその力を棄てられたとき、彼にとって絶対のものが手に入るのでしょう。彼がそう信じているのが私には分かります。
ジークたちのかつての理想に対し、私もレオニス様も、特に注意を払いませんでした。それは、失敗した、何の価値もない、過去の挫折の記録に過ぎなかったからです。
しかし今の私にはそうは思えません。彼らの理想を素晴らしいと思います。王座を廃止すること、戦乱をなくすこと、豊かさと平等をみなで分かち合うこと。彼らの夢、願い、努力は、決して無ではありません。あなたのこれまでの努力が決して無ではないように。
何を与え、何を守り、何をもたらすか。あなたが繰り返しご自分に問うてきたことの答えは、あなたのすぐそばにあります。あなたが一番近い場所にいるのです。
私は、自分の意志で遠く離れて初めて、あなたの存在を身近に感じています。私の影が遥か彼方まで伸びて、あなたの両足につながっているような気持ちになるのです。
今、私が目にしているのは雄大な大河です。全てを未来に運ぶ大いなる流れです。私はもうしばらくこの流れとともに歩みたいと思います。ドラクロワと行動をともにすることで何か有意義な情報が送れるかもしれません。ただし情報の多くがドラクロワに握られております。お気をつけ下さい。生きて帰れたとき、謹んであなたの裁きを受けます。
ノヴィア様は無事でいらっしゃいます。私の命にかけて、もう一人のあなたを守ります。

あなたの忠実なる影にして友なるトール・ヴュラード〉

6

「何を守り、何を与え、何をもたらすか……」
　レオニスは読み終えた手紙をそっと畳み、小さな声で呟いた。急激に体から力が抜け、熱による気怠さが襲った。空気が泥土に変わるような重さを全身に感じながら、のろのろと、その目をレティーシャが抱く頭蓋骨へ向けた。
「トールは……選択した。そして僕も……。未来は、それが訪れるまで……本当に見ることは出来ない。ただ……選ぶだけだ。どの流れにそって歩くか……。そうだろう……死と腐敗と後悔の向こう側にあるものを……僕に見ろと言うのだろう」
　頭蓋骨は微動だにせずレオニスを見返している。レオニスはゆっくりと視線を移し、
「兄様が死んだとき、悲しかったか……?」
　そうレティーシャに訊いた。レティーシャはぼんやりと頭蓋骨を見ている。質問の意味が分からないというようでもあり、答えるまでもないというようでもあった。
　レオニスは、なおも訊いた。
「悲しみに意味があると思いたかったか……?」

レティーシャの碧の目の奥で、ちらりと何かがよぎった。だが表情も眼差しも虚ろなまま、無言で頭蓋骨を抱きしめ、返答を拒んだ。
「意味はある」
ふいにはっきりとした声でレオニスは告げた。レティーシャの目が僅かに見開かれた。
「あるんだよ、レティーシャ。お前の綺麗さにも……全て意味があるんだ。そしてその先に……お前も知らない綺麗さがある……。僕には分かる……あの悪夢を見たことで、やっと……。全てが取り返しがつかなくなったときに、ようやく……」
その目蓋が力を失って閉じられた。だがレオニスはまだ眠りには落ちず、
「この手紙を破棄せず、僕に渡してくれた礼だ……お前の欲しいものをくれてやるぞ……レティーシャ。何でも言え」
「……あたしは、綺麗にしたい。それだけだよね、兄様」
「なら……城の西の庭に、残りの石材を置かせている。好きなだけ綺麗なものを彫れ。そして僕に見せてみろ……。その上で……今度は、僕が、お前の知らない綺麗なものを見せてやる。僕がこれから見る……本当の綺麗さを……」
「レオニス様の……？」
初めてレティーシャが顔を上げた。この娘には珍しく、焦点を合わせてレオニスの顔を

まじまじと見つめた。だがそのときレオニスはもう眠りの底へ沈んでゆくところだった。
「早く……帰って来てよ……トール」
トールからの手紙を握ったまま、レオニスは眠った。
レティーシャは、そろそろとレオニスに近寄った。何を思ったかレオニスの顔に手を伸ばし、そっと頬に触れた。途端に、その熱にびくっとなって手を引っ込めている。
「綺麗……。あたしの知らない……綺麗。レオニス様……」
茫々とした声を零し、レティーシャはレオニスの枕元で悄然と立ちつくしていた。

「ジー……ク……」
女が、崩壊した街をさまよっていた。赤い髪、赤い目、氷とは思えぬ柔らかな体。幼女のような表情を浮かべ、無惨な死体の一つ一つを、揺すって回る。
「ジー……ク？」
死体は答えない。ごろりと横になって火災で焼けこげた顔をさらした。女は立ち上がり、また別の死体の傍らにしゃがみ込んで、相手を起こすように揺すった。
「ジー……ク……。ジー……」
それも答えないと分かると、すぐ向こうで倒れている青年に歩み寄った。

黒い法衣の青年だった。両足がずたずたになって焦げ付いている。背にも腹にも深い傷を負っていた。その傷で何かを追って這ってきたのか、地面に血の跡が長く続いていた。
半ばちぎれた右手に何かを握っている。黒い鉄鞭だった。堕気と聖性が混ぜ合わされて形成された鋼鉄。原理的には、女の体を作り出しているのと同じもの——その鞭の柄に、女が懐かしむような手つきで触れようとした。
その鞭が、ふっと消えた。聖性と堕気を混ぜ合わせておく力が、消え去ったのだ。
女は、代わりに青年の背に手を当てた。それまで触れてきた死体と違って、まだだいぶ温度があった。その真っ赤な血が、女の手を温かく濡らした。
青年が、トール・ヴュラードという名であることを、女は知らない。
ただ、相手の肉体から、命の残滓が消えるのを、女の本能が察した。
ふいに——女の髪が、するすると伸びて、トールに絡みついた。
その髪が、真っ赤な輝きに満ちようとしたとき——
「シーラ」
声がかけられた。赤い髪が動きを止めた。女は、顔だけを振り向かせた。
そこに、ドラクロワがいた。
女の姿を見つめるドラクロワの双眸から、ひとすじの涙が零れ落ちていった。

異様な勢いで突進してくる一団があった。
ジークはすぐさま、薄汚れた鉄塊のごとき巌魔の兵団をそちらに当てている。
たちまち剣戟の音が起こり、一頭の馬が、巨体の男を乗せて跳躍した。巌魔の防衛を乗り越え、ジークへ迫る。率いてきた己の手勢の安否など気にもしない。単騎駆けであった。
魔兵を招くジークさえ倒せば形勢逆転となる――それを確信しての突撃だ。
その男に、三体の凄魔が跳びかかった。三対の双剣が竜巻のように男を襲う。普通は生き残れるものではない。ひとたまりもなく切り刻まれるかに見えた男の肉体は、しかし次の瞬間、ことごとく凄魔の剣を弾き返していた。
のみならず、男の振るった鉄鎖が、凄魔の頭部を粉々に砕き散らすのをジークは見た。
「チビ……少し揺れるぞ」
懐のアリスハートに短く声をかけ、凄魔を蹴散らして迫り来る男に向かって身構える。
「な、なに……？　ひゃあっ!?」
ジークの腕ほどもある太い鎖をぶんぶん振り回しながら馬を駆る男の姿に、懐から顔を出しかけたアリスハートが慌てて引っ込んだ。そしてジークの言葉通り、猛烈に揺れた。
眩いほどの火花が散った。馬上から振り下ろされた鎖を、ジークが剣で弾いたのだ。

第一撃がかわされるや、男は躊躇うことなく馬を棄てた。下手に馬の方向を変えれば遅滞が生じる。
馬から飛び降り、ジークの背後へ走り寄ったのだった。
その必殺の鎖が、唸りを上げてジークの頭上を通り過ぎた。ジークもまた勝機を逸することなく男を振り返り、身を低めながら、果敢に踏み込んでいた。
男に第三撃を放つ余裕を全く与えず、ジークの剣が男の胸に叩き込まれた。
男の着込んだ鉄の胸当てが紙のように両断された。耳をつんざくような音――そして異様な手応えが両腕に走るのへ、さしものジークが瞠目した。
男の巨体が、大きく宙に浮いて後方へすっ飛んだ。だが倒れない。僅かに膝をつき、すぐに身を起こした。がらん、と音を立てて男の胸当てが落ちた。
男の胸に刻まれた聖印が、切り裂かれた衣服の奥で、淡い輝きを零していた。
「堅牢なるロイヒルト――我が身に、お前の剣は利かない」
男は、獰猛な笑みを浮かべて、そう口にした。
「……もう少しだけ揺れるぞ、チビ」
そう声をかけ、ジークは左手を剣の柄に添えた。堕気が発露し、剣が青く燃え上がる。
アリスハートはその懐でうずくまり、戦い続けるジークの鼓動に包まれていた。

「ドラクロワが、聖印を与えたか」
そう言ったとき、ジークの鼓動が強く響いた。悲しい音だった。そのくせジークはその悲しみを消そうとも思っていない。悲しみさえ、自分が追いかける男との――ドラクロワとの絆がまだ残っている証拠なのだと信じているように。
「頑張れ……狼男」
そんな小さな声が、大粒の涙と一緒に零れた。
ジークの返答はない。
ただ激しく刃を打ち鳴らす音が、何もかもを引き裂くように響き渡っていた。

7

嫌だ――。こんなものは見たくない。走って逃げ出したい。
だがノヴィアは、その光景から目をそらすことも、逃げることも出来ずにいる。
キリの頬も腕も足も、切り傷だらけだった。特に腹の傷がひどく、何か所も深々と貫かれて真っ赤に染まっている。まだ助かるはずだ――ノヴィアの心はそう悲鳴を上げた。
まだ助かるに違いないのだ。どれだけ傷がひどく見えたとしても、きっとまだ――
「目……見えるようになったじゃんか」

キリが寝転がったまま、くすくす笑った。
一瞬、何を言われたのか分からなかった。それほどノヴィアは茫然自失していた。
足の力が抜け、気づけばキリの傍らにひざまずいていた。涙で視界がかすみ、はっと我に返った。震えながら止血しようとして、血があまり流れていないのに気づいた。
その傷口の周辺の感触に、ノヴィアは、今度こそ本当に言葉を失った。
「痛くないんだ……ノヴィア」
キリは微笑した。その体が、足から腹にかけて、蠟のように硬くなりつつあった。
「もう痛くないんだよ……ノヴィア」
二人の間に、赤い弔いの花が咲いていた。
世界中に、赤い花弁が舞っているようだった。

第六章　シャングリラの海

1

遠い昔――交わされた会話／通じ合ったはずの思い。いまだ鮮やかに浮かぶ光景――

「何のためにあるんだこれ、ドラクロワ？」

若い赤髪の騎士は不思議そうに訊いた。目の前に白い塔があった。海岸の絶壁の上にわざわざ建てられているのだ。すると銀髪の男が微笑み、それに答えた。

「これが灯台だ、ジーク。船が夜の闇にも迷わず港に帰れるよう、火をともす塔だ」

赤髪の騎士はしげしげと塔の壁を見て回った。

白い壁に、びっしりと何かの文句が刻まれている。ただの落書きではない。ここを訪れた者たちが、旅の目的を書き残しているのだ。祈りの文句も多くあった。

「あなたも何か記すの、ジーク？」

反対側から塔を回ってきた女が声をかけてきた。紺碧の海を背に、蜂蜜色の髪を潮風に

翻らせ、眩しい笑顔を浮かべている。騎士はその女にちょっと見とれつつ、
「俺は、まだ死ぬ気はないぞ、シーラ」
憮然となって返した。戦場では、書き置きは死を覚悟した者のすることだった。
女はそんな騎士をおかしそうに見つめている。
「違うわ……。灯台に、祈りを預けるのよ」
「祈りを、預ける……？」
「自分がどこから来て、どこへ行くのか……迷ったときに、帰って来られるように、あなたが何のために旅するかを、ここに記すの。灯台はそのためにあるのよ……ジーク」
そう言われて改めて塔を見上げる騎士の傍らに、銀髪の男が面白そうに歩み寄った。
「ほう、ジークが珍しく剣以外に祈るか？」
「別に……何も思いつかないな」
騎士がますます憮然となる。だが嘘だった。記すべき言葉は一つしかない。ただ、それを男の前で記すのが無性に照れ臭かった。
「お前は何か記さないのか、ドラクロワ」
男は肩をすくめた。別に、という感じだ。騎士が何となくむっとなる。だが女が微笑み、
「ドラクロワには必要ないわ。そばにジークがいれば良いのよ。そうでしょう？」

男が意表を突かれたような顔になる。だが否定はしない。
騎士の憮然とした顔が赤くなった。男も、むず痒そうに頬を掻いている。その二人へ、
「お互いに迷わないよう、灯を絶やさないでいなさい、ジーク……ドラクロワ」
まるで祈るように、女はそう言った。

迷わぬよう、灯を絶やさずに——
だが今は、全てが闇だ。
聞こえるのは剣戟の音。火の臭いばかりが鼻につく。
どこへ向かえば良いかも分からない闇だ。

凄まじいまでの火花の嵐だった。猛然と振り回される鎖をジークが剣で弾きながら、立て続けにロイヒルトの体に刃を叩き込む。お互いにほとんど引かず前へ前へじりじり迫る。
鉄鎖のかけらが火花とともに飛び散り、鉄が衝撃で灼ける臭いが辺りに充満する。
閃くごとに剣光が鮮やかさを増し、青白い炎が、渦巻く堕気とともに尾を引いた。
やがて異変が生じた。ロイヒルトの振るう鉄鎖の一部が、ぽろりと砕け散ったのだ。
目にしみるほどの錆の臭いがした。ロイヒルトが僅かに恐怖の色を見せる。

鎖が、いきなり腐敗し始めたのだ。ジークの身にやどる堕気を浴びせられた結果だった。
ひときわ凄烈な斬撃が来た。それを受けたロイヒルトの鎖が、ついに木っ端微塵に粉砕され、矢のように辺りに飛び散り、地面に突き刺さる。
すぐさまジークが剣尖を突き込んだ。ロイヒルトの胸に、これまでに層倍する衝撃が起こった。ロイヒルトの巨体が真っ直ぐ後ろに吹っ飛んで倒れた。すぐに起きあがりながら、ごぼっと濁った唾液を吐いた。立ち上がったところに、また剣尖が突き込まれた。
ロイヒルトの体がさらに後方に飛ばされた。建物の壁に叩きつけられ、息がつまった。
同じところを突かれて、咄嗟に息が出来ずにいるところへ――三度目の刺突が来た。
そのときロイヒルトの目には、剣を突き込むジークが、一本の矢と化して飛んでくるかのように見えていた。ロイヒルトは獣のように歯を剝き、堕気の炎を上げて飛来する銀色の死の矢を、両手でつかんだ。刃が、指と掌の間で真っ白い火花を上げた。
それでも衝撃が来た。背後の壁に亀裂が走り、剣尖を中心にロイヒルトの胸が圧迫された。ロイヒルトは剣を両手で握りしめながら顔を仰がせ、ぱくぱくと口を開いたり閉じたりした。息が出来なかった。肉体がどれほど堅牢であろうとも呼吸を封じられれば死ぬ。
そしてなおジークは猛然と踏み込んでいる。
ロイヒルトの胸が凹んだ。ひゅっ……と口から、肺の中の空気が零れた。

突然、ロイヒルトの胸の聖印が歪んだ。めりめりと音を立てて肉が裂けた。強すぎる聖性の発揮に従い、肉体により深く刻み込まれてゆくのだ。

かっとロイヒルトが喉を鳴らした。絶叫を上げようとしたのだろう。

だがさらにそこで悲劇が襲った。剣を握るロイヒルトの手の指がささくれ、爪がひとりでに剥がれたのだ。ジークの堕気を浴びせられたせいである。

聖性と堕気の両方が同時にロイヒルトの肉体を破壊しにかかっていた。あまりの激痛にロイヒルトの目蓋が引きちぎれんばかりに開かれた。その顔色が青黒くなっている。

だが剣は握ったままだ。それればかりか、少しずつ押し返し始めたではないか。

ジークの腕が下がった。剣がロイヒルトの胸から離れ、僅かな隙間が空いた。

ひゅっ、ひゅっ、とロイヒルトの喉が空気を求めて痙攣した。

「ぬあっ!!」

渾身の力を込めて剣を横へそらす。剣は背後の壁に突き刺さり、その刃を脇で挟んで固定する。そしてもう一方の手で、ジークの喉をわしづかみにした。

激しい苦痛に耐えて、ロイヒルトが叫んだ。

「首をへし折ってやる!」

ジークの表情は微動だにしない。ロイヒルトは唖然となった。ジークの喉をつかむ指先

に感覚がないのだ。痛みのせいではない。指が全く動かない。手がまるで蝋のように固く強ばっている。そして突然、その指が、ぼろりと五本とも砕けた。
ロイヒルトは剣を抑え込んだままのろのろと己の砕けた手を見た。
「死蝋症だ……」
ぼそりとジークが言った。ロイヒルトがぽかんとした表情になる。
その瞬間さっとジークが剣を引き抜き、四度目の刺突の体勢になった。
ロイヒルトを恐怖が襲った。慌てて両腕で身を庇い、背後の壁に身を押しつける。
その途端――ぴしりと壁の亀裂が広がり、がらがらと音を立てて崩壊した。
ロイヒルトの巨体が呆気なく建物の中へ転がり込んだ。
そのまま悲鳴を零しながらジークに背を向け、建物の奥へ逃げ込み――愕然となった。
そこは火の海だった。燃え盛る柱が四方から倒れてくる。その炎を、もろに浴びた。
頭髪と衣服が燃え、視界が一瞬で火に奪われた。絶叫が上がった。
もはや助けるすべもない。ジークは、ロイヒルトの手足が鮮やかな緑色の炎を上げるのを見た。あっという間に手足が溶け崩れ、ロイヒルトは出口を求めて暴れ回った挙げ句、さらに業火の中へと身を投げ込み、姿を消した。
その凄惨な光景から目をそらさず、じっと見届けてから、ジークは建物に背を向けた。

炎の中から緑色に燃える塊が飛び出してきたのは、そのときだった。
ぶくぶくと濁った息を吐き、火だるまになって背後から抱きついてくるロイヒルトの首を、ジークは振り返りざま一刀のもとに刎ねた。ロイヒルトの首は草むらに転がって蠟のように燃え上がった。その体もまた巨大な松明となって倒れた。
ジークは今度こそロイヒルトに背を向けた。

聖堂は焼かれ、増殖器も灰となった。瓦礫の上で戦死者を見渡すジークの赤髪を、炎が起こす風が煽っている。新手の兵は現れず、魔兵も次々に形を失ってゆく。
ジークは凄魔をシャベルの姿に戻して剣を収めた。シャベルの歯が半ば欠けているのは、それにやどる凄魔を遠く離れた場所で戦う二人の少女のために放ったからだ。
「終わったぞ……チビ。もう怖くない」
声をかけると、懐からアリスハートが泣きべそをかきながら顔を出した。
「こ、怖くなんかないよっ。それにチビじゃないっ。アリスハートって名前があるのっ」
ひとしきりわめくと、戦いの後の光景にまた涙ぐんだ。
これだけ戦ってもジークが得るのは次の戦いでしかないことが悲しかった。別れ別れになった二人の少女に敵の目が行かぬよう、ジークは近隣にいる全ての兵と戦う気なのだ。

「死者を葬ってから、海を目指す。そこの灯台に行くよう、ノヴィアたちに言ってある」
「ねえ……。その……灯台って、なに？」
ジークは目を細めた。ふいに戦場が遠のき、紺碧の海を背にする男と女の姿が甦った。
「船が迷わぬよう……火をともす塔のことだ」
自分が祈りを捧げた白い塔だ――その言葉を呑み込み、ジークは死者を葬るため、血と炎に染まる街へと歩んでいった。

「ジー……ク……？」
女は訊いた。歩み寄ろうとしたドラクロワの足が止まった。静かに女を見つめ、言った。
「違う……。私は、ジークではないよ、シーラ」
女は、不思議そうにドラクロワを見上げ、
「シー、ラ……」
その言葉を繰り返した。それから、手を当てたままのトールの背に目を戻した。
「ジー、ク……」
動かぬトールの背を、そっと撫でる。
「違う、シーラ。その男も、ジークでは……」

ドラクロワが言いさし、声をのんだ。
五体をずたずたにされたはずのトールが、ぴくりと身じろぎしたのだ。
女の赤い髪が、するすると束になってトールの四肢を覆ってゆく。まるで赤い繭だ。
「聖性……」
ドラクロワの声が震えた。治癒の力をもたらす聖性が女の身から——その胸に生えた紋章を通して発揮されたのだ。ドラクロワにとって忘れることのかなわぬ温かさが、今、確かに目の前の氷人形から発されているのだ。
「おお……。癒す者よ、お前は既に進むべき流れを、辿り着くべき聖地を知って……」
女が、再び顔を上げた。
「聖……地……」
澄んだ声で繰り返した。その言葉なら、自分も知っているというように。
ドラクロワは、うなずいた。いっときトールを見やり、それから女を見た。
「行け、流れのままに。私がその流れを逆巻かせてみせる……お前を迎えに行くために」
女は、まるで相手が誰だか思い出しかけているというように、かすかに眉をひそめた。
青ざめたマントを翻し、ドラクロワは女に背を向けた。そのまま荒廃した街を歩みゆき、やがてその姿が見えなくなった頃——女の口がそっと開かれた。

「ドラ……クロ、ワ……」

小さな声で、女はそう言った。

2

赤い弔いの花に囲まれるようにしてキリは横たわっていた。腕も頬も切り傷だらけで、腹は真っ赤に染まり、〈銀の乙女〉の小さな紋章まで血に濡れていた。

どきりとするほど鮮やかな青い目に、弱々しい微笑を浮かべ、キリは言った。

「もう……痛くないんだよ、ノヴィア」

「キリ――……」

ノヴィアは涙をこらえ、勇気を振り絞って手早く布を裂き、キリの傷の止血をした。背まで貫く傷が二か所もあった。その無惨さに思わず目をそらして逃げ出したくなる。

手当することさえ無駄だという思いに打ちのめされそうになり、必死に心を保った。

本当に恐ろしいのは、キリの足から腹にかけて、硬く強ばっていることだ。

死蠟症――聖印の悪影響で体が蠟のようになる死病である。だが逆にそのお陰でキリは体を貫かれながらも戦えたのだ。今も傷口が蠟のように固まり、失血が抑えられていた。

ふいに、周囲で凄魔たちが立ち上がった。双剣を両手に構え、獰猛な唸りを洩らす。

まるでまだ戦いが続いているかのような様子に、ノヴィアは慌てて敵の骸を見やった。
アキレスは、己の武器である魔獣に血を吸われ、干涸らびた屍と化している。
もう危機は去ったはず――ノヴィアが祈るようにそう思ったときである。突然、きしきし軋む音を立てて〈蛭氷〉が現れ、アキレスの骸を覆い、大きな塊と化していった。
「そんな……なんで……」
アキレスの胸に、おぼろな輝きがともった。ちょうどノヴィアの矢に貫かれた辺りだ。既に矢は消え、裂けた服の隙間から紋様が刻まれているのが見えた。〈蛭氷〉はアキレスの胸の紋様を核として体を保ち、土地の堕気を吸って力を得て、再び活動を始めたのだ。
おそらくアキレスの両手の紋様は〈蛭氷〉を操るためのものだったのだろう。それがないまま氷が出現したということは――〈蛭氷〉は今、独自の意志で動き出したのだ。
ノヴィアが愕然とそう悟ったとき、にわかに〈蛭氷〉が身を起こした。
氷の腹の中にはアキレスの屍が閉じこめられ、虚ろな眼窩を宙に向けている。
〈蛭氷〉に凄魔たちが跳びかかった。だがどの凄魔も戦いで傷つき、ジークから離れているため力を発揮しきれない。剣を振るうが氷の刃に弾かれ、逆に斬られた。そして触手のように伸びる氷の棘に絡みつかれるや、剣ごと透明な蛭の腹に呑まれた。
アキレスが氷の中でからからと笑っている気がして、ノヴィアはぞっとなった。

「俺を置いて、逃げろ……ノヴィア……早く」
キリが掠れた声を零す。ノヴィアは歯を食いしばり、キリの体を背負って歩き出した。
「良いんだ……俺を置いてっても。仲間は俺を助けるために死んだ……だから……」
「だからなに!? 一緒に海に行くんでしょう! 海を見た後も一緒にっ……て……」
涙声になり、体の力が抜けそうになって必死に耐えた。暗い河でキリが自分を背負って耐えたように。今度は自分の番だった。自分が助け、ともに海に辿り着く――
赤い花園から街道に戻ったとき、背後から、きしきし不気味な軋み音が迫った。
棘を生やして這い進む巨大な氷の中には、引き裂かれた凄魔の体や剣が閉じこめられ、その中心ではアキレスの骸が赤い花に囲まれている。
まるで無限に死者を増やそうとする生きた氷の棺だ。しかも真っ直ぐ追ってくる。
アキレスの「道連れにする」という思いが氷にやどってでもいるのだろうか。あるいはノヴィアの矢の聖性を記憶して、同じ聖性を発する者を追っているのか――
ノヴィアは万里眼で辺りを見た。すぐに最適な地形を見つけ、そちらへ向かった。
キリの体重が膝に、腕にのしかかる。だが重いとは思わない。自分が非力だと思った。
悔しさを力に変え、歩んだ。息を喘がせ、必死に森を歩き、狙いの場所へ来た。目の前は崖だ。落ちれば命はない。その二十歩以上離れた対岸へノヴィアは別の力を発揮させた。

「橋が……見えます」
幻視の力で、たちまち白亜の橋を出現させた。対岸へ向かって橋を見ながら渡った。
橋全体のイメージを保ち、渡るそばから橋の背後の部分が消えて支えを失い、落下するのを防ぐ。そしてそれは追跡者が橋を渡ることも可能にした。氷が背後から迫り、橋に乗るのが分かった。ふいに氷の刃が爆発的に生える音がした。橋がノヴィアの聖性によるものであることを感知し、〈蛭氷〉が狂喜したのだ。
ノヴィアは振り返らず、一歩一歩、汗だくになって進んだ。
そしてついに対岸に辿り着いたとき――そこで初めて、くるりと振り向いていた。
氷の刃が束になって迫る。だが全て狙い通りだった。ノヴィアは目を閉じ、言った。
「見えません」
その瞬間、橋が消えた。振り下ろされた氷の刃が前髪をかすめた。だがノヴィアはぴたりと目を閉じている。氷の中のアキレスが、声無き怒号を上げた気がした。
氷の怪物は、そのまま遥か下の岩地に落下し、粉々に砕け散る音が崖にこだました。
「凄いな……ノヴィア、一人で倒すなんて」
キリが言った。かと思うとノヴィアの背で、ふっと気を失った。呼吸は眠るように穏や

かだ。ノヴィアは崖から離れ、転ばぬよう力を振り絞って坂道を下った。
キリを背負い続ける体力はノヴィアにはない。
代わりに万里眼を駆使し、ある物を捜した。坂を下りて原っぱを進み、ようやく陽光に輝く河が見えた。ネルヴァ河の支流——ジークと別れ別れになった河の下流だ。
河畔で、目的の物を見つけた。三、四人が乗れる程度の、小舟である。
河の渡し船だが、持ち主の姿はない。舟にキリを乗せ、縄を外した。船尾に立ち、力を込めて櫓を漕ぐ。舟を操ったことなど一度もないが、何とか舟を河の中央へ寄せた。
万里眼で見通す限り、行く手に激流はない。天気も良く、強風で舟が転覆する不安もなかった。ノヴィアは久々に、ほっと息をついた。
舟を拝借したことで気が咎めたが、キリをつれて移動する手段は他になかった。
キリは舟の真ん中で横たわっている。脈も呼吸も穏やかで、氷の刃で腹を貫かれたとは思えないほどだ。死蠟症のお陰で出血も痛みも抑えられているのだと思うと、どうして良いのか分からぬほどの悲しみに襲われた。
ジークなら何とかしてくれる——河を下り、合流地点までつれてゆけば、きっとキリも治る。またいつものように憎まれ口を叩き合い、競争し、笑い合える。そう自分に言い聞かせるうちに涙がにじみ、慌てて拭った。

そのとき、ふいに河の両岸に建物が現れ、
「街だわ——！」
喜びで胸が躍った。これでキリを医者に診せられる。ちゃんとした治療が出来る。
ノヴィアは揺れる船の上で不器用に櫓を漕ぎ、懸命に舟を河港に寄せ——
「何……これ……」
見渡す限りの廃墟に、呆然となった。

「なんか静かねぇ……誰もいないみたい」
破れた羽を震わせながら、アリスハートがジークの頭上で言う。懐にいれば安全なのだが、血の臭いが嫌で外に出ているのだ。
ジークは無言で歩みながら河岸を見渡した。
ネルヴァ河の本流——いったんはアキレスの策略で見失った進路に、戻ってきたのだ。
この一帯は既にドラクロワに呼応して聖法庁から離反し、戦いに備えているはずだった。
だが兵の布陣も、待ち伏せの気配もない。それどころか河商人も渡し船も、旅人の姿さえ見られなかった。間もなく街に差し掛かり、
「あ……街だ……。って……うわ……」

アリスハートが唖然となった。最初に見えたのは崩れ落ちた橋だった。建物の大半が焼かれ、道には壊れた家具が散乱している。
「土地を棄てたか……」
「す……棄てた……？」
「聖法庁と戦うために……どこかへ集結しに行ったのだろう。聖法庁の兵が追って来ないよう、主要な施設を破壊している」
それが、ドラクロワに呼応するということだった。街の外れには、ずらりと墓標が並んでいる。離反に応じない者との間で争いが起こり、多数の犠牲者を出したのだろう。民衆は逃げ出したか——殺されたに違いなかった。
「同じ街の人を……どうしてぇ……」
ジークは、ただ墓標の群を見つめている。争いが起こる理由は数多くある——貧富の差、身分の差、利害の不一致、相手の土地を奪うため、名誉のため、私欲のため——
「その争いをなくすために……俺は……」
無意識に零れそうになる言葉を呑み込んだ。代わりに最も現実的なことを口にした。
「灯台も……破壊されているかもしれん」
「え……？　そんな……。だって……大事な物なんでしょぉ？」

ジークは目を細めて墓標の群を見つめた。
「何より……大事な物だったはずだ」
そう呟き、廃墟と化した街を立ち去った。

ノヴィアは失意の余り、櫓を放してひざまずきそうになった。焼けた壁。崩れた屋根。おびただしい血の跡。広場に並ぶ墓標。ジークではない——位置的にジークがここで戦ったはずはない。内乱が起きたのだ。恐らく近隣の街のほとんどがこのような状態なのだ。
ともかくも舟を河港につけ、他の舟を真似て縄を締めた。
揺れる舟の上でキリを担ぎ、どうにか河から運び上げる。キリを背負い、廃墟に入った。目当ては〈銀の乙女〉の修道院である。だがすぐに焼け落ちた建物の前で立ちつくすことになった。仕方なく、被害が少ない家を見て回り、その一軒に入り込んだ。家財道具はあらかたなくなっていたが、ベッドと毛布は残されている。ベッドに眠れるキリを横たえ、
「包帯や食料がないか探してくるわ」
そう声をかけ、疲労に耐えて家を出た。街には人っ子一人いない。しーんと静まり返る街を駆け回り、毛布や衣類を揃えた。薬や包帯も僅かながら見つけた。それらを運び、
「大丈夫よ。すぐに治るわ……キリ」

キリの傷口を洗い、薬を塗り、包帯を巻いた。出血はなく、腹や足にかけて肌が蠟のように硬くなっている。特に左足は膝を曲げることも出来ないくらい硬く強ばっていた。

「ありがとうな……ノヴィア」

ふいにキリが目を覚まし、くすくす笑った。

「お前の背中、けっこう気持ち良くてさ……いつの間にか寝ちまった。どこだい、ここ」

ノヴィアも精一杯の微笑を返し、

「河沿いの街よ。誰もいないの。食べ物を探してくるわ。すぐに戻るから……」

「俺の分は、いいよ……ノヴィア」

キリは優しく笑った。当然だった。腹を刃で貫かれた人間に、食事など出来るわけがない。キリがまだ生きているのは、傷口が蠟のように硬くなっているせいだ。

「ダメよ。きちんと食べて精をつけるの」

きっぱり言って家を出た。そして涙と嗚咽をこらえながら、誰もいない街を駆けた。

神様、神様、神様。助けて下さい。なぜキリがこんな目に遭わねばならないのですか。心の中で何度もそう繰り返し、悲しさで震えながら走り回った。僅かに残された食料をかき集め、黴かけたパンさえ貴重だった。

刃がキリの内臓を傷つけていない可能性だってある。傷が蠟のように固まっているなら

粥くらい食べられるかも――そう祈るように考えながら台所で火を焚いた。あり合わせでスープと粥を作り、パンと一緒に運んだ。
「美味そうな匂い……」
キリが身を起こそうとする。ノヴィアは慌てて料理をテーブルに置き、キリを助けた。
「なんか……思い出すんだ……仲間のこと。お前の……金を盗んだときのこと……」
キリと仲間――聖印を刻まれた孤児たち。
ノヴィアは胸が痛んだ。この状況で初めてキリと仲間の心情が分かった。彼らは必死に生きていたのだ。だがノヴィアはあのとき、ただ金を盗まれた怒りだけでキリを追った。
「ありがとうな……ノヴィア。お前が〈銀の乙女〉の紋章を与えてくれなかったら……俺はずっと……聖堂を恨んだままだった……」
「あなたが教えてくれたのよ。私の知らなかったことを。あなたが全部……私に……」
「ずっと……お前が羨ましかった……」
「私だって、あなたが羨ましかったのよ」
ノヴィアが涙ぐむ。キリは微笑した。
「少し……くれないか、それ」
ノヴィアはキリの望む通りにした。キリの背を支えながらスプーンでスープをすくい、

口元に持っていった。キリは一口飲み、嬉しそうに微笑んだ。だがそれ以上は何も口に出来ず、ノヴィアは椀をテーブルに戻した。
「海は……近いのかな」
「すぐそこよ、キリ。もうすぐなの。あと一日もあれば海に着くはずよ。あなたの仲間のために……フモのために、海をその目で見るんでしょう？」
ノヴィアはあえて死んだキリの仲間のことを、フモの名を口にした。キリにとってそれが生きる希望になるように。何も持たない孤児だったキリの、故郷という希望——
「全てが終わり……全てが始まる場所。それが海だって……ジークは言った……」
キリはノヴィアの手に触れ、そう囁いた。
「俺……分かったんだ。仲間が俺を助けるために死んだのは……俺が、ノ、ヴィ、ア、を、助、け、る、た、め、だって。そしてそれは……ノヴィアがもっと別の誰かを助けるためなんだ。誰かが誰かを助けるのは……自分だけじゃない……もっと大きなもののためだって……」
「大きな……もの？」
「みんな旅の途中で死ぬんだって、ジークは言った。大事なのは、死ぬときにそいつの足がどこへ向かってたかだって。誰かが誰かを助けるのは……みながどこかへ向かうためだ……いつでも新しく始まる場所へ……みなが向かうためなんだ。そうしてみなが……」

キリのどきりとするほど鮮やかな青い目が、優しくノヴィアを見つめた。

「みなが誰かの海になるんだよ、ノヴィア」

ノヴィアの頬を、こらえきれぬ涙が溢れた。

「ジークにとってはドラクロワってやつが海で……。ノヴィアにとってはジークが海で……。俺は……ノヴィアやジークやアリスハートっていう海に出会えたんだ……」

「ずっと一緒よ……。あなたは、自分のためにばかり頑張る私に、誰かのために頑張ることを教えてくれたのよ……キリ」

キリは目を閉じ、ノヴィアの肩に頭を乗せた。

「親友って、きっとこんなのを言うんだろうな……」

そう言いながら、かすかに笑った。

「ノヴィアは頑張り屋さんだから……。俺も見習って、もう少し……頑張るよ……」

それを最後に、キリは再び眠りに落ちた。

何も出来なかった。ノヴィアに幻視の力を受け継がせた聖道女は、見るだけで人の傷や病を癒したという。だがノヴィアには治癒の素質はない。それが何より悔しかった。

だが分かっていた。どんな癒す者でさえキリを治癒させることは出来ない。肉体が蝕になるのは聖性の力だ。そこに癒す者の聖性を与えたところで結果は変わらない。

ノヴィアは、ベッドのシーツを握りしめて嗚咽をこらえた。ああ——全てから見放された子がここにいます。死の間際でさえ満足に食べることも出来ず、助けの手も差し伸べられない子がここにいます。助けて下さい。助けて下さい。自分一人では助けられません。

必死の祈りはどこへ届くあてもない。今このときに助けの手など来るはずもない。

やがてノヴィアは涙を拭い、キリをベッドに横たえた。

そして、テーブルの上に手を伸ばした。たとえキリが食べられなくとも自分は食べるのだ。ここで体力を失っては元も子もなかった。

涙をこらえて食事をした。辛かった。味も何も感じない。ただ食べた。自分のために、キリのために食べた。キリの分も食べた。悲しかった。それでも食べるべきだった。

やがて二人だけの死の街に、夜が訪れた。

3

「死と苦しみに真実を見ようとしたお前は……間違っていない、レティーシャ」

レオニスはそう口にしながら、寝室に運び込まれた書状の束をかき回していた。

「それは根源を見ようとする試みだ。死は、生命がどこへ行くのかを暗示してくれる。死と苦しみに触れたとき……生命の源に……一瞬だけ、手が届く気がするんだろう」

書状を幾つか手に取り、見比べる。まだ微熱が残っているためベッドから出られないが、こうして政務に取りかかれるまでにはレオニスは回復していた。
レティーシャは寝室の隅でうずくまり、いつものように頭蓋骨を膝に抱えている。
「僕は……その先を見る。お前が僕に見せたものが全てじゃない……。いずれ……」
そう言ってレオニスは手にした書状を開いて中身を取り出し、紙片のあちこちに記された暗号に従って順番を整えていった。紙片の一つ一つは断片的な情報しか示さず、何枚も揃って初めて正確な内容となるのだ。
「〈刻の竜頭〉の秘儀……。竜骸と対をなす……竜精……か」
それが整えられた書状の中身だった。ドラクロワが送って寄越した秘儀の一端である。
「なぜ、ドラクロワが、この秘儀を僕へ送ってきたのか……。分かる気もするし……分かりたくない気もする。一番可能性があるのは、ドラクロワは僕に……」
言いさし、書状から目を離した。窓の外を見つめるうち、ふいに身を強ばらせ、
「もし、そうでも……怨みはしない。僕が悪いんだ……あいつは僕のことを怒って出て行ったんだ。決して行かせるつもりはなかったのに……。僕のせいで……トール……」
声が震えかけ、歯を食いしばって耐えた。目尻をぐっと袖で拭い、深々と息をついた。
ドラクロワがなぜトールを密使として派遣するよう要請したのか。今になってようやく

理解されていた。幾つも送られてくる書状の文面の端々から、ドラクロワの意図が察せられるのだ。いや、ドラクロワはあえて、自分が何をしたかを伝えてきているのだろう。レオニスにとって唯一無二の忠臣にして友であるトールを、その手で――

「必ず……その先を見てやる……。死の向こう側にあるものを……。それが僕の……」

耐え難い無念さを胸中に抑え込もうとするように、胸に手を当て、瞑目した。

やがて静かに目を開き、窓の外を――トールの去った方を見ながら、言った。

「トールが帰って来ても……喧嘩をするなよ、レティーシャ」

明るい声だった。不自然なくらいの朗らかさだった。トールの帰還を信じるようでもあり、それがもう叶わぬことを知るようでもあった。

「綺麗な彫刻を彫れ……レティーシャ。僕が、その先にある綺麗さを見せてやる。お前にも……そして、ドラクロワにも……。必ず、見せてやる……」

そのレオニスを、レティーシャは遠いものに向けるような目で、じっと見つめていた。

とてつもない激痛が全身に走った。

それが、蘇生するなり感じた生命の感覚だった。聖性による治癒が功を奏したお陰で、逆に耐え難い苦痛が戻ってきているのだ。そのせいで危うくまた意識を失いかけた。

じっとしているうちに、その痛みも徐々に引いていった。
ゆっくりと、少しずつ、長々と息を吸い――そしてそれを、トールは静かに吐き出した。
たった一呼吸が、かつて味わったことのない苦痛と安堵に満ちていた。
それから、のろのろと目蓋を開いた。まだ体中が痛みを訴えている。どうやら地面に横たわっているらしい。なぜ自分は倒れているのか？　疑問と同時に答えが甦る。
漆黒の稲妻だ――そう。ドラクロワと戦っていたのだ。いや、戦いなどというものでさえない。一方的に打ち砕かれた。あっという間に体を吹き飛ばされて――
そのときトールのおぼろな視界に何かが映った。人――女の顔だ。どこかで見たような気がする。視界が定まり、女の顔が――その姿が、明瞭になってゆく。
唖然となった。女の真っ赤な髪が伸びて、自分の体のそこかしこに絡みついているのだ。きしきしと軋む音がした。氷――アキレスの〈蛭氷〉が放つ堕気！　それを女の身から感じた。慌てて逃げようとするが、全身の痛みで立つことも出来ない。
そしてふとトールは、堕気とは違うものが自分の体に流れ込んでいるのを感じた。
女を見上げ、呆然となった。女の胸元に、直接埋め込まれたかのように十字形の紋章が生えているのだ。いや、その紋章から女の体が生えているというべきか。
間違いなかった。ドラクロワがアキレスに渡した紋章だ。この女は氷人形だ。そうだ、

思い出した。紋章に刻まれた称号——〈癒す者〉だ。高位の聖道女。〈銀の乙女〉——
その癒しの聖性が、今、トールの体を包み、致命的な傷からかろうじて命を救っていた。
いったい何の罠か？　咄嗟にそう疑った。これさえドラクロワの意図ではないのか？
だが一方でトールは今度こそ自分に起こったことを理解していた。
「生きている……？」
そう呟いたのをきっかけに、何かが堰を切って溢れ出した。
死んでも良いと思っていた。ここが終焉の地なのだと。自分がここにいることを誰も知らないまま、命を落としても一向に構わない。そう心に決めていた。それなのに——
聖地シャイオンに帰れるかもしれない——そう思うだけで、ふつふつと涙が溢れてきた。
それは実に抗いがたい希望だった。処刑されても良い。生きて帰れさえすれば——
その瞬間、トールを歓喜が支配した。心が全力でその希望を受け入れた。
生きている——！
心が凄まじいまでの叫びを上げた。
自分は生きている！　この体も心も、まだ生きている！
もうたまらなかった。トールは這いつくばったまま地面に爪を立て、むせび泣いた。
狂おしいまでの喜びに体中が震えた。まだ命があることを世界中に感謝したかった。

震えながら泣きに泣くトールを、女は、不思議そうに見つめていた。
河岸一帯に破壊の嵐をもたらしながら、続々と叛逆の兵団が集ってきた。
ドラクロワはただ無言で馬に乗っている。その総身にまとう苛烈な気配に惹かれるようにして、聖堂の兵が、離反騎士団が、盗賊たちが、各地からやって来る。
ここに到達するまで、ひたすら破壊と殺戮を繰り返してきた者たちだった。動乱の布告とともに彼らが通り過ぎた後には、おびただしい瓦礫と屍ばかりが残された。
「準備が出来ました、ドラクロワ様」
兵の一人が声をかけた。ドラクロワは黙ったまま、そちらへ馬を進めた。
目の前に、大きな白い塔があった。海岸に設けられた灯台――その周囲の壁が一部、崩されている。その付近に、塔を倒すための器械が用意されていた。
この塔の破壊をもって、河岸一帯から始まった動乱の布告が完結するのだ。
あとは運ばれた物資とともにいったん海に出て、大陸各地へと進撃するばかりだった。
動乱を拡大し、聖法庁の中核である聖都を脅かすために――
ドラクロワは馬を進め、崩された壁を乗り越え、塔へ迫った。
誰もが、ドラクロワの合図を待っていた。塔が破壊される瞬間を。それが、大河を血で

染めた動乱の終曲となるとともに、大陸全土への進撃を告げる序曲となるはずだった。
ドラクロワは馬を止め、苛烈な意志のみなぎる眼差しで塔を見つめている。
白い壁の前まで来たとき——ふいに、ドラクロワは馬を止めた。
じっと壁に目を当てたまま、微動だにしない。冷厳とした表情でありながら、その目に得体の知れない光を溜めて壁を見つめている。やがて兵たちが合図を待ち侘びる中、
「……ジーク」
ドラクロワの口から、ひどく痛切な声が零れていた。

4

朝の光とともにノヴィアが目覚めたとき、キリはベッドの背もたれに体を預け、嬉しそうに窓の外の輝きを見つめていた。
「綺麗だ……きらきら光って……。海も……きっと、こんな風に綺麗なんだろうな」
その言葉はキリの生きる意志そのものだった。ノヴィアはそれが心底から嬉しかった。
ノヴィアは言った。
「行きましょう……その目で見るために」
キリはただ静かに微笑していた。

僅かな食料の残りを包み、水筒を見つけて水を入れ、衣類や毛布とともに舟に運んだ。
キリの左足はほとんど動かず、ノヴィアの肩を借りながら歩いた。だが意識は明瞭で、
「……へえ、いつの間に、舟なんか見つけたんだよ」
「あなたが寝てる間によ。ちゃんと漕げるよう祈ってて。まだ二度目なんだから」
宝杖を腰帯に差して櫓を握るノヴィアに、キリは面白がるような目を向け、
「舟がひっくり返ったら俺が助けてやるさ」
船首で寝そべりながら笑ったものだった。ノヴィアも不器用に舟を漕ぎながら微笑んだ。
キリと言葉を交わせることが嬉しかった。延々と舟での移動を続け、やがて昼になり、
「ノヴィア……何か食べろよ。腹減ったろ」
何気ない口調でキリは言った。自分は昨夜から何も口に入れていないのに。まるで自分はもう食べる必要がないとでもいうように、
「俺はこんなザマだから……お前に頑張ってもらわないと。だから……食べるんだ」
ノヴィアはしっかりと心を保ち、その通りにした。
腹に傷を負ったキリの目の前で僅かな食料を独占したのだ。昨日の夜、一人で食べた以上に悲しかった。それでもちゃんと食べられたのは、キリの明るさのお陰だった。
自分はキリの命を食べているのだと思った。キリから分け与えられた心を——優しさを、

勇気を食べているのだ。絶対に蔑ろにしてはいけない、この世で最も神聖なものを。
昨夜は感じなかった味が、ひどく鮮やかに感じられた。粗末な食事のはずなのに、どんな料理よりも美味かった。泣き叫びたくなるほど悲しいのに、心から嬉しかった。
「見ろよ……あの街も……死んでる」
キリは新たに現れた廃墟を見つめ、
「どこにも向かえなくなった奴らが街を殺したんだ。俺もお前に出会ってなけりゃ……」
そしてふと、焼け落ちた聖堂を指さした。
「あそこの宝物庫、何か残ってるんじゃないか。はは、万里眼で見てみろよ、ノヴィア」
「もう盗みはやめたんじゃなかったの」
さすがにノヴィアが呆れた顔をする。キリはおかしそうに手を振った。
「盗みじゃないさ、拾い物だよ。お前だって、拾い食いしてるし」
「ひ、拾い食いじゃありませんっ」
ノヴィアが顔を赤らめる。キリは微笑み、河面に目を向けて言った。
「お前と一緒に、沢山の宝物を手に入れる夢を見たんだ。俺たちなら何だって手に入れられるって、二人で言い合ってさ。そして沢山の宝物を……お前が、ジークやアリスハートにも分けてやってるんだ」

「キリ――」

「俺は……聖堂の宝物庫なんかにはない宝物を沢山手に入れたんだ……」

そのとき、キリの目が大きく見開かれた。

「あいつ――泳いで来やがった……」

ノヴィアも振り向き、上流から泳いで来る巨大な氷の塊に、ぞっとなった。

やはり崖から落としたくらいでは倒せなかったのだ。沢山の氷柱を櫓のように動かし、猛然と追ってくる。このままでは確実に追いつかれ、舟を破壊されて餌食となる他ない。

だが――ふとキリが、ぼつっと言った。

「あいつ……可哀想だな」

ノヴィアは驚き、そしてすぐにその意味を察した。

アキレスの骸が崖から落下したせいで異常にねじれているのだ。まるで死んでなお苦しみ悶えるようだった。凄魔の体も引き裂かれ、凍てついている。

「二人で……あの化け物を倒そう」

当然のようにキリは言った。実際、そうせぬ限り氷の怪物は延々と追ってくるだろう。

「私がやるわ。考えがあるの」

舟を岸につけつつ、迫る氷を見た。アキレスの胸の紋様――それさえ破壊すれば氷は姿

を保てなくなるはずだ。問題は、どうやってあの分厚い氷を貫くかだった。
ノヴィアはキリの脇の下に腕を回し、揺れる舟から転び出るように脱した。
目の前は登り坂の森だ。キリを背負うにはきつすぎた。何とかキリの肩を担いで登った。
キリも何とか動く右足を立たせ、二人して懸命に木々の生い茂る斜面を登る。
背後で何かが粉々に砕ける音がした。氷が、乗り捨てた舟を食らったのだ。だが誰もいないと察し、ずるずる陸上に這い登ってきた。やはり水上に比べて移動速度は遅い。だが、
「俺が……囮になるよ……その隙に……」
健脚なはずのキリが息を乱して言う。やはり少しでも動くと、途端にキリの体力は底をついてしまうのだ。それほど弱っているキリを囮に使うなど――それがいかに有効な手だろうと、ノヴィアに許せるはずがない。
「駄目よ。私がやるの。私があなたを守るの。あなたが私を守ってくれたように」
キリはか細い笑みを浮かべた。それを了承と取り、茂みの陰にキリを横たえ、
「そこで待ってて。倒してくる」
きっぱりとノヴィアは告げた。キリはただ微笑んでいた。その鼓動も呼吸もひどく弱まっている。一刻も早くあの氷を倒し、キリを海につれてゆくのだ――自分に出来ることはもうそれしかなかった。それだけは必ず果たさねばならなかった。

身を貫くような悲しみを胸に押し込め、精一杯の微笑みをキリに返すと、ノヴィアは、斜面を横へと慎重に移動していった。

河縁で無事な小舟を見つけると、ジークは躊躇うことなくそれに乗って移動した。
水上に身を置けば、咄嗟に襲われたときに力を発揮できない。その危険を冒してでも先を急ぐとともに、逆にジークが水上にいるのを見て敵が襲ってくるのを期待していた。
今のジークにとって、離れた場所にいる少女たちを守る方法は、一人でも多くの敵を自分に引き寄せる以外にない。舳先では、アリスハートが小さな身を伸ばしてノヴィアとキリの姿はないかとしきりに辺りを見回している。
船の櫓を動かしながら、ジークはふとシャベルを握った手に目を当てた。
遠隔地に放ったままの凄魔を通して、戦いの気配が伝わってきているのだ。
「ノヴィア……」
ジークは目を閉じ、凄魔の魂が声なき声で伝える戦いの様子に耳を傾けた。シャベルを握る手に力がこもった。今から駆けつけようとしたところで間に合うはずがない。
そっと目を開き、舳先のアリスハートを見た。それから鋭く彼方に目を向け、
「そうだ……迷うな。迎え撃て――」

まるで遠く離れた相手に命じるようにして、ひそかな呟きを零していた。
決意は、二つの感情によって強く引っぱられていた。恐怖と勇気である。その二つの感情がぴんと張りつめ、かつて経験したことのない緊張をノヴィアの中に生じさせていた。
全身が熱い。そのくせ頭だけ、ひどく冴え冴えとしていた。鼓動が騒然と鳴り響いているが、今はもうそれも気にならない。ただ自分がどうするべきか考えていた。
一度作戦を考えたら、疑いなくそれを行わなければならない。
戦いが始まってしまえば考え直す時間などないのだ。幾つもの可能性を検討しつつ最善の結果に向かって、最大限の努力をする。その最初の一歩が——恐ろしく難しい。
何よりジークの命令がないのだ。命令されないまま戦うことの辛さをノヴィアはほとんど初めて知った。誰も指示してくれない。責任も取ってくれない。最初の一歩が間違いだったとしても、それを指摘してくれる人も修正してくれる人もいない。
自分の考えと行動が正しかったかどうかは——結果であらわすしかない。
生き残りを賭けた戦いの全ての責任が、自分一人にある。言い訳も出来ない。
ジークはいつもこんな恐ろしいことから逃げずに戦ってきたのかと思った。
思わず足がすくみそうになり、勇気が恐怖に引っぱられ、決意が揺らぎかけるたび、

(迷うな――)

声なき声が、どこからともなく聞こえる気がしていた。

(迎え撃て――)

生き残るために。キリを海へ連れてゆくために。ただ己の考えを信じ、危機を乗り越えるという決意をしっかり保ち、やがて最初の一歩を踏み出すべき場所へ到達していた。

下方から巨大な氷が邪魔な木をなぎ倒しながら登ってくる。

間違いなく、犬が臭いを辿るようにノヴィアの聖性を追っているのだ。

ノヴィアは足を止めて深呼吸した。ここが開始の場所、決着の地だ。自分から戦いを仕掛け、勝利するための最善の地点だ。ノヴィアは緊張に耐え、ひたと眼前の宙を見た。

「沢山の……沢山の矢が、見えます」

たちまち何十本もの矢が眼前に現れた。一瞬の間。そして、ざあっと驟雨のごとき音を響かせ、全ての矢が一斉に奔った。狙いは氷そのものではない。氷の周囲の地面や木々に、次々に矢が突き刺さる。途端に氷の進行が鈍った。氷の刃が戸惑うように宙をかく。

さらにノヴィアは何十という矢を放った。金の輝きが森に乱舞した。まるで黄金の雨だ。

そしてその輝きが――聖性が、氷を惑わせた。

氷にしてみれば、いきなり森中に何十人ものノヴィアが現れたようなものだ。

ついに氷が怒り狂った。とてつもない数の刃が生え延び、矢が刺さった木を片っ端から打ち倒し、貪り食った。構わずノヴィアは矢を現し続けている。宝杖で聖性を回復させもせず、ひときわ大きな矢を放ち、強い聖性を発揮して氷を幻惑の中に叩き込んだ。
今や氷を中心に森が黄金色に染まるようだった。疲労が襲い、急激に聖性が衰えてゆく。
だがそれがノヴィアの狙いだった。自分の聖性が、周囲の矢よりも弱まることが。
ふいに氷の怪物の一部が、めりめりと盛り上がり――巨大な顎と化した。かっと氷の牙を剝いたそれが、森中の木の葉を震わせるような凄まじいまでの雄叫びを迸らせていた。
これまで全く声を発しなかった怪物が、ノヴィアを仕留められぬことに憤怒したのだ。
そしてその咆吼が突然――ぴたりとやんだ。
ノヴィアが、いた。
牙を剝く氷のすぐそばに。今や何百と具現され、一面に突き刺さった金の矢を隠れ蓑にし、手を伸ばせば触れる距離にまで接近していたのだ。そのことに氷が気づいた瞬間、
「見えません！」
ノヴィアの凜冽たる声音が上がった。
「あなたの力は、私には見えません！」
最後の力を振り絞って無視による幻視を現すや――ぴしりと氷の顎に亀裂が走り、崩壊

した。氷の牙が一挙に砕け散った。氷の堕気が、ノヴィアの聖性に吹き飛ばされたのだ。
氷の体がえぐられ、のけぞって悲鳴を発した。その分厚い氷の内部から、アキレスの屍が——胸の紋様が、あらわになった。それを、ノヴィアはおぼろげに見た。幻視の力を使い過ぎて目がかすみ、新たな矢を放つことも出来ない。だがそうでもしなければ、ここまで近づけなかった。そして、そうすることでしか手に入らないものもあった。
身もだえる氷から、そのとき何かが落下した。
氷に閉ざされていた凄魔の剣——それが、捨て身のノヴィアの前に突き立ったのだ。
その柄を、ノヴィアの小さな手が力の限りに握りしめた。
「ジーク様っ、力を下さいっ！」
体中の力を振り絞り、無我夢中で分厚い剣を突き込んだ。
どん！　鈍い音が響いた。剣尖が、深々とアキレスの胸の紋様を貫いていた。
紋様が青白い輝きを放ち、アキレスの胸が大きく膨らんだ。その一瞬後、紋様が音を立てて肉体ごと弾け飛んだ。アキレスの胸にぽっかりと穴が空き、氷が甲高い叫びを上げた。
そのとき干涸らびたアキレスの口が突然、かぱっと開き、でろりと赤いものが現れた。
そこだけぬめぬめと水気を保つ、長い舌。
その舌の表面に、青い輝きが——紋様が刻まれていた。予想もしていなかった、もう一

つの紋様の存在。ノヴィアの背を恐怖を走り抜け、ぞっと総毛立った。

氷の刃が猛然と振るわれた。ノヴィアの両腕が反射的に凄魔の剣を掲げた。鋭い音とともにノヴィアの体が大きく弾き跳ばされ、斜面を転がった。

慌てて起き上がり、呆然となった。剣が、半ばから折れ砕けていた。もはや逃げも隠れも出来ない。ただ無数の氷の刃が振りかざされる様に立ちつくしたとき——

「ノヴィアーっ！　ここだーっ!!」

敢然と、その声が上がったのだった。

ああ——

ノヴィアは祈るように吐息した。

彼女はそこにいる。そこにいることが誰かとの絆となる——ただそれだけのために。

みなが誰かの海になる——その言葉が熱く胸に甦るのを感じながらノヴィアはただ声の方へ——頭上へ——キリのいる場所へ——折れた剣を投げ上げていた。

そうして振り仰いだノヴィアのかすむ目に映るもの。その何もかもが、ゆっくりと動くようだった。宙を舞う折れた剣。傷つきながらも敢然と宙を跳ぶキリのしなやかな体。

振りかざされた氷の刃の群——その全てが宙のキリに襲いかかる——キリの右足が剣の柄を蹴り——剣は猛然と回転しながら宙を迅る。

そしてアキレスの顔面に剣の刃が叩き込まれ、長く伸びた舌が縦に切り裂かれたとき、ひときわ長く鋭い氷の刃がキリの左胸を貫き——その尖端が背へと突き抜けた。
頭上を仰ぎ見るノヴィアの頬が、血の雫が熱く跳ねた。
「あばよ……蛭野郎」
宙で、キリが、ひどく優しく言った。
氷の全身が崩壊した。キリを貫く刃も砕け散った。きらきら輝く氷の破片とともに落下するキリをノヴィアが泣きながら抱きとめようとして二人の体が茂みに倒れ込む。
アキレスの屍はついに全ての力を失って氷のかけらとともに斜面を転落し去り、凍りついていた凄魔と剣は銀の輝きとなって消えた。
そしてキリの名を泣き叫ぶノヴィアの声が——森にこだました。

5

トールは、自分が生きているのと同じくらいの奇跡が起こったような気持ちになった。
廃墟で一頭の馬がさまよっているのを見つけたのだ。普通、主人を失った馬は自然と軍勢についてゆくものだ。はぐれ馬であり、トールにとっての救い主だった。
トールは傷の痛みに耐えてその馬を捕まえ、新たな主人となった。

そして鞍の後部に、あの赤い髪の女を乗せ、街道を進んだ。蛇行する河に沿って移動せず、一直線に海岸に向かう道を選んだ。いったん海に出て船で沿岸を回り、それから聖地シャイオンへ帰る——それが最短の帰路だった。ジークもドラクロワもそうするはずだ。
ドラクロワも海岸の港全てを破壊するわけにはいかない。兵団の輸送が不可能になるからだ。上手くすれば彼らの動向もつかめるだろう。
「ジー……ク……。ジー……ク」
トールの背にしがみつきながら女はその名を繰り返し口にした。
「ジークはここにはいませんよ」
さすがに今、ジークと戦う気はない——トールは、女の目的がジークを殺して力を奪うことだと信じている。アキレスが創った氷人形なのだから、そう考えるのが自然だった。
女のことは、仮にシーラと呼んでいた。かつてジークとドラクロワとともに、同じ理想を抱いた〈銀の乙女〉——その女性を模して生み出された、人外の存在だった。
恐ろしいのは、ときおりトールの肩に手を当て、
「ジーク……?」
と訊いてくることだ。傷を癒された後で、いきなり襲われて血を吸われてはたまらない。
「いいえ、シーラ。私はジークではありません。トールです」

まるで子供に言い聞かせるようにトールが返す。
「トー……ル。聖、地……。帰、る……の」
女――シーラは言う。いったいアキレスは何を考えてこの氷人形に知性を与えたのか。しかも聖性を発揮する力まで与えた上で放置するとは意味不明だった。まさかこのシーラがアキレスの力を超えたところで生まれたとはトールは考えもしない。ただシーラがこうして形を保っているということは、アキレスがまだ生きている証拠であるのだ――
その考えが一変したのは、街道を進んでしばらくしたときだった。
「お帰、り……な、さぁい」
いきなりそんなことを言ったかと思うと、ふわっと馬を降りたのだ。そのまま羽毛のような身軽さで、横手の森へ入った。トールは眉をひそめてシーラを追った。
「お帰りなさい……？」
まさかアキレスだろうか――咄嗟にそう考えた。森を進んでシーラに追いつき、そこでトールは、自分の考えが間違っていないことを知った。
「……よくやった。ノヴィア……キリ……」
ジークのひそかな呟きとともに、ふいに異変が起こっていた。

シャベルの歯が、どこからともなく現れた銀の輝きとともに、元に戻ったのだ。
船首でノヴィアやキリがいないか首を伸ばして探していたアリスハートが目を丸くし、
「あいつらが……敵を倒した」
ジークの言葉に、わっと歓喜の声を上げた。
「じゃ、じゃあ、無事に会えるってこと？」
ジークはうなずきつつ、左手を見つめ、凄魔の魂が告げる戦いの詳細を受け取った。
「でも……灯台が壊されてたら、どうやって二人と待ち合わせるのぉ？」
「シャングリラの海岸に出て、狼煙を焚く。ノヴィアの万里眼ならすぐに気づくだろう」
河を下るほどに破壊の光景はひどくなり、ジークも、もはや灯台が破壊を免れるとは考えていないのだ。やがて河幅が広がり、海に近づいた。予想通り周囲は破壊を極めている。
だがふと、アリスハートがそれに気づいた。
「ねぇ……灯台って、あれのこと？」
ジークはそちらに顔を向け、
「まさか……。なぜ……」
遠くに見える白い塔に、呆然となった。

それは、見るからに弱々しい動きで、ずるずると草むらを這って近づいてきた。
「アキレス……」
トールは馬上から、あまりに変わり果てたその姿を見た。両手を切断され、干涸らび、ずたずたになり、顔面を割られている。その無惨な遺体から氷の棘が生えて、百足のように這ってくる。異様なのは、そこだけ赤く濡れた舌が真っ二つになり、それを氷の棘が縫い合わせていることだ。舌に刻まれた聖印の形を何とか保とうとしているのだろう。だがその聖印の輝きも、今にも消えそうなほど弱々しい。
「お帰り……なさぁ、い」
シーラは草むらにひざをつき、両手を広げて、その無惨な遺体を――〈蛭氷〉の残滓を迎えた。ほっそりとした両腕が、ずたずたになった遺体を優しく抱いた。
癒しの聖性が発揮され、シーラの赤い髪が、赤い目が、血の色に輝いた。
アキレスの遺体から、凄まじい堕気が噴き出した。きしきし軋み音を立てて氷の棘が現れ、シーラに絡みつき、その背や腹へと潜り込んでゆく。
限りなく慈愛に満ちた癒しの聖性が――数々の怨みに満ちた凍れる堕気を呑み込んだ。
舌の聖印の輝きが消え、残った氷が解けて骸の顔を濡らした。
トールは骸が泣いている気がした。傷の痛みに耐えて馬を降り、シーラの傍らに立った。

手を翻して短剣を出現させ、それで土を掘り始めた。
アキレスの墓を掘るトールを、シーラは不思議そうに見つめ——やがて手伝った。
それからトールはシーラとともに馬に乗り、街道を進んだ。
そして破壊された街を通り抜けたとき、トールは、ふと風の香りの変化を感じていた。
何かが色濃くふくまれたような風を受け、自然とそれを悟った。
海が近いのだ。

ノヴィアは、キリの肩を担ぎ、必死に斜面を越えた。森を抜け、なだらかな丘に入った。
キリは、胸の傷さえそれほど痛まないと言った。左半身はもはや全く動かず、胸の傷さえ蠟のように硬く、出血も止まっていた。それでも、か細い呼吸を繰り返しながら、キリは最後まで動く右足で立つことを望んだ。一歩一歩、命を削りながら歩むことを。
「俺の足は……ちゃんと海を向いてるかな……」
キリが訊く。ノヴィアは懸命にその体を支えながら言った。
「真っ直ぐ向いてるわ、キリ。この向こうに、あなたの故郷が……海があるのよ……」
そうして丘を越えたとき、その風が来た。
何か大きな気配をたたえたような風の匂いが行く手から届いてくるのだ。

かつてかいだことのない空気。それが潮風であることをノヴィアは自然と悟った。
「キリ――」
思わず喜びが胸に迫った。もうすぐだ。あと少しで辿り着くのだ。
「ああ……良い匂いだ」
キリも一歩ずつ進みながら、こころもち顔を上げて微笑んでいる。かと思うと、
「ノヴィア……お前は、どこへ向かうんだ？」
そんなことを訊いてきた。
「私は、これからもジーク様の従士として……」
ノヴィアは海が近いことを喜びながらそう口にしようとした。当然の答えを。だが――
「違うよ……ノヴィア」
「え……？」
「ノヴィアにとって……ジークは始まりの海だ……。終わりじゃない……」
そう言って、キリは優しく笑った。
惨憺たる破壊の光景の中でただ一つ、灯台だけが無事だった。その白い塔を囲む壁の一部が崩されている。そこから塔を倒すための器械が運び込まれ――放置されていた。

「なぜだ……。ここまで用意しておいて……」
ジークにしては珍しく戸惑いもあらわに塔へ入った。中も、全くの無傷である。
「……灯台に火をともす。お前はここにいろ」
罠かどうか確かめるためだった。有無を言わせずアリスハートを置いて階段を登った。
最上階に来た。柱だけで、壁はない。その部屋の中央に大きな鉄の器があり、貯蔵された油を少しずつ器に流し込む器械がある。
ジークはすぐさま油を注ぎ、発火用の小さな器に火をともし、鉄の器に投げ入れた。
たちまち炎が起こった。それが塔の力を目覚めさせた。柱に刻まれた聖印が効果を発揮し、聖性の力で炎を風雨から守り、その輝きを何倍にも増して沖合に届けるのだ。
その聖性が、塔の入り口で不安に身を縮こまらせるアリスハートにも影響を及ぼした。
温かな輝きに包まれるや、破れた羽の痛みが消えたのだ。
そしてにわかに、まるで金色の花が咲くように、羽が甦ったのだった。
「羽が……元に戻ったあ……」
恐る恐る羽を震わせ、ふわりと宙に舞うと、歓喜の声を上げてそこら中を飛び回った。
「ありがとねぇ……ジーク」
勢いに任せて、階上に向かって呟く。そこへ階段を下りてくる音が響き、何となくどき

っとなって入り口の彫像の陰に隠れた。
壁中が聖性で白く輝く中、ジークは階下に戻り、アリスハートがいないことに気づいた。
「羽が戻ったか……分かりやすいやつだ」
淡々と呟いた。早速辺りを飛び回っているとしか思わない。むっとなったアリスハートは、飛び出して行って礼を言わなければという義務感から、あっさり解放された。
ジークはなおも答えを求めて、塔を出た。なぜここだけ無傷なのか。指示したのがドラクロワなら、明確な意図が――罠があるはずだった。
だが何も見つからぬまま塔の白い壁に沿ってぐるりと歩き、崩された塀が目に入った。
そこから器械を運び込み、ちょうど今ジークがいる辺りから塔を崩す予定だったのだ。
だがなぜかその作業を止めた。完全に放置した。いったい何が起こったのか――
ジークは、塔の壁を振り返った。
そして、答えが目の前にあるのを知った。

「ジークだってそうだ……ドラクロワってやつは、決して終わりの海じゃない……」
吹き寄せる潮風の向こうにあるものへ真っ直ぐその顔と足を向けながら、キリは言った。
「全部、そこから始まるんだ……。頑張れ……ノヴィア。お前も、自分の向かうところに

……。お前が行くところ……俺も行きたかった……」
「行けるわ、キリ……」
ノヴィアは声を振り絞って言った。
「一緒よ……キリ。ずっと一緒に……」
「お前のお陰で……海に向かい続けられたよ……。本当に、ありがとうな……」
ノヴィアはかぶりを振った。
「まだよ。まだそんなことは言わないで。あともう少しなのよ。あそこの木まで行けばきっと海が見えるわ。ううん、もっと手前かも。この丘を一つ越えればすぐ――」
だがキリは優しく訊いた。
「なぁ……海は綺麗かな……？」
「キリ……あと少しで……」
「ノヴィア……海が見えるか……？　俺……もう……なんにも見えないんだ……」
真っ暗な何かが上から降ってくるようだった。優しく届く潮風さえ残酷な意志に満ちている気がした。ノヴィアは泣き崩れそうになるのに耐えて、必死に告げた。
「……見えるわ」
万里眼を使うくらいには力は回復している。どれほど疲労しようとも今それを見ねば力

を持つ意味などなかった。キリの重みを肩に感じながら、涙でくもらぬよう歯を食いしばって視界の力を発揮させた。今このとき自分の聖性に意味があることを祈りながら――ノヴィアは、それを見た。丘の向こう――そこに広がるものを。

そしてにわかに全てが一変するさまに息をのんだ。そこにそれがあった。天地の彼方にあって全てを迎え入れるものが。遥かなる広がり――何もかもが突き抜けるような広大さの中へと吸い込まれてゆくかのように。どこまでもどこまでも続く素晴らしい青さ。

その輝きが視界を埋め尽くすさまにノヴィアは思わず目をみはり、

「なんて……美しい……」

呆然と、そう口にしていた。

『いつか剣を棄てるために』

それが全てだった。かつてジークがこの塔に預けた、ただ一言の祈り。まさしく今握る剣で刻んだ言葉――それに触れる指が震え、

「俺の……言葉が……止めたのか……」

気づけば、白い壁の前にひざまずいていた。

「お前を……止めたのか……俺が……」

あの男が教えてくれたのだ。心まで剣を握るなと。そしていつかその手も剣を放すときが来ると——

「信じて良いのか……。理想は……お前の中に、まだ……生きて……」

それだけが今も昔も、自分の戦いの全てなのだ。自分の旅の意味、生きる意志なのだ。

「信じて良いのか……ドラクロワ……」

祈るように頭を垂れるジークを、新たな羽で宙を舞うアリスハートが遠くから見つめていた。何があったかは分からない。ただ、これまでどんな感情も押し殺してきたジークが、今、背を震わせるほどの何かに辿り着いたのだ。きっと沢山の悲しさを抱きながら、それでも求めた喜びに出会えたのだ。そんな風に思った。

「良かったねぇ……狼男」

アリスハートは、ふわりと宙を舞った。

久々の飛翔に心躍らせ——そして、見た。

それまで塔の陰になって見えなかった、一面の青さを。

「綺麗よ……キリ。あなたの目のように……」

胸を震わせながらノヴィアは言った。

「本当に、綺麗……。色々な青さが、輝き合ってて……あなたの目は、海の一番遠い青さよ……。空に一番近いところにある青さよ……キリ」
ノヴィアが喜びを込めて告げると、キリは嬉しそうに目を閉じた。
「ああ……綺麗だ……」
まるでノヴィアの目を通してそれを見るように呟いた。その体がふいに重みを増し、
「みんながいる……。フモが……待ってる……」
すうっと眠るように顔が下がった。
「キリ……？」
「紹介するよ……みんなに……」
キリの体から、ゆっくりと力が抜けてゆく。
「こいつは、ノヴィア……俺の、親友なんだ……」
声とともに最後の息が空気に溶けて消えた。
かつてない重みがノヴィアの肩に生じた。
それはこの世の中で最も重く感じられた。
それでもキリの体はまだ温かかった。
キリの名を呼ぼうとして声が出なかった。

泣いても叫んでも二度と返事をすることのないキリを背負い続けられるほど自分は強くないということが悲しいくらいによく分かった。だが歩まなければならなかった。ここで立ち止まるわけにはいかないのだ。後もう少しで辿り着ける場所に、二人で行くために。だから——微笑った。まるで今、キリの仲間を一人ずつ紹介されているように。力の限り微笑み、萎えそうになる足に力を込めた。泣き叫びそうになり、必死に歯を食いしばって耐えた。ただ微笑み、動かぬキリの体を、一歩一歩運んでいった。
ふいに風の香りが濃くなり、地面にも変化が現れた。土が真っ白い砂に替わり、鮮やかな潮風がノヴィアたちを包んだ。そしてついに砂が丘をなす場所に立ったとき——
ノヴィアは、そこに辿り着いていた。
キリと一緒に。遥かなるものの広がる場所に。
見渡す限りの一面の青さ。打ち寄せる波の美しさ。空との境は遠く広がり、万里眼を通したときとは比べものにならぬ圧倒的な存在感が、ノヴィアとキリを迎えていた。
ノヴィアは、ぎゅっとキリの体を抱きしめ、その限りない青さを見つめた。
「海よ……キリ……」
そう囁いたとき、初めて涙が溢れていた。

6

船の上から、ドラクロワは、彼方にともる灯を見ていた。
沿岸にただ一つ残してきた白い塔に、誰かが火を投じたのだ。
「追って来い……ジーク。真実の刻を求めて……」
囁きとともに、青ざめたマントを翻し、灯に背を向けた。
「ともに……シーラを迎えに行くために」
ドラクロワを乗せた船は、遠く広がる海原を、新たな動乱を求めて進んでいった。

見るべきものは全て見た――トールはそう思った。遠くの砂浜にノヴィアともう一人の少女の姿があった。灯台には火がともされている。アキレスは死んだ。ドラクロワはさらなる動乱を求めて出航した。おそらく、聖地シャイオンもそれに巻き込まれるだろう。
「終わ……り。始ま、り……。海……」
シーラは青く澄んだ海を見つめてそう呟いた。その通りだとトールは思う。ここが河の終焉だった。終わりの場所であり、そしてまた始まりの場所だった。
どこまでも広がる海の輝きを目に焼きつけながら、トールは静かに馬首を返した。

自分はこれから何を見るのだろう——レオニスはそう思いながら、車椅子に乗り、テラスに出て久々の風を頬に受けていた。湖の輝きに目を向け、囁いた。
「なあ、海はどんなだい……トール。この湖よりも大きい海を……お前は見たのかい」
答える者はいない。大事な存在を失ったかもしれないという痛みが、胸を刺した。その痛みはレオニスの予想を遥かに超えた。胸を押さえ、うつむき、たまらず泣きじゃくった。
「頼むよ……トール。お前の話が聞きたいんだよ……。お前の旅の話が……トール……」

ぶんぶん唸る蠅の羽音が静まり、レティーシャはぼんやりと出来上がったものを見た。
「何回やってもこうなるよ兄様。急に綺麗が分からなくなっちゃったよ兄様……」
碧の目が、呆然とした光を溜めている。頭蓋骨も、虚ろな眼窩でそれを見ていた。
習作——石に刻まれた幾つもの顔。その全てが聖地シャイオンの領主たる若い少年の顔だった。それを彫りたいのではなく、それ以外に具体的な顔がまるで思い浮かばないのだ。
「あたしの頭が変になったよ兄様。レオニス様の顔ばっかり出てくるよ兄様」
頭蓋骨は答えず、レティーシャも黙った。長いこと立ちつくし、やがてぽそっと呟いた。
「苦しんで死ぬことより綺麗なもの……あるの？　ねえレオニス様……あるの？」

「遅いね……ノヴィアたち。あたし……捜して来ようかなぁ」

心細そうに言うアリスハートを、ジークはかぶりを振って止めた。

「じきに来る……大人しく待っていろ」

そうして海を見た。波は光を受けてどんな宝石よりも複雑で澄んだ輝きに満ちている。

その最も澄んだ青さの彼方へと還ってゆく、まだ若い死者の魂の行方を、そのときジークははっきり感じ取っていた。それは嘆き悲しむべきことだが、そうではない面もあった。

友の腕の中で看取られるという、身寄りのない者にとって最高の幸せの中で逝けたのだ。

友の肩を借り、最後まで歩くというこの上ない栄誉の中で生涯を閉じたのだ。

出来れば自分もそのように終焉を迎えたい――偽らざる思いと、最高の敬意を込めて、

「よくやった……キリ」

潮騒の向こうに去った者へ、ジークは静かに弔いの言葉を投じた。

砂浜に、並んで座っていた。

キリはノヴィアの肩に頭をもたれ、まるで眠っているようだった。

ノヴィアはキリの背に腕を回し、海を眺めながら、祈りの歌を口ずさんでいる。

安らぎたまえ、安らぎたまえ、
あなたの平安は生まれたときに決まっていたのだから――
そういう、子守唄にも似た祈りを。
全ての死者と、全ての生者とをつなぐ祈りだった。
生まれたときから約束された平安の意味を、ノヴィアは今初めて知った気がした。
死にゆく者を迎える海――新たな生命への予感をたたえる波の音がノヴィアにそれを教えた。無限に続いてゆく命の大いなる源の、なんと豊かであることだろう。死と苦しみの果てに辿り着くべき場所――まさしく終わりと始まりの場所に、ノヴィアはいた。
穏やかな潮風が髪をなびかせ、波の音が心を透明にしてゆく。海の青さはありとあらゆる色彩に変化し、太陽が水平線に近づくにつれて、青から黄金色へと輝きを変えた。
いつしか潮が満ち、キリの足を波が濡らした。まるでキリの帰郷を誉め、迎えるように。
今が、キリが故郷に帰るときなのだ――
ノヴィアはゆっくりと立ち上がり、出来る限りの静かさでキリを砂浜に横たえた。
キリの両手を胸の上で組ませ、その頬を撫でた。
波はキリの体を洗い、傷の血を綺麗に消し去りながら、少しずつ引き寄せていった。
ノヴィアは、キリを波にゆだねた。波が近づくほどに後ずさり、祈りの歌を唄った。

遠のくキリを静かに見届けた。力を使ってどこまでも姿を追おうとは思わない。今の眼差しが届かなくなったときがキリとの別れだった。
蝋のように硬くなったキリの体が波に浮かび、沖へ招かれていった。そこで魚や多くの生き物たちが、キリを食べるのだろう。自分がキリの命を食べたように。そう思った。
多くの犠牲が命を支え、その命がより大きなものへとつながってゆくのだ。それは人もどんな生命も変わらない。死の向こう側にある輝き——それを自分は食べたのだ。
(みなが誰かの海になるんだ——)
その言葉が胸に甦ったとき、キリは海に消えた。
黄金色の波が墓標となり、波打ち際が、生者と死者を分ける境界線となったとき、
「キリ————っ!!」
ノヴィアは弾かれたように海に向かって波を蹴っていた。
その膝を、ひときわ強い波が押し、そして引いた。まるで警告だった。生者と死者の領域を侵してはならない——さもなくば死が唯一の再会の手段になると。そんなことをキリが望むだろうか。ノヴィアは泣きじゃくりながら後ずさり、キリの名を呼び続けた。
自分のことを親友と言ってくれた少女の名を——生まれて初めて得た同い年の友達の名を呼びながら、ノヴィアは誰もいない砂浜で大声を上げて泣き続けた。

7

夜が降り、ノヴィアは、いつの間にか泣きやんでいる自分に気づいていた。

闇を見つめるうちに、心が自然と向かう先を決めたのだ。

心は、灯を求めた。

暗い海岸を見渡すと、そこに輝きがあった。

夜の海でも船が迷わず帰れるための塔。

死と破壊に満ちたこの場所に、輝きをともそうとする者がいるのだ。

あの塔には、男と、もう一人の大事な友達がいるのだ。

ノヴィアは、一度だけキリの消えた海を振り返った。

波の向こうから、明るい声が聞こえた。

(お前はどこへ向かうんだ――?)

零れたのは涙ではなく、微笑みだった。

「さようなら……キリ。私、行くわ……」

ノヴィアは、波打ち際を歩き出した。

闇に輝く灯へ。

自分の足が向かう先へ。
ただ真っ直ぐに、歩いていった。

Epilogue　平和と戦いと

明け方になり、ようやく船が来た。
諜報院が手配した船である。聖王の命令で、近くの海港から動乱の様子を探りに来たのだ。人が近づく気配でジークは目が覚めた。すぐに白い塔を出て、朝靄の中で諜報院の者たちと情報をやり取りし、船に乗せてもらうことが決まった。塔に戻り、まだ毛布にくるまって寝ているノヴィアの小さな体を抱き上げると、胸元でアリスハートが顔を上げた。
「お船が来たのぉ？」
悲しい顔でジークを見上げた。目に涙を溜めている。
「ずっと起きていたのか？」
「ううん……さっき起きた。悲しくて目が覚めたの」
しょんぼりとアリスハートは言った。
「キリが……」
言いさし、小さな肩を震わせて涙ぐんだ。

「あいつは精一杯歩いた」
「うん……」
「最後まで勇敢に生きた」
アリスハートの頬をぽろぽろ涙が零れ落ちた。
ジークは眠れるノヴィアを抱いて塔を出た。一度だけ白い塔を振り返り、灯を見つめた。
やがてきびすを返し、船へ向かった。己の辿り着くべき場所へ、歩みゆくために。

ノヴィアはそのとき、夢の中でキリと笑い合っていた。
白い花が咲き乱れる湖のほとり。そこにはキリとアリスハートと一緒に、レオニスやトールもいた。少し離れたところでは、ドラクロワとジークとシーラの三人が語らっている。
レオニスが何か気の利いた冗談を言うと、キリはおかしそうに笑い転げた。
ふいに母がやって来てノヴィアの傍らに座った。間もなくキリの仲間たちも現れ、一人一人、互いを紹介し合った。柔らかな木漏れ日の下で沢山のことを話した。信頼と友愛に満たされた時間だった。平和な笑い声。やがてジークたちがこちらに来て、話に加わった。
微笑みのひととき。決して手に入ることのない時間――
ノヴィアは、みなが誰かの海になる夢を見た。

その日――レオニスは王座に座り、報告を待っていた。

聖地に内通者がいてドラクロワに情報を送っているのは明らかであり、それを炙り出すための処置を講じることが病床より脱したレオニスの最初の仕事だった。自分とドラクロワの同盟が知られないようにしつつ廷臣たちや城の者全員の素行を調査させたのである。

広間に廷臣たちはいない。午前中の審議が終わり、いったんみなを退席させていた。

書記もおらず、控えの間には付き人たちが待機している。がらんとした広間の隅には、もはや誰も咎めぬレティーシャが、頭蓋骨を抱いてぼんやり椅子に座っている。

ときおりレオニスがそちらを見るが、そのたびにレティーシャはうつむいてしまう。

もともと頭蓋骨とばかり喋って他人と話すことがないレティーシャである。レオニスも今さら気にしないが、どうも様子が変だった。気づけば自分の方をじっと見ているのだ。

「どうやらアキレスは狩りに失敗したようだ。これで晴れてお前が狩りに出られるな」

視線を感じてレオニスが声をかけるが、レティーシャは目を伏せ、返答しない。

「綺麗な像は彫っているか、レティーシャ。好きなだけ彫って良いんだぞ」

レティーシャは頭蓋骨を見つめたまま、足をぶらぶらさせている。

「まだ習作だけか。何なら僕が見てやるぞ」
これには反応があった。ちょっとびっくりしたように碧の目を見開き、
「ダメ、絶対」
ぼそっと呟いた。後はだんまりである。レオニスは肩をすくめた。
「まあ、好きにしろ。狩りが嫌になったのならそれでもいい。城の者も、妙にお前のことを受け入れているようだから……」
レオニスの声が尻すぼみに消えた。足音がした。誰かが広間にやって来るのだ。
どうやら報告が来たようだ――レオニスは悠然と構え、そしてそこに現れた者の姿に、大きく目を見はった。レティーシャも顔を上げ、ぼんやりとそちらに目を向けた。
「あなたの影が……ただいま戻りました」
トールは言った。レオニスは無言でいる。一度でも目蓋を閉じれば消えてなくなってしまうとでもいうように、息をこらし、じっとトールを見つめ続けた。
最初に応えたのは、レティーシャだった。
「……帰って来たね、兄様」
そう呟きながら、そっと左手で自分の頬を撫でた。トールに切られた傷跡がうっすらと残っているのだ。トールも、レティーシャに挨拶でもするように左手を上げた。レティー

シャの蠅に食いちぎられて、指が三本になった手だった。
おあいこだ、というようにトールは目に微笑を浮かべた。レティーシャも、つまらなそうに頬から手を離し、もうトールになど興味はないというように目をそらす。
「謹んで咎めをお受けします、レオニス様。ただ、その前に報告すべきことが……」
トールが歩み寄ろうとするや、いきなりレオニスが怒鳴った。
「止まれ！　それ以上、近づくな！」
トールはぴたりと動き止めた。レティーシャはぼんやりと頭蓋骨を撫でている。
レオニスは王座の肘掛けを両手できつく握りしめ、きっぱりと言った。
「僕が、お前の方へ行く」
はっとトールが息をのみ、レティーシャの手が止まった。
レオニスの体が少しずつ持ち上がり、その足がゆっくりと前へ踏み出された。
歯を食いしばり、震える膝に渾身の力を込めて、階段を降りてゆく。
眉間に皺を寄せ、体中を強ばらせながら床に到達し、一歩ずつトールに向かって歩んだ。
かつて見たことのない距離を、何の助けもなしに歩むレオニスの姿に、トールは目の前がぼやけるのを覚えた。危うく涙が零れるところだった。
最後の一歩で膝から力が抜けて倒れ込むレオニスを、トールがしっかりと受け止めた。

小柄な体のどこにそんな力があるのかと思うほど、きつくトールの胸にしがみついてくる。
「もし、お前が帰って来たなら……こうしようと、決めていたんだ」
額をトールの胸に押し当て、わななきながら告げた。
「お帰り、トール。本当に……よく帰って来てくれた……。よく生きて……」
「はい……レオニス様」
「話したいことが……沢山あるんだ。お前から聞きたい話も、沢山……」
レオニスは腕で頬を拭い、顔を上げた。そこで、トールの傍らに見たこともない女が立っているのに気づいた。レオニスが訊く前に、トールが説明した。
「アキレスの氷人形です……外で待っているよう言ったのですが」
「……意志を持っているのか」
「はい。アキレスは死にました。なぜかこうして魔獣だけがひとりでに……」
「いや、違う。こいつは魔獣なんかじゃない」
レオニスはトールの助けを借りながら女に向き直り、
「竜精だ……。竜骸と対をなす〈刻の竜頭〉の一部だ。ドラクロワが送って寄越した書類に、こいつについての秘儀が記されていた」
「秘儀……これが……」

呆然となるトールをよそに、レオニスは手を差し伸べ、女の手の甲に触れた。
「凄い……強い聖性が、堕気を支配して形を作っている。……お前の名は？」
「シー、ラ……」
幼女のような口調で告げた。レオニスは微笑し、女から手を離した。
そこで限界が来た。レオニスの足から力が消え、トールが柔らかくその体を抱き上げた。
「竜骸を炸裂させずに成長させる存在だ……。ドラクロワの狙いは、僕がこいつを使って秘儀を成長させることだ。お前の仇を討つためにね……トール。ドラクロワは必ずこの聖地を攻める。秘儀を完成させるために。聖地に、破壊と荒廃がもたらされるだろう」
「はい……レオニス様」
レオニスの体を静かに運びながら、トールが応える。
女もその後について歩き、階段のふもとでレティーシャが頭蓋骨を抱えて立っていた。
「流れが……来たね、兄様。未来が流れるね、兄様。始まるね……兄様」
ぼそぼそと囁くレティーシャに、いきなりレオニスが同意した。
「そうだ、レティーシャ。始まるぞ」
途端にレティーシャはびくっとなって目を伏せている。
かくしてレオニスは、トールの手で再び王座につき、敢然と言った。

「ドラクロワの狙いが何であるにせよ……見せてやるさ。破壊と荒廃のさらに先にあるものを。死と腐敗の果てを。あの男が求めるものとは違う、もう一つの真実を」

いつしかそのおもてに、凜冽とした意志のみなぎる微笑が浮かんでいた。

トールは恭しく頭を垂れ、そのそばに女が静かに立ち、レティーシャはぎゅっと頭蓋骨を抱きしめながら上目遣いにレオニスを見た。

「この身をかけて、ジークにもドラクロワにもない僕だけの力を見せてやる」

熾烈な声とともに——終わりの、そしてまた始まりの戦いの幕が、開けられたのだった。

後書き

初めましての方も、今回はあまりお待たせせずに済んだでしょうかの方も、こんにちは、沖方です。皆様の熱い応援のお陰でついに『カオス レギオン』も六冊目。気づけば、はじめに予定されていた「三冊で完結」の倍の冊数になっているではありませんか。
さらには前作・前々作を上回る超ページ規定オーバーにて刊行。
「ふ、ふふふ……分かってたよ……こうなるってことはね……ふ、ふふふふふ……」
仁王立ちで涙をこらえ切ない笑いをこぼす編集のシバッチユイユイ氏の前で、ただただ土下座切腹モードの僕としては、もう、ホントすいません。ごめんなさい。
そしてそれでも出版して下さって、本当にありがとうございます。まったくもって読者の応援のお陰としか言いようがありません。皆様には超・超・超絶感謝です。
さて今回の物語は、ドラゴンマガジン誌上にて連載された短編連作をまとめる予定でしたが、それはもう色々と書き加えたせいで長編になってしまったという本です。

ドラクロワを追って大河を下りゆくジークたちは、ある一人の少女と出会い、ともに海を目指すことに。ノヴィアにとっては初めての同年代の相手。ことあるごとに反発を繰り返す二人の少女の旅の行方は――？　そして彼らを狙う刺客アキレスの執念の果ては？
というのが短編連作時に書かれた物語でした。
そのときレオニスは？　トールは？　レティーシャは？
ドラクロワはどこで何をしていたのか？　といったことは書かれなかったのです。
そのため今回の短編集をまとめるにあたり、
「次の短編集ですが、エピローグとプロローグをつけて、あれとあれとあれとこれとこれとこれと、ついでにあれとこれとそれも書き加えたいんですが……」
とお話する僕。叫ぶ担当のシバッチユイユイ氏。
「原型とどめてねぇじゃん!!　つーか本当に書けるのぉ!?」
「いやいや前作だって約束通り一か月（と××日間）で書いたじゃないですか」
「つーか今回も〆切は同じだよ？」
「ぐ…………………………………ま、まあ、それはそれとして。今回はですね、そろそろ、あの女性に再登場を願うべきだと思うんですが……」
「は？　女性？　再登場？」

「ほら、あれですよ例の女性ですよ。ジークとドラクロワの……」
「えっ。ちょっ……、つーか無理だろそれぇっ!?」
「いやいやいや、これこれこういうわけで……その後はこれこれこうなると」
「嘘……マジ……? た、確かにそれなら最初の長編につながるけどさ……」
「じゃ、ちょっと書いてみますね」
「ちょっとじゃねーだろ、あんたの場合!! ……えーいもう、どうせ止めたって聞かねーんだから。よしっ、行けっ!! やれっ!! その代わり手加減すんなぁっ!!」
「うお――――――――――――――――っし!! 書くぞー!!」
かくして――書きに書いた「海への物語」が本書です。
ずうーっと大陸を巡り続けてきたこの物語が、ついに辿り着く始まりと終わりの場所。
そこでジークやノヴィアたちは何を見るのでしょうか。
どうぞ彼らと一緒に、この旅の行方を、見届けてやって下さい。
最後になりましたが、わがままを許して下さった富士見書房の編集諸氏、結賀さとるさん、シバッチ氏、カプコンの皆様、奥さん、妖精さん本当にありがとうございました。
そして読者の皆様へ――

次が最終巻です。

泣いても笑っても次の第二期・完結編が、ジークたちを描く最後の物語となるでしょう。

この旅の始まりで心に描いた全ての場所に辿り着けるよう、ジークたちと一緒に、踏ん張って踏ん張って書き尽くしたいと思います。

ここまで応援して下さった皆様に、尽きせぬ感謝を込めて――

頑張ります。

書くぞぉ――――――――――――――――っ!!

冲方丁　二千四年六月

ノヴィア＆キリ
メモリアル・アルバム

出会いの挨拶は"矢"!?
ジークは俺のものっ♥

ノヴィア&キリ
メモリアル・アルバム

いつも喧嘩ばかりだったけど

「なぁ何が見えるんだ。俺にも教えろよ」
「あ、あなたがどいたら教えてあげます!」

たまに二人とも
落ち込んじゃったり……

永遠に海へと歩みゆく

「キリ・ラフィエットを
<銀の乙女>に迎えます。
あなたの道に輝きのあらんことを」

「必ず、お前を
ジークのもとにつれてってやる」

ノヴィア&キリ
メモリアル・アルバム
傷つき
打ちのめされても……
「みなが誰かの
海になるんだよ」
to be continued……

初出

この作品は『月刊ドラゴンマガジン』２００３年12月号〜２００４年５月号までの連載分を大幅に加筆修正しております。

カオス レギオン 04

天路哀憧篇

平成16年7月25日　初版発行

著者──冲方　丁（うぶかた　とう）

発行者──小川　洋

発行所──富士見書房

〒102 8144

東京都千代田区富士見1 12 14

電話　営業　03(3238)8531

　　　編集　03(3238)8585

振替　00170-5-86044

印刷所──旭印刷

製本所──本間製本

落丁乱丁本はおとりかえいたします

定価はカバーに明記してあります

2004 Fujimishobo, Printed in Japan

ISBN4-8291-1628-5 C0193